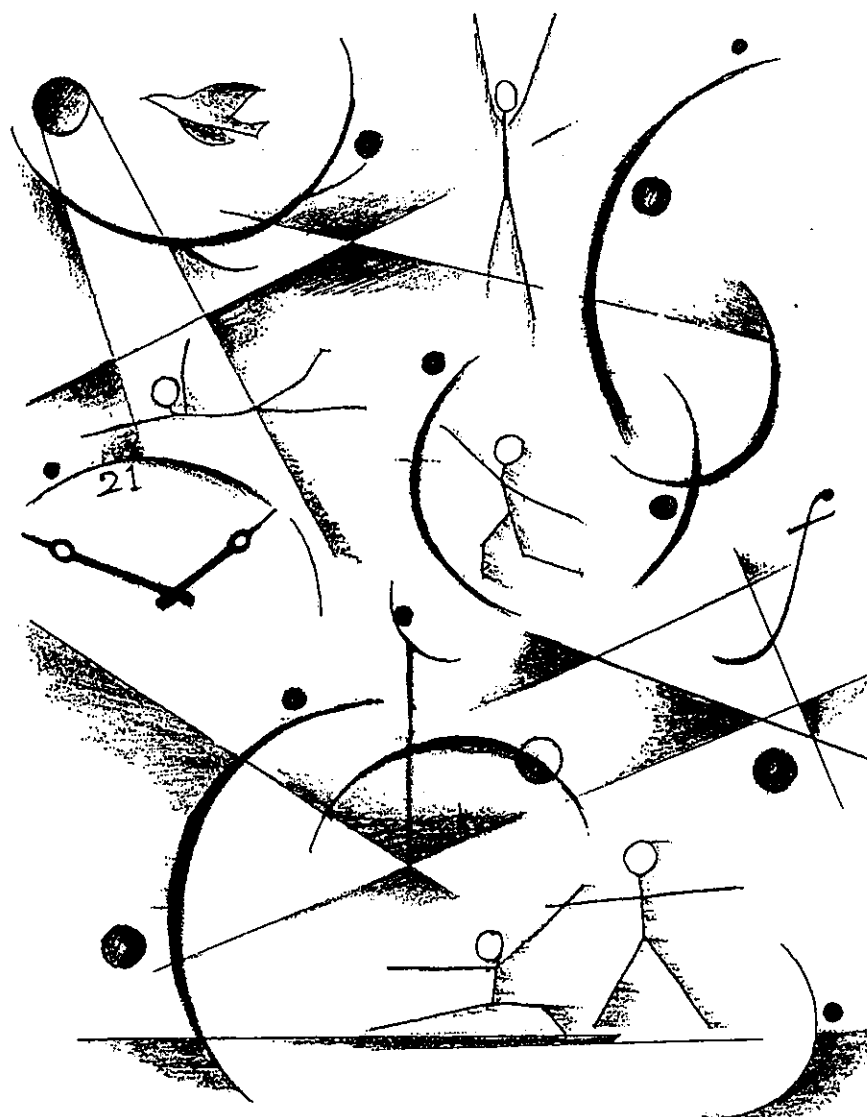


平成9年6月12・13日

教育研究会要録

生きる喜びを生み出す教育課程の創造

—— 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ——



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第26条の2の規定に基づき、教育課程の基準改善のために文部大臣の委嘱を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読み下さい。

ご あ い さ つ

福岡教育大学長 菰 口 治

21世紀へのカウントダウンが始まりました。20世紀は科学技術・工業技術の著しい進歩による経済活動が発展し、高度物質文明が構築されてまいりました。しかし一方、国家財政の逼迫、制度的疲労が随所に見られ、先行き不透明な世紀末となっており、総合的視点に立った抜本的改革が求められています。

学校教育におきましても、いじめ、登校拒否、受験競争などが深刻化して、教育の閉塞感が強まり、教育改革論が高まっております。

昨年、第15期中央教育審議会は、21世紀を見据えた「教育の基本的な在り方」を提言いたしました。その答申を受けて、教育課程審議会は、ゆとりと生きる力の育成を目指し、社会の変化に対応した新学習指導要領の作成に向けて審議を行っております。

こうした状況の中で、本学附属学校の一つである福岡小学校が21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供の育成を目標にして、本校独自の新教科・新領域を設定し、内容の再編を行い創造的教育実践研究の開発に力を注いでまいりました。

なお、本学では大学と附属学校とが共同研究を進めるための組織を昭和44年にスタートさせ、附属福岡小学校は初等教育研究部と障害児教育研究部において研究活動を進めております。共同研究関係の方々のご尽力に心から感謝申し上げます。

本年も実践研究の成果の一端を公開し協議する発表会を開催する運びとなりました。ここに至るまでの関係各位のご支援・御指導に心より感謝申し上げます。

当校の開発研究が、21世紀の新しい教育の提案になることを期待し、御参会の皆様のご指導をお願い申し上げます。

は じ め に

『教育はあらゆる社会システムの基盤であり、教育改革が社会の在り方全体を見直すことにつながる国民的課題』と文部省は1月24日『教育改革プログラム』の策定を公表しました。

このような時代の要請を背景に、本校では、平成6年から3年間、文部省の研究開発学校の指定を受け、子供たちに「生きる喜びを生み出す」教育課程の創造をめざし、教科の再編、内容の改定を試みてまいりました。

本校がめざす「21世紀の社会をよりよく生きる自立した子ども」を育てるために、総合的学習を基盤にした新設教科として、低学年に「表現科」、中学年に「生活環境科」を、全学年に新設領域として「人間」を新設することにいたしました。そして、子どもの関心・意欲・態度などに着目し、子どもが主体的に豊富な体験をする学習、生涯学習に通じる目標を置き、学習する楽しさや喜びを感じさせる教育課程の編成を試み、実践に取り組んでまいりました。

昨年度で終了した研究開発の内容・授業の具体化像は、著書『21世紀の教科・領域への挑戦「新時代の授業を創る」(明治図書刊)』及び「研究紀要」、「年間指導計画集」として、現在発刊いたしております。

皆さまのご批判・ご教示を賜りながら、より有効に適切に改善・活用され、新時代に生きる子どもたちの育成にいささかでも貢献できれば幸いです。

本研究内容が文部省及び運営指導委員の皆様をはじめとする多くの方々のご指導・ご支援のもと発表できることを深く感謝申し上げますとともに、今後も各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成9年6月

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

校 長 高 橋 義 夫

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
日程と内容（1 日 目）	4
日程と内容（2 日 目）	6
本校研究のあゆみ	8
公開授業及び全体会の部	
1 日 目	
学習指導案（午前）	9
全 体 会	34
学習指導案（午後）	37
学習指導協議会	54
2 日 目	
学習指導案（午前）	55
全 体 会	78
学習指導案（午後）	81
学習指導協議会	104
パネルディスカッション	105
研究紀要の部	
研究紀要目次	108
研究紀要	110
おわりに	231
研究同人	232

日 程 と 内 容 (1日目)

◇学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年組	教科等 (指導者)	単 元 ・ 題 材 名	会 場
1の1	生 活 (石 田 耕 一)	にしこうえんであそぼう	西 公 園
1の2	体 育 (稲 津 一 徳)	ぼくの・わたしのブロックボールをしよう	運 動 場
2の2	国 語 (伊 藤 啓 二)	いきもののちえクイズブックをつくろう	4
3の2	算 数 (重 松 宏 明)	時刻や時間を調べて旅行日程表を作ろう	5
4の1	人 間 (中 原 浩 一)	福祉の心をひろげよう	7
4の2	算 数 (加 藤 英 也)	どんな変わり方をするのか折れ線グラフに表そう	9
5の1	理 科 (山 下 浩 徳)	生活の中でのこの働きを調べよう	理 科 室
5の2	家 庭 (平 山 尚 美)	家族の生活を楽しくする小物を作ろう	家 庭 科 室
6の1	音 楽 (津 本 修 一)	世界の民謡と民族音楽の音楽会をしよう	音 楽 室
4・5・6の3	帰国総合 (藤 木 寿美枝)	博多にわかを世界へ	子供スタジオ
ふ じ	音 楽 (西 原 敦 子)	うちゅうせんについてのいこう	北校舎音楽室
さくら	国 語 (舩 元 俊 文)	なぜなぜめいろであそぼう	さ く ら

◇あ い さ つ (10:15～10:30)

学 長 菰 口 治
学 校 長 高 橋 義 夫

◇主 題 発 表 (10:30～11:00)

●生きる喜びを生み出す教育課程の創造

一子供主体の活動からみる教育課程の編成一

教 頭 芋 生 修 一

◇教 科 等 発 表 (11:00～11:45)

●算 数 科 「数学的活動を豊かにもつ算数科学習」

算 数 科 部 小 森 晃

●生活単元 「自分の生活を楽しくしていく生活単元学習」

障害児教育研究部 松 本 良 一

◇アトラクション 音楽クラブ合唱発表 (11:45～11:55)

◇教 科 発 表 (12:45～13:30)

●生 活 科 「対象への愛着を深める生活科学習」

生 活 科 部 藤 木 寿美枝

●国 語 科 「必要感をもって創造的な言語活動を行う国語科学習」

国 語 科 部 吉 田 正 樹

◇提 案 授 業 (13:45～14:30)

新時代の授業を創る

学年組	教科等 (指導者)	単 元 ・ 題 材 名	会 場
☆21世紀の教科・領域を考える総合的学習			
1の2	表 現 (榑島稔、津本修一)	題材「あめくん、にじさん、こんにちは」	2
3の1	生活環境 (今 林 康 治)	単元「花いっぱい町(2)」	5
6の2	領域「人間」 (植 松 伸 之)	題材「小山さんのホスピスでふれあいを」	9
☆数理に迫るためのコンピュータの効果的活用			
5の2	算 数 (小 森 晃)	題材「コンピュータを使って分数の大きさをくらべよう」	パソコン室
☆創造的な言語活動力を育てる単元学習			
6の1	国 語 (吉 田 正 樹)	単元「地球を守るホームページをつくろう」	11
☆たくましい体力を育てる複線型学習			
2の1	体 育 (笠宏照、稲津一徳)	単元「チャレンジランドであそぼう」	附中体育館
☆生活力を培う総合的学習の工夫			
ふじさくら梅	合同生活単元学習	単元「福岡ドームにいこう」	4
☆子供の心の健康をはぐくむ保健室からの支援			
	保健・養護部 (今 村 由 香)	※公開授業はありません	8

◇学習指導協議会 (14:45～16:15)

会 場	教 科 等	司 会 者	指 導 助 言 者	
2	表 現	粕屋町立粕屋中央小学校 教諭 宮 口 光 秀	柳川市立柳河小学校 校長 竹 下 政志郎	福岡教育大学 教授 岩 崎 洋 一
5	生活環境	福岡教育事務所 指導主事 安 永 純 二	那珂川町立片縄小学校 教頭 平 石 信 敏	福岡教育大学 教授 中 村 重 太
9	人 間	志摩町立引津小学校 教諭 石 硯 昭 雄	三橋町立矢ヶ部小学校 校長 松 石 正 夫 甘木市立立石小学校 校長 徳 田 正 毅	福岡教育大学 教授 高 田 清
パソコン室	算 数	久山町立久原小学校 教諭 安 部 章	大野城市立大野小学校 校長 古 賀 宮 太	福岡教育大学 助教授 飯 田 慎 司
11	国 語	二丈町立一貴山小学校 教諭 木 下 伸 生	福岡市立七隈小学校 校長 大 崎 克 之	福岡教育大学 教授 前 田 真 証
附中体育館	体 育	柳川市立両開小学校 教諭 福 永 美智也	春日市立春日北小学校 校長 大 橋 直 徳	福岡教育大学 助教授 相 部 保 美
3	生活単元学習	宗像地区教育研究所 研究主事 有 馬 宏	福岡市立福岡中央養護学校 校長 塚 本 浩 巳	福岡教育大学 助教授 藤 金 倫 徳
8	保健・養護	志免町立志免南小学校 養護教諭 井 上 しのぶ	福岡県立看護専門学校 講師 筑 紫 味 子	福岡教育大学 教授 照 屋 博 行

日 程 と 内 容 (2日目)

◇学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年組	教科等 (指導者)	単 元 ・ 題 材 名	会 場
1の2	生 活 (藤 木 寿美枝)	うさぎさんとなかよし	動 物 村
2の1	表 現 (樺島稯、石田耕一)	みんなおいでよ！空や森や海の楽しい世界へ	3, 4
2の2	算 数 (加 藤 英 也)	長さをはかって、コピーしよう	多 目 的 室
3の2	生活環境 (芋 生 修 一)	草花や野菜を育てる土作り	5
4の1	国 語 (吉 田 正 樹)	とんち話のおもしろさを読み比べよう	7
4の2・3	体 育 (笠 宏 照)	のびのびジャンプにちょうせんしよう	附中体育館
5の1・3	人 間 (植 松 伸 之)	田んぼの忘れ物 (命と環境について考える)	9
6の1	理 科 (今 林 康 治)	わたしたちの生活と健康な体－食べ物のおくえ－	理 科 室
6の2・3	家 庭 (平 山 尚 美)	わが家ふうの住まい方をつくり出そう	家 庭 科 室
さくら	生活単元 (松 本 良 一)	そうこうとしょかんにいこう！	さ く ら
梅	国 語 (落 合 純 哉)	ともだちによんできかせよう「そらいろのたね」	北校舎音楽室

◇あ い さ つ

初等教育研究部委員長 相 部 保 美
学 校 長 高 橋 義 夫

◇主 題 発 表 (10:30～11:00)

●生きる喜びを生み出す教育課程の創造

一子供主体の活動からみる教育課程の編成一

研 究 主 任 重 松 宏 明

◇教 科 等 発 表 (11:00～12:00)

●領域「人間」 「ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する「人間」学習」 「人 間」部 植 松 伸 之

●表 現 科 「豊かな感性と創造性の基礎を培う表現科学習」 表 現 科 部 樺 島 稯

●生活環境科 「身近な環境とのよりよい関係をつくる生活環境科学習」 生活環境科部 今 林 康 治

◇アトラクション 音楽クラブ合唱発表 (12:00～12:10)

◇学 習 指 導 (13:00～13:45)

学年組	教科等 (指導者)	単 元 ・ 題 材 名	会 場
1の1	表 現 (津 本 修 一)	どうぶつのもりの一日	音 楽 室
2の1	生 活 (石 田 耕 一)	あらつの町をたんけんしよう	3
3の1	人 間 (中 原 浩)	301号復元 伊崎浜に浮かべよう	プ ー ル
3の2	国 語 (末 次 幸 一)	虫の研究百科をつくろう	5
4の1	算 数 (小 森 晃)	がい数で表そう	7
4の2	生活環境 (山 下 浩 徳)	生活の中の電気	子供スタジオ
5の1	国 語 (伊 藤 啓 二)	物語の中の宇宙人を比べよう	9
5の2	理 科 (手 島 宏 樹)	あらつ気象台で天気予報をしよう	理 科 室
6の2	社 会 (猿 樂 隆 司)	元寇と博多の禅僧	11
ふ じ	算 数 (西 原 敦 子)	ぼくのわたしのおみせをつくろう (かずあわせ)	北校舎音楽室
梅	体 育 (外 元 俊 文)	グランドホッケーゲーム	北校舎運動場

◇学習指導協議会（13：50～14：50）

会 場	教 科 等	司 会 者	指 導 助 言 者	
9	国 語	柳川市立昭代第一小学校 教諭 池 上 龍 矢	太宰府市立水城小学校 教頭 古 川 千 年	福岡教育大学 助教授 山 元 悦 子
7	算 数	柳川市立矢留小学校 教諭 本 田 透	甘木市立十文字中学校 教頭 廣 渡 照 久	福岡教育大学 教授 山 下 昭
11	社 会	福岡教育事務所 指導主事 後 藤 正 弘	前原市立前原小学校 教頭 家 宇 治 正 幸	福岡教育大学 教授 中 野 和 光
理科室	理 科	太宰府市立太宰府小学校 教諭 奥 村 明 男	福岡町立福岡小学校 校長 金 子 孝 信	福岡教育大学 助教授 宮 脇 亮 介
3	生 活	太宰府市立太宰府南小学校 教諭 奥 園 哲 夫	大牟田市立中友小学校 校長 堤 直 樹	福岡教育大学 教授 寺 尾 慎 一
2	表 現	久山町立山田小学校 教諭 山 本 麻 美	北野町立弓削小学校 教頭 大 橋 鉄 雄	福岡教育大学 教授 吉 井 宏
8	生活環境	宇美町立原田小学校 教頭 西 邦 彰	福岡教育事務所 主任指導主事 谷 友 雄	福岡教育大学 教授 中 村 重 太
5	人 間	福岡町立神興東小学校 教諭 田 淵 聡	福岡県教育センター 総務課長 萩 尾 耕 一	福岡教育大学 助教授 堺 正 之
10	体 育	福岡市立草ヶ江小学校 教諭 曾 根 徹	福岡市立香椎小学校 教頭 三 原 英 喜	福岡教育大学 助教授 相 部 保 美
家庭科室	家 庭	福岡市立東花畑小学校 教頭 藤 永 福 子	福岡市立愛宕浜小学校 校長 田 中 光 子	福岡教育大学 助教授 甲 斐 純 子
ふ じ	障害児教育 生単・体育	久留米市立日吉小学校 教諭 石 橋 康 秀	福岡県教育庁特殊教育課 指導主事 橋 本 英 作	福岡教育大学 教授 山 下 勲
梅	障害児教育 国語・算数	新宮町立新宮東小学校 教諭 三 浦 嘉 明	北筑後教育事務所 指導主事 江 藤 肇	福岡教育大学 教授 石 井 武 士

◇パネルディスカッション（15：05～16：30）

テーマ 21世紀の教科・領域への挑戦 ―新時代の授業を創る―

パネラー

文部省初等中等教育局小学校課
福岡教育大学
福岡教育事務所
春日市立春日野小学校
附属福岡小学校

教科調査官 嶋 野 道 弘
教 授 山 下 昭
主任指導主事 谷 友 雄
研究主任 高 野 誠 一
研究主任 重 松 宏 明

コーディネーター

福岡教育大学

教 授 寺 尾 慎 一

◇あいさつ

副校長 倉 吉 志米男

本校研究のあゆみ

年度		年度	
23	学習効果判定の理論と実際	53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 - 交流でよりよい操作を身につける学習指導 - 秀巧社から出版「自由活動の時間」
24	カリキュラムの構成と実際	54	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 - 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 -
25	(発表会なし)	55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 見直し活動を生かした操作学習の深化 -
26	学習深化の指導	56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 自己を見直し、考えを深める指導のしくみ -
27	学習深化の指導	57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ - 北大路書房から出版 「学ぶ喜びを生み出す指導」
28	学習深化をめざす指導	58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 個が生きる課題づくり -
29	学習指導における諸問題の再検討	59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 - 学習実態の多様性に即応する学習指導 -
30	学習指導における新課題の再検討	60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 子どもの個性が生きる指導 -
31	学習指導深化をめざす新課題の究明	61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 「学習の個性化」をめざす指導法の開発 - 明治図書から出版
32	組織化をめざす学習指導法の究明	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 「学習の個性化」をめざす学習過程 -
33	組織化をめざす学習指導法の究明	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 - 「学習の個性化」をめざす授業の改造 - 明治図書から出版 「『学習の個性化』をめざす授業の開発」 生活科の授業づくり」
34	学習指導の系統化	平成元年	○個が生きる授業の創造 - 自己理解の学習過程 -
35	改訂指導要領による学習指導の諸問題	2	○個が生きる授業の創造 - 考えを確かにする活動達成 -
36	考える子どもを育てる指導法の究明	3	○個が生きる授業の創造 - 考えを深める自己吟味活動を通して - 北大路書房から出版 「個が生きる授業の創造」
37	○考える力をのばす学習指導法の考察 - 考えさせるために経験を どのように位置づけるか -	4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 - 思い・願いをもって問い続ける活動づくり -
38	○考える力をのばす学習指導法の考察 - 考える力をのばす学習過程の構造化 -	5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 - 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開 -
39	○考える力をのばす学習指導法の考察 - 学習課程における「くらべ活動」の 検討とその指導 -	6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 - 自分のよさを実感する表現活動の展開 -
40	○考える力をのばす学習指導法の考察 - 学習の「かまえ」を育てる指導法の究明 -	7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 - 新しい教育課程における 教科領域の学習の具体化 -
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 - 考える力をのばす学習過程の評価 - 明治図書から出版 「授業における思考訓練」	8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 - 子供主体の活動からみる教育課程の編成 -
42	○教材の本質に立脚した学習指導法の考察 - 教材の価値と指導内容の検討 - 明治図書から出版 「思考をのばす学習過程の評価」	9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 - 子供主体の活動からみる教育課程の編成 -
43	(発表会なし)		
44	○現代化をめざす指導法の究明 - 教材の現代的価値と児童の実態と 反応にもとづく指導内容の検討 -		
45	○現代化をめざす指導法の究明 - 基本的内容にせまらせる学習の開発 -		
46	○現代化をめざす指導法の究明 - ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ -		
47	○現代化をめざす指導法の究明 - 学習の連帯化をはかる指導のしくみ -		
48	○現代化をめざす指導法の究明 - 連帯性を育てる学習指導のしくみ -		
49	○現代化をめざす指導法の究明 - 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ -		
50	○現代化をめざす指導法の究明 - 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ -		
51	○学びとる力をのばす学習指導法の究明 - 操作を通した学習の構造化 -		
52	○学びとる力をのばす学習指導法の究明 - 操作を通した学習指導の展開 -		

公開授業及び全体会の部

第1日目 午前の部
公開授業指導案

第1学年1組 生活科学学習指導案

指導者 石 田 耕 一

単 元 にしこうえんであそぼう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、草花や虫などが好きで、生き物に対する興味・関心が高い。また、始業前や休み時間などには、外で友達と元気よく遊ぶ姿が多く見られる。しかし、子供たちの日常生活を見ると身近な自然と触れ合う機会はとても少なく自然体験が不足していると言える。そこで、本単元では、学校に隣接する自然豊かな西公園を取り上げ、友達との遊びを通して自然やそれにかかわるもの・人への親しみを深めていきたいと考える。
- 本単元は、季節に応じた西公園での遊びを工夫しながら、西公園への親しみを深めていくことをねらいとし、2年間にわたる西公園との継続的なかかわりの導入単元として年間計画に位置づいている。具体的には、①西公園で楽しみのあるものやことを見つけ、自分の気に入った場所を基点に西公園に親しみを深めていくこと、②西公園の自然物や地形の特徴を利用した遊びの工夫をすること、③自分の気に入った場所を基点とした継続的な観察活動を通して、春から夏への季節の変化に気付くことである。これらのことは、西公園とのかかわりの中で自分たちの生活をより楽しいものにしていくとする態度を育てる上から価値がある。
- 本単元の指導にあたっては、季節に合った遊びを楽しく展開していく中で、西公園とのかかわりを深めていくことができるよう次のような支援を行う。①子供たちが体全体で西公園と思う存分触れ合うことのできる探検活動の設定、②西公園への親しみや気付きの深まり、新しいかかわり方の発見を生み出す西公園ウォークラリーの設定（「自然案内舎」田村さんやネイチャーゲームの会の方との触れ合いの場）、③西公園マップや西公園カードを活用した継続的な観察活動、④「荒津の秋と遊ぼう」につなげる継続的な働きかけの促しと励まし。

目 標

1. 西公園探検や西公園ウォークラリーを通して、西公園を身近な公園としてとらえかわっていきこうとする意欲をもつことができる。
2. 春から夏にかけての西公園のよさを友達と共に感じ取りながら、西公園の自然物や地形の特徴を生かした遊びを工夫し、その気付きを西公園マップに表現することができる。

計 画（約10時間）

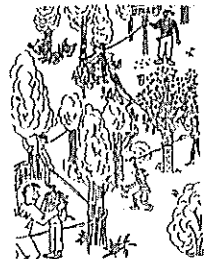
段階	であう（3時間）	ふれあう（4時間）	ふかめる（3時間）
活動と内容	1. 春の西公園を探検する。 ○ 西公園との出会い ○ 春の西公園の素晴らしさの感じ取り ② 2. 自分の気に入った場所で遊ぶ。 ○ 西公園を自分とのかかわりでとらえ、活動への意欲をもつこと	3. 初夏の西公園で遊ぶ。 (1) 自分の気に入った場所を中心とした遊びをする。① (2) 友達同志で遊びを工夫し、西公園マップや西公園カードに表現する。 ② ○ 自然物や地形の特徴を生かした遊びの工夫 (3) 西公園ウォークラリーをして遊ぶ。 （本時）① ○ 西公園への親しみや気付きの深まり	4. 夏の西公園で遊ぶ。 (1) 夏のもみじ谷で遊ぶ。② ○ 春との様子の違いへの気付き ○ 継続的な観察活動 (2) 子供広場で遊ぶ。 ① ○ もみじ谷以外の場所へ活動の広がり ○ 公共施設の利用の仕方
支援	○ 西公園を探検できる探検ともみじ谷を中心とした探検を設定する。 ○ 自分の気に入った場所を決めさせ、年間を通して西公園とかわっていく拠点とする。	○ 西公園マップや西公園カードの活用 ○ 西公園への親しみや気付きを深めていくことのできる西公園ウォークラリーの仕組みづくり	○ 西公園マップや西公園カードの活用 ○ 「荒津の秋と遊ぼう」につなげる継続的な働きかけの促しや励まし

本時の目標

1. 田村さんやネイチャーゲームの会の方と触れ合いながら西公園ウォークラリーを行い、西公園の自然物や地形などを生かしたいろいろな遊びを楽しむことができる。
2. 西公園における新たな楽しみ方を西公園カードや西公園マップに表現することができる。

準備 自分たちで作り上げた遊び道具や遊びの場、西公園ウォークラリーの場の設定

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確かめる。 (1) 前時までの学習を想起し、本時への思いを発表する。 ○ 自分たちの気に入った場所への興味・関心、遊びの工夫 ○ 本時学習への意欲や具体的な活動の見通し (2) 本時学習のめあてを話し合う。※ペーパーサートを使った楽しい西公園ウォークラリーの導入 めあて にしこうえんウォークラリーをしよう。 2. 活動グループごとに西公園ウォークラリーをする。 西公園ウォークラリー ◇丸太わりに挑戦  ◇アースアート ・木の葉や木の実の造形遊びに挑戦 ◇宝の木 ・木の鼓動 ・目隠しトレインなど ◇マイクロハイク を楽しもう  西公園マップ ◇フィールド・ビンゴ ・自然の宝物 を探してい く活動  ◇草花遊び ◇坂道すべり・のぼり ※ 田村さんやネイチャーゲームの方にネイチャーゲームを取り入れたいろいろな自然とのかかわり方を紹介して頂く場を設定する。 ○ 西公園の自然（草花、生き物など）や地形の特徴への気づき ○ 西公園におけるいろいろな遊びの楽しさの感受 ○ 友達同志の気づきのよさの認め合い ※ 西公園ウォークラリーを終えたグループから、随時「西公園カード」に気づきを表現させる。 3. 西公園ウォークラリーについて発表し、話し合う。 ○ 西公園での遊びの楽しさを友達と共有すること ○ 西公園に対する新たな発見や感動、親しみの深まり ○ これからの西公園での活動に対する意欲や具体的な思い ※ 西公園における遊びの楽しさや新たな気づきを認め価値づける。 ※ 次にしてみたいことを発表させ、次時への意欲を高める。	○ ぼくたちの木は、とても大きいんだよこの前よりも葉っぱの緑が濃くなっていたよ。 ○ 西公園ウォークラリーって、とても楽しそうだね。早くやりたいなあ。 ○ ～さん、一緒に回ろうね。 ○ どの順番でまわろうかなあ。 ○ 田村さんからいろんな遊びを教えてもらったよ。 ○ わたしは、アースアートがとても楽しかったです。もっといろいろなものを作りたいです。 ○ この坂道はすごいね。順番にすべってみようよ。 ○ ビンゴゲームが楽しかったよ。 ○ 西公園のことがいろいろ分かってきたよ。 ○ 西公園は、とても楽しいね。 ○ また、西公園で遊びたいなあ。

第1学年2組 体育科学習指導案

指導者 稲 津 一 徳

単 元 ぼくの・わたしのブロックボールをしよう（用具を使った運動）〔達成型・競争型〕
指 導 観

- 本学級の子供たちは、幼稚園や保育所などの遊びを通して、ボールをついたり、転がしたりする楽しみを味わってきている。その中で、ボールを相手に向かって思いっきり投げたり、ボールを避けたり逃げ回ったりすることに対する興味関心が高まってきている。しかし、就学前の遊びの経験の違いから、個人によって投捕の力に大きな差があり、投げる・捕る・逃げるの動作についてもなかなか呼応できない姿が見られる。そこで、調整力が発達し、活発な運動を好むこの期に、本単元を取り上げ、自分に合った運動づくりを通して、精一杯活動する楽しさを味わわせたい。
- 本単元のねらいは、簡単なコート・きまりを含めた遊び方を決めてコートの中の動物を目標けて素早くボールを転がす、投げる、それに応じてボールをはじいて止める、捕って止めるなどの動きを楽しく繰り返していくことである。具体的には次のような内容がある。①ボールの動きを意識して、止める、転がす、投げるなどの多様な動きをつくる。②自分たちの動きに合った簡単なコートやきまりを決め、楽しくブロックボールをする。この単元は、2年生のドッジボールや中学年での味方を意識し、場とかかわっていくフリーゾーンハンドボールへ、さらには、高学年の相手を意識し、場とかかわっていくバスケットボールへと発展する。
- 本単元の指導にあたっては、転がす、投げる、止めるといった動きを多様につくり出しながら、簡単なコートやきまりを決め、旺盛な動きで楽しめる自分たちのブロックボールができるようにしたい。そのために、とらえる段階では、楽しみながら達成型ブロックボールを行うことを通して、多様に転がす、投げるといった動きの達成を図る。次に、つくる段階では、達成型ブロックボールに守りを付加する形で、攻守に分かれて勝敗を競う競争型ブロックボールに発展させ、旺盛に遊ぶ中で、止めるを中心とした多様な動きをつくり出させていきたい。具体的には、動物の大きさや数を変化させた的で遊ぶことで、その的に応じた転がし方や投げ方を引き出すとともに、多様な止め方をつくりだすことができるようにしたい。最後に、深める段階では、対戦したことのない他のチームとブロックボールの大会を行い、多様な動きで楽しくゲームができるようにしたい。

目 標

1. 簡単なコートやきまりを決めて、攻守に分かれ、転がす、投げる、止めるなどの動きを工夫しながら旺盛に繰り返し運動することができる。
2. 決めたコートやきまりを使って、みんなで仲良くブロックボールをすることができる。

計 画（約8時間）

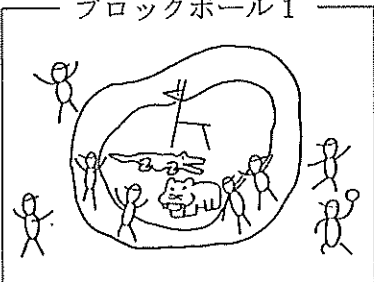
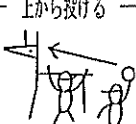
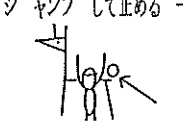
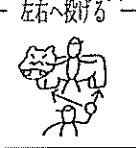
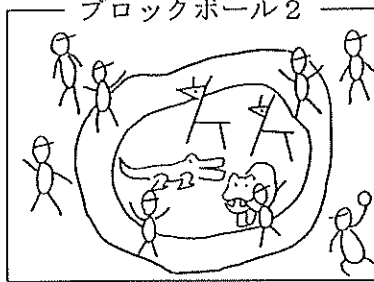
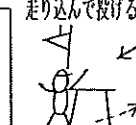
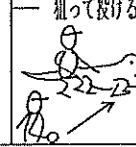
階 段	とらえる（2時間）	つ く る（4時間）	深める（2時間）
活 動 と 内 容	1. 達成型のブロックボールと出会い、転がす、投げる動きを中心に遊ぶ。 ○ 多様な投げる動きの達成	2. 競争型のブロックボールと出会い、止める動きを中心に、繰り返し遊ぶ。 (1) 競争型ブロックボールで遊ぶ。① ○ コート、きまりの決定 (2) ワニの的で遊ぶ ① ○ しやがんで止める動き (3) カバの的で遊ぶ。 ① ○ 横に跳んで止める動き (4) キリンの的で遊ぶ。(本時)① ○ 上に跳んで止める動き	3. 高めた動きやコート、きまりを大会で試して味わう。 ○ 多様な動き、コート、きまりの高まりの実感
手 だ て	○ 動物の的を使った達成遊びの体験 ○ 高さや幅の異なる動物の的の提示 ○ ルール説明用ペーパーサート	○ 的の大きさや数の変化による競争遊びの体験 ○ 高さや幅の異なる動物の的の提示 ○ コート用ロープ	○ 動物の的の大きさや数の選択遊びの体験 ○ 未対戦チームとのゲーム

本時の目標

1. 止める、転がす、投げるなどの多様な動きで攻防を旺盛に繰り返しながら、ブロックボールを楽しむことができる。
2. 自分たちのコートやきまりを使って、みんなで仲良く遊ぶことができる。

準備 高さの違う目標物、ボール、コート用ロープ等

学習指導の過程

活動と内容	子供の思考の流れ
1. 前時学習を想起し、本時めあてについて話し合う。 ○ 目標物の高さに着目し、当て方に気付くこと ※ 前時から高さを変化させた目標物の提示 めあて なぜかたをかながえて、たのしくぶろっくぼーるをしよう。 2. 繰り返し楽しくブロックボールを行う。 (1) ブロックボール1を行う。 ○ 前時に付加した目標物での遊びの体験と動きづくり ※ 高さの違う目標物の付加 (付加される動きの工夫例) ブロックボール1  上から投げる  ジャンプして止める  左右へ投げる  左右へ跳んで止める  (2) ブロックボール2を行う。 ○ 数を付加した目標物での遊びの体験と動きづくり ※ 目標物の数の変化 (付加される動きの工夫例) ブロックボール2  走り込んで投げる  走り込んで止める  狙って投げる  分担して止める  3. 本時学習について話し合いまとめる。 (1) 楽しかったことをもとに、本時学習を振り返る。 ○ 自己の動きの高まりの実感 (2) 次時の見通しを持つ。 ○ ブロックボールの大会への意欲化	○ 相手をかかわしてうまくワニに当てることができた。 ○ キリンは頭の方を狙って投げて当てよう。 ○ 今日は、もっとたくさん当てて点数をとるぞ。 ○ キリンの頭を守るときは、ジャンプして守ろう。 ○ カバは、頭やお尻が見えているから、相手を交わして当てようかな。 ○ カバを守るときは、右や左に跳んで止めないといけないな。 ○ 守っていない動物がいるぞ。 ○ 向こうは〇〇君こっちは△△さんが狙うようにしよう。 ○ 空いている動物がでないようにキリンは、一人で2頭守ることにしよう。 ○ 空いている動物を狙って、素早く走り込んで倒すぞ。 ○ 今日は、投げ方を工夫してたくさん点数がとれたな。 ○ もっとたくさん倒すぞ。

第2学年2組 国語科学習指導案

指導者 伊 藤 啓 二

単 元 いきもののちえクイズブックをつくろう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、動物の赤ちゃんの様子を文章から読み取り、読んだことを生かして自分の赤ちゃんの時の様子を調べて作文を書くという学習を経験している。この中で、生活事象から思い出したり、知りたいことを人に聞いたりして情報を取りだし、文章にして発信していくことを学んでいる。そこで、2年生のこの時期には、情報活用の範囲をさらに広げ、知りたいことを知るために、図鑑や他の読み物を活用し、資料から読んで情報を取り出す経験をさせていきたい。
- 本単元は、たんぽぽやその他の動植物についてのクイズブックを作る過程で、文章やことばを個人的に読み取り、必要感をもって情報を収集することをねらいとしている。具体的には、①たんぽぽについて書かれていることと自分の観察したことを比べて、文章やことばから自分にとって必要な情報を取り出すこと、②文章やことばの表す事柄や内容に自分なりの解釈を加え、想像を働かせて読み取ること、③調べてわかったことをもとにたんぽぽの変化の様子が分かるクイズを作り、問いと答えの形式にまとめることが内容である。このことは、自分にとって意味のある情報を様々な文献から取り出す能力を伸ばすとともに、新しい情報を創り出す素地を育てる上からも意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、身近にあるたんぽぽを観察することから、読む活動が必要感をもって行われるように構成し、文章やことばに着目しながら表現目的に応じた情報収集が行われるようにしたい。そのために、目的の設定段階では、実際に観察する活動を行い、たんぽぽの様子から「なぜ」という疑問を出し、読みの視点とクイズブック作りの目的を明確にする。情報の収集段階では、クイズを作るために教材文「たんぽぽのちえ」やその他の文章を読む活動を位置付け、文章やことばに着目した個性豊かな問いと答えを作りながら、情報収集の経験を豊かにしていきたい。情報の整理段階では、様々な動植物の知恵を自分なりに見つけたり、文章から情報収集する場を仕組み、クイズ作りをすることで、自分の見つけた情報を整理する経験をさせていきたい。

目 標

1. たんぽぽを観察したことから疑問や課題をもち、教材文などの文章から疑問や課題を解決するために必要な情報を取り出し、問いと答えの形に表すことができる。
2. 動物や植物の知恵について本の中から情報を取り出し、クイズにまとめて説明することができる。

計 画 (約11時間)

階	目的の設定 (2時間)	情報の収集 (6時間)	情報の整理 (3時間)
活動と内容	1. 実際のたんぽぽを観察し、たんぽぽの様子からたんぽぽクイズブックをつくる見通しと情報収集の視点を話し合う。 ○ 問いと答えで解決していく見通しをもつこと ○ 問いや疑問をもつ観察活動	2. クイズ作成につながる文章をもとに、たんぽぽクイズブックを作る。 (1)「たんぽぽのちえ」のことばから想像してクイズを作る。(本時3/5) ⑤ ○ クイズにできることばからの想像 (2)他の文章を活用してクイズを作る。① ○ 教材文以外からの情報の取り出し	3. 他の植物や動物の知恵について自分で見たことや調べたことをもとに、他のクイズを作る。 ○ 調べたい内容の明確化と観察や図鑑などの絵、文章から必要な情報を収集すること ○ クイズ形式での情報の整理
手だて	○ 実際のたんぽぽの様子の提示 ○ クイズブックのモデル提示 ○ 観察の視点の投げかけ	○ 観察日記や写真とことばとの比較活動 ○ 金の星社「たんぽぽ」の説明文の活用 ○ 問いの文と答えの文による表現	○ 他の植物、動物の知恵に関する情報の提供 ○ クイズ形式による学習活動

本時の目標

- たんぽぽの写真や自分で観察した事柄と、「たんぽぽのちえ」のことばや文章を照らし合わせて自分なりの理由を明確にしたたんぽぽクイズを作ることができる。

準 備 たんぽぽの写真数種、前時までのクイズのモデル、疑問一覧表など

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. たんぽぽを観察したときにもった疑問の中で、本時クイズにできそうな事柄について出し合う。 (1) たんぽぽを観察したときに知恵だと感じたことや疑問に思ったことを出し合う。 ○ 情報収集しようとしている課題の把握 ※ 学級全員の疑問は、一覧表にして提示し、前時までに解決できたもの、そうでないものができるようにしておき、活動の見通しがもてるように配慮する。 (2) 情報源となる部分を読み、本時活動のめあてを決める。 ○ 情報源となる文章やことばの認識	○ たんぽぽの綿毛はどうして花の時よりも背が高くなるのだろう。 ○ 写真のたんぽぽもちょっと違うぞ。 ○ この文章から綿毛のひみつがわかりそうだよ。
たんぽぽのクイズブックがつくれそうな文をさがして、もんだいとこたえをつくろう。	
2. 自分の疑問や友だちの疑問を文章やことばと照らし合わせて、たんぽぽに関する個性的な問いと答えを作る。 (1) 疑問を解決できそうな文章やことばをさがす。 ○ 文章やことばへの着目と想像を働かせた解釈 ※ 教材文「たんぽぽのちえ」に書かれた事柄を生かして想像を働かせた個性的な問いや答えになるように、前時までにできたクイズの中から個性的な解釈の加わったものをモデルとして提示し、発想が広がるように配慮する。	○ 文を読んで答えを見つけてみよう。 ○ Aくんの知りたかったことがここに書いてあるよ。
〈情報〉「たおれていた花のじくが、またおき上がります。」 〈想像〉長く寝て休んでいたから元気よく起き上がるだろうな。ぼくも、長く寝ていたら元気だし、背伸びするぞ。	〈問い〉たんぽぽの花はかれた後、長く寝ていますが、その後また元気よくおきます。なぜでしょう。 〈答え〉人間と同じで休養十分だと元気が出て、寝る子は育つというからです。
(2) 収集したたんぽぽの情報について、たんぽぽのちえクイズの問いと答えの形式にまとめる。 ○ 問いと答えになる情報の個性的な取り出し ※ 自分の知ったことはもちろん、友達の発見したことなども生かしてクイズにまとめるようにうながす。 3. たんぽぽの写真や実物を使いながら、自分の作ったたんぽぽの知恵クイズについて発表する。 ○ 収集した情報の表出 ※ 問いの文章を全体に伝え、その答えを出してもらうとともに、問いと答えの対応の仕方について評価してもらい、自分だけの創造的なクイズを作った成就感を味わわせる。	○ この言葉からたんぽぽの気持ちが想像できるぞ。 ○ たんぽぽの気持ちが込められたクイズはできないかな。 ○ Aくんのクイズの問題はとてもおもしろいなあ。 ○ 答えが、全然思いつかなかったけれど、問題ときちんとあっていたと思うよ。

第3学年2組 算数科学習指導案

指導者 重 松 宏 明

題 材 時刻や時間を調べて旅行日程表を作ろう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、地下鉄やバスを使った通学などにより、時計をよむことや、ある程度時刻と時間を区別することはできるようになっている。また、ある時刻から1時間たった時刻や10分たった時刻、あるいは午前8時から正午までの時間など、簡単な時刻や時間については、具体的に時計を用いながら求めることができるようになっている。しかし、繰り上がりや繰り下がりのある場合で時間を求めることについては、時間がかかったり、求める過程で間違ったりとまどったりすることが多い。また、夏休みを1ヶ月後に控え、家族で旅行やキャンプなどのお楽しみの計画をたてようとしている子供も多い。
- 本題材は、時、分、秒の間の関係を理解し、必要な時刻や時間を計算で求めながら、旅行日程表を作ることができるようにすることをねらいとしている。具体的には次のような内容がある。①時刻と時刻の間の量である時間と、時の流れの中にある1点を示す時刻とを区別して表す。②24時制での時刻の表し方を知り、20時は午後8時であるといった時刻を求める。③電車の時刻表やバスの運行表を調べ、発着時刻、運行時間などを調べる。④60分は1時間、60秒は1分であることを知り、繰り上がる場合、繰り下がる場合の時間の計算をしたり、秒、分、時の単位換算をして、時刻や時間を表したり計算したりする。これらの内容を学習することによって、時刻や時間への関心を高め、それらを積極的に活用し生活することの便利さや必要性を味わわせることができる。
- 本題材の指導にあたっては、自分の旅行日程表を作る過程で、時刻表を調べたり、時間を計算で求めたり、時間を知って必要な時刻をもとめたりする活動に多く触れさせていきたい。第1次では、旅行日程のモデルを見せ、乗り物の発着時間や観光したい場所、時間を考えながら、旅行日程表を作ることに興味を持たせていきたい。その際JRの時刻表を使って、時刻表の見方や調べ方を知らせていく。第2次では、自分なりに旅行の日程表を作る活動を行う。人に頼らず、自分の旅行日程を作る過程で、時刻表の使い方、時間の計算などに自信を持たせていきたい。60進法の計算が十分理解できない子供に対しては、時計の模型を使って考えさせたり、時刻を目盛ったテープ図を活用させたりしながら、時刻や時間の計算の理解や説明に役立てたい。第3次では作った日程表の紹介をし、それぞれの調べ方、作り方のよさを交流する。この際、発表者は発表時間を決め、ストップウォッチを使い、秒を使った時間の計測を行い、短い時間の量的感覚を体感させていきたい。

目 標

- 時刻表を使って電車の発着時刻を調べたり、必要な時刻や時間を計算によって求めたりしながら、自分で旅行日程表を作ることができる。

計 画 (約4時間)

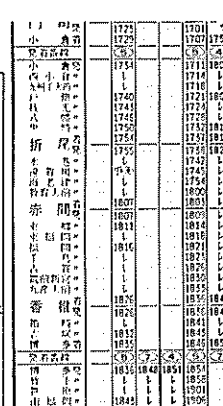
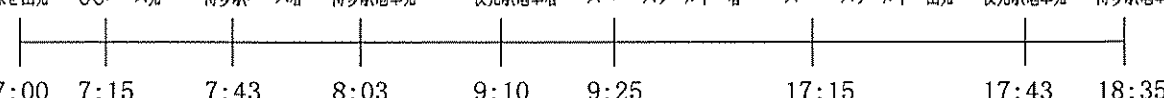
段階	第1次 時刻表を調べて時刻をよむ体験(1時間)	第2次 時刻や時間を計算によって求める体験(2時間)	第3次 短い時間を測定する体験(1時間)
活動と内容	1. JRの時刻表を使って時刻を調べる。 ○ 時刻と時間の違いを知ること ○ 24時制での時刻の表し方を知ること ○ 時刻表を使って電車の発着時刻を調べること	2. 自分の行きたい旅行日程表を作る。(本時1/2) ○ 時刻や時間を調べながら、旅行日程表を作ること ○ 時刻表や運行表を見て、発着時刻や運行時間を調べること ○ 必要な時刻や時間を計算によって求めること	3. 作った旅行日程表の紹介をする。 ○ 時刻表の上手な調べ方や、時刻、時間の計算の仕方を交流すること ○ 秒を使って短い時間を測定すること
手だて	○ 電車やバスの発着を示した楽しい旅行日程のモデル提示 ○ JRの時刻表に親しむ活動の設定	○ 旅行日程表のモデル提示 ○ 時刻を目盛ったテープ図の活用 ○ 60進法の計算を支援するヒントカード [*] の準備	○ 発表時間をストップウォッチで計測する活動の設定

本時の目標

1. JRの時刻表や電車、バス等の運行表を活用して、自分の行きたい1日旅行日程表を作ることができる。
2. 時、分の間の関係を理解し、分から時間に繰り上げたり、時間を分に繰り下げたりしながら、必要な時刻や時間を計算によって求めることができる。

準備 JR時刻表、バス等の運行表、各地域の地図、学習用時計、時刻を目盛ったテープ図

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ												
1. 旅行日程表を作るための活動の見通しと課題を話し合う。 ○ 日程表を作るための活動の見通しと課題の把握 (1) 自分の旅行日程表を作るという目的を確認し、日程表を作るために、どんなことをしなくてはならないか話し合う。 ※ 1日の旅行日程表の完成モデルやそれを作るために使ったバスや電車の運行表やJRの時刻表などを提示し、日程表を作るために必要な活動を予想させる。 ※ 右のようなおおまかな予定を事前にたてさせておく。 めあて 時刻表を調べたり、時間の計算を工夫したりして、〇〇へ遊びに行く旅行の日程表をつくらう。 (2) 日程表を作っていく活動上の課題を確認する。 課題 自分の旅行日程表から乗り物にのっている時間と目的地で遊べる時間を求めること	○ 今日は、夏休みに行く、旅行日程表を自分で作ります。 ○ 乗り物の時刻を調べなくては行けない。 ○ 時間の計算ができなくては行けない。 〇〇の予定 ◎家の出発 午前7時ごろ ◎〇〇で遊ぶ時間 約6時間 ◎家への到着 午後8時ごろ  《時刻表》												
2. 自分の旅行日程表を作る。 (1) 時刻表を調べながら、旅行日程表を作る。 ○ 時刻表を使って乗り物の時刻を調べ時間の計算をすること (例) 家を出発 〇〇バス発 博多駅バス着 博多駅電車発 枝光駅電車着 スペースワールド着 スペースワールド出発 枝光駅電車発 博多駅電車着  7:00 7:15 7:43 8:03 9:10 9:25 17:15 17:43 18:35 《スペースワールドで遊べる時間》9時25分から17時15分(午後5時15分)まで <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 33%;">・ 9時25分から16時25分まで7時間</td><td style="width: 33%;">・ 10時まであと35分間</td><td style="width: 33%;">・ 17時 15分</td></tr><tr><td>16時25分から17時まで35分間</td><td>10時から17時まで7時間</td><td>— 9時 25分</td></tr><tr><td>17時から17時15分まで15分間</td><td>17時から17時15分まで15分間</td><td>7時 50分</td></tr><tr><td>計 7時間50分</td><td>計 7時間50分</td><td>計 7時間50分</td></tr></table> ※ 時刻を目盛ったテープ図や時計の模型を活用させ、1時間=60分の構造を視覚的にとらえさせる。 8時 9時  (2) 日程表を作っていて困ったことや簡単な作り方を話し合う。 ○ 時刻表の上手な調べ方や時間の計算の仕方の難しさ、多様さを表現・交流	・ 9時25分から16時25分まで7時間	・ 10時まであと35分間	・ 17時 15分	16時25分から17時まで35分間	10時から17時まで7時間	— 9時 25分	17時から17時15分まで15分間	17時から17時15分まで15分間	7時 50分	計 7時間50分	計 7時間50分	計 7時間50分	○ 急行が使えるから速いな。 ○ 時間の計算は1時間が60分だから、計算がしにくいな。 特に時間を分に繰り下げたり分を時間に繰り上げたりするときは面倒だよ。
・ 9時25分から16時25分まで7時間	・ 10時まであと35分間	・ 17時 15分											
16時25分から17時まで35分間	10時から17時まで7時間	— 9時 25分											
17時から17時15分まで15分間	17時から17時15分まで15分間	7時 50分											
計 7時間50分	計 7時間50分	計 7時間50分											
3. 作った旅行日程表の紹介をし、本時学習をまとめる。													

第4学年1組 「人間」学習指導案

指導者 中 原 浩

題 材 福祉の心をひろげよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、3年生から特別養護老人ホームへの訪問を行っている。そこでの交流を通して、お年寄りの身体や気持ちを思いやり、真心をもって接することの大切さと相手に役立つことの喜びを味わっている。そして、訪問を継続したいという意欲をもっている。この子供たちのふれ合い体験とそこでの喜びをもとに、他者との間に温かい心をかよわせながら、人を尊び、人とともによく生きるという福祉の心を培っていきたい。
- 福岡市市民福祉プラザ（仮称、以下「福祉プラザ」）は、高齢者、障害者、児童など多様なニーズに総合的、効率的に対応するために建設が進められている。それは、民間福祉活動の拠点、情報提供・相談、研修、交流という機能を備えた市民福祉の総合センターである。現在、愛称募集活動、オープニングセレモニー、交流施設やイベント活動の具体化などの企画立案が行われている。本題材では、福祉プラザへの提案や参加を通して、子供の福祉の心を大切にする態度を育てたい。具体的には、①高齢者や障害者の思いや願いを感じ取る豊かな感性、②みんなが利用しやすい福祉プラザの在り方やそこでの活動を考える創造力と判断力、③友達や福祉施設の方と交流しながら活動を推し進めることができる対人関係能力と実践力を培うことをねらいとしている。
- 本題材の指導にあたっては、福祉プラザの計画やイベントに提案、参加することで、人の尊さと人の役に立つことの喜びを味わわせ、進んでかかわっていかうとする態度を育てたい。そのために次のような支援を行う。①障害をもった人々の思いの感受と福祉施設の必要性への気づきを促すアイマスク歩行体験や車椅子体験、②福祉プラザの方の招聘による願いの聞き取りと提案の場の設定、③福祉活動の実践の場と自分たちの学びや計画を発表できる場の保障。

目 標

- 福祉プラザへの提案や参加活動を通して、他者の役に立つことの喜びと人間の尊さを感じ取り、お年寄りや障害をもった人に進んでかかわっていかうとする実践的態度を育てる。
 - ・ 高齢者や障害者の思いや願いを感じ取ることができる。
 - ・ みんなが利用しやすい福祉プラザとそこでの活動を友達とともに考え、協力して実践することができる。

計 画（約8時間）

この段階は、他題材との関連を図りながら長期的に行う。

段階	感じる（2時間）	考える（3時間）	行う（2時間、他題材）	見つめる（1時間）
活動と内容	1. 身近な福祉施設や設備を調べる。① ○ 福祉施設への気づきと必要性の感得 2. 福祉プラザの機能を調べ、願いをもつ。① お年寄りや障害をもった方、そして私たちが使いやすい福祉プラザにしたい。私たちもできることをしたい。	3. みんなが利用しやすい福祉プラザプランを話し合う。 (1) 福祉プラザ担当の和佐さんとともに願いを話し合う。② (2) 福祉プラザ4-1プランについて話し合う。（本時）①	4. 福祉活動を行う。 (1) 福祉・ボランティア活動を行う。（他題材） ・ 長浜公園にふれ合いをつくらう（6月） ・ ボランティア活動を行おう（7月） ・ 特別養護老人ホームの訪問（継続） ○ ふれ合いによる喜びや戸惑いの実感 (2) 福祉プラザのオープニングセレモニーに参加する。②	5. 「わたしの福祉体験発表会」を行う。 ○ 人に喜ばれる心地よさと役立つことができた有実の感得 ○ 活動の価値の内的自覚
手だて	○ アイマスク歩行や車椅子体験 ○ 福祉設備探検ウォークラリー（福祉プラザへの気づき）	○ 他の福祉プラザからの情報収集 ○ 福祉プラザ担当の招聘 ○ 老人ホームでのふれ合い体験の想起	○ ふれ合いの場の設定 ○ 思いの取り出しとノートを活用	○ 実践活動時のビデオ ○ 福祉センターの方からの価値づけの声かけ

本時の目標

- 福祉の心を体験を通して学ぶことのできる福祉プラザにするための4－1プランを話し合い、高齢者や障害をもった人と進んでかかわっていこうとする意欲を高めることができる。

準備 学習の流れ図 福祉プラザの各階の構成図 企画書（自分たちの考えた福祉プラザプラン）

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 自分の福祉体験にかかわる思いや気づきを発表し、本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 福祉体験の想起と本時めあての明確化 ※ 前時学習（アイマスク歩行体験や車椅子体験）や特別養護老人ホームのお年寄りとのふれ合いから学んだことを想起しやすいように学習（思い）の流れ図を掲示する。 めあて 福祉の大切さを感じ、福祉の心をひろげる「4－1福祉プラン」を考え、提案しよう。 2. 4－1福祉プランを発表し、交流する。 (1) 自分たちが考えた4－1福祉プランのよさを発表する。 ○ 子供の福祉センターへの期待と意思の表現・交流 体験コーナーの設置 目が見えない方や車椅子の方の不自由さや施設の大切さを身をもって知るため 【暗室による模擬体験の場】 点字ブロックや信号音、盲導犬の必要性 駐輪、駐車による歩行者への危険性の増大 声かけのありがたさ イベントホールの活用 交流を深めて障害をもった方などに喜んでもらい、福祉の喜びを感じるため 【学級での定期的参加】 「福祉で学んだ私の生き方」などの発表 手話劇の発表やふれ合い 音楽テープ作りなどの継続的活動 広報活動 小・中学生が福祉に関心をもち、福祉センターを積極的に利用するため 【新聞「ぬくもり」の発行】 福祉センターの機能や活動の紹介 活動からの学び 市内の小中学校への呼びかけ ※ 考えの根拠を自分の体験、福祉の必要性、活動の現実性から整理し、資料をもとに具体化させる。 ※ 他の福祉プラザからの情報やゲスト（市の福祉プラザ担当の方）からの意見をもとに交流を進めていく。 (2) 交流をもとに、企画書（4－1プラン）を吟味する。 ○ 4－1プランの吟味と根拠の付加修正・強化 ・ 効用性（その施設、新聞を利用することでの効果）からの内容の検討 ・ 現実性（費用や実現までの時間、実現可能性）からの内容の検討 ・ 普及性（ふれ合いを深めたり他者へひろげられるか）からの内容の検討 ※ 活動の目的、ゲストの話から観点を絞り練り上げていく。 3. ゲスト（市の福祉プラザ担当の方）からの話を聞き、今後の活動への見通しを明らかにする。 ○ 自分たちの取り組みへの価値づけと今後の活動への意欲の高揚 ※ ゲストからの子供たちの活動に対する評価と福祉プラザのかかわりの可能性を聞き、意欲をもたせる。	○ 体の不自由なお年寄りとおふれ合って、やさしさの大切さと、心の温かさを味わうことができた。そんな福祉の心を生かして福祉センターの活動に取り組んでいきたい。 ○ すぐ近くに福祉センターが建設中であることを知った。お年寄りや障害をもった方、そして私たち小学生が利用しやすく、ためになる福祉センターにしてみたい。 ○ 体験コーナーも大切だけれど、もっといろいろな障害をもった方の不自由さや願いを感じられるようにならないかな。それに利用する人がいなかったら、もったいない。 ○ 一月毎に変えられるようにしたらどうだろう。そして、それを「ぬくもり」で学校に知らせたい。 ○ もっと福祉の大切さをみんなに知ってもらおうプラザになるように見直そう。 ○ お年寄りとの交流を続けてたくさんのことを学ぼう。

第4学年2組 算数科学習指導案

指導者 加 藤 英 也

題 材 どんな変わり方をするのか折れ線グラフに表そう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、これまで、第2学年でゲームの過程や結果を分かりやすくするために、記録をしたり、○×などを使ってグラフに表して処理する活動を行っている。第3学年では、目的に応じて資料を収集・分類し、数量の大小を分かりやすくするために、棒グラフに表して統計的に処理する活動を行ってきた。そこで本題材では、これらの活動体験を生かして、変化する事象から資料を収集してその変化の様子を分かりやすくするために折れ線グラフに表して、判断し、推定していくといった統計的に処理する一連の活動体験を持たせたい。
- 本題材は、変化する事象の途中の様子が知りたいという目的のために、情報を収集し、統計的に処理する活動体験を豊かにすることをねらいとしている。具体的には、①時間の経過に伴って変化する数量の情報を集め、表に整理する、②変化の様子が分かりやすいように折れ線グラフで表す、③グラフの傾きから変化の傾向を読み取る、④情報のない部分の数値を予測する活動である。これら一連の活動を通して、日常の事象を分析的にとらえ判断していく力が育つとともに、身に付けた統計的処理の仕方を生活事象に適用しようとする態度を育てることができる。
- 本題材の指導にあたっては、目的を持って、情報を統計的に処理する活動を一人一人の子供に行わせたい。そこで、第1次では、練習して上手になりたいという願いをもとに練習するとその分上達するのか調べてみたいという目的をもたせて各自自分が上達したい事柄を決めて継続的に練習し資料を収集させる。第2次では、集めた情報の変化（上達）の様子が分かるグラフを棒グラフを基に自分なりに工夫しながら作らせ、折れ線グラフまで高めていく。第3次では、グラフから上達の仕方の違いをとらえ、グラフにない近い将来のデータの数値の予測をして、実際に行って得た実測値と比較させることで統計的に処理することのよさを味わわせる。

目 標

1. 練習するとどのように上達するのかという目的を持って情報を集め、上達の仕方を折れ線グラフに表し、練習による上達の仕方は一様でないことや今後どのように変わるのかを判断・予測するといった一連の統計的に処理する活動ができる。
2. 情報の大小を比較するには棒グラフ、変化の様子を表すには折れ線グラフと、目的に応じて使い分けながら、グラフを作ることができる。

計 画（約7時間）

段階	第1次 情報を集める体験(2時間)	第2次 情報を処理する体験(3時間)	第3次 判断・予測する体験(2時間)
活動内容	1. 情報を集める目的意識を持ち、収集の計画を立てる。② ○ 練習効果を調査する目的 2. 自分の上達したいことを練習して情報を収集する。(課外) ○ 目的に応じた情報の継続的収集活動	3. 集めた情報を整理し、変化の様子が分かるような表し方を調べる。(本時 1/2) ② ○ 上達の経過が分かるグラフ作りの活動 4. 折れ線グラフを使って、変化の様子を表す。① ○ 目盛りの取り方を工夫した折れ線グラフ作りの活動	5. 折れ線グラフから変化の様子や傾向を読み取る。 ○ グラフから変化の様子を読み取り、近い将来の記録を予測する活動
手だて	○ 練習効果が量的に判断できるかどうかの吟味 ○ 情報の継続的収集への支援	○ 棒グラフとの違いを比較する場合 ○ 変化の様子が分かりやすくする支援	○ 未調査データの予測値と実測値の比較検証 ○ 活動の相互・自己評価

本時の目標

- 集めた情報を整理した表から、練習の継続と上達の経過の様子を分かりやすくするために、棒グラフを基に自分なりに工夫したグラフを作ることができる。

準備 グラフ用紙、各自が調べたデータ、棒にする材料

学習指導の過程

活 動 と 内 容

子供の思考の流れ

1. 自分が調べたデータのいくつかを棒グラフに表し、上達の過程について話し合う。

(1) 収集したデータのいくつかを棒グラフに表す。

○ 上達の仕方の違いがあること

※ 変化（上達）の仕方や棒の数の違いが顕著なものを比較提示する。

月日	5/13	5/20	5/27	6/3
ボール投げm	25.5	32.0	33.0	34.5

月日	5/13	5/20	5/27	6/3
一輪車m	2	3	8	24

(2) めあてについて話し合う。

めあて

自分が一番伸びた日がよくわかるようなグラフを工夫して表そう。

○ 調べた全部のデータを表すと詳しく分かること

2. 毎日取ったデータを基に変化する様子をグラフに表す。

(1) 表を基にしてグラフを書く。

※ 最初の棒グラフの間に残りの棒を挿入できるように、棒は移動可能にしておき、データの順序や間隔を意識化させる。

(2) 変化の様子が分かるように工夫したことを話し合う。

○ 工夫したこと…資料がないところは隙間を空けた。

棒の先だけを線でつないだ。

○ 変化の様子…増え方がいろいろと違うのが棒の先の上がり下がりを見れば分かる。

※ 変化の様子がよく分かるようにするために、棒と棒の隙間を空けたものと空けていないものを比較する。

3. 新しく作ったグラフと棒グラフとの違いについて話し合う。

○ 横軸の違い……時間的経過を表すこと

○ 棒グラフは、棒の順番が入れ替えられるが、新しいグラフは入れ替えることができないこと

○ 棒グラフを見れば増えているから上手になったことは分かるけど、調べたことによって、上手になり方が違うみたい。

○ ボール投げは、最初の方で上手になっているけど、一輪車は後の方で急に上手になっている。

○ 練習していて自分は、初めの方でうまくなったと思うけど、練習する度にうまくなくなったのかな。

○ 全部の記録を棒グラフにしてみれば、もっと詳しいことが分かるだろう。

○ この棒と棒の間にもっと棒が入るから、動かさないと入らない。

○ 日にちの順番通りにしないといけない。

○ わあ、たくさん棒をかかないといけない。大変だ。

○ ここの間は、記録がないから、間を空けておこう。

○ もっと簡単にできないかな。

○ 一番上だけ分かればいから上だけ線でつなごう。

○ 自分の練習したのは、上がったり下がったりしながら増えていて、～日が一番上手になっている。

○ 棒グラフみたいだけど少し違うところがある。

第5学年1組 理科学習指導案

指導者 山下 浩 徳

単 元 生活の中でのこの働きを調べよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、日常生活の中にあるてこの仕組みを利用したハサミやペンチなどの様々な道具を使っており、てこの働きにかかわる事象の利用を豊富に体験している。しかし、ハサミやペンチなどについて、てこの仕組みを利用した道具であることやてこの働きの規則性は意識していない。そこで、これらの身近なてこの道具の働きや仕組みを調べることを通して、生活の中で使われているてこの働きやきまりについての見方や考え方を深めさせるとともに、生活の中に潜む科学事象に目を向けさせていきたい。
- 本単元は、生活の中で使っているてこの道具の働きとてこの釣り合うきまりを関連づけながら、てこの仕組みやその働きを調べることができるようにすることをねらいとしている。具体的には、①私たちが使うハサミやペンチなどはてこの仕組みを利用して小さな力で大きな力を出していること、②てこの働きには力の加わる位置と力の大きさが関係し、てこが釣り合うときには一定のきまりがあること、などを内容としている。これらの学習を通して、身近なてこの働きや規則性についての見方や考え方を深め、てこの仕組みやきまりを生活の中で生かそうとする態度を育てることができる。
- 本単元の指導にあたっては、日常使っている様々なてこの道具の働きを体感したり、道具をてこのモデルに置き換えて追究したりしながら、日常使われている道具のてこの仕組みや働きを調べていけるようにしたい。そのために見出す段階では、まずてこの道具を使わないで釘やピンを抜く体験をして、小さな力を大きな力に変えるてこの働きを意識させる。そして日常使う釘抜きなどのてこの道具の中から、一番楽に使える釘抜きなどを探すことで、小さな力で大きな力が出せるてこの仕組みについての問題意識を持たせる。調べる段階では、その問題を確かめるために、日常の道具からてこのモデルを作って、てこに働く力をおもりやバネの釣り合いで調べる。生かす段階では、てこの働きを生かして生活に役立つ道具を作ったり、てこの道具のより上手な使い方を調べたりすることができるようにする。

目 標

1. てこを使い、力の加わる位置や大きさを変えて、てこの仕組みや働きを調べることができる。
2. 日常生活に使われるてこの道具についての見方や考え方を深めることができる。

計 画 (約7時間)

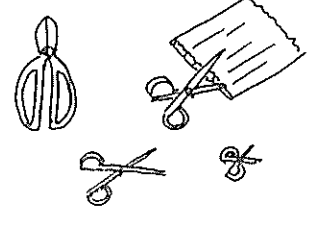
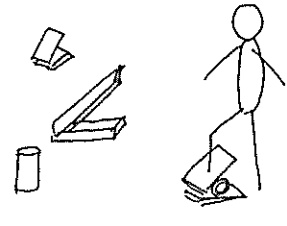
階	見出す (2時間)	調べる (3時間)	生かす (2時間)
活動と内容	1. てこの道具の働きを体感し追究課題を話し合おう。 (1) 素手やてこの道具で釘を抜く体験をする。 ① ○ 力の変化の体感 (2) 楽なてこの道具の条件を調べる。 (本時) ① ○ 身近なてこの仕組みについての課題の把握	2. てこの道具のモデルを使い、生活の中の身近なてこの仕組みを調べる。 (1) 支点や力点の位置を変え力の変化を調べる。② ○ 力の変化の把握 (2) 力点の位置と力の大きさの関係を調べる。 ① ○ 力の釣り合いの把握	3. てこのきまりを生活の中で活用する。 (1) 生活の中でのてこの生かし方を考える。 ① ○ きまりの活用の計画 (2) 生活に役立つてこの道具作りやてこの上手な使い方調べをする。 ① ○ きまりの応用や適用
手だて	○ 釘やピンを抜く場の設定 ○ 日常のてこの道具の準備	○ 力の釣り合いを測定するバネやおもりとてこの準備	○ 自由な研究活動の設定 ○ てこの道具を作る材料の準備

本時の目標

- 日常使っている様々なたこの道具について、より大きな力が楽に出せるてこの条件を見出すとともに、てこの働きについての問題意識をもつことができる。

準備 てこの道具（ハサミ、ペンチ、釘抜き、押しピン抜き、空き缶つぶしなど）

学習指導の過程

活動と内容	子供の思考の流れ
1. 前時の学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 (1) 前時の学習について確認する。 ○ 素手やてこの道具を使って釘抜きなどを行い、てこの道具を使うと小さな力でも大きな力を出せることを体感したこと。 (2) 本時学習のめあてを話し合う。 ○ 同じてこの道具でも大きな力が出せる道具の条件を見つけること。 めあて 同じてこの道具の中で、大きな力が出せる道具を見つけよう。 2. てこの道具を使い、楽に大きな力が出せる道具を調べる。 (1) 楽に大きな力が出せるてこの道具を見つける。 ○ てこの大きさや腕の長さに着目した追究 ・ ハサミやペンチなどで (支点があるてこ)  ・ 空き缶つぶしなどで (支点が端にあるてこ)  ※ 大きさや腕の長さが違てこの道具を準備するとともに、実際に操作して力の変化を体感することで、楽に力が出せるてこの条件に気づかせる。 (2) 大きな力が出せるてこの道具の条件を話し合う。 ○ 楽に力が出せる道具 ・ 切るところより持つところが大きいせん定用のハサミ。 ・ 踏むところが長い空き缶つぶし。 ○ 大きな力が出せるてこの条件 ・ てこの道具が大きい方がよい。 ・ てこの道具の腕の長さが長い方がよい。 ※ てこの大きさか腕の長さかについては、腕を持つ位置を変えて実際に確かめさせる。 3. 本時学習をまとめ、もっと調べたいことについて話し合う。 ○ てこの腕の長さが長いと楽に大きな力が出せること。 ○ もっと調べたいこと。 ・ 道具からてこのモデルを作って、もっと正確に力の変わる条件を調べること。	○ 素手で釘を抜こうとしたけど無理だった。 ○ 釘抜きを使えば楽に釘が抜けたよ。 ○ 同じ釘抜きでも、どの釘抜きが楽なのか調べたいな。 ○ 私の持ってきたハサミはどうか。 ○ 小さいハサミだと、段ボールを切るのも大変だ。 ○ やっぱり大きいハサミの方がよく切れやすいぞ。 ○ 釘抜きも大きい方がやっぱり楽になるのか確かめたいな。 ○ ハサミと釘抜きは、似ているぞ。 ○ 楽に切れるのは枝をせん定するハサミや金属を切るハサミだ。 ○ 大きい方がいいのかな、それとも長い方がいいのかな。 ○ モデルを作って、長さを測ったりして、はっきり確かめたい。

第5学年2組 家庭科学習指導案

指導者 平 山 尚 美

題 材 家族の生活を楽しくする小物を作ろう

指 導 観

- 本学級の子供たちは日常生活の中で、いろいろな小物を使って楽しく生活している。しかし小物のある生活のよさを自覚したり、更に自分で小物を製作して生活を楽しくすることはあまり意識にない。また、針と糸を使ってものを製作する経験をもつ子供は少ないが、それらを使って自分で何かを製作していく学習には期待をもっている。さらに家族への思いを込めて小物作りをし、家族に役立てたいという意欲も深いものがある。
- 本題材のねらいは、小物の製作を通して、家族との生活をより楽しいものにしていこうという実践的な態度を育てるものである。具体的には、①家族の生活を見つめる中から、自分が家族に作ってあげたい小物を決めること、②家族が「いつ」「どこで」「どのように」使うのか、家族の使用目的や好みを考えて、大きさ・形・飾り・縫い方などを計画し工夫して製作すること、③自分が作ったものが家族に役立つことの喜びを味わうこと、を内容としている。これらの学習を通して、家族の一員として家庭生活に働きかけていく能力や態度を育てることができると考える。
- 本題材の指導にあたっては、家族の一員として家族の生活を明るく楽しいものにしていきたいという子供たちの思いや願いを大切に学習を進めていきたい。つかむ段階では、手作りのものを子供から受け取った家族の喜ぶビデオを視聴させ、針と糸を使って家族のために何かを作ってあげたいという意欲化を図る。そして、家族に喜んでもらえる小物を家族からの情報収集をもとに決定させていく。その際、使用目的を家族への思いとつないで「何を」「どうして」作りたいのかという製作の目的を明確に持たせるようにする。調べる・作る段階では、家族への思いを考えながら、布の材質・形・大きさ・色柄、飾り、縫い方どの視点に沿って準備させる。そして情報コーナーを設定して、試しながら製作ができるよう支援していく。生かす段階では、自分が製作した小物が家族に活用された様子や家族の感想を情報収集させ、自分の製作した物が家庭生活に役立つ喜びを味わわせ、家族に働きかけることの楽しさを深めさせていきたい。

目 標

- 家族の生活を楽しくする小物の製作を通して、家族に役立つ喜びを味わわせ、家族の一員として家庭生活をよりよくしていこうと働きかける実践的な態度を育てる。

計 画 (約6時間)

階	つかむ (1時間)	調べる・作る (4時間)	生かす (1時間)
活動と内容	1. 家族への思いをもとにして製作する小物を決める。 ○ 家庭生活における小物の働きの理解 ○ 家族の思いを情報収集し製作物を決定すること	2. 情報収集をもとに家族の使用目的や好みに応じた形・大きさ・飾り・縫い方などを工夫し、計画し製作する。 ○ 作る目的に応じた計画 ○ 家族への思いに応じた製作	3. 小物作りを通して家族や家庭生活への自分の見方や考え方の深まりを話し合う。(構) ○ 友達の製作物のよさの理解 ○ 家庭生活に役立つ喜びの感得
手だて	○ 家庭生活に役立っている小物を見直す場面提示 ○ 家族からの情報収集の促し	○ 製作の見通しをもてる情報コーナーの設置 ○ 家族の使用目的や好みに応じた情報収集の促し	○ 製作物を使用しての家族からの情報収集の促し ○ 自己評価活動の場の設定と促し

本時の目標

- 自分が製作した小物が家族に十分役立ち喜ばれているかどうかを家族からの情報収集をもとに使用目的や好みの観点から見直すことができる。

準備 家族からの情報収集ノート、自己評価ノート、製作した小物

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ												
1. 前時までの学習を想起し、本時学習のめあてについて確かめる。 ○ 本時学習のめあての確認 めあて 家族に役立ち喜んでもらえる小物になっているかどうか使用目的や好みの観点からふり返り見直そう。 2. 家族に役立ち喜ばれる小物になっているかどうかを家族からの情報収集をもとに見直す。 (1) 自分の小物作りの良い点や不十分な点についてグループ交流する。 ○ 自分の小物の良い点と修正する点についての見直し ○ 友達の作品のよさの認め合い ※ 自分の小物を家族が使用している様子や家族からの感想などをもとに、縫い方・形・大きさ・飾り・色柄などの観点から見直し、交流しあえるよう支援していく。 ※ 友達との交流を通して更に見直し、付加・修正したことを自己評価ノートに書き加えさせていく。 ※ 製作した小物が同じもの、似たものでグループを作る。 (2) 各グループで見直したことについて全体交流する。 ○ 製作した小物について、見直しの交流 <table><tr><th>縫い方</th><th>形・大きさ</th><th>布地</th><th>色柄・飾り</th></tr><tr><td>・マスコットを作ったけどぬい目が大き過ぎて使っているうちに中の綿が出てきた。</td><td>・ていし入れを作ったけど大きさがきゅうくつで出し入れがしにくかった。出し入れに必要なゆりみがないことがわかった。</td><td>・メガネなどに中に入れるものは布地が薄い方がしっくりして使いやすい。</td><td>・飾りが少なかったのでもう少し工夫して作ってあげると楽しい。</td></tr><tr><td>・メガネ入れを作ったけど、出し入れ口が使っているうちにゆるんできたからもっとじょうぶに縫わないといけない。</td><td>・ティッシュ入れを作ったけど大きすぎて使うときに使いにくかった。大きさをきちんと測るとよかった。</td><td>・この次の製作では布地のことも考えるようにしよう。</td><td>・ボタンや色糸を使うのも楽しい。</td></tr></table> ※ 小物作りで見直し気づいたことを次からの製作の学習に役立てていくとよいことを支援する。	縫い方	形・大きさ	布地	色柄・飾り	・マスコットを作ったけどぬい目が大き過ぎて使っているうちに中の綿が出てきた。	・ていし入れを作ったけど大きさがきゅうくつで出し入れがしにくかった。出し入れに必要なゆりみがないことがわかった。	・メガネなどに中に入れるものは布地が薄い方がしっくりして使いやすい。	・飾りが少なかったのでもう少し工夫して作ってあげると楽しい。	・メガネ入れを作ったけど、出し入れ口が使っているうちにゆるんできたからもっとじょうぶに縫わないといけない。	・ティッシュ入れを作ったけど大きすぎて使うときに使いにくかった。大きさをきちんと測るとよかった。	・この次の製作では布地のことも考えるようにしよう。	・ボタンや色糸を使うのも楽しい。	○ 今日は、本当に家族に喜んでもらえる小物になっているかどうかを家族からの情報収集をもとに見直していくのだな。 ○ ぼくは、おばあちゃんにメガネ入れを作った。おばあちゃんは、とても喜んでくれたけどおばあちゃんが使っているうちに入り口のところがゆるんで破れそうになっている。おばあちゃんが、そこは返し縫いで細かく縫うといいと教えてくれた。 ○ 僕は、出し入れのところは、やはりもっとじょうぶな縫い方をしないといけないとわかった。おばあちゃんもとっても喜んで使ってくれているのもう一度縫い直してあげよう。 ○ 作るものは違っていても使う目的によって縫い方の工夫や大きさなど考えないといけないということがよくわかってきた。次からは、もっとよく考えて製作していこう。 ○ 初めて家族のために製作したけど、小さなものでも家族がとても喜んでくれたのでうれしかった。家族のことを考えて自分のできることをしていくのは家族も喜ぶけど自分もうれしいし楽しいと感じた。また他の小物を家族の人や自分の知っている人に作ってあげよう。
縫い方	形・大きさ	布地	色柄・飾り										
・マスコットを作ったけどぬい目が大き過ぎて使っているうちに中の綿が出てきた。	・ていし入れを作ったけど大きさがきゅうくつで出し入れがしにくかった。出し入れに必要なゆりみがないことがわかった。	・メガネなどに中に入れるものは布地が薄い方がしっくりして使いやすい。	・飾りが少なかったのでもう少し工夫して作ってあげると楽しい。										
・メガネ入れを作ったけど、出し入れ口が使っているうちにゆるんできたからもっとじょうぶに縫わないといけない。	・ティッシュ入れを作ったけど大きすぎて使うときに使いにくかった。大きさをきちんと測るとよかった。	・この次の製作では布地のことも考えるようにしよう。	・ボタンや色糸を使うのも楽しい。										

第6学年1組 音楽科学習指導案

指導者 津 本 修 一

題 材 世界の民謡と民族音楽の音楽会をしよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、5年生の12月題材「手づくり音楽会をしよう」で、世界の子守歌の鑑賞活動から好きな楽曲を選択し、グループで自分たちができる楽器をもとに簡単なアレンジを行い、音楽会形式で発表をするという経験をしてきている。この活動を通して、子供たちは楽曲に関する楽譜・資料を収集したり、楽器編成や表現の工夫から音楽会の企画・運営までを自分たちの手で行う音楽活動の楽しさを味わってきている。また、世界の様々な子守歌に出会い、音楽の多様性に関心を抱く子供が増えてきた。
- 本題材は、世界の民謡と民族音楽に関心をもち、世界の音楽の多様性に気づかせるとともにアンサンブルの楽しみ方を身につけさせることをねらいとしている。具体的な内容としては、①世界の民謡や民族音楽の多様なおもしろさを感じ取ること、②楽曲の演奏形態や表現の工夫をすること、③自分たちで音楽会を企画・運営することなどである。楽曲としては、世界の民謡（「アリラン」、「夢の中のヨーデル」、「カライモーメ」など）、民族音楽（「バリ島のケチャヤガムラン」、「ベトナムのトロロン（木琴）」、「アフリカのバラフォン（木琴）」、トゥームボ（ひょうたん製の打楽器）」など）子供が親しみやすく即興性の高い曲を取りあげる。これらは、子供に世界の民謡と民族音楽に関心をもち、即興的なアンサンブルづくりの音楽活動へと発展させていくうえで価値ある教材であると考えられる。
- 本題材の指導にあたっては、「であう段階」では、様々な世界の民謡や民族音楽を鑑賞し、世界の民謡や民族音楽に興味をもたせる。そして、演奏してみたい楽曲を選択させ、楽曲ごとにグループを組ませる。「あらかず段階」では、グループごとに楽曲についての資料の収集活動、楽器選択と編成、パートづくりの活動を仕組み、自分たちでのアンサンブル表現の基礎づくりを行っていくようにする。「ふかめる段階」では、グループに応じて練習の方向性や技能面などの助言を行いそれぞれの表現を高めていくことができるように支援する。「まとめる段階」では、発表についての日時・会場・プログラム・宣伝方法などについて、助言や必要な物的支援を行い、自分たちの手で音楽会の企画・運営を行っていくことができるようにしたい。

目 標

1. 楽器編成やパートづくり、アンサンブルを工夫し、発表する楽しさを味わうことができる。
2. 世界の民謡や民族音楽に関心をもち、その多様性やおもしろさを感じ取ることができる。

計 画（約8時間）

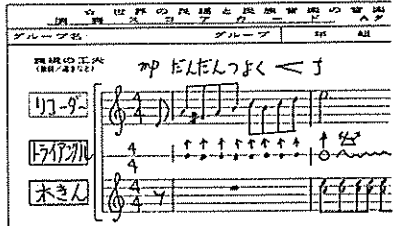
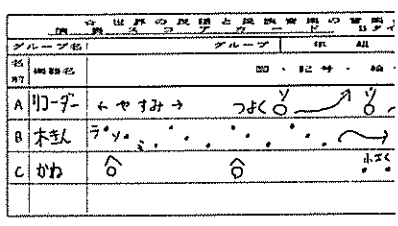
段階	であう段階(1時間)	あらかず段階(3時間)	ふかめる段階(3時間)	まとめる段階(1時間)
活動と内容	1. 世界の民謡・民族音楽について調べたり、鑑賞したりする。 ○ 世界の民謡・民族音楽について関心をもち、音楽会への目的意識をもつこと	2. 演奏グループを組んでアンサンブルづくりの計画をたてる。(本時3/3) ○ 演奏楽曲選択と楽譜・資料などの収集 ○ 演奏形態の工夫と楽器選択 ○ パートづくりと演奏カードづくり	3. グループごとに曲想を工夫してアンサンブルの表現をする。 ○ 練習課題の設定 ○ 部分練習/パート練習 ○ グループごとの練習	4. 「世界の民謡・民族音楽の音楽会」を行う。 ○ 音楽会の企画・運営 ○ 全体を通したりハーサル ○ アンサンブルの鑑賞
手だて	○ 世界の民謡・民族音楽についての映像・資料の提供 ○ 感想ノートの活用	○ 世界の民謡・民族音楽についての映像・資料の提供 ○ 演奏カードづくりと活用への支援	○ アンサンブル活動の場の構成 ○ グループ別計画ノートの準備と活用 ○ グループごとの巡回支援	○ 音楽会の企画・運営についての支援 ○ 音楽会に対する聴衆の感想カードの配布と回収

本時の目標

- 世界の民謡と民族音楽の演奏曲の演奏カードをもとに、ためしのアンサンブル活動を行うことができる。

準備 演奏カード、アンサンブルノート、各自必要な楽器、世界民族音楽マップ、世界の民族音楽のビデオ

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○ 前時学習についての確認と本時めあての把握 ・グループの楽器編成 ・演奏カードのアレンジの課題点 ※ 代表グループの演奏カードを例にとりながら、オスティナートの工夫、強弱や奏法の工夫などについてのアレンジのポイントを示す。 — めあて — 各パートの表現を工夫して、グループで「ためしのアンサンブル」をしよう。 2. 各パートの表現を工夫して、グループで「ためしのアンサンブル」をする。 ○ 各パートの表現の課題点の明確化 ※ 課題点については、アンサンブルノートの計画欄に記入したり、演奏カードに書き込みをしたりして明確にさせる。 ○ 各自のパートの表現の工夫 ・リズム、伴奏形やオスティナートの工夫 ・強弱、奏法などの工夫 ※ 工夫した表現をもとに、演奏カードを付加修正させる。 ○ グループでのアンサンブル ※ グループごとに気づいた点や改善方法について話し合わせグループに応じて適宜指導・助言を行う。 【民謡の演奏カード例】  【民族音楽の演奏カード例】  3. 本時のまとめをし、次時の見通しをもつ。 ○ 代表グループの表現 ○ 本時活動の感想の発表 ※ 代表グループの表現を参考に、各グループで、アンサンブルの方向性について話し合うように助言する。	○ この前は、オー・ソレ・ミオのメロディーをリコーダーで演奏できるようにアレンジしたよ。 ○ ぼくは、鉄琴担当だからガムランのふしぎな音色の感じがでるようにたたき方を工夫してみたいな。 ○ この前の時間にアレンジをした和音伴奏は、あまり曲の感じに合っていないので、伴奏の形をいろいろ工夫してみたいな。 ○ 「アリラン」のメロディーは、中間の部分をもりあげると感じがでるようになったぞ。 ○ 「コンドルはとんでいく」のリズム伴奏ができあがったぞ。演奏カードに書いておこう。 ○ みんなで合わせるのはむずかしいけど、楽しいな。 ○ Aグループの演奏は、リズム伴奏がよく工夫してあってよかったな。 ○ わたしたちのグループももっと工夫したいな。

第4・5・6学年3組 総合活動指導案

指導者 藤 木 寿美枝

単 元 博多にわかを世界へ 指 導 観

- 本校の帰国子女学級には、アメリカ、マリ、オーストラリア、スウェーデンなどから帰国した子供たち7人が在籍している。外国での生活期間は2年から6年と様々ではあるが、その期間の外国での生活は子供たちに強い影響を与えている。子供たちの語らいを聞いていると、ユーモアを交えて楽しい話が進んでいることがある。これは、文化を異にする異国の人々ともうまくつきあえるセンスを在住していた国で身につけた子供たちのよさであると思われる。そこで、ユーモアの感覚を身に付けてきている子供たちに、日本の、特に博多のユーモアを理解し、身につけることは、日本の慣習や心情を理解するために役立つと思われる。
- 本単元は、福岡市民に愛されている博多にわかを子供たちなりに工夫して行うことによって、日本のユーモアに触れ、日本の言語文化に親しみをもつことをねらいとしている。具体的には、①博多にわかふれ、博多にわか楽しさを味わうことができる、②博多にわか作り方を学び、日本人が感じるユーモアを味わうことができる、③自分たちでも博多にわかを演じたり、創造したりしてそれを他の帰国者や外国人などに紹介することを通して博多にわかをよさを広めることができる、などである。
- 本単元の指導にあたっては、まず、博多仁和加振興会の方のにわかの実演を鑑賞することにより、博多にわかに出会わせ、博多にわかのおもしろさに気づかせたい。次に、自分たちで博多にわかを演じてみて、その楽しさを味わい、どうすれば他の人にもにわか楽しさが伝わるかを工夫させたい。この過程では、博多にわかクイズを行ったり、博多仁和加振興会の方ににわか相方をお願いしたりして、にわか作り方を学びながら、そのおもしろさやダイナミックさを感じ取らせたい。そして、お互いで相互評価しながらおもしろい「帰国版博多にわか」を作り上げ、帰国者のグループである帰国子女の会のパーティで披露するなどして、博多にわかを世界に発信していきたい。

目 標

1. 博多にわかのおもしろさを味わうことによって日本人の心情の理解につとめようとする態度を養う。
2. 帰国版はかたにわかを作りそれを他の海外生活経験者に表現する活動を通して、それらの人々との交流を図ることができる。

計 画 (約5時間)

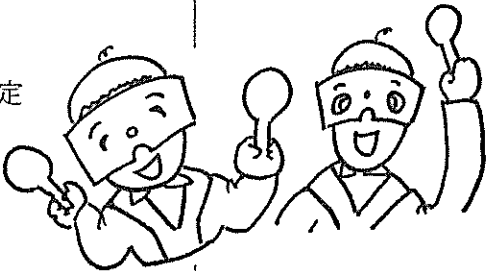
階	であう (1時間)	ふれあう (3時間)	ふかめる (1時間)
活動と内容	1. 博多にわかを鑑賞したり、博多にわかクイズをしたりする。 ○ 博多にわかへの関心と自分たちで演じる意欲の喚起	2. 帰国版博多にわかをつくり、自分たちで演じてみる。 (本時2/3) ○ 日本語や外国語の言葉の文化に着目した帰国版博多にわか創造 ○ ユーモアの感じ取り	3. 帰国子女の会等で紹介する帰国版博多にわかビデオをつくる。 ○ 作品の紹介 ○ 海外経験者へ向けての博多の伝統文化の伝達 ○ ユーモアの自己表現
手だて	○ 博多にわか鑑賞 ○ 英語版博多にわかクイズのモデル提示	○ 在留国のユーモアについての話し合い ○ 帰国版にわか集の製作	○ 作品紹介の場の設定 ○ 視聴者の反応を聞く場の設定

本時の目標

1. おもしろいにわかになるよう、にわかを作りを工夫することができる。
2. 自分たちがつくった帰国版博多にわかを上演し、その楽しさを味わうことができる。

準備 帰国版博多にわか集、博多にわかのお面、博多仁和加振興会の方の招聘、しゃもじ、ビデオ

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時の学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○ 「帰国版博多にわか」を演じ表現することの確認 ※ 博多にわかクイズや連想ゲームをして、博多にわかを創作・表現しやすい雰囲気作りをする。 め あ て 帰国バージョンの博多にわかを演じよう。 2. これまで創りためてきた「帰国版博多にわか集」や即興表現をもとに、帰国版博多にわかを演じる。 (1) 博多仁和加振興会の方の博多にわか演技と自分たちのにわか演技とを比較し、もっとおもしろくするにはどうしたらよいかを話し合う。 ○ 博多にわかをおもしろくする観点の把握 ○ 博多にわかと言語文化としての価値の理解 <内容面から> ・ 博多にわかタブー（人を傷つける笑いはいけない）を守る ・ すぐ分かるおちでなく、「なるほど」と思わせるおちを考える。（おちー 地口おち、考えおち、とたんおちなど） <演技面から> ・ 間の取り方 ・ 鳴り物による盛り上げ方 ※ 振興会の方と自分たちとの演技の比較の場の設定 (2) おもしろい演技になるよう工夫して、帰国版博多にわかをつくる。 ○ 表現の工夫 ※ 振興会の方と相方を組み、にわかを演じてみる。 ※ 自分たちが作ったにわかをグループ間で見せ合う。 <帰国版博多にわか例> 「このごろは、排気ガスの多うして、鳥も困つとるごたる。」 「ばってん、白鳥は全然気にしとらんばい。」「なしな。」 「そりゃ、白鳥は、スワン（吸わん）。」 3. 創り上げた帰国版博多にわかを観客の前で上演する。 ○ 掛け合いにわか、一口にわか上演 ○ 自分たちがつくったにわかのおもしろさの感受 ○ 創作したことへの成就感 ※ 保護者や参観者を観客として招待する。	○ 帰国版の博多にわかもずいぶんできたね。 ○ 今日は、にわかをやって、おもしろいか試してみよう。 ○ 振興会の松崎先生のにわかはとってもおもしろいけど、ぼくたちのはもう少しだな。どうしてだろう。 ○ おもしろくするコツがあるんじゃないかな。 ○ おちを工夫しよう。 ○ 鳴り物もタイミングが大事だよ。  ○ 君たちの、音がきちんと合ってて、博多にわからしいね。 ○ おちを言うときは、拍子木を入れると観る人によく分かるよ。 ○ よし、ぼくたちのつくったにわかを観てもらおう。笑ってもらえるかな。

第1・2学年ふじ組 音楽科学習指導案

指導者 西 原 敦 子

題 材 うちゅうせんについてのいこう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、精神年齢2歳から4歳程度の1年生3名、2年生4名で構成されている。音楽の楽しみ方については、リズムカルな歌が流れているテープレコーダーに自分から近づいて耳を傾ける、手拍子をしたり身体を揺らしたりしながら聴くなど、音楽への興味・関心をもち自分なりに音楽を楽しむ姿が見られる。また、楽曲の印象的なリズムの部分で歌う、部分的に拍の流れにのって歌う、打楽器を楽曲の流れの中鳴らすなど、部分的に音楽的要素を感じとって表現する姿も見られる。さらに、歌詞からイメージをふくらませて、身近な動物やおもちゃなどになりきって身体表現することもできるようになりつつある。
- 本題材のねらいは、楽曲の雰囲気や歌詞の表す情景から動きを工夫して身体表現をしたり、楽しく歌ったり、打楽器に親しみをもち、部分奏に慣れたりすることである。具体的には、①楽曲「うちゅうせんのうた」を聴きながらみんなで行進したり、かけ合いの歌詞から動きをつくって身体表現をしたりしながら歌う、②ロボットの星や動物の星では楽曲の雰囲気や歌詞の表す情景を思い描いて動きをつくったり、歌ったりする、③星の場で表現するグループと宇宙船の中で楽器を鳴らすグループに分かれてかけ合いをしながら一緒に表現する、などである。これらの内容を学習することによって、みんなと一緒に音楽を楽しむことができ、音楽を楽しむ方をもつ上で意義深い。
- 本題材の支援は、楽曲の表す情景を思い描き、なりきることの面白さを感じながら、身体表現をしたり、歌ったり、楽器に親しみリズム奏に慣れたりするなどの表現をさせていく。そのために、次のような支援を行う。①具体的で情景を浮かべやすい歌詞と拍の流れにのりやすく「準備OK！」など、かけ合い的な表現ができる部分をもつ楽曲を選定する、②ペープサートを持って、歌いながら踊る→楽曲に合わせて打楽器を鳴らす→それぞれの表現を録画したビデオを視聴しながら身体表現をしたり、歌ったり、楽器を鳴らしたりする、という一連の活動を構成する、③表現の場子供が乗ることができる位の宇宙船を準備するなど、楽曲の歌詞や雰囲気に合った場の設定をする、④打楽器を鳴らす部分を個に応じて決めるなど個の実態に応じた働きかけを行う。

目 標

- 宇宙船で動物の星やロボットの星に行き、楽曲の表わす情景を思い描きながら、身体表現をしたり、歌ったり、楽器を鳴らしたりすることができる。

計 画 (約4時間)

段階	で あ う (1時間)	あ ら わ す (2時間)	まとめる (1時間)
活動と内容	1. ストーリーや楽曲、楽器を知って歌う。 ○ 宇宙へでかけていく話を知ること ○ 表現への目的意識をもつこと ○ かけ合いの歌い方を知ること	2. 宇宙船にのって色々な星へ行き、動きや歌、打楽器の部分奏で楽しく表現する。 (1) ロボットの星や動物の星へ行き、楽しく表現する。 ○ 身体表現や歌唱表現 ① (2) ロボットや動物の星で好きな表現を選んで表現する ○ 身体表現や歌唱表現、器楽表現 (本時) ①	3. 楽しかった表現を他クラスの友達に発表する。 ○ 自分の表現への満足感を味わうこと
支援	○ パネルシアターの提示 ○ 楽曲「うちゅうせんのうた」の提示 ○ 宇宙船の提示	○ ストーリーのドラマ的ビデオの提示 ○ ロボットや動物の楽曲の提示 ○ 拍やリズムを強調したテープ、ペープサートの準備 ○ 宇宙船の提示、打楽器の提示	○ 友達と発表し合う場の設定 ○ 励まし、賞賛、表現を価値づける声かけ

本時の目標

○ ロボットや動物になって、拍の流れを感じながら身体表現をしたり、歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら、楽しく表現することができる。

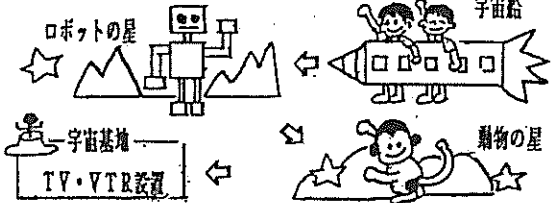
Aグループ：楽曲を聞いたり、動物やロボットになりきったモデル演示を見たりしながら身体表現をしたり、楽曲が流れる中で声を出したり、楽器を鳴らしたりすることができる。

Bグループ：楽曲を聴きながらロボットや動物になって身体表現をしたり、部分的な拍の流れにのって歌ったり、楽器を鳴らしたりすることができる。

Cグループ：ロボットや動物になり、拍の流れにのって身体表現をしたり、歌ったり、楽器を鳴らしたりして、繰り返し表現することができる。

準備 ドラマ的ビデオ、拍やリズム、号令を強調したテープとレコーダー、打楽器（タンブリン、ボンゴなど）、宇宙船、テレビ、キーボード、ロボットや動物のペープサート

学習指導の過程

活動と内容			個の活動を促す支援
1. 活動のストーリー、楽曲や楽器、リズムなどに会い、本時学習のめあてを知る。 (1)「うちゅうせん」の楽曲を歌う。 ○ 活動の場、宇宙船に出会うこと (2)ドラマ的ビデオを見て、本時のめあてを知る。 ○ 表現への目的意識をもつこと めあて うちゅうせんによって、ロボットのほしやどうぶつのほしであそぼう！			1. 学習への目的意識をもたせる支援 ○ 楽曲の拍（4拍子）を強調した伴奏 ○ 拍を強調した手拍子や声かけ ○ ドラマ的ビデオの提示 ○ 活動の場、宇宙船の提示 
2. ロボットの星や動物の星へ行き、好きな表現を選んで、楽しく表現する。 ○ ロボットや動物になりきって拍の流れを感じながら楽しく表現すること Aグループ：モデル演示を見ながらペープサートを振って動いたり、歌ったり楽器を鳴らしたりすることを楽しむ。 Bグループ：ロボットや動物の動きを部分的に拍の流れにのってつくったり、歌う・楽器を鳴らすことを選んだりして表現する。 Cグループ：ロボットや動物になりきって特徴をとらえた動きを拍の流れにのってつくったり、歌う・楽器を鳴らすことを選んで表現する。			2. 場面の情景や楽曲に合わせて、表現する支援 ○ ロボットや動物のペープサートの提示 ○ 手拍子、部分奏のモデル演示 ○ 拍やリズムを強調した楽曲テープ ○ 打楽器の提示 Aグループ：ロボットや動物の動きの特徴を強調したモデル演示や動作援助 Bグループ：特徴をとらえた動きを認めながら全曲続けて表現していくような働きかけ、部分奏のモデル演示 Cグループ：楽曲テープに耳を傾ける声かけ、部分奏のモデル演示、繰り返し表現するような声かけ
3. 本時の活動を振り返り、学習をまとめる。 ○ 友達と表現した楽しさを味わうこと ○ 表現したことへの満足感を味わうこと ・身体を左右に揺らす、手拍子や楽器を鳴らす。 ・ビデオを視聴しながら友達と一緒に表現する。 ・ビデオを視聴しながら楽曲に合う表現を選び行う。			3. 表現したことへの満足感を味わわせる支援 ○ 見合う、聴き合う場（宇宙基地）の設定 ○ VTRに注目するような声かけ ○ VTRの友達に合わせて表現する子供への働きかけ、声かけ ○ 賞賛、表現を価値づける声かけ ○ 次時への期待をもたせる声かけ

第3・4学年さくら組 国語科学習指導案

指導者 舩 元 俊 文

題 材 なぞなぞめいろであそぼう（よみましょう）

指 導 観

- 本学級の子供たちは精神年齢3歳から5歳程度の3年生男子2名・女子1名、4年生男子1名・女子2名の計6名で構成されている。子供たちが自分が経験したことを、「～をした。」「～にいった。」という2語文程度で話をするができる。聞くことに関しては、指示された「机の上におく」「本を取る」「カバンの中に入れる」「ティッシュを取る」などの言葉の意味を理解し、行動にうつすことができる。しかし、自分で文を読んで書かれている内容を理解したり、上・下などの位置関係を表す言葉の意味を理解し表現したりして、行動するまでには至っていない。
- 本題材のねらいは、なぞなぞお化けにばらばらにされたテレビの主人公をめいろの中からみつけたし、構成していく活動を通して、語句や文を正しく読み取ることができるようにすることである。具体的には、①ばらばらになったテレビの主人公を探すという目的意識をもって読むこと、②語句・文・文章を意欲的に読もうとする態度を身につけること、③日常生活の中でかかわる語句・文・文章を音声化し、その意味を理解し、語彙を増やすこと、④位置関係を表す言葉について、語と語を関連づけてその意味を読み取ることなどである。以上のことで、日常生活の中で読むことに対して積極的にかかわり、自分の意志で読もうとする力を高めることができる。このことは、子供たちの言語生活を広げることになり、将来の自立的な生活を考える上で意義深い。
- 本題材の支援は、①なぞなぞお化けに連れ去られ、ばらばらにされたテレビの主人公をもと通りにするという目的意識と読みの意欲をもつことができるようなストーリーを提示すること、②個の能力に応じた日常で使う語句を含んだなぞなぞカードを準備すること、③繰り返し語句・文を読むことができるような、テレビの主人公の構成物を用意すること、④自分の解いたなぞなぞから、主人公を構成できるようなノートの準備をすること、⑤達成感・成就感を味わえるような、構成したノートを紹介する発表の場の設定、などである。

目 標

1. テレビの主人公を構成しようという目的意識をもって、繰り返しなぞなぞめいろで楽しく遊ぶことで、語句、文、文章を意欲的に読もうとする態度を身につけることができる。
2. なぞなぞを解くことで日常生活の中でかかわる語彙を増やしたり、位置関係を表す言葉の意味を読みとることができる。

計 画（約4時間）

階 段	であう（1時間）	つくる（2時間）	いかす（1時間）
活 動 内 容	1. なぞなぞめいろに出会う ○ なぞなぞの解き方を知ること ○ めいろの通り方を知ること	2. なぞなぞめいろで遊ぶ。 (1) 学習で使う語句を中心になぞなぞを解く。 ○ 位置関係を表す言葉の意味を読みとること （ほんの右など） ○ 学習で使う語句を中心に語句の意味をしり、語彙を増やすこと (2) 生活で使う語句を中心になぞなぞを解く。 （本時） ○ 同じ言葉でも場所の違う位置関係を表す言葉を読みとること （なべの上など） ○ 生活で使う語句を中心に語句の意味をしり語彙を増やすこと	3. 他の学級の友達と一緒にめいろ遊びをする。 ○ 他の学級の友達に迷路の通り方や、なぞなぞの解き方を教えながら遊ぶこと
支 援	○ なぞなぞの提示 ○ 解き方のモデル演示	○ なぞなぞめいろの設定 ○ 個に応じたなぞなぞカードの準備 ○ テレビの主人公を構成するノートの準備 ○ ものを表す絵カードの準備	○ 他の学級の友達と一緒に遊ぶ時間の設定

本時の目標（※Gはグループを表す。）

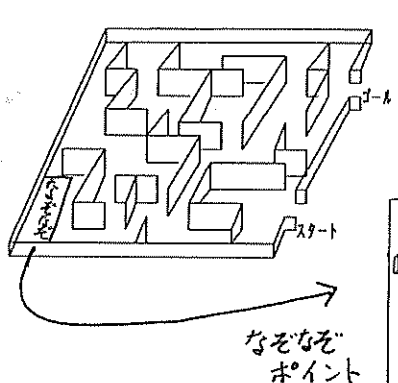
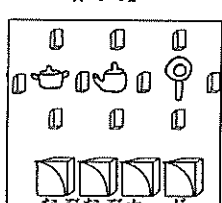
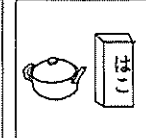
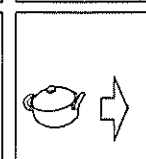
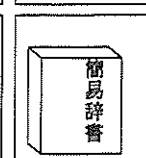
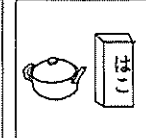
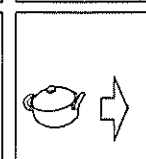
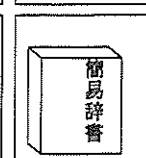
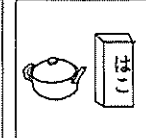
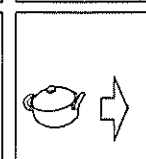
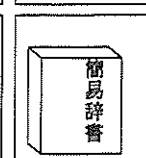
○ ものを表す言葉と位置関係を表す言葉で書かれたカードを読み、2つの言葉を結び付けてなぞなぞを解き、ヒーローを集めノートに構成することができる。

A G：「なべ・みぎ」などの語句を絵や音声を手がかりにし読み取ることができる。 B G：「なべのみぎがわ」などの文を矢印や音声を手がかりにし読み取ることができる。

C G：「なべの右側」などの漢字で書かれた文を簡易辞書を手がかりにし読み取ることができる。

準 備 ダンボール板、なぞなぞカード、なぞなぞノート、絵カード、簡易辞書など

学習指導の過程

活動と内容	個の活動を促す支援									
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時学習のビデオを視聴する。 ○ 前時学習の想起 (2) 本時ストーリーをビデオで視聴し、頑張ることを話し合う。 ○ 活動への目的意識の明確化と活動の手順の把握 ビデオの内容 なぞなぞお化けにばらばらにされたテレビのヒーローをめいろの中から探しだし、なぞなぞを解いてもとどりにする。 めあて なぞなぞめいろをとってヒーローをさがそう	1. 目的意識をもたせるための支援 ○ 前時を想起できるなぞなぞカードの提示 ○ 前時学習のビデオの提示 ○ 本時ストーリーをイメージさせるビデオの提示 <本時めいろの場合>  ヒーローの入っている箱  ○ テレビのヒーローの構成物 ○ 迷路の通り方のモデル演示 2. なぞなぞめいろを通る個に応じた支援 A グループ ・一語ずつ指差すことができるカードの提示 ・位置関係を意識できる絵の提示 ・位置関係を意識できるようなモデル演示 B グループ ・一語ずつ読むことができるカードの提示 ・位置関係を意識できる矢印の提示 ・位置関係を意識できるような声かけ C グループ ・漢字を含んだカードの提示 ・漢字を調べることのできる簡易辞書の準備 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 20%;">なべ・みぎ</td><td style="width: 80%;"></td></tr><tr><td>なべのみぎがわ</td><td></td></tr><tr><td>なべの右側</td><td></td></tr></table> ※ 各グループとも自分のカードが分かるような色分けをし、自分のカード以外はとらないようにする。 3. 学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 発表の場の設定	なべ・みぎ		なべのみぎがわ		なべの右側				
なべ・みぎ										
なべのみぎがわ										
なべの右側										
2. なぞなぞめいろで楽しく遊ぶ。 (1) なぞなぞポイントで、なぞなぞを読む。 ○ 文字の音声化 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><th style="width: 33%;">A G</th><th style="width: 33%;">B G</th><th style="width: 33%;">C G</th></tr><tr><td>・「なべ みぎ」という文を一語ずつ音声化する</td><td>・「なべのみぎがわ」という文を音声化する</td><td>・「やかんの右側」という文を簡易辞書をたよりに音声化する</td></tr></table> (2) 読んだなぞなぞを解く。 ○ ものの名前と位置関係を表す言葉に関連づけて、その意味を読み取ること <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 33%;">・絵を手がかりにして右側の箱を取る</td><td style="width: 33%;">・矢印を手がかりにして右側の箱を取る</td><td style="width: 33%;">・辞書の読みを手がかりにして右側の箱を取る</td></tr></table> (3) 箱の中のヒーローをノートに構成する。 ○ 自分の読みへの評価 ※ (1)～(3)の活動を繰り返させる。 3. 本時学習のまとめをする。 ○ ヒーローを探すことができたことへの達成感・成就感を味わうこと	A G	B G	C G	・「なべ みぎ」という文を一語ずつ音声化する	・「なべのみぎがわ」という文を音声化する	・「やかんの右側」という文を簡易辞書をたよりに音声化する	・絵を手がかりにして右側の箱を取る	・矢印を手がかりにして右側の箱を取る	・辞書の読みを手がかりにして右側の箱を取る	
A G	B G	C G								
・「なべ みぎ」という文を一語ずつ音声化する	・「なべのみぎがわ」という文を音声化する	・「やかんの右側」という文を簡易辞書をたよりに音声化する								
・絵を手がかりにして右側の箱を取る	・矢印を手がかりにして右側の箱を取る	・辞書の読みを手がかりにして右側の箱を取る								

全 体 会（1 日 目）

○ あいさつ

学 長 菰 口 治
学校長 高 橋 義 夫

◇ 主題発表

「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」

—子供主体の活動からみる教育課程の編成—

教 頭 芋 生 修 一

◇ 教科等発表

● 算 数 科

「数学的活動を豊かにもつ算数科学習」

算数科部 小 森 晃

● 生活単元

「自分の生活を楽しんでいく生活単元学習」

障害児教育研究部 松 本 良 一

◇ 教科発表

● 生 活 科

「対象への愛着を深める生活科学習」

生活科部 藤 木 寿美枝

● 国 語 科

「必要感をもって創造的な言語活動を行う国語科学習」

国語科部 吉 田 正 樹

第1日目 午後の部
提案授業指導案

第1学年2組 表現科学習指導案

指導者 樺島 穰(T1)・津本 修一(T2)

題材 あめくん、にじさん、こんにちは

指導観

- 本学級の子供たちは、材料や音などを中心に言葉や動きなどを取り入れて楽しく表現遊びをすることに親しみ始めている。また、表現遊びの過程では、想像力を働かせてお話をつくったり、表したい様子を声や打楽器でつくったりしながら表現を楽しむ子供も見られる。また、自分の表現遊びに必要な材料や手づくり楽器なども、進んで準備をしようとする態度も見られるようになってきた。さらに、自分の表現遊びに楽しく浸り切りながらも、友達の表現遊びを見たり聴いたりすることに対して関心をもち始めている。
- 本題材のねらいは、「雨の日のお話」をもとに表した森の登場物が、雨や虹に出会う様子を想像して、お話や音をつくったり絵に表したりしながら楽しく表現遊びができるようにすることである。具体的な内容としては、①材料、言葉、音などの表現素材をもとに、楽しく表現遊びをすること、②森の登場物が雨や虹に出会う様子を想像的なお話や音や絵に表したりすること、③手づくり楽器などの材料の準備を進んで行うこと、④自分の表現遊びに満足し、友達のよさも感じ取ること、などである。これらの内容を学習することによって、豊かな感性と創造性の基礎を培い、表現する喜びを味わわせることができる考える。
- 本題材の支援は、子供の多様な表現活動を保障するため2人の教師による協力、分担型の支援を行う。具体的には、①「雨の日のお話」の提示や森の登場物を表すための造形材料などの提供(T1)、②森の登場物が雨と虹に出会うお話づくりの促しと助言、お話カードの提供(T1)、③森の登場物が雨と虹に出会う様子の音づくりの促しと助言、音づくりカードや打楽器類の提供(T2)、④様々な表現素材で表現遊びを楽しむための場の設定(1階・ワークスペース)と想像的なお話づくりや音づくりの楽しさに友達同士が気づいていくための交流の促しや賞賛(T1・2)、などを行う。

目標

- 森の登場物が、雨や虹に出会う様子を豊かに想像し、お話や音をつくったり、絵に表したりしながら楽しく表現遊びができる。

計画 (約5時間)

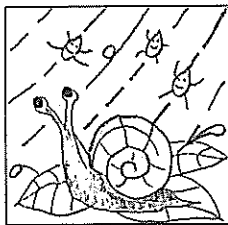
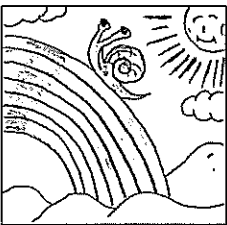
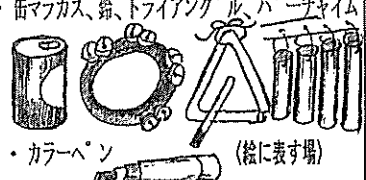
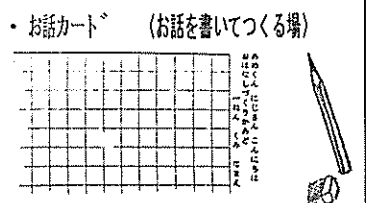
鑑	感じる(2時間)	表す	⇔(3時間)⇔	味わう
活動と内容	1. 「雨の日のお話」を聞いて、森の登場物を表す。 ○ 雨の日の様子を想起すること ○ 主人公となる森の登場物を表すこと	2. 森の登場物が雨や虹に出会うお話や音づくり、絵に表すなどの表現遊びをする。(時2/3) ○ 雨くんと出会う場面 ・ かたつむりたちの生活 ・ 喜ぶあじさいの花たち ○ 虹さんと出会う場面 ・ 七色の美しさへの驚き ・ 虹の橋への旅立ち	○ お話を書いてつくる ○ お話を声に出して話す ○ 音をつくる ○ 絵に表す	3. 友達の表現遊びと交流する。 ○ 表現遊びの楽しさの感じ取り ○ 友達の表現のよさへの気づき ○ お話や音づくりへの共感
支援	○ 想像的なお話の提示 ○ 造形材料の提供	○ 多様な表現遊びに応じる場の設定 ○ お話や音づくりのためのカードの活用助言 ○ 造形材料、打楽器類などの提供と活用助言		○ 表現遊びの賞賛 ○ 友達の表現との交流の促し

本時の目標

- 森の登場物が雨や虹に出会うお話や音をつくったり、線描きをしたりして、楽しく表現遊びをすることができる。

準備 森の登場物を表したダンボール紙、お話カード、打楽器類(缶マカス、バーチャムなど)、カラーペン

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの表現遊びを振り返り、本時の表現遊びのめあてについて話し合う。 (1) 友達の途中の表現遊びの絵を見たり、お話や音づくりを聞いたりして、楽しさや工夫点について話し合う。 ○ 森の登場物の周りの様子を表した線描きの工夫 ○ 森の登場物が雨や虹に出会っていくお話の面白さ ○ お話を楽しくするための打楽器による音づくりの工夫 (2) 本時のめあてについて話し合う。 もりのとうじょうぶつが、あめくんやにじさんにであうおはなしやおとをつくったり、えをかいいたりしてあそびましょう。 ※ 前時までの表現遊びを振り返らせ、もっと楽しく表現するための工夫点をめあてとして考えさせる。(T1・T2協力支援) 2. 森の登場物が雨や虹に出会うお話や音をつくったり、線描きをしたりして楽しく表現遊びをする。 ○ 森の登場物が雨や虹に出会って遊ぶお話をつくること ○ 打楽器類の選び方や音の出し方を工夫すること ○ 森の登場物が雨や虹に出会う周りの様子を線描きすること ＜雨くんに出会う場面＞ → ＜虹さんに出会う場面＞  『かたつむりが葉っぱの上で遊んでいると雨くんが「ポタンポタン」(缶マカス)とみんなで降りてきました。』  『虹さんが「キラキラキラ」(バーチャム)と大空にかかると、かたつむりは七色を数えながらのぼって行きました。』 ダンボール紙(表) ダンボール紙(裏) ※ 雨から虹に出会うお話の続きをつくるための助言や周りの様子を楽しく線描きするための助言や共感をする。(T1分組支援) ※ 雨の音や虹の光の感じを出す打楽器類の選び方や音の長さなどの出し方について、助言や補助をする。(T2分組支援) 3. 本時の表現遊びを振り返り、次時の表現遊びについて知る。 ○ 自分の表現遊びをより楽しく工夫できたこと ○ 次時は、友達の表現遊びを見たり聴いたりすること ※ 本時の表現遊びで選択した表現素材のよさや表現の工夫点に気づかせ、次時への意欲をもたせる。(T1・T2協力支援)	○ 雨の日のお話から、森の登場物を描いたり、お話をつくったりして楽しかったな。また、遊びたいな。 ○ 友達はお話の続きをつくったり、手づくり楽器で音をつくったりしているから楽しいな。 ○ かたつむりが雨くんと出会うお話の続きをカラーペンで付け加えよう。 ○ 七色の虹さんが空にかかる音をバーチャムできれいに鳴らしたいな。 【表現遊びの場の設定】 — ワークスペース — (お話や音をつくる場) (絵に表す場) ・ ホワイトボード  ・ カラーペン ・ ホワイトボード  ・ お話カード (お話を書いてつくる場) — 1年2組教室 — ○ お話や音をつくったり、線描きで付け加えたりしたので、前よりずっと楽しいお話になったよ。次も、工夫して遊びたいな。

第3学年1組 生活環境科学習指導案

指導者 今 林 康 治

単 元 花いっぱい町（2）

指 導 観

- 本学級の子供たちは、これまでに花や野菜を継続的に育ててきている。また、3年生になって、「花いっぱいの運動」に参加し、その活動内容やしくみをとらえてきているそして、地域の方々と協力して町をよりよくするために花を設置したり、草花を継続的に世話したりすることを通して、自然を大切に、人々と協力していく心情が育ってきている。そこで、日当たりや水やりの違いによる生長の違いを比較したり、地域の方々と花いっぱい運動を見直し広めていく話し合いをしたりする学習を設定していくことで、子供たちに奉仕活動や身近な自然とふれあうことの大切さを感じさせ、花いっぱい運動へ継続的にかかわっていこうとする態度を身につけさせていきたい。
- 本単元は、地域の方々との協力的な活動を行うことを通して、環境の変化と植物の生長との関係をとらえ、花いっぱい運動のよさを感じてさらに活動を広めるために行動していくことをねらいとしている。具体的には、①日当たりや人通りなどを考えて花を設置する場所を決定していくこと、②地域の人たちといっしょに花いっぱいの運動を広めていくこと、などがあげられる。この学習を通して、子供たちは感性豊かに自然を感じるとともに、協力して地域をよりよくしていく活動のよさを受け継いでいくことができる。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちと地域の方々が協力し合ってプランターの花づくりを行いながら、花の設置場所について吟味・決定したり、運動を広げたりしていくことをねらいとしている。そこで、まず、自分たちで地域に設置しておいたプランターを観察したり、設置したことへの地域の反応を地域の方に取材できるようにする。次に、設置している場所によって生育の様子が違うことから設置場所を考えたり、花いっぱい運動のよさを地域の方と一緒に話合えるようにする。最後に、話し合った結果をもとにして、花の設置を増やしたり、花の苗づくりをして配ったりして、もっと地域の方々に参加してもらえるように呼びかけていけるようにする。

目 標

- 自分たちで育てた花を設置しながら、体験的に情報を収集して花の設置場所を吟味・決定し、地域の人々と一緒に花いっぱいの町にすることができる。

計 画（約13時間）

階	であう（4時間）	さぐる（6時間）	いかす（3時間）
活動と内容	1. あらつ地域の街路に自分たちで設置していた花が育っている様子を観察する。 (1) 地域の花を観察する。② ○ 観察と地域の取材 (2) 観察結果を話し合う。② ○ 設置場所による違い	2. 花を育て、地域の方に喜んでもらえるための条件を調べる。 (1) 設置にする条件を調べる。③ ○ 設置した場所別の調査活動 (2) 花いっぱい運動を進めていくための条件を考える。（本2/3）③ ○ 花の世話と設置の条件	3. 地域の方々の思いや願いを知って、花を新たに設置したり苗を育てて配ったりする。③ ○ 花いっぱい運動参加への呼びかけ
手だて	○ 設置した花の継続的な観察活動の促し ○ 草丈、葉の茂り具合等の観察とその比較活動の設定	○ 設置した場所と他の場所の取材及び調査活動の設定 ○ 設置場所をマーキングした地域の拡大地図の提示と操作の助言	○ 花の新たな設置と取材活動の設定 ○ 地域の方と一緒に苗を配る活動の設定

本時の目標

- 花の観察や地域の取材をもとに、花の設置場所とお世話の仕方について花いっぱい運動を行っている方たちと一緒に話し合い、今後の設置場所やお世話の仕方を決めることができる。

準備 地域の拡大地図と模型、取材活動のVTR、お世話してきた花の一部等

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 花の設置場所や世話の仕方について ○ 設置場所の様子と花にとっての環境について めあて 花いっぱい運動で町に花をおいていく場しょを考えよう。 ※ 前時での活動の様子を資料を使って想起させ、地域に設置した花の様子や地域の方への取材活動を想起する。 ※ 4つの調査視点を明確にして、調査結果を基に話し合いできるようにする。 2. 花の設置及び世話の仕方について考え、今後のお世話について地域の方々と話し合う。 (1) 設置及び世話の仕方の理由について交流する。	○ お店の方々は美しくなっている気持ちになると喜んでくださっている。 ○ わたしの花は元気に育っているけれども、友だちの花はどうだろう。 ○ 花を置いているお世話をしている方もうまくいかない。 ○ 水はきちんとあげてるけど日当たりがよくないのかな。 ○ 日当たりがいいところにはお店がないからこまるな。
[自然的見方から] ○ 日あたりがよいこと → 友達や地域の花の生長の違いを比べる。 → 日あたりのよい場所の方がよく育つ。 ○ 水やりができること → 友達や地域の方々の水やりを調べる。 → 水を毎日十分に与えないといけない。 [社会的見方から] ○ 世話をすること → 友達や地域の方々のお世話の仕方を調べる。 → 協力してもらわないとお世話はできない。 ○ 人に見られること → 地域の方々の反応を調べる。 → 町が明るく、美しくなっている。	
※ 植物の生長に係る日照・水やり、お世話に対する協力・地域の方々の反応といった観点から吟味していく。 (2) 花いっぱい運動を行っていくために大切なことを明らかにし、自分の考えを見直す。 [花いっぱい運動の今後の活動例] ・ もっと花いっぱい運動を他の人たちに知らせていくこと。 ・ どうしても水やりにいけないときをお願いすること。 3. 話し合いで出された結果から、次時の学習の見通しをもつ ○ 地域の方々に対する協力の呼びかけること	○ おじさんたちもなかなかうまくお世話できないんだ。 ○ 置く場所を変えても花の世話はやっていけるかな。 ○ もっと、いろんな人に花いっぱい運動を知らせよう。 ○ ぼくたちはお店の近くに置いているから、水やりの協力をお願いしよう。

第6学年2組 「人間」学習指導案

指導者 植 松 伸 之

題 材 小山さんのホスピスでふれあおう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、バングラデシュの人たちの相互扶助の精神のすばらしさ、一人一人の「人」を大切にするために地域医療を志された二ノ坂医師の生き方、末期ガンを宣告されたあとも元気に命の尊さを語ってくれる小山ムツコさんの生き方を追求し、「限りある命」の尊さを感じ、自他の命を大切にしていこうという意欲をもっている。この子供たちの生命感をさらに、人が生きていく上での本当の喜びとは何か、自分もそんな喜びを感じたいという課題と願いに高めたい。
- 小山ムツコさんは、ご自分が「あと半年」という末期ガンを宣告されたあと、命の尊さ、生きることの喜びを感じ・語り合うための対話の会やホスピスづくりの活動を行っている。小山さんは、「前向きに人間らしく生きていく」人が集まってつくるホスピスを理想とし、「文句と愚痴を言わない」「患者の話を傾聴できるスタッフ」「患者自らがボランティアを行う」そんな成立条件を考えられている。最近、下半身の麻痺を感じ、大きな講演会をキャンセルしながらも、30人程度の地域のお年寄りが集まって命と健康を考える健康教室には、モルヒネを投与して出向かれている。人間としての尊厳を自らの生き方で表現されているのである。この小山さんの生命感を、子供たちに実感させたい。そのことは、子供の感性をゆさぶり、生きるとは、人にとって本当の喜びとは何かという切実な課題意識を子供に持たせることになると思う。
- 本題材の指導にあたっては、小山さんの生き方の尊さを実感し、自分も「人の役に立てる生き方をしたい」という態度を育てるために、次のような手だてを設定する。①小山さんとともに、なぜホスピスの患者さんが老人ホームのボランティアを行うのか、人にとって本当の喜びとは何かを話し合う。②患者さんの心情を推しはかったボランティア活動のあり方を考え、継続的に行う。③自分の実践活動を振り返り、小山さんが示した「人にとって本当の喜びとは何か」を再度話し合う。

目 標

- 小山さんの生き方の強さを感じ、人にとって本当の喜びとは何かという課題意識を持ち、自分も「人の役に立てることに喜びを感じて生きたい」という態度を育てる。
 - ・小山さんの「末期こそ人に役立つ生き方をしたい」という生き方の尊さを実感することができる。
 - ・患者さんの心情を推しはかったホスピスでのボランティアを考え、行うことができる。
 - ・自分の体験から「人の役に立てた喜び」を振り返り、「これからも人の役に立てる生き方をしたい」という意志をもつことができる。

計 画 (約8時間)

段階	感じる (5時間)	考える (2時間)	行う (総合)	見つめる (1時間)
活動と内容	1. ホスピスでのボランティアのあり方を話し合う。 (1) ボランティアで大切なことを話し合う。① (2) 栄光ホスピスでできることを話し合う。① (3) 実際にボランティアを体験する。③ ○ ボランティアを行いたいという意欲 ○ 患者の立場に立ったボランティアのあり方 ○ ボランティアを継続しようという意欲	2. 小山さんの願いに立ったホスピスボランティアを話し合う。 (1) 小山さんがめざす「自立」したホスピスとは何かを話し合う。① (2) 小山さんの生き方から「人にとっての喜びとは何か」を話し合う。(本時)① ○ 小山さんの生き方への感動 ○ 自分の中にある本当の喜びの自覚	3. ホスピスや老人ホームでのふれあい活動を継続する。 ○ 相手の思いに立つふれあい ○ 人の役に立つ喜びの感受	4. 実践活動から学んだことを振り返る。 ○ 人の役に立つ喜びの実感 ○ 人の役に立つ生き方をしたいという意志
手だて	○ 栄光ホスピスでのふれあい	○ ホスピス、老人ホームでのふれあい ○ 小山さんとのテレビ電話による交流	○ ふれあいの場の設定	○ 実践活動時のビデオの提示

本時の目標

- 小山さんの「末期こそ人の役に立つ生き方をしたい」という生きる姿の尊さを感じ、自分も「人の役に立つことに喜びを感じて生きたい」という願いをもつことができる。

準 備 老人ホーム・ホスピス体験時のビデオ 小山さん宅と学校を結ぶテレビ電話

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 自分がホスピスの患者だったら、ボランティアを行えるかを交流し、本時めあてを設定する。 ○ 自分がホスピス患者だったらボランティアを行えるかという課題意識 めあて 小山さんのホスピスにこめられた心を考えよう。 2. 人にとって本当の喜びとは何かを話し合う。 (1) 自分がホスピスの患者だったらホスピスと併設した老人ホームでボランティアを行うことができるか話し合う。 何かを行いたいけれど自分のことで精一杯 ↔ 希望する患者さんと一緒に、老人ホームでのボランティアを行う。 ○ 自分の体験をもとにしたボランティアを行うことの喜びと患者さんの生活の大変さを推しはかった葛藤 ※ 老人ホーム、ホスピス体験をもとに判断を行わせる。 ※ 必死に生活する林さんの映像を提示し、患者さんと一緒にボランティアを行うことの難しさを理解させる。 (2) 小山さんは、なぜ老人ホームでのボランティアを行おうと思ったか、人にとって本当の喜びとは何かを話し合う。 小山さん 子供 老人ホームでのボランティアを行おうと考えています。 ↔ 小山さんは老人ホームでボランティアを行いたいですか。 人の本当の喜びとは何でしょう。 ↔ 自分も大変なのになぜ、ボランティアを行うのですか。 ○ 体験をもとにした小山さんの生命感の推しはかり ○ 人の役に立つ喜びの追求 ※ 「人にとって本当の喜びとは何か」小山さんと交流させる。 (3) 自分の「人の役に立てた喜び」を振り返る。 ○ 人の役に立てる喜びを感じた自分の生き方の自覚と人の役に立つ生き方をしたいという願いの喚起 ※ 子供が老人ホームの中でふれあいを繰り返して行い、お年寄りと子供の変容が生まれているビデオを提示する。 ※ 林さんの次の声をビデオで伝える。  小山さんの計画は本当に素晴らしいと思います。人の役に立てる自分を感じたとき生きる力になります。 4. 小山さんによる子供たちの交流への価値づけを聞く。	○ 老人ホームでお年寄りとかかわることは確かに喜びになる。しかし、もう亡くなるかもしれないというときに、大切なことは、自分の時間ではないだろうか。 ○ 林さんのような方に負担をかけるのはよくない。 ○ 亡くなるときだからこそ、本当の心の喜びになることが大切ではないだろうか。 ○ どうして、小山さんはホスピスの中で老人ホームへのボランティアを行おうと考えたのだろうか。 ○ 私にとって、本当の喜びとは・・・（迷う）。 ○ 自分だけじゃなくて、他の人と喜びを分かち合ったとき大きな喜びになる。 ○ 私は、自分のことばかりを考えているのに、小山さんは人の役に立つことを喜びと考え実行されている。すごい！ ○ Aさんの表情がなかなか変わらなかったとき、心は通じないと思ったけど、こんなに喜んでもらっているとは思わなかった。うれしい。 ○ 亡くなるかもしれないというときだからこそ、人の役に立つことをしたいという林さんや小山さんの生き方を聞き何とも言えない気持ちになった。このお二人の願いに応えられるよう私も一緒に活動したい。

第5学年2組 算数科学習指導案

指導者 小 森 晃

題 材 コンピュータを使って分数の大きさをくらべよう

指 導 観

- 本学級の子供たちはものの大きさを分数で表したり、同分母分数については単位分数のいくつ分で大きさを比べたりする経験をしてきている。その他にも同分母分数は分子どうしのたし算やひき算で処理する体験もしてきている。さらにいろいろな分数には表記の仕方は違っていても大きさが等しい分数があることには気づいている。本題材ではこの同分母分数の大きさを比べた体験をもとに異分母分数や整数や小数の大きさを比べ、分数による処理の体験をいっそう豊かにしていきたい。
- 本題材は異分母分数どうしをコンピュータで表現する過程で等しい分数を多様につくる。また等しい分数づくりのきまりをたし算やひき算に生かしたり、整数や小数も分数で表記、処理できるよさを味わうことをねらいとしている。具体的には次のような内容がある。①ドローソフトの拡大縮小の機能を使って1を任意に等分した分数を多様につくり出し、約分や通分のきまりをさぐる。②きまりをもとに異分母分数のたし算やひき算をする。③ドローソフトの拡大縮小や複写機能を使って既習の数を任意に分割し分数で表記する。④わり算の商を分数で表して整数のわり算の処理の範囲を広げる。このことでコンピュータに親しみながら分数の処理の範囲を広げることができる。
- 本題材の指導にあたっては、具体物では処理しにくい分数づくりをコンピュータで処理することで、子供たちが自分に必要な大きさの分数を多様につくり出して比べたり計算したりしながら、分数で処理できる範囲を広げていく活動を十分に行いたい。そのために第1次では異分母分数で表された1m以下のテープの合併や残りを、コンピュータで多様な分数づくりを行いながら表現し、通分、約分へと高めていく。第2次ではコンピュータで表現する大きさを1mから2m、3mへと大きくすることで異分母分数のたし算やひき算の処理の範囲を広げていく。第3次では2m、3mを等分割する分数をつくって整数、小数と比べたり、商を分数で表して処理する活動を行う。

目 標

1. コンピュータを使って分数の分割の仕方をかえて、他の分母の分数につくりかえたり整数や小数につくりかえたりすることができる。
2. 異分母分数のたし算、ひき算や整数のわり算の商を分数で表すことができる。
3. コンピュータを使った絵図で分数の1をそろえて大小や相等を意欲的に調べるができる。

計 画 (約15時間)

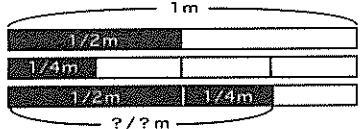
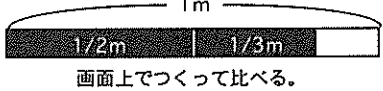
段階	第1次 分数の合併や求残のきまりを調べる体験(6時間)	第2次 異分母分数どうしを計算で処理する体験(4時間)	第3次 いろいろな数の関係をつかむ体験(5時間)
活動と内容	1. 異分母分数のテープの和や差の長さを調べる。 (本時1/4) ④ ○ コンピュータで分数の大きさの関係を調べる 2. 同値分数づくりのきまりをコンピュータで調べる。② ○ 通分、約分すること	3. 異分母分数テープを合わせたり取り去ったりした長さ調べを生かして計算する。④ ○ 1mを超える分数をコンピュータでつくって、それらの和や差を計算すること ○ 数とコンピュータの長さの処理を一致させること	4. 分数と大きさの等しい整数や小数を調べる。③ ○ 分数と等しい整数や小数を調べる 5. 整数や小数と分数の関係をわり算に生かす。② ○ わり算の処理に分数を生かし計算すること
手だて	○ 異分母分数で表されたテープをコンピュータの画面上で操作して大きさをそろえる活動の設定	○ 1を超える大きさの異分母分数の和や差をコンピュータの画面で調べたり計算で処理する活動の設定	○ コンピュータを使った絵図による整数、小数、分数の比較の設定 ○ 整除できない数をコンピュータで分割する場合

本時の目標

1. $1/2$ m、 $1/3$ m、 $1/4$ m、 $1/5$ mのテープを組み合わせた長さを求めることができる。
2. コンピュータの画面上で1をそろえた分数を多様につくってテープの和を表現しながら、異分母分数の分母を共通化するきまりに気づくことができる。

準備 パーソナルコンピュータ、描画ソフトウェア（スクールフレンズ）

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. $1/2$m、$1/3$m、$1/4$m、$1/5$mのテープの中から$1/2$mと$1/4$mのテープを選んで合わせる試しの活動を行い、めあてを話し合う。 (1) $1/2$mと$1/4$mでは分子のたし算が使えないことを調べる。 ○ 分母が違くと分子どうし計算できない不十分さに気づくこと (2) $1/2$mと$1/4$mのテープを合わせたテープの単位分数の大きさが違うために分数で表現できないことからめあてを話し合う。 ○ 単位となる分数の大きさをそろえればよいこと ※ $1/2$m = 1mの半分 → $2/4$mと考えられるようにコンピュータの画面上に2つのテープを縦に並べて提示する。  めあて コンピュータを使っていろいろな分数テープをつくりながら、合わせたテープの長さを表現しよう。	○ $1/2$と$1/4$をたせばいいけど何分のいくつになるのかわからない。 ○ 図だと$1/2$mは$2/4$mと同じ長さみたいだ。 ○ コンピュータを使うと4分のいくつの分数が簡単につくれるぞ。 ○ $1/2$mはやっぱり$2/4$mと同じ長さだ。だから合わせると$3/4$mになる。
2. $1/2$m、$1/3$m、$1/4$m、$1/5$mのテープの中から2つを選んで合わせた長さをコンピュータで多様に表現する。 (1) コンピュータで分数テープを多様につくり出しながら表現の仕方を調べる。 ○ 単位分数を共通化して長さを表現すること ※ $1/2$m、$1/3$m、$1/4$m、$1/5$mのテープの中から選んだ2本のテープを合わせた長さと同じ目盛りになる分数を予想させる。  ※ コンピュータの画面上に単位となるカードを作成しておき、調べさせる。 (例) ・自分で任意にカードをつくって合わせ、全体を1にそろえて調べる。 (2) 他のテープの組み合わせの和を表現する。 ○ 合わせた長さの表現を見つける方法を活用すること ※ テープを組み合わせた和の表現を調べる活動を繰り返す。	○ どの分数を合わせた長さから調べようかな。 ○ $1/2$mと$1/3$mを合わせた長さは4分のいくつだけれど同じ長さにぴったりならないからだめだ。 ○ 5分のいくつも合わないな。 ○ 6を単位にすると$5/6$のところがぴったり合うぞ。$1/2$と$1/3$を合わせると$5/6$だ。 ○ テープの両方の分母の数で割り切れる分数をつくるといいぞ。 ○ 大きさが同じ分数をたくさんつくって、その中で分母の同じものを選べばきちんと長さが表せるようになる。
3. $1/2$m、$1/3$m、$1/4$m、$1/5$mなど、いろいろなテープを合わせた時の長さを表現する方法を出し合い、学習をまとめる。 ○ 分母となる単位を共通にすること ※ $1/2$mと$1/3$m → $5/6$m、$10/12$mなど多様な表現を取り上げる。	

第6学年1組 国語科学習指導案

指導者 吉 田 正 樹

単 元 地球を守るホームページをつくろう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、5学年単元「子供地球環境会議」を契機に、様々な資料を読み比べ活用しながら地球環境問題の実態を調べたり、自分たちにできる取り組みを考え実践する活動を継続的に行ってきた。そのなかで、主体的にことばに関わり情報を収集したり発信したりする力を伸ばしてきている。また自分たちの思いや考えと実践してきたことを情報発信し他に広げたいという願いを抱き膨らませてきている。この子供たちの願いを実現する情報発信の学習を設定し、目的意識・相手意識をもった言語活動に積極的に取り組ませていきたい。
- 本単元は、地球環境保全に向けて収集した事実と意見・取り組みを自分の情報として再構成し他に情報発信することをねらいとしている。具体的には、インターネットを学習に導入することで、①より広い対象へ情報発信する目的をもち、文献・資料やウェブを活用して必要な情報を収集し、観点ごとに整理して、自分たちの情報を再構成する、②受け手との交信を行いながら相手意識を強め、内容構成や効果的な表現の工夫を考える、③主張の通るホームページを創造・発信していくための創造的な言語活動を行うといった価値ある内容がある。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちが必要感をもって情報を操作する過程として学習が展開できるようにしたい。そこで、情報発信の計画段階では、参考になるホームページを教材化し自由に閲覧させることを通して、情報発信の方法としてのよさを体感させ、これを活用する計画を立てる。情報の創造段階では、編集会議を中軸に位置づけ、電子メールを活用した調査活動や試しの活動を行い、ページの内容構成や効果的な表現方法を検討する。情報の発信段階では、工夫して分担ページを作成しウェブに公開する。その際、受け手との感想や意見のメール交換をしながら今後継続的に取り組めるようにする。

目 標

1. インターネットの双方向性、即時性、マルチメディア特性を生かして、地球環境問題とその対策について自分に必要な情報を収集・整理するとともに、地球環境保全を訴えるための効果的な内容構成や表現方法を工夫して、自分たちのホームページをつくり情報発信することができる。
2. 友達や他校の児童などとのコミュニケーションを深めながら、相手意識をもって情報操作できる。

計 画 (約16時間)

階	情報発信の計画(3時間)	情報の創造(8時間)	情報の発信(5時間)
活動と内容	1. 地球環境問題についての自分たちの学習や実践を情報発信する計画を立てる。 (1) ウェブを閲覧しよさを考える。② ○ WWWの情報発信のよさの把握 (2) インターネットを活用した情報発信計画を立てる① ○ 情報発信の目的と見通しの把握	2. 必要な情報を収集し、地球環境保全を訴えるためのホームページの素案をつくる。 (1) 提供する情報とページ構成を話し合い取材計画を立てる。(本時2/3時) ③ ○ 読み手を想定した内容構成を考えること (2) 計画に基づき必要な情報を収集したり実践を振り返り話し合う。③ ○ マルチメディアを活用した情報収集をすること (3) 電子メールを活用した試しの活動をもとに構成や表現を話し合う。② ○ デザインや画像音声の取り込み、他のページとのリンクの工夫	3. 工夫してページを再構成して、情報を発信する。 (1) 分担ページを工夫し作成する。③ ○ 効果的な表現の工夫 (2) 電子メールを使い他校の児童と意見交換をする。② ○ 自分たちのホームページについて感想や意見の交流をすること
手だて	○ 既習内容の想起 ○ 参考になるホームページの提示と閲覧	○ 電子メールを活用した情報交換 ○ 内容構成や表現方法を考えるためのホームページモデルの教材化と提示	○ 電子メールによるコミュニケーション ○ コンピュータ操作の支援

本時の目標

- 地球環境保全の主張を明確に伝えるホームページの構成について、素案の違いや他校からの意見を根拠にしながら話し合い、目的に応じた効果的な構成と表現の工夫を考えることができる。

準備 ホームページの提案資料（拡大資料も準備）、他校からの電子メールの印刷資料
素案作成ボード、コンピュータ、ビデオプロジェクター、WWWブラウザソフト

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. ホームページの特徴（長所）を振り返り、本時の編集会議で決めることについて話し合う。 ○ 前時学習の想起と本時学習のめあての把握 相手が読みたくなるみ力あるホームページになるよう、ページ構成の工夫について話し合おう。	○ 自分たちの主張が伝わるホームページにするにはどんなページの構成にしたらいいだろうか。
2. ページ全体の構成について考える。 (1) ホームページ編集委員の提案（素案）をもとに、全体の構成と目次ページについて話し合う。 ○ ページ全体を見通しながら情報を選び、観点ごとに整理するとともに、目的に応じた構成を工夫すること	○ それぞれの案にどんな理由があるんだろう比べてみよう。 ○ 自分たちの学習や取り組みのことをどの階層に書きまとめたらいいいのだろう。
—— 予想される編集委員の提案の違い —— 素案A 地球環境問題と対策について調べたこと（結果）を先に提示し、その中で自分たちの取り組みも紹介するページ構成 いろいろな地球環境問題 ・ 森林の問題 ・ 水・空気 ・ 地球温暖化 ... 環境保全のためのいろいろ な対策法 その中で自分たちが取り組んでいること 素案B 自分達の学習や取り組みの経過を先に提示し、調べたこと（結果）を後づけるページ構成 自分たちの学習と実践の過程 ・ 情報の収集 ・ 地球環境会議 ・ 環境保全の実践 こんな問題があることが分かった（調べた結果） こんなことにも取り組める（調べた結果） ※ ページ構成の根拠を明らかにしながら、自分たちの主張がわかる構成を考えさせる。	
(2) 電子メールで送られた他校の児童の感想や意見をもとにして、内容構成の改善点を話し合う。 読者の感想・意見 ・ 実際に取り組んでいることを詳しく伝えてほしい。 ・ 地球環境問題についての感想や意見を交流したい。	○ どちらのページ構成にした方が魅力あるホームページになるだろうか。比べてみよう。
—— ホームページの構成・表現 —— ○ 他に伝えたいことを明確にし自分たちだけの貴重な情報をより多く伝えること ○ 目的に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること（要約と敷衍） ○ ページの階層や相互の関係を考えること	自分たちの主張 自分たちの考えや取り組みを少しでも多くの人に伝え広げていきたい。
※ 情報の独自性を求めるメールを教材化し取り上げる。 3. 話し合った点をもとに、グループごとに自分たちの分担ページの構成の工夫と再取材の観点について話し合う。 ○ 相手を意識した内容構成と取材計画の見直し ※ 素案ボードを活用した記録と交流を行わせる。	○ タイトルや小見出しの工夫をしたらどうだろう。 ○ 全体のページ構成をもとに、自分たちの分担ページの構成はどう工夫したらいいだろう。

第2学年1組 体育科学習指導案

指導者 笠 宏照（T1）・稲津 一徳（T2）

単 元 チャレンジランドであそぼう（器械・器具を使った運動）〔達成型・競争型〕
指 導 観

- 本学級の子供たちは、第1学年で鉄棒・跳び箱・マットなどの器械・器具を使った運動において回ったり、跳んだりするなどの動きをしてきている。例えば、マットでは、場の広さや長さに注目しながら、前・後ろ・横など回る方向や速さを変えたり、続けて回ったりなどのいろいろな動きに挑戦することを楽しく行っている。運動の学び方においては、友達同士仲良く協力し、練習の場を自分たちでつくったり、つくり変えたりしてきている。このような子供たちは、器械・器具を使った運動において高さや回数などの課題を意識して自分の動きを高めていくことに挑戦できる段階であると考ええる。
- 本単元のねらいは、器械・器具で構成されたチャレンジランドで子供たちが、跳ぶ・回る・転がる・渡るなどの運動をして楽しく遊ぶ中で、高さや回数などに挑戦したり、友達と競争したりして動きを高めることである。具体的には、①力強く踏み切って段ボール箱やとび箱を高く跳び越すこと、②手や足の位置をとらえながら続けてマットを転がること、③バランスをとらえながら平均台を素早く渡ること、④自分の課題を解決するために器械・器具の高さや配置を操作すること、⑤高さや回数などの記録を達成する活動と友達と競争する活動を選択して運動を楽しむこと、などである。以上のことは、一人一人の運動の楽しみ方に対応できること、子供たちの楽しみ方に立脚した体力を育むことができること、など生涯体育・スポーツを考える上で意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちが運動の楽しみ方を選択し、跳ぶ・回るなどの多様な動きを豊富に経験できるようにしたい。そのために、子供の多様な興味・関心や意欲などの違いに対応した、達成型活動の場、競争型活動の場を構成し、チームティーチングによって2つの場の活動を同時に進めていく複線型の学習を展開していく。とらえる段階では、多様な場の中で動きを比較させながら達成・競争などの意識をもつようにする。つくる段階では、自分の動きに対する興味・関心などに合わせて、2つの活動を選んだり、場を操作したりしながら、動きを達成することや友達と競争することなどの遊びができるようにする。深める活動では、工夫した遊びを子供たち同士がお互いに紹介し合う発表会をする。

目 標

- 多様な跳ぶ・回る・転がる・渡るなどの運動を全身を使ったり、巧みに動いたりして楽しみながら行うことができる。
- 自分の楽しみ方に合わせて、活動を選んだり場を操作したりして動きを高めながら、高さ・早さなどの動きの課題を達成したり、友達と楽しく競争したりできる。

計 画 （約6時間）

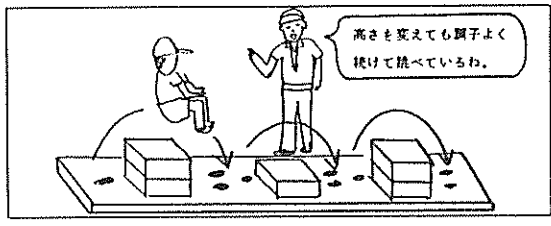
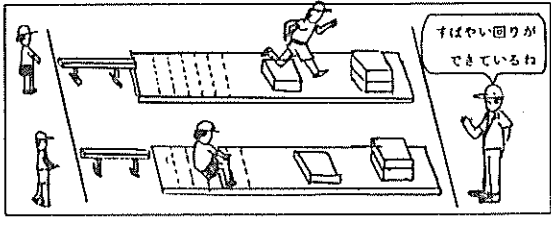
段階	とらえる（2時間）	つくる（3時間）	深める（1時間）
活動と内容	1. 跳ぶ・回る・転がる・渡るなどの動きをして遊ぶ。 ○ 遊び方の把握	2. 自分の興味・関心、楽しみ方に合った場を選び、学習する。〔本時2/3〕 達成型活動の場 ○ 連続した動きづくりー動きの高まり ○ 動きの組み合わせー多様な動きの保証 ・ 高さや記録など動きの課題をとらえる視覚資料 ・ 高まりを意識できる操作可能な用具の提示	3. 工夫した遊びの発表会をする。 ○ できるようになった動きや多様な動きの紹介 ・ 動きの視点や工夫した観点の子供たちへの意識化
手だて	・ 活動類型と4つの動きの場の提示 ・ 活動類型の場の模擬体験 ・ 学習カード（課題の記録） ・ 動きのモデル演示	競争型活動の場 ○ 勝敗を意識した動きづくりー動きの高まり ○ 多様な競争の楽しみ方の感得ー多様な動きの保証 ・ グループ 同士の競争の交流 ・ よい動きを評価できる場の提示	○ 様々な遊びの仕方の紹介 ・ 遊びの財産カードの提示と生活への意識づけ

本時の目標

1. 跳ぶ・回る・転がる・渡る動きを組みわせたり、高さや長さなどの違いをとらえたりして、多様な動きで楽しく遊ぶことができる。
2. 自分の楽しみ方に合わせて場を操作し親しみながら、動きの課題を達成したり、友達と競争したりして、動きを高めることができる。

準備 マット、跳び箱、移動式鉄棒、平均台、学習カード、動きのボードなど

学習指導の過程

活動と内容	子供の思考の流れ
1. 本時学習について話し合う。 ○ 場づくりとそれぞれの場における試しの遊び ○ 活動の確認と、めあての把握 ※ VTRや学習カードを用いて前時学習を想起させ、前時に決定していた活動の場や型を確認させる。 めあて じぶんのチャレンジランドで、たのしくあそぼう。 2. 活動を選びそれぞれの場に行って楽しく遊ぶ。 (1) それぞれの場で遊びをする。 ○ 活動形態に合わせ場を選び、動きを組み合わせたり、動きを連続させたりする遊び（達成型活動）や友達と動きの競争をする遊び（競争型活動）をすること ○ 楽しみ方に応じて、器械・器具を操作して、動きに変化を持つようにすること	○ この前は、いろいろなチャレンジランドで遊んだな ○ 今日はいろいろな高さにちょうせんするぞ。 ○ いろいろな動きを組み合わせで遊ぶぞ。 ○ リレーみたいに、グループで競争してみよう。 ○ 高さを変えた跳び箱を並べて跳んでみよう。 ○ 動きの組み合わせにもいろいろあるな。 ○ 渡るのが好きだから、平均台を最初に置いてみよう
達成型活動  ・ 高さ、長さなど異なる器械を配列した場 ・ 動きのねらいに合わせて器械を操作することの助言	競争型活動  ・ 勝敗につながるよい動きの観点と子供同士の評価の視点の提示 ・ 多様な競争の仕方へと向かう助言
(2) 遊び方や競争の仕方について交流し遊びの活動を広げる。 ○ 達成型・競争型それぞれの活動における、動きの高まりや深まり、遊び方の工夫などの紹介 ○ 達成型・競争型活動の変更や継続の決定と遊びの再開 ※ 学習カードへの記録により、動きの変化や伸び、勝敗などを確かめさせる。 ※ 興味・関心の変化によって、活動の場を変えて遊んでも、続けて遊んでもいいことを伝える。 3. 本時学習をまとめ、次時の活動について話し合う。 ○ 動きの高まりや遊びの工夫などの感得 ○ 次時活動への期待感と活動目標の設定 ※ 活動について高まりや工夫点を引き出し賞賛する。	○ マットや鉄棒を使った回る動きはおもしろそうだな ○ リレーになったら、もっと楽しそうだな。僕たちもやってみよう。 ○ 後ろに回る動きもいれることができたぞ。 ○ 楽しく遊ぶことができた ○ 友達と競争することも楽しかったな。つぎは、場をつくりかえて競争したい。

ふじ・さくら・梅組 合同生活単元学習指導案

指導者 落合純哉・舩元俊文・松本良一・西原敦子

単 元 福岡ドームにこう

指 導 観

- 本校特殊学級の子供たちは、低学年ふじ組7名・中学年さくら組6名・高学年梅組8名の計21名で構成されている。これまでに、商店で買い物の手順を意識しながら好きな品物を買ったり、公共の施設を利用したりする等の活動を行ってきた。その中で、個に応じた目的意識をもちながら、学校生活における課題を解決しようとする姿が見られるようになりつつある。また、日常生活の中で、様々な余暇利用の経験があり、ファーストフード店を利用することへの興味・関心も高い。福岡ドームについても、実際に利用したことのある子供が数名いる。
- 本単元のねらいは、ファーストフード店の利用や野球観戦の仕方を知り、福岡ドームを利用して楽しむことができるようにすることである。具体的には、①ファーストフード店で好きな食べ物を購入したり、野球観戦をしたりすること、②必要な事柄についてお店の人に働きかけること、③体験から得た情報を「福岡ドームたんけんパンフレット」にまとめること、④学習したことを生かして、ファーストフード店、チケット売り場、案内所等を利用できるようにすること、などである。以上のことは、子供たちの生活の幅や楽しみを広げていくことになり、生活力を培うとともに、現在及び将来の自立的な生活を考えていく上で意義深い。
- 本単元の支援は、①福岡ドームの外観や周辺を見学させることにより、子供の目的意識や課題意識を喚起する、②福岡ドームで野球観戦をしたり、ファーストフード店等を利用したりするという課題を解決するために、模擬体験の場を設定し、利用するための練習を繰り返す活動を構成する、③ファーストフード店の利用の仕方等を「福岡ドームたんけんパンフレット」にまとめさせる、④家庭生活においても、様々な施設を利用して楽しむことができるように、実際に福岡ドームに行つてパンフレットを活用する体験をする、などである。

目 標

- 福岡ドームに行こうという目的意識をもちながら、ファーストフード店や、チケット売り場、案内所の利用の仕方や野球観戦の仕方を知り、実際に福岡ドームに行つて楽しむことができる。

計 画 (約9時間)

階	3 時間	3 時間	3 時間
活 動 と 内 容	1. 福岡ドームに行き、外観や周辺を見学し、施設の概要を調べる。 ○ 福岡ドームを知ること ○ 活動への目的意識	2. 模擬体験の場でパンフレットをまとめながら、課題解決のための練習をする。 (1) お店の人とのやりとりや、金銭処理の仕方をパンフレットにまとめながら練習する。 (時2/2) ② ○ お店の人とのかかわり ○ 好きな食べ物の注文の仕方 金銭処理の仕方	3. 福岡ドームに行き、自分の好きな店舗や施設を利用する。 ○ 利用できたことへの達成感・成就感、学習の生活化
支 援	○ 目的意識や課題意識を喚起する直接体験の場の設定	○ 個に応じた目的意識や課題意識をもとにグループを編成し、模擬体験を繰り返す活動構成 ○ 個の課題解決力に応じた「福岡ドームたんけんパンフレット」づくりの促し ○ T. Tによる個に応じたモデル演示、ことばかけ	○ 野球観戦やファーストフード店を利用できる直接体験の場の設定

本時学習の目標 ※ A・B・Cグループは、模擬体験グループごとの個別目標をさす。

- ファーストフード店を利用するための手続きについて、「ふくおかドームたんけんパンフレット」にまとめ、お店の人とやりとりをしながら、好きな食べ物を買うことができる。

低学年：友達の誘いを受け入れて活動する	中学年：友達と一緒に活動する	高学年：友達を誘って活動する
Aグループ：金銭の意味を意識し援助を受けて品物を買う。	Bグループ：必要な金額を意識し教師に尋ねて品物を買う。	Cグループ：必要な金額を払い、店の人に尋ねて品物を買う。

準備 福岡ドームの模擬の場、福岡ドームたんけんパンフレット、など

学習指導の過程

活動の姿と内容	個の活動を促す支援							
1. 本時のめあてについて話し合う。 (1) 福岡ドームに行ったビデオを見る。 ○ 福岡ドームに行くことへの目的意識 (2) 模擬活動を行う。 ○ 手順を意識する試しの活動をする ①パンフレットをまとめる。→②友達と教え合いながら模擬体験をする。 めあて おみせの れんしゅうをしよう。 2. 模擬体験グループごとに店舗利用をする。 (1) 店舗の利用の仕方を考えながら「福岡ドームたんけんパンフレット」をつくる。 <table border="1"> <tr> <td>低学年児童 ・友達の誘いか・友達の誘いかけを受け入れながら活動する。</td> <td>中学年児童 ・友達と一緒に・友達に誘いかけながら活動する。</td> <td>高学年児童 ・友達に誘いかけながら活動する。</td> </tr> </table> Aグループ Bグループ Cグループ ○ 利用する手続きをとらせること ・大体の手順に・手順に沿って・利用するため沿いながら写真写真カードを並に必要表の見カードを並べるべ、必要な物を方を文カードで対応させる。貼る。 (2) 模擬体験の場で利用の練習をする。 ○ 必要な手続きで店舗を利用すること ・簡単な手続き・必要な事柄を・お店の人に自に沿って利用す意識し、利用す分で働きかけてる。る。利用する。 3. 本時学習のまとめをする。 ○ 好きな品物を買えたことへの達成感・成就感、福岡ドームへ行くことへの期待感	低学年児童 ・友達の誘いか・友達の誘いかけを受け入れながら活動する。	中学年児童 ・友達と一緒に・友達に誘いかけながら活動する。	高学年児童 ・友達に誘いかけながら活動する。	1. 福岡ドームに行く目的意識を喚起する支援 ○ ビデオの提示 ○ 品物の購入の手順についてのモデル演示 ○ 好きな品物を選んで買うことができる模擬体験の場 <table border="1"> <tr> <td>2年2組 教室 ※ パンフレットづくりの場 T1</td> <td>2年1組教室 協議会場 T3</td> </tr> <tr> <td>ワークスペース T2</td> <td>ミスター福岡 ドームの模擬物 T4</td> </tr> </table> 2. ファーストフード店の利用の仕方を身につけさせる支援 ○ 上学年の子供が下学年の子供をリードできるペアリング ○ 個に応じた「福岡ドームたんけんパンフレット」 Aグループ：写真カードの構成により、視覚的に手順をとらえさせるもの Bグループ：写真カードによる手順の理解、及び品物と必要な金額を対応させるもの Cグループ：写真カードによる手順の理解、及び値段表の見方、金銭の払い方を確かめさせる支援 ○ 個に応じた支援 Aグループ：利用の仕方のモデル演示、動作援助 Bグループ：利用の仕方や必要な事柄を意識させることばかけ Cグループ：値段表の見方についての説明 3. 達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 自分の好きなファーストフード店等を利用することができたことへの賞賛	2年2組 教室 ※ パンフレットづくりの場 T1	2年1組教室 協議会場 T3	ワークスペース T2	ミスター福岡 ドームの模擬物 T4
低学年児童 ・友達の誘いか・友達の誘いかけを受け入れながら活動する。	中学年児童 ・友達と一緒に・友達に誘いかけながら活動する。	高学年児童 ・友達に誘いかけながら活動する。						
2年2組 教室 ※ パンフレットづくりの場 T1	2年1組教室 協議会場 T3							
ワークスペース T2	ミスター福岡 ドームの模擬物 T4							

子供の心の健康をはぐくむ保健室からの支援

保健・養護部 今村 由香

1. 主題の意味

心の健康とは、とくに疾病などがなく、情緒的に安定し、社会に適応している状態であるが、子供にとっては、ストレスが蓄積されていないこと・甚だしい不安や悩みがないこと・そして健全な自己肯定感を持っていることが重要な要素であると考えます。心に問題を持つ子供にとって、その問題を克服したり、自信を持てるようになっていくことは子供自身の心の成長につながる。保健室から個に応じた支援を行うことで、心の健康をとりもどし健やかに成長して欲しいと考え、この主題を設定した。心の健康とは、学ぶ意欲や創造力・探求心の基盤になると言える。

2. 子供をとりまく問題点

今日、子供をとりまく環境もめまぐるしく変化している。学歴社会は受験戦争を生み出し、核家族化や少子化、地域社会の稀薄化は社会性や人間関係を豊かにする機会を減少させている。家庭の機能も低下し、心の安定やしつけの習得ができにくくなっている。本校で行った「生活についてのアンケート」でも、かなりの時間を学習に費やしており、それが睡眠時間や外遊びの減少に影響していることがわかった。また、朝食での孤食や家族とのふれあいの様子から、家庭にも心の健康面での啓発をしていく必要性を感じた。さらに「ストレスについてのアンケート」ではゆとりのない生活が、いかにストレスや心の不健康を生み出しているか、またそのことがいじめや不登校にも少なからず関係していることがわかった。

これらのことから、心の不健康という状態はいつどんな子にも起こりうるという認識を新たにし、いじめや不登校の現状は子供たちが発する危険信号ととらえ、より深い一人一人に応じた子供理解と心の健康への支援が急務であると感じた。養護教諭として保健室に来ないまたは行けない子供にも支援の手を広げていくことが必要で、心の健康の積極的予防が望まれるところである。

3. 本校における心の健康への支援

(1) 心の問題の早期発見および子供理解のための全校的な支援

本校では、心の問題に対する指導体制を組織して各部の役割を推進している。養護教諭は心の健康に関連した全校的な企画として「エゴグラム」と「保健の先生への手紙」を実施した。これらを実施し分析することによって、心の健康のスクリーニングができ、潜在的な心の不安や悩み、または心の不健康を早期発見できると考えた。また、その結果をもとに担任へ情報提供を行い連携して支援を行えば、教師の子供理解が深まるとともに子供の心も安定し、心の健康をはぐくむことができるのではないかと考えた。

① 「エゴグラム」

エゴグラムは交流分析の理論をもとに心の自我状態を、批判する私（CP）・優しい私（NP）・考える私（A）・自由な私（FC）・人に合わせる私（AC）の5つに分けグラフで表したものである。このグラフから、自己をより客観的に見ることによって自分の自我状態のアンバランスを見つけ、こうありたいと望んでいる姿や望ましい行動様式に改善していくことができる。エゴグラムは、その子供の行動や生き方にも関係しており、心のエネルギーのバランスから問題の早期発見やその状態に応じた指導や援助を行うことができる。さらに、教育相談や保護者との面談など生徒指導上の参考資料ともなり得るものである。

本校では4・5・6年生に実施して「心のカルテ」を作成し、保健室での相談活動の資料として用いている。学級担任には①全員のエゴグラムの結果一覧②学級の傾向の分析結果③エゴグラムから見て、注意が必要と思われる子についての記述④支援の具体的方法についての参考資料などを提供した。

② 「保健の先生への手紙」

これは、低学年を対象に保健室に来室しない子供の心の問題の早期発見を目的として行った。低学年でも親しみやすく気負わず書けるように手紙の形式にし、学級での指導の時間に担任によって実施した。記入している不安や悩みがその子供にとってどれだけ緊急かつ重大であるかという把握をするため、手紙カードの右肩に「S」マークを記入する枠を作った。

子供たちの手紙には、一枚ずつ内容の分析を行って全員に返事を書いた。また、「S」マークを記入している子供については個別に相談の機会を持ったり、担任と連絡をとったりして、気持ちの軽減や環境的配慮を行いながら経過観察をしていった。

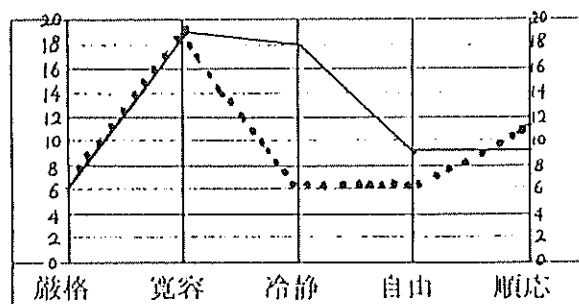
(2) 保健室での相談活動による支援

保健室での相談活動では、カウンセリング・マインドの対応を心がけるとともに、エゴグラムを実施し自我状態に応じた支援を行った。相談活動にエゴグラムをとりいれることで、今まで勘や経験でとらえていた気になる子の把握が客観的に裏付けられた。また、エゴグラムの分析をもとに、個に応じた支援計画を立て継続して支援を行えば、子供の心が安定し心の健康をはぐくむことにつながると考えた。

◇ 事例（友達関係で悩み、学校にいきたくないと訴える I 子）

ラポールがとれたころ、本人と一緒にエゴグラムを実施した。担任と連携をとりながら、カウンセリング・マインドの対応を心がける一方で、エゴグラム分析結果から支援方法を検討し実施していった。最初のエゴグラムはN型で自分を押しえて人に合わせたり、周りの期待に応えようとする傾向があること、またAが低いことから適切な自己判断ができなくなっていることがわかった。担任は数回の面談を持ち、いつでも相談にのるという姿勢と I 子が安心できる学級の雰囲気づくりを心がけた。意欲的な行動が見られるようになってからは、友達関係でのアドバイスや本人の得意な音楽での励ましなどを行った。養護教諭はFCとAが上昇するように「したいことを思いっきりさせること」と、会話の中で「自分が言ったことを自分で解釈したり、再確認できたりするように、言葉かけをすること」を心がけて対応した。

以上のような支援と担任との情報交換を継続的に行っていった結果、三学期になると周囲とも積極的にかかわる姿や自分の意志で行動する姿が多く見られるようになり、明るさの中に強さが感じられるようになってきた。I 子が自分に自信を持ち明るさをとりもどしていった過程で、エゴグラムも「N型」からゆるやかな「への字型」へと移行した。



… 平成8年5月のエゴグラム — 平成9年1月のエゴグラム

4. 成果と課題

全校的な企画であるエゴグラムと保健の先生への手紙は、潜在的な悩みに気づくことができ、観察だけでは見えない心の面での資料の提供ができたことから、子供理解や学級経営の一助となったようである。これからは「心の健康への積極的予防」の観点から、心の問題を持っていると思われる子やその可能性の高い子供に焦点を当てた取り組みを行うことや、学級担任との連携をどのようにしていくかが課題である。

最後に、現在の子供たちを見ていると、心の健康への積極的予防と同時に、子供自身に心の健康の自己管理能力を育てていくような取り組みが必要ではないかと思われる。よりよい人間関係を結んだり修復したりする力や、ストレスをコントロールする力、またエゴグラム本来の自己変革にかえり、心の自我状態をよりよい自分や理想とする自分に変えていく力などは、これからの時代を生きる子供にとって必要とされる「生きる力」と考える。

— 提案授業・学習指導協議会メモ —

第2日目 午前の部
公開授業指導案

第1学年2組 生活科学学習指導案

指導者 藤 木 寿美枝

単 元 うさぎさんとなかよし

指 導 観

- 本学級の子供たちは、「がっこうたんけん」において学校内にうさぎやハムスター・ニワトリ・金魚・コイなどの生き物が飼われていることに気づいている。特に休み時間などには、ウサギの飼育舎に集まり、ウサギを見守ったり餌をあげたりしている。子供の願いを聞くと「さわってみたい」「自分で飼ってみたい」という声が多く聞かれる。これは、ウサギの姿や表情・しぐさがかわいく子供の興味を引くものであるためである。
- 本単元は、ウサギとふれあいながら世話をする活動を通して生き物に親しみ、優しく接したり、世話を続けたりすることができるようにすることをねらいとしている。具体的には、①ウサギを抱いたり、餌をやったりすることによってウサギの扱い方を身につけ親しむこと ②ウサギの表情やしぐさを見たりすることによって、ウサギをくわしく観察すること ③ウサギの行動の特徴を考えながら、隠れ家や穴などウサギの住みやすい環境をつくること ④ウサギの成長や生活の変化に合わせて世話の仕方を工夫し世話をし続けることなどである。以上のことは、生き物を大切にして世話を続けていくという実践的態度の育成や生き物に対する愛着を深める上で価値ある活動である。
- 本単元の指導にあたっては、「どうぶつむら」を作り、そこでウサギの喜ぶ世話をする活動を通して、生き物と親しみ、これからも動物たちとかかわっていききたいという心情を育てたい。そこで、まず日常のウサギへの関心をもとにウサギに関する質問を手紙に書く活動を通して、ウサギへかわりたいという意欲をもたせる。次に、ウサギがもっと健康にもっと楽しく遊べるようになるには、どんなお世話が必要かを考え、ウサギが喜ぶような動物村作りを行うようにする。さらに、これから先一緒に学校で生活する仲間として、どんなにかかわりをもったらよいかを考えさせ、これからのふれあいの計画を立て、ながくふれあっていく見通しをもたせたい。

目 標

1. 継続的な動物たちとのふれあいを通して、生き物に親しみをもち、優しく接することができる。
2. 動物たちを一生懸命にお世話をすることによって生き物の成長に気づき、成長の様子を自分たちの働きかけとともに表現することができる。

計 画 (約5時間)

階	であう (1時間)	ふれあう (3時間)	ふかめる (1時間)
活動と内容	1. ウサギを観察したり、うさぎさんへの質問の手紙を書いたりする。 ① ○ 動物の取り扱い方への気づき ○ 動物への関心	2. 動物村を作ったり、作り変えたりする。 ③ ・ウサギが喜ぶようなコーナを備えたうさぎさんの家を作る。 (本時2/3) ○ 動物の習性や世話の仕方への関心	3. これからの動物たちへのかかわりについて話し合う。 ・学級で飼う生き物や上級生との飼育の協力などについての話し合い。 ○ 継続的なかかわりへの見通し
支援	○ ウサギの観察の場作り ○ 飼育委員からの手紙	○ 動物村の設置 ○ ウサギの大好きなもののパネル製作	○ 飼育委員の仕事の紹介 ○ 上級生の学級での生き物へのかかわり方の紹介

本時の目標

1. ウサギが喜ぶ動物村を作り、ウサギの世話をすることができる。
2. ウサギの様子や自分たちのお世話の様子をうさぎさん日記に表現することができる。

準 備 うさぎさん日記、野菜、わら、時計、活動の予定表、ウサギの世話パネル

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時の学習を想起し、本時のめあてや活動について話し合う。 ○ 本時学習のめあてや活動の把握 ※ 前時のうさぎさん日記からウサギの性格や習性についての気づきを発表させる。 めあて どうぶつむらに うさぎさんのよろこぶ いえをつくろう。 2. 動物村にウサギの喜ぶ家を作り、様子を見守る。 (1) これまでのウサギの観察から、自分たちの動物村の家に付け加えることについて話し合う。 ○ ウサギの習性への関心 → ウサギの世話の仕方への気づき ・湿気が嫌い → 敷き草の取り替え ・穴をほる → トンネル用の土の準備 ※ 世話の仕方を表にしておき、自分がしたい世話を選択させる。 (2) ウサギの喜ぶ家を作り、ウサギの様子を観察する。 ○ ウサギの家作り ・レストランに水飲み場や餌場を作る。・トンネルや砂山を築く。 ・ウサギの家を作り、ベッドにわらをしく。 ○ ウサギの表情や行動の観察 ・うさぎさん日記への記録	○ この前、動物村に放したら喜んでたよ。 ○ うさ君は、日陰が好きです。 ○ 今日は、もっとうさぎさんが喜ぶ動物村にしたいな。 ○ うさぎさん喜んでくれるかな。 ○ トンネルも好きみたい。 ○ ベッドにわらをひいたら気持ちよさそう。 ○ 木もかじるから、木のガムをあげよう。
話合いの場 材料コーナー <動物村>	
※ 家作りの参考となる世話の仕方のパネルを掲示しておく。 3. 今日の活動について話し合う。 ○ ウサギの様子や世話したことについての表現 ※ これから先の活動が見通せるようなカレンダーを作っておく。	○ うさぎさん、広いところで遊べて嬉しそうだったね。 ○ もっとうさぎさんのお世話をしたいな。

第2学年1組 表現科学習指導案

指導者 樺島 稔(T1)・石田 耕一(T2)

題 材 みんなおいでよ！空や森や海の楽しいせかいへ

指 導 観

- 本学級の子供たちは、自分の思いを材料や音、言葉や動きなどを取り入れて楽しく表現することの経験を積み重ねてきている。また、表現活動の過程で、想像力を働かせて表したい様子を動きや飾り、お話や音をつかって教師や友達に楽しく伝えようとする子供たちも増えつつある。また、自分の表現の目的に合った材料や手づくり楽器の計画や準備も進んで行うことができるようになっていく。さらに、自分の表現活動に楽しく浸り切りながら、友達と共同的に表現したり、お互いの表現活動を見たり聴いたりすることに楽しさを感じ始めている。
- 本題材のねらいは、子供が空や森や海の世界の様子を豊かに想像し、思いに応じた表現素材で楽しく表現ができるようにすることである。具体的な内容としては、①材料、言葉、声、音、体などをもとに、楽しく表現活動すること、②空や森や海の楽しい世界を想像して絵や飾り、動きや音に表したりすること、③自分を飾るための材料や手づくり楽器の材料の準備を進んで行うこと、④自分の表現活動に満足し、友達のよさも感じ取ること、などである。これらの内容を学習することによって、豊かな感性と創造性の基礎を培い表現する喜びを味わわせることができると考える。
- 本題材の支援は子供の多様な表現活動を保障するために2人の教師による協力・分担の支援を行う。具体的には、①空や森や海の世界を絵に表すための色画用紙を床に敷いた場(ワークスペース)の設定や飾りづくりのための材料用具の提供と場(舞台)の設定(T1)、②空や森や海の世界の様子や生き物などを、絵や飾りで表す子供への助言と賞賛(T1)、③空や森や海の世界の生き物などを動きや声で表したり、手づくり楽器などの音で表したりする子供への助言と賞賛(T2)、④空や森や海の世界を多様に表現したよさや楽しさに友達同士が気づいていく交流の促しや賞賛(T1・T2)、などである。

目 標

1. 空や森や海の世界の様子や生き物などを豊かに想像し、自分の思いに応じた表現素材で楽しく表現することができる。
2. 友達が表現した空や森や海の世界のよさや楽しさを感じ取ることができる。

計 画 (約6時間)

階	感じる(1時間)	／ 表 す ⇔ (5時間) ⇔	味 わ う
活 動 と 内 容	1. 空や森や海の様子や生き物などについて話し合う。 ○ 空や森や海の様子の想起 ○ 生き物などの生活の様子を想像すること	2. 空や森や海の世界の様子や生き物などを様々な表現素材で楽しく表現する。(枠4/5) ○ 空の世界の様子 ・ 動物雲や鳥たち ○ 森の世界の様子 ・ 動物や虫たち ○ 海の世界の様子 ・ 魚や生き物たち — 絵で表す — 飾りをつくる — 動きや声で表す — 音で表す — お話をつくる — 友達と表す	3. 友達の表現と交流する。 ○ 表現活動の楽しさの感じ取り ○ 友達の表現のよさへの気づき ○ 自分の表現への取り入れ
支 援	○ 体験想起の促し ○ 床に色画用紙を敷いた場の設定	○ 造形材料や用具の提供と活用助言 ○ 打楽器類の提供と活用助言 ○ 個別表現や共同表現の楽しさの賞賛	○ 表現活動の賞賛 ○ 友達の表現との交流の促し

本時の目標

- 空や森や海の世界の様子や生き物などを想像し、絵を描いたり、飾りをつくって動いたり、音をつくったりして楽しく表現することができる。

準備 全紙色画用紙類、カラーペン、カラービニール類、セロテープ、はさみ、打楽器類

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ		
1. 前時までの表現活動を振り返り、本時の表現活動について話し合う。 (1) 友達の途中の表現活動の絵を見たり、お話やつくった音を聴いたりして、楽しさや工夫点について話し合う。 ○ 空や森や海の世界の样子の線描きの工夫 ○ 空や森や海の世界の生き物たちの飾りや動きの工夫 ○ 手づくり楽器による音づくりの工夫 (2) 本時の表現活動のめあてについて話し合う。 空や森や海のせかいのようすや生きものたちを いろいろなあらわしかたでもっとたのしくくふうしましょう。 ※ 前時までの表現活動を振り返らせ、もっと楽しく表現するための工夫点をめあてとして考えさせる。(T1・T2協力支援) 2. 空や森や海の世界の様子や生き物などを想像し、自分の思いに応じた表現素材で楽しく表現する。 ○ 空の世界の様子 ・ 「鳥の飾りをつくって大空を飛び回るよ」 ・ 「動物雲の絵の上に友達みんなも描き足したい」 ○ 森の世界の様子 ・ 「森の動物たちが遊んでいる様子を楽しくかくよ」 ・ 「友達と一緒に動物になって動き回りたいな」 ・ 「かわいい虫たちの鳴き声を楽器でつくってみよう」 ○ 海の世界の様子 ・ 「お魚が海の中を泳いでいるようにワカメをかくよ」 ・ 「友達と一緒にお魚になって自由に泳ぎ回るよ」 ・ 「海の波の音を箱マラカスでつくりたいな」 ※ 全紙色画用紙を床に敷いた空や森や海の世界の場をつくり、絵や飾り作りへの助言や動きに支援する。(T1協力支援) ※ 手づくり楽器などの音の強さや長さなどの出し方について助言や補助をしたりする。(T2協力支援) 3. 本時の表現活動を振り返り、次時の表現活動について知る。 ○ 自分の表現の工夫や、友達と工夫して楽しくできたこと ○ 友達の表現の面白さや楽しさに共感すること ○ 次時は、友達の表現を見たり聞いたりすること	○ 空や森や海の世界の様子や生き物たちの絵や飾りをつくって楽しかったな。また続けて表したいな。 ○ 友達はペンでお魚をたくさん描いたり、波の音を箱マラカスでつくっているから楽しいな。 ○ 空の動物雲の様子をもっとくわしく描いたり、風の音を缶マラカスで感じを出して音をつくったりするともっと楽しくなるよ。 〔表現活動の場の設定〕 ワークスペース <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top; border: 1px solid black; padding: 5px;"> 空の世界 T1: 絵や動きの賞賛 森の世界 T2: 声や音づくりの助言 海の世界 </td><td style="width: 50%; vertical-align: top; border: 1px solid black; padding: 5px;"> 2年2組教室 ・ 飾りをつくる場 T1: 材料用具の提供 ・ 飾りづくりの助言 2年1組教室 ・ 全体で話し合う場 ・ 手づくり楽器置き場 T2: 音づくりの助言 </td></tr> </table> ○ 床の大きな紙に自由に絵が描けて楽しいな。友達は飾りを工夫して森の生き物になりきって動いているな ○ 空や森や海の世界の様子をいろいろな表し方で表せて楽しかったな。次は、友達ともやりたいな。	空の世界 T1: 絵や動きの賞賛 森の世界 T2: 声や音づくりの助言 海の世界	2年2組教室 ・ 飾りをつくる場 T1: 材料用具の提供 ・ 飾りづくりの助言 2年1組教室 ・ 全体で話し合う場 ・ 手づくり楽器置き場 T2: 音づくりの助言
空の世界 T1: 絵や動きの賞賛 森の世界 T2: 声や音づくりの助言 海の世界	2年2組教室 ・ 飾りをつくる場 T1: 材料用具の提供 ・ 飾りづくりの助言 2年1組教室 ・ 全体で話し合う場 ・ 手づくり楽器置き場 T2: 音づくりの助言		

第2学年2組 算数科学習指導案

指導者 加藤 英也

題 材 長さをはかって、コピーしよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、これまでに、第1学年で大きさ比べの活動をしなが、具体物のもつ属性としての長さという量を取り出すことができるようになってきている。そして、2つのものの長さを、端をそろえて比べたり、曲がった物は真っ直ぐ伸ばして比べたりする直接比較の活動、直接比べられない2つの長さは、片方の長さを写しとって、もう一方の長さとはべる間接比較の活動、身の回りの具体物を単位として使って、そのいくつ分で長さを比べる単位のいくつ分で比べる活動を行ってきている。そこで本題材では、共通単位（普遍単位を含む）を使って、長さを測定したり、作図したり、長さをたしたり引いたりする活動をたっぷりと行わせたい。
- 本題材は、30cm程度から2～3m程度までの長さを対象として、長さを単位やその補助となる単位を作って測定する活動を行うとともに、量概念の基礎となる『量を測定する』ということをとらえることをねらいとしている。具体的には、①長さを測定するために単位を設定する、②設定した単位を分割したり、まとめたりして、補助単位を作り、設定した単位では測定しにくい長さを測定する、③cmやmm、mという普遍単位で長さを測定したり、作図したりする、④長さの合計や違いを計算するという活動である。これらの活動を通して、連続量は単位やその補助単位を用いて測定して数値化できるという測定の考え方、量のもつ加法性の概念を身に付け、長さ以外の量の学習において生かすことができると考える。
- 本題材の指導にあたっては、題材を通していろいろな大きさの図形の辺の長さをコピーするという場を設定し、それぞれにおいて、長さを比較・測定したり作図したり計算したりする活動を十分に行わせる。第1次では、コピーする図形の線分の長さにあう材料を当てはめながら探してコピーする。第2次では、コピーする図形の線分の長さにあう材料をいろいろな単位を使って単位のいくつ分で測定しながら探したり、基になる単位をつなげたり分割したりしながら測定して探したりしてコピーする。第3次では、普遍単位を導入し、コピーする図形の線分の長さにあう材料を測定したり、長さを計算したりして作図して、コピーする。

目 標

1. 必要とする長さをコピーするために、共通単位を使って測定したり、物差しを使って特定の長さを作図したり、長さを計算して求めたり作図したりする活動ができる。
2. 自分の発想を生かして、長さを測定する単位を設定したり、つなげたり、分割したりして、必要とする長さを取り出すとともに、量のもつ性質（加法性、分割可能性）をとらえることができる。

計 画（約8時間）

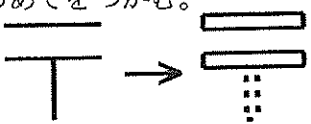
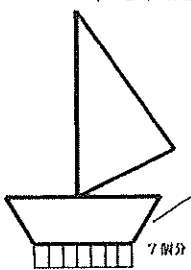
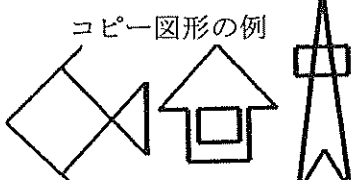
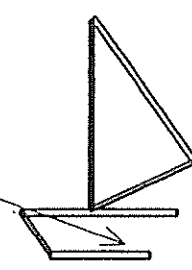
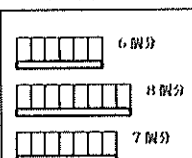
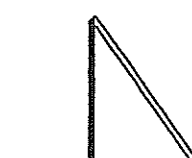
段階	第1次 長さを写しとる体験（2時間）	第2次 長さを測りとる体験（4時間）	第3次 長さを作る体験（2時間）
活動と内容	1. 間接比較でコピーする。 ○ コピーする図形の線分と同じ長さの材料を直接当てはめて探し、長さを写しとる体験	2. 任意単位で測定してコピーする。 (本時2/2)② ○ いろいろな単位で測定する体験 3. 共通単位で測定してコピーする。 ○ 共通単位や補助単位を使って測定する体験 ②	4. 普遍単位で測定しながらコピーをする。 ○ 長さの測定値から線分の長さを作図したり計算したりする体験
手だて	○ コピーする長さを組み合わせた図形の多様な提示 ○ 当てはめる線分を選択する場合	○ 単位となるものの多様な提示 ○ 補助単位による測定を必要とする長さを含むコピー図形の提示	○ 普遍単位の導入 ○ 図形の辺の長さの情報の提示

本時の目標

○ いろいろな図形の線分の長さについて、単位を選択してそのいくつかで測定し、同じ長さの材料を取り出してコピー図形を作ることができる。

準備 多種のコピーする図形、方眼紙、紙テープ、多様な単位カード、1cmキューブ

学習指導の過程

活動と内容	子供の思考の流れ
1. 試しのコピーを行い、本時学習のめあてをつかむ。 (1) コピーする線分と同じ長さの材料を探す試しのコピーをする。  ○ コピーする線分と同じ長さの道具がないこと ※ 材料としてコピーする線分と同じ長さやわずかに長さの違うものを、コピーする道具として方眼紙、紙テープ、多様な単位カード(2cm, 4cm, 8cm) 1cmキューブなどを準備する。 (2) 活動の見通しをもちめあてをつかむ。 ○ 長さがきちんと合う道具(単位)を探したり、使い方を工夫したりすること めあて どうぐやざいりょうのつかいかたをくふうしてコピーしよう 2. 自分の考えた方法でコピーを行う。 (1) コピーする図形を選択し、適切な単位を使いコピーする。 ○ いくつもある単位の中から適切な単位を選んでそのいくつかで長さを測定すること ※ コピーする図形として、線分の長さが数cmから1m程度の図形を多数準備する。  コピーする図形  コピー図形の例  コピーした図形  材料  測定による選択 ※ 図形の全ての線分をコピーするのではなく、いくつかの線分は必要に応じてあらかじめコピーしておく。 (2) 正しくコピーできているかを確認する。 ○ コピー元とコピー先の長さを比べること ※ 重ねて自己評価できるようにコピー元の図形は透明シートに、作成しておく。 3. 測定の仕方を発表し、本時学習をまとめる。 ○ 単位のいくつかで測ると長さがコピーできること ○ 長いものは、長い単位で測ると速いこと	○ 今日はどんなコピーをするのかな。 ○ この長さはコピーできたぞ。 ○ あれ、ここは、同じ長さの道具がないよ。 ○ 他にもいっぱい道具があるから、どれか使えるかもしれない。 ○ よし僕は、このタワーをコピーしよう。 ○ どの道具を使おうかな。 ○ このカードを使ってみよう。 ○ ここの長さは、カードより長いな。いくつかぐらいあるかな。7つ分だ。 ○ だったら7つ分の材料を探せばいい。 ○ この材料は6つ分。これじゃない。 ○ この材料は…7つ分。これだ。 ○ よしこれでコピーができた。 ○ きちんとできているかな重ねて確かめてみよう。 ○ この道具のことを単位というのか。 ○ 単位のいくつかで、長さが測れるよ。

第3学年2組 生活環境科学習指導案

指導者 芋 生 修 一

単 元 草花や野菜を育てる土作り

指 導 観

- 本学級の子供たちは、これまでの栽培活動の中で、自分と友達の植物の生長の比較から、植物が育つ様子やそのための条件を体感的にとらえてきている。特に、日当たりや土の違い（養分の有無や含まれる量、水保ちや水はけ）によって植物の生長には違いがあることをとらえてきている。そこで、植物を育てる活動の中で得た体験を生かすことができ、土作りの重要性にも気付き始めているこの時期に本単元を設定し、これからの栽培活動に役立つ土作りを自分たちの手で進めさせていきたい。そのことで、土作りに対する興味・関心を一層高めたり、今後の栽培活動に役立つ知識や技能を身に付けたりすることができると思う。
- 本単元は、地域の土の様子を観察・調査を繰り返しながら、土作りに必要な材料を自分たちで集めたり作り方を調べたりして、草花や野菜を育てるときに必要な土（堆肥）を作ることをねらいとしている。具体的には、①植物の生長にかかわってきた体験を生かしながら、植物の生長に必要な条件（土の中の養分）を調べる、②地域の自然界の中での土の様子やそのでき方を観察・調査すること、③土作りに関する資料収集や専門家への取材を行うこと、④自分たちで作った堆肥の活用法を交流し、今後の全校的な栽培活動や地域における栽培活動に生かしていくこと、といった内容がある。これらの活動をとおして、土作りの大切さを実感するとともに、物質の変化に対する不思議さや土の生命観の素晴らしさを味わうことができる。
- 本単元の指導にあたっては、地域の土の様子を観察・調査を繰り返したり、土作りの情報を収集したりする活動を行わせる。「であう」段階では、生長の違う花の比較活動を行い、花の生長の条件を明らかにして、土作りへの必要性和意欲をもたせる。「さぐる」段階では、地域における自然界の土の構成を調査したり土作りに関する情報を収集したりして養分を多く含んだ土作りの見通しをもたせる。「いかす」段階では、土作りに必要な材料を収集したり専門家からの指導を受けたりして自分たちで土作りを行い、今後の栽培活動に役立てていきたい。

目 標

- 植物の生長の違いを究明し、よく育つ土のでき方を調べたり、土作りに関する情報を収集したりしながら、自分たちで草花や野菜を育てるときに必要な土を作り、活用することができる。

計 画（約14時間）

階 段	であう（4時間）	さ ぐ る（6時間）	いかす（4時間）
活 動 と 内 容	1. 草花や野菜の生長の違いを調べる。 (1) 生長の原因を土や水といった観点から調べる。③ ○ 植物の生長の違いとその原因 (2) 土と生長の関係に関心をもち、土作りの大切さについて話し合う。① ○ 土作りへの意欲と見通し	2. 地域の土についての調査や土のでき方の情報収集を行う。 (1) 西公園や大濠公園、地域の土を採取し、様々な土の中の様子を比較観察・調査する。(樹4/4)④ ○ 植物がよく育つ土の分析と生長との関係 ○ 西公園、大濠公園など自然の中での土や地域の花壇の土の採取 ○ 採取した土の样子の分析 (2) 植物がよく育つ土の作り方について情報収集する。② ○ 堆肥の作り方の体験と情報収集	3. 土作りを行い、活用の仕方について話し合う。 (1) 自分たちで材料を収集し、土作りを行う。③ ○ 土作りの活動 (2) 堆肥の活用の仕方について話し合う。① ○ 活用方法の決定・全校や地域への啓発と活用
手 だ て	○ 様々な花による生長の比較 ○ 生長の違いの分析	○ 西公園や地域の土の採取・調査活動 ○ 採取した土の比較・観察活動 ○ 土作りに関する情報収集活動	○ 専門家の指導 ○ 材料の収集活動 ○ 活用法の交流

本時の目標

- 西公園や地域で採取してきた土を分析し、植物がよく育っている土は木の葉や草、虫の死骸、生き物の糞、虫などによって構成されていることを感得し、土作りの見通しをもつことができる。

準 備 採取した土と採取場所を示す地図、解剖顕微鏡、ルーペ、ツルグレン装置

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子 供 の 思 考 の 流 れ
1. 植物がよく育っている土の中の様子について話し合う。 (1) 植物がよく育っている土の特徴について話し合う。 ○ よく育つ土の特徴 ・色は黒く、葉や枝などが混じったさらさらした土 自分であつめてきた土のでき方をしらべよう。 (2) 土の中の観察の仕方について話し合う。 ○ 観察の仕方と手順 ・顕微鏡やルーペを使って土の中の様子を観察し、前時の土と比較する。 ※ ツルグレン装置、顕微鏡やルーペの使い方を指示し、観察・調査を効果的にさせる。 2. 採取した土の中の様子について調べ、土の成分と生長との関係について話し合う。 (1) 植物がよく育っていた土の中を観察・調査し、土を構成するものについて調べる。 ○ 植物がよく育っていた場所から採取した土の分析 ・細かい木の葉や枝などを含んだ土 ・小さな虫や虫の糞、虫の死骸などを含んだ土 ・黒々とした色やさらさらとした肌触り ※ 農業改良普及センターの徳永さんとともに、自分が採取した土の様子を調査させ、前時の土との共通点を取り出させる。 (2) 調べた土の様子について話し合う。 ○ 採取して調べた様々な土の共通点 ・植物が生長している土の中は虫や木の葉が多い。 3. 土の中の様子と生長の違いについて話し合う。 (1) 土と植物の生長の関係について話し合う。 ○ 木の葉や枝、虫の死骸と植物の生長との関係 ※ 土の採取時の様子やこれまでの観察・調査の結果を根拠として、土と植物の生長の関係について考えさせる。 (2) 徳永さんの話をもとに、土と植物の生長の関係について話し合い、土作りへの見通しをもつ。 ○ 養分を多く含んだ土の作り方 ・木の葉や虫の死骸などを含ませた土を作ればよい。 ※ 自分たちが考えた土と植物の生長の関係を専門家に意味付けて頂くことで、土作りの見通しをもたせる。	○ 植物がよく育っている土は、土の色が黒々として、手触りもさらさらしている。 ○ ミミズがいたり、他の虫がいたりした土は、よく植物が育っていた。 ○ 西公園の中でも、植物がよく育っていた場所の土を採ってきているので、その土もいろいろな虫がいるはずだ。調べてみよう。 ○ 生活科畑で集めてきた土は、色が黒く、柔らかい。土の中も小さな葉や虫が混じっている。 ○ 西公園で集めてきた土は、枯れた木の葉や枝のがたくさん入っている。小さな虫もいる。だから、植物がよく育っていたのだな。 ○ やっぱり、植物がよく育っている土は、腐った木の葉や枝や虫の死骸などが土の中に入っている。それらが、腐って植物の栄養になっているから、植物がよく育つと思う。 ○ 植物がよく育っていない土には、腐った葉や枝、虫などがいなかった。植物の栄養になるものが土の中に入っていないから植物が育たないと思う。 ○ 自然の中には、自分たちで土を作り出している場所がたくさんある。自分たちも早く、木の葉や枝、虫の死骸などを含ませたよい土を作ってみたい。

第4学年1組 国語科学習指導案

指導者 吉田正樹

単元 とんち話のおもしろさを読み比べよう

指導観

- 本学級の子供たちは、これまでに「力太郎」や「モチモチの木」などの読みを通して、民話というジャンルの作品に出会い、その内容だけでなく独特の語り口や方言による表現の面白さを楽しんでいる。また、一つの作品について自分が面白かったところを取り出したり思ったこと・考えたことを付加したりして読みを深める力も育ちつつある。しかし、自分で何か課題をもち、それを解決するために、いくつかの作品を読み比べたり話し合ったりして自分の読みを創り上げる読書の力には至っていない。これまでの楽しむ読書経験を基盤に、考える読書の経験を味わえるようにしたい。
- 本単元は、とんち話の面白さを追求する課題をもち、必要感をもって作品を読み比べることをねらいとしている。具体的には、①「吉四六話」への興味・関心をもとに追求課題をもつこと、②とんち話の面白さを追求するために複数の作品を読み比べたり、必要な事柄やことばを取り出したりして、自分の思いや考えを付加し整理すること、③自分の読み取り方を筋道立てて説明し深め合うことを内容としている。これは、子供たちが必要感をもって創造的に読書活動や話し合い活動に取り組むなかで個性的な理解する力を身につけていく上で価値ある内容である。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちが必要感をもって読書の範囲を広げ、必要な事柄やことばを情報として収集・処理していく過程として学習を展開していきたい。そこで課題の設定段階では、「柿の実の話」での吉四六さんのとんちについて話し合い、その善し悪しやとんちに込められた思いを考える追求課題をもたせる。情報の収集・整理段階では、まず教師が提示する3つの「吉四六話」を読み比べさせ、とんちでやりこめる相手やその理由などの情報を収集・整理し、とんち話の面白さを比べる視点を整理できるようにする。その上で、他の「吉四六話」を選択読みできる場を設定し、課題を追求させる。情報の処理段階では、彦一話など他の話と読み比べ、各地に伝わるとんち話の面白さについて調べ交流することを通して、とんち話に込められた人々の思いや願いを考える読書活動ができるようにする。

目標

1. 複数のとんち話を読み比べながら、とんち話の面白さを追求するために必要な事柄やことばを収集・整理し、とんち話に込められた思いや願いを考えることができる。
2. 一人一人の読み取り方の違いを考えながら、自分の読みを深め確かにすることができる。

計画 (約9時間)

階	課題の設定(1時間)	情報の収集・整理(4時間)	情報の処理(4時間)
活動と内容	1. 「柿の実の話」をもとに吉四六さんのとんちについて話し合い、課題をもつ。 ○ 追求意欲の喚起 ○ 学習課題の把握(予想される課題) ・吉四六さんはどんな人だろう。なぜとんちをするのだろう。	2. 吉四六話を読み比べる。 (1) 3つの話を読み比べ、とんち話の面白さの違いや共通点について話し合う。② ○ 叙述に即して情と人物像を読み取ること ○ とんち話の面白さをとらえるための視点づくり (2) 他の吉四六話と読み比べ、とんちに込められた思いや願いについて話し合う。② ○ 人物像に関わる情報収集	3. 吉四六話と他のとんち話の面白さを読み比べる。 (1) 昔話を調べ、とんちの名人を探して読み比べる。② ○ 複数の作品の読み比べ (2) グループごとに提案し、とんち話の面白さと人々の思いを話し合う。(構1/2)② ○ 筋道立てて説明しながら相互に読みを深め合うこと
手だて	○ とんちについて対立的に話し合う場 ○ 課題の焦点化	○ 3つの「吉四六話」の提示 ○ 比べたい「吉四六話」を自分で選択する場の設定と支援	○ 読書(案内)コーナーの設置 ○ とんち名人マップの提示 ○ グループ提案と交流の場

本時の目標

- 吉四六話と他のとんち話を比べて思ったことや考えたことを筋道立てて話し合いながら、それぞれのとんちの面白さやとんち話に込められた人々の思いや願いについて読み深めることができる。

準備 学習の流れ図、グループ発表に必要な資料、読書コーナーの設置

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. とんち話の面白さについてグループごとに調べてきたことを見直し、みんなに発表することを話し合う。 ○ めあての把握と話し合う観点の明確化 調べたとんち話のおもしろさについて発表し合い、にている点やちがう点を考えよう。	○ 彦一さんと吉四六さんとは、よく似ていたんだけど、他のとんち話はどうなのか知りたい。
2. それぞれが調べたとんち話の面白さを比べながら、似ている点や違う点を話し合う。 (1) グループ発表を、メモをしながら聞き合う。 ○ 感想や意見を付加し、筋道立てて発表すること ○ メモを取りながら聞き比べること（共通点と相違点） ※ 視覚に訴える資料などを活用した発表の支援をする。 (2) 代表者の発表を受け、とんちの面白さやとんちに込められた人物の思いについて話し合う。 ○ とんち話の相違点に着目しながら読み比べること	○ 吉四六さんのとんちについてもっと調べたかったので他の吉四六話を探して読み比べた。 ○ 自分のなかまをやりこめている話もあったけどなぜかな。 ○ 彦一さんのとんちを比べてみた。名前と場所や仕事などは違うけど、吉四六さんとよく似ていた。語り口(方言)も違った。
（彦一さん） ・吉四六さんは大分県のとんち名人だけど、彦一さんは、熊本県のとんち名人、いろいろなところにたような名人がいる。	（モーイ親方） ・いつも弱いものの見方 ・みんなのためにとんちを働かせている。
○ 一人一人の感じ方に違いのあることに気づくこと ※ とんちの面白さを考える視点から意見を整理させる。 (3) とんち話に込められた人々の思いや願いを話し合う。 ○ とんち話の共通点に着目しながら読み比べること	（他のとんち名人） ・吉五どん ・曾呂利新左右衛門
・身分の高い人やお金持ちの人をやりこめる話が多い ・おかしくて思わず相手も許してしまう話が多い。 ・ことばの違いやしゃれなどを使ったとんちが多い。 ・同じようなとんちで内容の似ている話がある。 ・その地方の方言で楽しく語りかけている。 ※ 時代背景などの補説ととんち名人分布図の提示	○ こんなにたくさんの場所にたくさんの名人がいたのか。でもどうして人々はこんなとんちの名人を考え、いろいろなとんち話を創り伝えてきたんだろう。 ○ 生活を明るく楽しくした。 ○ ただおかしい楽しい話ではなく、貧しく苦しい生活をしていた人々の反抗する気持ちや少しでも楽しく生活したいという願いが込められていたんだ。 ○ 他のいろんな民話を読んでみて、創り伝えた人々の気持ちをもっと考えてみたいな。
3. 話し合ったことをもとに、他のグループが調べたとんち話を読み味わい、これからの自分の読書計画を立てる。 ○ 自分の読書計画における追求課題をもつこと ※ 話し合ったことについて、読書コーナーを活用して読書活動を行わせたり、他のグループの友達と交流させたりして、自分で納得のいく確かめをさせる。	

第4学年2・3組 体育科学習指導案

指導者 笠 宏 照

単 元 のびのびジャンプにちょうせんしよう（走・跳・投・泳の運動）〔達成型・競争型〕
指 導 観

- 本学級の子供たちは、3年生までの跳の運動において、川跳び遊び等で長さを変えてリズムカルに跳ぶ動きやゴムを使って高さを変えて跳ぶ遊びを行ってきた。そこでは、自分たちで、高さを決めながら勢いよく助走をつけ、力強く踏み切ってゴムを跳び越したり空中で体を回転させながら着地をしたりするなど、動きを工夫する姿が見られた。ここでは、自分たちで活動の場や用具を工夫しながら、様々な跳ぶ動きをつくったり、課題を達成することや友達と競争することなど学習の仕方を決めたりして、友達と協力して運動する楽しさを味わわせたい。
- 本単元のねらいは、子供たちが高さや長さ、姿勢などをとらえて様々な跳ぶ運動をしながら、めざす記録に挑んだり、グループ同士競争をしたりして、楽しく跳ぶ運動ができることである。具体的には、①踏み切りや助走の位置を変えながら、より高く・より遠くへ跳ぶこと、②高いところから身体を操作しながら跳びおりること、③片足や両足でリズムをとりながら続けて跳ぶこと、④場や用具を工夫して様々な跳び方を楽しむこと、などである。以上のことは、多様な跳ぶ動きを通して全身的運動や調整力・瞬発力などを高める上で意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちが高さや長さ、姿勢などをとらえながら、目標に向かって様々な跳び方を楽しんでいくようにしたい。そのために、達成型と競争型の活動で構成し、2つの運動の楽しみ方で子供たちが活動できるようにする。とらえる段階では、いろいろな場で高さ・長さ・姿勢などをとらえながら跳ぶ動きを行い、運動の楽しさに触れるようにする。つくる段階では、動きの達成度や記録に挑戦したり、友達同士競争したりしながら運動の楽しさを味わう。そのために、達成型・競争型の活動を構成しながら、学習カードによって動きの高まりをとらえるようにしたり、VTRや学習カードによって競争する活動を支援したりする。深める段階では、跳ぶ動きを取り入れたゲームを考え、つくりながら、さらに跳ぶ運動の特性を味わうようにする。

目 標

1. 高さや長さ、姿勢などを観点にしながら、運動の場で自分の動きをとらえ、全身を使って楽しく跳ぶ運動をすることができる。
2. 自分の能力に合わせて、場や用具を工夫して、記録に挑戦したり、友達と競争したりして、活動を十分に楽しむことができる。

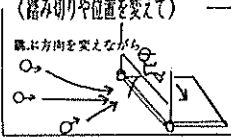
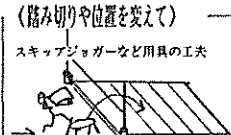
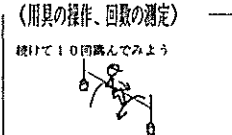
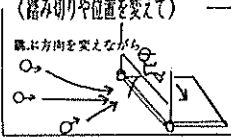
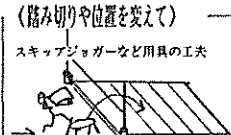
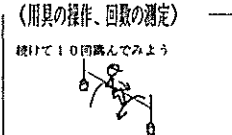
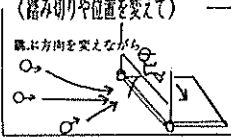
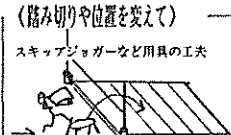
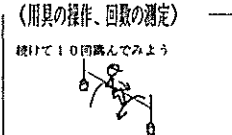
計 画 （約6時間）

段階	と ら え る (2時間)	つ く る (3時間)	深 め る (1時間)
活動 と 内 容	1. 多様な場における跳ぶ動きに挑戦する。 ○ 高さや長さを変えた跳ぶ動きの試し ○ 課題の方向性の決定 ※ 高く跳ぶために ・方向〔前・横・斜め〕 ・踏み切り〔片足・両足〕	2. 活動の場を工夫しながらジャンプに挑戦する。〔本時2/3〕 ○ 動きの達成のための場づくりの工夫と動きづくり ・用具の活用と工夫（例・スキップ・ジョグカー使用） ○ 高さや距離を課題とした競争の活動 ・多様な競争の観点（高さ・距離・得点制など） 達成型の活動 競争型の活動	3. 練習した動きや自慢できる動きを使ってゲームを工夫して遊ぶ。 ○ ゲームの場づくり ○ 競争の仕方の工夫 ○ ルールづくり
手 だ て	○ 高さや長さの異なる課題設定のための場 ○ 学習カード（課題の記録）	○ 動きのモデル（ポイントの提示） ○ 視聴覚機材 ○ 学習カード（課題克服・達成の記録）	○ 視聴覚機材 ○ 学習カード（課題克服・達成の評価）

本時の目標

1. 自分がとらえた高さや長さ、姿勢などの観点に添って記録に挑戦したり、グループや個人間で競争したりして、楽しく跳ぶことができる。
2. 自分の実態にあった場を工夫しながら、友達同士協力して楽しく活動することができる。

準 備 スタンド、ゴムひも、スキップジョガー、三角パット、学習カード、視聴覚機材など
学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ					
1. 本時学習について話し合う。 ○ 場づくりとそれぞれの場におけるための遊び ○ 課題や活動の確認と、めあての把握 ※ 前時活動のVTRを提示して活動内容を確認させる。 課題例 ・高く跳ぶための踏み切り方 ・続けてたくさん跳ぶための着地と踏み切り方 ・遠くへ跳ぶための用具の工夫と踏み切り方 —めあて— いろいろなとび方をしながら、楽しくのびのびジャンプをしよう。	○ いろいろな場でジャンプ遊びをしてみたいな。 ○ もっと高く跳ぶために、踏み切る場所を考えてみよう。 ○ 続けて跳ぶために、着地と踏み切りを早くすることを考えないといけないな。					
2. いろいろなジャンプをする。 (1) 課題に向け自分の力を精一杯出して跳ぶ運動をする。[達成型] ○ 課題や実態に合わせた跳ぶ運動の選択 ○ 用具の操作による動きの深まりや高まり [活動の場の設定例] <table border="1"> <tr> <td rowspan="2">ス テ ー ジ</td><td> 高さを追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) 跳ぶ方向を変えながら  </td><td> 高いところからのジャンプ (身体の向きを変えて) マークにあわせて回りながら  </td></tr> <tr> <td> 距離を追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) スキップジョガーなど用具の工夫  </td><td> タイミングをとるジャンプ (用具の操作、回数の測定) 続けて10回跳んでみよう  </td></tr> </table>	ス テ ー ジ	高さを追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) 跳ぶ方向を変えながら 	高いところからのジャンプ (身体の向きを変えて) マークにあわせて回りながら 	距離を追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) スキップジョガーなど用具の工夫 	タイミングをとるジャンプ (用具の操作、回数の測定) 続けて10回跳んでみよう 	○ どの場所から助走をして踏み切れればより高く跳べるかやってみよう。 ○ ひねりをいれて着地をしてみよう。手を振りながらフットマークに合わせるぞ ○ スキップジョガー、踏み切り板、三角パッドなどを使って踏み切りを力強くしてみよう。 ○ 続けて10回跳んでみよう。着地と踏み切りを素早くやって、手の振り上げを大きくしよう。 ○ 用具を使って踏み切れればもっと遠くへ跳べるぞ。
ス テ ー ジ		高さを追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) 跳ぶ方向を変えながら 	高いところからのジャンプ (身体の向きを変えて) マークにあわせて回りながら 			
	距離を追求するジャンプ (踏み切りや位置を変えて) スキップジョガーなど用具の工夫 	タイミングをとるジャンプ (用具の操作、回数の測定) 続けて10回跳んでみよう 				
※ VTRによって新たな課題の提示と場の活用を促す。 ※ 競争の場や活動のモデル提示を行う。 (2) ジャンプの仕方や競争の仕方を考えて工夫して遊ぶ。[競争型] ○ 交流活動による競争型の意識化と活動 ○ グループ同士のペア活動による2つの動きの競争型活動 ※ 学習カードへの記録により、動きの変化や伸び、勝敗などを確かめさせる。	○ グループで高さの競争をすると楽しくなるよ。 ○ 距離の競争と回数の競争をしてみよう。					
3. 本時学習をまとめ、次時の活動について話し合う。 ○ 動きの高まりや工夫などの感想 ○ 個人間やグループ間の競争の楽しさの想起 ※ 活動について賞賛しながら、みんなで楽しむための競争の仕方についてとらえさせる。	○ スキップジョガーを使うとみんな遠くて跳ぶことができたぞ。 ○ あのチームと競争できて楽しかったな。					

第5学年1・3組 「人間」学習指導案

指導者 植 松 伸 之

題 材 田んぼの忘れ物（命と環境について考える）

指 導 観

- 本学級の子供たちは、4年生で「長浜公園にふれあいをつくろう」などの学習を行い、公園の清掃を継続されている方の生き方への共感、公園を利用する方たちと共に環境をよりよくする喜びを感じている。そのような子供たちの人への共感や人と協力して環境をよくしていく喜びを、さらに環境が持つ生命の共生の感受、生命を守る意志まで高めたい。そして、自分を取りまく人と自然の生命を広く深く感受し、生かされている自分への気づきにつなげていきたい。
- 人間学習における高学年の「環境」の内容は、自分がまわりの人や生き物の命によって生かされていることを実感し、その価値を自覚しながら環境を守る意志を持つことと規定している。赤米づくりは、外敵に強い原種に近い稲を育てることで、人の健康安全と、生き物の生態を守る環境保全をさらに進めようとする農法である。本題材は、赤米づくりを通して、田に住む生物が命を生かし合っている尊さを実感し、人と自然の命を大切にしようという態度を育てることをねらいとしている。具体的には、①田を通して、人間を含めた生き物が共存し生かし合っていることのすばらしさ、尊さを感じること ②目に見えない命を守る人の努力や命の尊さを感じながら稲作りを行っている人の生き方のすばらしさを感じてもらうことを内容としている。以上のことは、生命尊重の精神を基盤とした「環境保全」の態度を育てる上で価値深い。
- 本題材の指導にあたっては、田に住む生物が生かし生かされていることの尊さを実感するために、①赤米づくりを行なう吉住さんの願いや工夫・苦勞の追究、②吉住さんの赤米田での農業生物の豊かさを感じる田植え、③吉住の立場に立ったとき労力が半減するが、冬眠中のカエルを殺してしまう3月の耕耘を行うかという話合いの設定とその根拠をつくるための取材活動や体験活動の設定、吉住さんとの交流、自分が採取した生き物の誕生の場面提示、④草取り、花見、稲刈りの体験、⑤半年間の活動の中からの苦勞と感動の場面の映像による取り出しと心の振り返りを行う。

目 標

- 赤米田では、農業生物と稲と人が共存していることを知り、生かし生かされている命の尊さを実感し、人を含めた自然の命を大切にしようという態度を育てる。
 - ・人間を含めた生き物が共存していることのすばらしさとその尊さを実感することができる。
 - ・人と自然の命を守る吉住さんの努力やロマンを実感することができる。

計 画 （約6時間）

段階	感じる（3時間）	考える（2時間）	行う（総合活動）	みつめる(1時間)
活動と内容	1. 赤米の田に共生する生物の豊かさを調べる。 ○ 吉住さんの願いの感受 ○ 農業生物の豊かさの感受 <u>赤米を自分で育てよう。</u>	2. 赤米田の耕耘時期を話し合う。(本時2/2) ○ 生物の共生の豊かさの感受 ○ 共生を守ることの難しさと尊さの感受	3. 赤米を育てる。 ○ 草取りの大変さと充足感 ○ 赤米の豊かさの感受	4. 半年間の活動を振り返る。 ○ 命の共生を守ることの大変さと尊さの実感
手だて	○ 農業生物の関係図の提示 ○ 吉住さんの田んぼの観察と田植え	○ 草取りの模擬体験 ○ 吉住さんとの交流	○ 草取りの設定 ○ 赤米の花見	○ 感動場面の提示

本時の目標

- 農業生物が共存していることのすばらしさを実感するとともに「生命の共生・尊さ」を守っていくことの難しさと尊さを感じることができる。

準 備 子供たちが草取りを体験したときのビデオ、子供たちが採取した農業生物が実際に成虫になる様子を写したビデオ

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 赤米田の耕耘時期をいつにするかを話し合う。 ○ 吉住さんの状況や願いを推しはかろうという態度 ※ 耕耘時期の決定についての葛藤を交流させる。 — めあて — 自分が吉住さんだったら、赤米田の耕耘を3月に行うべきか吉住さんの立場に立って考えよう。 2. 吉住さんの願いを推しはかり3月に耕耘すべきかを話し合う。 (1) 自分が吉住さんの立場だったら、3月の耕耘を行うか否かを話し合う。 3月に行う ・草取りの労力が半減でき除草剤を撒かなくてすむ。 ・害虫が少なくなるため、農薬の散布をおさえることができる。 ・目に見えないまま虫を殺すことが問題、悪いと思いつながら許される。 5月に行う  ・冬眠するカエルを殺すことは、環境保全の根本的な考えを覆すことになる。 ○ 環境保全の理想を貫くことの大切さ、環境保全を現実的に行うことの難しさ、どちらかの選択の中での葛藤 (2) 吉住さんは「どんな思いで5月耕耘にしたか」を吉住さんと話し合う。 なぜ、カエルが生きることが田にとって大切なのですか。それが大事なことです。私は理想に生きたいと思っています。しかし、3月に田を耕す人を批判できるでしょうか。難しい問題です。 ○ 願いを貫く生き方をしたいという吉住さんの生き方への共感 3. 赤米田での生き物の豊かを感じた体験を話し合う。 ○ 吉住さんが大切にしている生き物の豊かさの感受 ※ 赤米田で生き物を見つけ生き生きと活動する子供の様子をビデオで提示する。 ※ 子供が育てた農業生物を提示する。 4. 秋の赤米の開花への期待と想いを話し合う。	○ 私が吉住さんだったら、3月に耕耘を行うべきか、5月に耕耘すべきか迷っている。3月に耕耘すれば、草取りの労力が少なく、除草剤をまく必要がなくなる。しかし、冬眠中のカエルを殺してしまうことになる。 ○ ぼくも、5月に耕耘を行った方がよい。吉住さんは、わずか50グラムのお米を消費者に送ったことがあるけど、それだけ環境保全の大切さを多くの人に伝えたいからだ。理想を大切にすべきだと思う。 ○ 賛成、冬眠中のカエルを殺してしまうことは、環境保全の願いに反することになる。 ○ 確かにそうだけれど、あの草取りの大変さを考えると、実際にできるのか。吉住さんに苦勞を押し付けることになる。 ○ 目に見えないまま虫を殺すことが問題、悪いと思いつながら行うことはしかたない。 ○ 環境保全型農業は、生き物をできるだけ殺さないで生かし合って育てる農業。必要以上に殺す事はよくない。 ○ 吉住さんはあえて苦勞を選んでいる。すごい。 ○ 自然の中の小さな虫にも命があるんだ。人間だけの自然ではないんだ。 ○ とってもきれいだ。 ○ 赤米を大切に作っていきたい

第6学年1組 理科学習指導案

指導者 今 林 康 治

単 元 わたしたちの生活と健康な体―食べ物のゆくへ―
指 導 観

- 本学級の子供たちは、生活経験において見られる現象から自分の体の内部の働きを漠然ととらえている。例えば、消化については食べ物が体の中で糞や尿になって体外にでること、血液の循環については血液が体中に流れていること、呼吸については空気がそのまま体内に取り入れられていること、といった程度である。また、それらの考えは子供のなかでそれぞれ独立して存在し、消化することの意味と血液の働きとをつなげてとらえてはいない。そこで、子供たちの認識を、体の各部が関連し合って働くことによって健康な体が維持されているといった認識まで高めたい。
- 本単元では、体の内部のつくりや働きを調べて自分たちの生活の仕方が体の各器官に影響し、口・胃・腸及び血液とが関連しあって生命を維持しているといった見方や考え方を養うことをねらっている。具体的には、①食べた物は口、胃、腸、などを通る間に消化、吸収され、吸収されなかった物は排出されること、②血液は、心臓の働きで体内を巡り、養分などを運んでいること、③体の各器官が関連しあって、健康な体を維持していること、④食べ物は、養分を吸収しやすくするために消化されていること、などが内容である。この学習を通して子供たちは、自分の食事の仕方を見直し、健康な体づくりに向けて自ら実践していくことができる。
- 本単元の指導にあたっては、食べ物と健康な体との関連について子供の見方や考え方をとらえ、より科学的な見方や考え方に構成し直して日常生活に役立てていくことを大切にしている。そのためにも、現実的には説明できるが内容の面ではあいまいな考えで過ごしてきたものとして「食べ物がフンに変わる」ことを提示し、消化についての課題をもたせる。そして、課題別に資料で調べるとともに、自分が調べたことを確かなものにしていくために、動物の内臓や人体模型などを使って人の体をイメージしながら調べていくようにする。最後に、交流しても納得のいかない課題について、学習のまとめと自由研究を行ったり、交流の場面で生活経験の想起を再度図ったりして、体内における食べ物のゆくえを説明していく。

目 標

- 自分なりの見方や考え方を大切にしながら、消化・吸収の働きを調べることができる。
- 各器官が関連し合って働くことにより養分が体全体に送られているという見方や考え方ができる。

計 画 (約8時間)

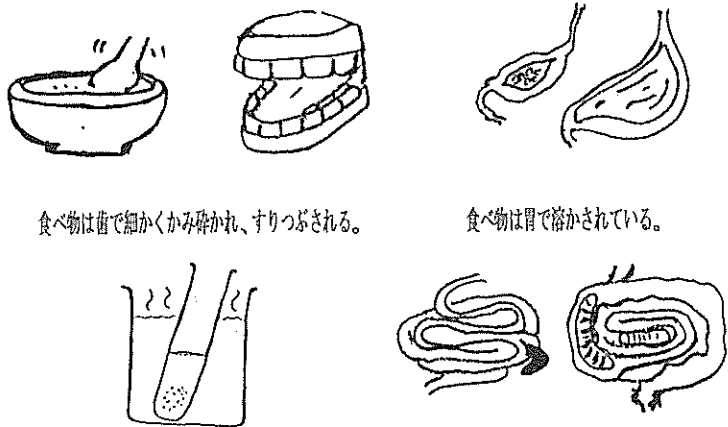
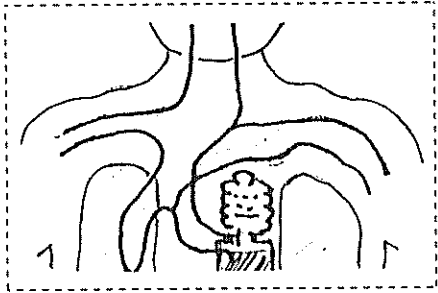
時 間	見出す (2時間)	調べる (3時間)	生かす (3時間)
活動と内容	1. 栄養の吸収の要因を明らかにし、問題をつくる。 (1)糞の観察から食べ物の変化を予想する。 ① ○ 生活的見方・考え方 (2)自分なりに調べる。 ① ○ 資料による情報収集	2. 実験・観察を行って情報を確かめ、考えを見直す。 (1)方法別に追究する。 ② ○ 糖への変化、食物の変化、血液 (構2/2) (2)実験結果を振り返る。① ○ 自分の論理の見直し	3. 自然の原理・法則が他の事象に適用できるか試す。 (1)納得のいくまで実験・観察や情報収集を行う。 ② ○ 自由研究 (2)日常事象と比べる。 ① ○ 生活上の見直し
手 だ て	○ 子供の生活場面で遭遇する事象の提示 ○ 自分の解釈を見直す体験	○ 自分なりの表現による実験結果の解釈と見直し ○ 生活場面のイメージ化	○ 関連する生活事象の例示 ○ 結果の解釈を確かめる観察実験の再現

本時の目標

- 人や動物の食べ物が体内で変化していく様子を自分なりの方法で調べ、体内に養分が吸収されやすいように消化されているといった見方・考え方をもつことができる。

準 備 子供が調べたノート、鶏の内臓、魚、人体模型、血液循環モデル等

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時の学習を想起し、本時のめあてを確認する。 ○ 食べ物の変化と消化の意味 —めあて— 食べ物が体のなかで消化されていくしくみを調べよう。 ※ 食べ物がフンになるまでの過程において、食べ物の消化と養分のゆくえについての考えを概念地図に書いておく。 2. 鶏のえさとそのフンの対比や観察から食べ物の変化を調べて、自分が確かめようとする方法を確認する。 ○ 自分なりの見方・考え方に対応した実験方法 ・食べ物は、体の中でどのように変化していくのか。 3. 食べ物が口内で糖に変えられたり、胃や腸を通る間に変化していく仕組みをを自分なりの方法で調べる。 ※ 調べる方法を自分なりに考え、組み合わせて調べる。  食べ物は歯で細かくみ砕かれ、すりつぶされる。 食べ物は胃で溶かされている。  でんぷんは口の中でだ液によって糖に変わる 腸で色が変わっているので養分が変化している。 4. 消化についての実験結果から、さらに調べてみたい問題を見出す。 ○ 自分の必要性から生まれた疑問 ・血液の循環について ※ 血液循環モデルを使って、養分が全身に運ばれ、健康を保っていること気付かせる。  ＜ポンプを使った循環モデル＞	○ 人や動物が生きていくためには食べ物が必要であることは、あたりまえのことだ。 ○ 消化されるしくみを資料などで調べてみたけど、実際に食べ物は、体の中でどのようにして消化されているのだろうか。 ○ 嚙んで小さくなるのはわかるけど、なぜ小さくするの。 ○ よく嚙みなさいと言われるけど、口の中で食べ物の性質が変わるのかな。 ○ パンやご飯に含まれるでんぷんがだ液によって養分に変化していくことを調べてみたいな。 ○ だ液によって、でんぷんは糖に変わっていくんだ。 ○ この糖がぼくたちの体を動かすエネルギーになっているんだ。 ○ 食べ物は、胃でとかされて養分に変化しているのかな。 ○ 色が変わるのは養分が吸収されるからだろう。 ○ なぜ、食べ物は消化されるのだろうか。 ○ 養分は血液の中に入って、全身に運ばれるんだ。 ○ どのような仕組みで全身に運ばれるのかな。

第6学年2・3組 家庭科学学習指導案

指導者 平 山 尚 美

題 材 わが家ふうの住まい方をつくり出そう

指 導 観

- 本学級の子供たちは5年生の「家族の生活と住居」の学習を通して、家族が健康で楽しく生活していくためには、清潔で整理整頓された住まい方や家族の心がふれあうことが大切であるという見方・考え方をもってきている。また、家族との生活を大切し、家族とのかかわりから豊かな住まい方を追究し創りだしていききたいという意欲はもっている。しかし、家族の生活の場である住居という立場で住まい方を全体的にとらえることはまだ十分ではない。
- 本題材のねらいは、家族構成や家族の生活ライフに応じた住まい方の工夫を通して、よりよい家族の生活を創ろうとする実践的な態度を育てることである。具体的な内容としては、①住まいの働きについて健康や生命を守る・休養・家族の人間関係という観点から理解すること、②わが家にふさわしい住まい方を健康・休養・家族の人間関係等の観点から情報収集し試し追究していくこと、③それぞれの家庭の実情に応じて児童のできる範囲で、住生活をよりよいものにしていこうと創意工夫していくことなどである。これらの学習を通して家庭生活への理解を一層深め、家族とのかかわりを大切にする心情や意欲的に働きかけたいこうとする実践的な態度を育てることができると考える。
- 本題材の指導にあたっては、家族や家庭生活をより深く理解するために住居を学習するという立場に立って、家庭生活や家族のとのかかわりで学習を進めていきたい。つかむ段階では、住まいの働きについて理解させ、わが家の住まい方の工夫を情報収集させていきたい。調べる・つくる段階では、わが家の住まい方の工夫を実際に試したり、根拠を調べたりすることを通して、自分が願うわが家の豊かな住まい方を追究させていきたい。生かす段階では、家庭で実践したことをもとに、わが家のより豊かな住まい方を求めて働きかける有用感を深めさせていきたい。また、今後の1年間の住まい方の実践の見通しと意欲化を図っていきたい。

目 標

1. 家族の住まい方の工夫や友達の家庭の住まい方の工夫を情報収集し、わが家にふさわしい住まい方を追究し創り出すことができる。
2. 家族にとって、より豊かな住まい方を工夫し実践していくことを通して、家族の一員として家庭生活に働きかけ役立つ有用感を深めていくことができる。

計 画 (約10時間)

階	つかむ (3時間)	調べる・つくる (5時間)	生かす (2時間)
活動と内容	1. 住まいの働きをもとにわが家の住まい方の工夫について情報収集する。 ○ 住まいの働きについての理解 ○ わが家の住まい方の工夫についての情報収集	2. 住まい方の工夫を調べたり試したりしてわが家ふうの住まい方を追究し創り出す。 ○ わが家ふうの住まい方に生かせる試しの活動 ○ わが家の住まい方の工夫の交流 ○ 住まい方の工夫の家庭実践	3. 家庭実践したことをもとに、家庭生活に役立つ有用感を深める。 (構 2/2) ○ 家庭に働きかける有用感の感得 ○ 友達の実践のよさの感得
手だて	○ 住まいの働きについての資料提示 ○ 住まい方の工夫についての情報収集活動の促し	○ 住まい方の工夫を試したり調べたりしていく場の設定 ○ 友達の家庭の住まい方の工夫の交流の場の設定	○ 家庭からの情報収集活動の促し ○ 家庭に働きかけることについての振り返り活動

本時の目標

- わが家に合った自分の住まい方の工夫を発表しあい、友達の実践のよさを情報として取り入れ、更に自分の実践をよりよいものにすることができる。

準備 家庭実践したことについての家庭からの情報収集ノート、友達に説明する資料

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの学習を想起し、本時学習のめあてについて確かめる。 ○ 本時学習のめあての確認 めあて 自慢の住まい方の工夫を発表し、よいところを取り入れよう。 2. わが家ふうの自分の住まい方の工夫を交流しあい、自分の実践を更に豊かにしていくために友達の実践の工夫を情報収集する。 ○ 友達の家庭実践のよさを認め合いと情報収集をすること ※ 課題別のグループで家庭での実践をもとに自分の自慢のすまい方を各コーナー別で発表し、交流しあう場を設定する。 《一人の子供の発表の例》－快適な住まい方の工夫について－ 《家族の生活ライフ》 → 《わが家の住まい方の工夫》 → 《調べ・試したこと》 → 《家庭で実践したこと》 → 《家族の感想》 ぼくの家族は、自然が好きでよく山などにしかける。 花などの植物をよく家庭の中で育てている。 植物の働きについて ・人の心を安らかにする ・空気をきれいにする 水やりや手入れなど花や植物のお世話をするようになった。 植物は日頃の世話が大切だが、なかなか忙しくてできなかった。なのでとても助かるようになった。	○ 今日はわが家のすまい方で工夫実践したことをみんなに発表していくのだな。 ○ ぼくは、エネルギーを大切にしたい住まい方で特に涼しい住まい方の工夫について調べたよ。クーラーや扇風機の効果的で健康にも良い使い方をみんなに話してあげよう。
《わが家ふうの住まい方の工夫の家庭実践の発表の例》 【A子の明るい住まい方大作戦コーナー】 ・照明器具の掃除や照明器具の効果的な使い方について 【B子のさわやか大作戦コーナー】 ・自然換気の効果的な仕方 【C子の涼しい住まい方大作戦コーナー】 ・涼しさを感じる調度品の工夫 教 【D子の騒音防止大作戦コーナー】 ・夜は音楽の音などを低くする。 ・イスの下に布などを巻く。 【E子のエネルギー節約大作戦コーナー】 ・クーラーは適度な温度で必要に応じて使う。 【H子の家族の心がふれあう住まい方大作戦コーナー】 ・居間を明るくする工夫	○ 各コーナーでいろいろな実践について発表しているな。ぼくも、友達の実践を聞いてもっと涼しい住まい方の工夫に役立てよう。 ○ 涼しい住まい方の工夫では直射日光をさえぎるとよいことを知った。ぼくもすだれなどをつけてためしてみよう。また、部屋に涼しい雰囲気を出すものを置いたりすることでも工夫できることがわかったよ。
※ それぞれの子供の住まい方の工夫のよさが友達に伝わりやすいように、具体的な表現物を使った発表の仕方を工夫していけるよう支援していく。 3. 「わが家ふうの住まい方の学習をして」の感想をまとめる。 ○ 家族や家庭生活への見方の深まりのまとめとこれからの家庭実践の見通しと意欲化 ※ 住まい方の工夫が季節の変化に応じて深まっていくように、1年間の家庭実践の意欲化を図っていくようにする。	○ ゴミの問題でもそうだが、一人一人が少し気をつけていくことで地域や自然をよくしていくことができるのだな。これからの実践をもっと工夫していこう。

第3・4学年さくら組 生活単元学習指導案

指導者 松 本 良 一

単 元 そうごうとしょかに いこう！

指 導 観

- さくら組の子供たちは、精神年齢3歳から6歳程度の3年生3名、4年生3名の計6名で構成されている。図書館の利用については、学校における週1時間の図書の時間に本を借りる経験をしてきていることから、図書館は本を借りる所であることはとらえている。また、本を借りることを楽しみにしている子供が多く、図書館への興味・関心は高い。福岡市総合図書館については、2名の子供が利用した経験がある。
- 本単元のねらいは、福岡市総合図書館にある余暇利用にかかわる施設について知り、自分の生活を楽しむために、その施設を利用できるようにすることである。具体的には、①目的意識をもって課題に取り組むこと、②自分にとっての総合図書館の価値をとらえること、③練習をして利用の仕方を身につけること、④バスカードを使ってバスに乗ること、⑤日常生活の中で総合図書館を利用すること、などを内容としている。以上のことは、課題解決の経験を積む中で、子供たちの生活の楽しみ増やすことになり、生活力を培うと同時に現在及び将来の自立的な生活をめざす上で意義深い。
- 本単元の支援は、①本を借りたりビデオを見たりする直接体験によって、子供の活動への目的意識や課題意識を喚起する、②総合図書館の施設を利用するための課題を解決するために、模擬体験と直接体験の繰り返しにより活動を構成し、自分の活動の意味をとらえられるようにする、③個に応じた「総合図書館ノート」を準備し、利用の仕方をまとめることができるようにする、④家庭との連携を行い、単元終了後も継続的に総合図書館の施設を利用できるようにする、などである。

目 標

- 福岡市総合図書館に行こうという目的意識をもって課題を解決し、図書の閲覧やビデオライブラリー、レストランの利用などを行い楽しむことができる。

計 画 (約12時間)

階	であう(3時間)	しらべる・おこなう(8時間)	いかす(1時間)
活動と内容	1. 総合図書館に行き、施設を見学、利用する。 ○ 総合図書館の施設を知ること ○ 活動への目的意識	2. 模擬の場で課題解決のための練習をして、繰り返し総合図書館を利用する。 (1) 閲覧や貸出カードの作り方を練習する。……① ○ 貸出カード作成の手続き ○ 図書の閲覧の仕方 (2) 実際に総合図書館に行って貸出カードを作り本を借りる。……② ○ 学習したことを直接体験に生かすこと	3. 総合図書館パンフレットをつくり、総合図書館に行く計画を立てる。 ○ 達成感・成就感 ○ 生活化
支援	○ 直接体験の場の設定 ・本の閲覧貸出 ・ビデオライブラリーの利用 ・レストランの利用 ・バスの利用	(3) ビデオライブラリーやレストラン利用の仕方を練習する。…(時間1/2)② ○ ビデオブース、レストラン利用の仕方 (4) 実際に総合図書館に行ってビデオを見たり飲み物を飲んだりする。…③ ○ 学習したことを直接体験に生かすこと ○ 模擬体験と直接体験の繰り返しの活動構成 ○ 個に応じた「総合図書館ノート」の準備 AG:写真カードに文字入り写真カードを対応付ける BG:写真カードに文カードを対応付ける CG:番号に従って写真カードと文カードを手順通りに対応付ける ○ 個に応じた動作援助、モデル演示、賞賛の声かけ	○ ビデオや写真による活動の振り返り ○ 家庭と連携 ○ 写真、絵、文でまとめるパンフレットの準備

本時の目標（※Gはグループを表す。）

- ビデオライブラリー利用への期待感をもって、ブースの申し込み方やビデオの選択などの手続きを中心とした利用の仕方を身につけるために、繰り返し模擬体験を行うことができる。

AG:教師の支援を受けてブースを利用する。 BG:「総合図書館ノート」を見てブースを利用する。 CG:自分で利用申込みやビデオの検索を行い、ブースを利用する。

準備 ビデオブース利用の模擬体験の場、総合図書館ノート

学習指導の過程

活動と内容	個の活動を促す支援												
1. 本時めあてについて話し合う。 (1) 総合図書館に行ったときのビデオを見る。 ○ 総合図書館へ行くことへの目的意識 (2) 申込書を書くための活動をする。 ○ 課題意識と課題解決への見通し ①ブース利用の申込書を書く→②ビデオを選ぶ→③選んだビデオの番号を入力する めあて ビデオを みる れんしゅうを しよう。	1. 総合図書館へ行く目的意識を喚起する支援 ○ ビデオライブラリー利用を体験したビデオの提示 ○ 課題を意識できるための活動の設定 ※ ビデオライブラリー利用の仕方を代表児にためさせ、できるようになりたいことを意識させる。 2. ビデオライブラリー利用の仕方を身につけさせる支援 ○ 個に応じた総合図書館ノート AG:課題の写真カードに文字入り写真カードを対応できるノート BG:課題の写真カードに文カードを対応させて構成できるノート CG:番号に従って写真カードと文カードを対応させて構成できるノート ○ 自分の好きなビデオを選んで見れる模擬体験の場												
(2) 模擬の場でビデオを見る練習をする。 ○ ビデオライブラリー利用の手続き <table border="1" style="width: 100%;"><thead><tr><th>AG</th><th>BG</th><th>CG</th></tr></thead><tbody><tr><td>・写真カードに文字入り写真カードを対応させること</td><td>・写真カードに文カードを対応させて構成すること</td><td>・写真カードと文カードを順番に対応させて構成すること</td></tr></tbody></table> (2) 模擬の場でビデオを見る練習をする。 ○ ビデオライブラリー利用の手続き <table border="1" style="width: 100%;"><thead><tr><th>AG</th><th>BG</th><th>CG</th></tr></thead><tbody><tr><td>・教師の支援を受けて申込書を書く、ビデオ番号の入力をする</td><td>・拡大登録番号を見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする</td><td>・貸出カードを見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする</td></tr></tbody></table> ※ 子供たちが繰り返し活動する中で、カウンターの場を中心に個への働きかけを行う。	AG	BG	CG	・写真カードに文字入り写真カードを対応させること	・写真カードに文カードを対応させて構成すること	・写真カードと文カードを順番に対応させて構成すること	AG	BG	CG	・教師の支援を受けて申込書を書く、ビデオ番号の入力をする	・拡大登録番号を見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする	・貸出カードを見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする	○ 個に応じた働きかけ AG:動作援助、モデル演示、賞賛の声かけ BG:利用の仕方を示す声かけ、賞賛の声かけ CG:賞賛の声かけ、行動の意味づけの声かけ 3. 達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 総合図書館ノートの発表による試行回数への賞賛 ○ レストラン利用の直接体験のビデオ提示
AG	BG	CG											
・写真カードに文字入り写真カードを対応させること	・写真カードに文カードを対応させて構成すること	・写真カードと文カードを順番に対応させて構成すること											
AG	BG	CG											
・教師の支援を受けて申込書を書く、ビデオ番号の入力をする	・拡大登録番号を見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする	・貸出カードを見て申込書を書く、ビデオ番号の入力をする											

第5・6学年梅組 国語科学習指導案

指導者 落 合 純 哉

題 材 ともだちに よんでかせよう ―「そらいろのたね」―

指 導 観

- 本学級の子供たちは、精神年齢2歳から5歳程度の子供たちで構成されている。これまでに関心のある絵本を読んだり、物語文をもとにした絵本づくりをしていくことを通して、文字・音声・意味を結びつけたり、文を構成したりしていくこと等、読むための基礎力のある程度身につけてきている。そのため、様々な絵本への関心が高まり、あらすじを意識しながら読もうとする姿も見られるようになっている。こうしたことから、読むための基礎力、文の関係や場面のつながりを理解する力が高まり、絵本を読むことの楽しさを味わっていく素地ができつつある。
- 本題材のねらいは、動作化や音声化をしながら場面の様子やあらすじをとらえ、好きな場面を選んだり、構成したりすることを通して、絵本を読むことの楽しさを味わっていくことである。具体的な学習内容は、①絵本を読んで出てくるものやあらすじ等、内容の大体を理解すること、②好きな場面を選び、自分なりの表現をしながら楽しんで読むこと、である。このことにより、読んだことをもとに自分なりに表現することへの興味・関心、文字力・語彙力・文法力などの読むことの基礎力、好きな絵本や場面を選ぶ、場面をとらえて表現につなぐ、相手に読み聞かせる、といった表現力が養われる。以上のことは、絵本を読むことの楽しさを感受したり、自分なりに表現したりする態度を引き出し、実生活において読むことの楽しさを広げていく上で意義深い。
- 本題材の支援は、①教師による内容にふさわしい調子での読み聞かせを通して、絵本の読み聞かせの楽しさを味わわせること、②個々の読解力に応じた絵本を提示し、好きな場面を選択できる場を設定すること、③場面の状況に即した体験の場での動作化や音声化を通して、場面のイメージをふくらませ、発声の仕方や、動作を工夫させること、④他の学級の友達に読み聞かせをする場を設定し、ことばによる人とのかかわりのひろがりを実感させること、である。

目 標

1. 絵本から好きな場面を選び、絵本を読むことの楽しさを味わうことができる。
2. 印象的な場面の様子やあらすじをとらえるとともに、発声の仕方や動作を工夫しながら絵本を読むことができる。

計 画 (約5時間)

時	みつける (1時間)	ふかめる (3時間)	ひろげる (1時間)
活 動 と 内 容	1. 教師の読み聞かせを聞き、場面を選んで読む。 ○ ファンタジックな内容の感受 ○ 読み聞かせの楽しさの感受 ○ 好きな場面の選択	2. 教師の読み聞かせを聞き、場面の様子やあらすじについて読み深め、個々の楽しみ方に応じた表現を繰り返す。 (1) 動物たちが集まってくる様子や家が大きくなっていく筋をとらえ表現する。② ○ 様々な場面についての内容の理解 (2) 動物たちが喜んでいる様子等を声の出方や動きを工夫して表現する。(構)① ○ 楽しみ方に応じた表現	3. 他の学級の友達に読み聞かせたり他の友達の読み聞かせを聞いたりする。 ○ 楽しみに応じた表現 ○ 達成感・成就感
支 援	○ 内容にふさわしい調子での範読 ○ 場面選択の場	○ 場面の状況に即した体験の場 ○ 個の楽しみ方に応じた絵本 ○ 繰り返し相手に読み聞かせをする場	○ 読み聞かせの場の設定 ○ 表現への賞賛

本時学習の目標

- 好きな場面を選んだり、筋にそって場면을構成したりした絵本を、発声の仕方や動作を工夫しながら楽しんで読むことができる。

Aグループ：印象的な絵を見て、好きな場面の絵本を選び、絵を見て楽しそうに発声する。

Bグループ：印象的な語句を見て、好きな場面の絵本を選び、印象的な語句に着目しながら音声化する。

Cグループ：筋にそって場면을構成し、場面に応じて抑揚をつけながら読んで聞かせる。

準備 個の読解力に応じた絵本、場面に即した体験ができる模擬物、絵本を楽しんで読む場
学習指導の過程

活動の姿と内容

1. 好きな場面についての読み聞かせをすることについて話し合う。

(1) 好きな絵本や場面を選び、教師の読み聞かせを聞く。

○ 読み聞かせの楽しさの感受

めあて

いちばん おもしろい おはなしを
ともだちに よんであげよう。

(2) 読み聞かせの仕方について聞く。

①体験の場で動作化や音声化をする。②表現を工夫しながら読み聞かせをする。③好きな場面を選んで、読み聞かせをする。

2. 場面の様子や筋について、とらえたことをもとに、好きな場面を楽しんで読む。

(1) 場面に即した体験の場で、動作化や音声化をしながら場面の様子や筋をとらえる。

○ 場面のつながり、文の関係の理解

Aグループ	Bグループ	Cグループ
教師や友達の動きやことばを模倣する。	援助を受けて動きやことばをとらえる。	自分なりに動きやことばをとらえる。

(2) 絵本を楽しんで読む場で、好きな場面を読む。

○ 楽しみ方に応じた表現

登場人物のペープサートを操作しながら発声する。	印象的な語句に着目し、声の抑揚をつけて音声化する。	場面に応じて声の大小や抑揚をつけて読み聞かせる。
※ (1)、(2) を繰り返させる。		

3. 好きな場面を選び、友達に読み聞かせる。

○ 読むことの楽しみ方の広がり

個の活動を促す支援

1. 読み聞かせへの意欲を引き出す支援

○ 絵本や場面を選択させる場

○ 教師による内容にふさわしい調子での読み聞かせ

○ 読み聞かせの仕方についてのモデル演示

2. 筋の流れ、場面の状況を読みとらせる支援

○ 場面の状況に即した体験の場

Aグループ：場面のイメージをとらえる模擬物

Bグループ：場面のイメージと表現を結びつける語句の提示

Cグループ：筋をとらえさせる模擬物の配置

○ 個の表現の仕方に応じた絵本

Aグループ：人物等をペープサートで操作できる絵本

Bグループ：印象的な語句に着目できる絵本

Cグループ：各場面により、筋を構成できる絵本

3. 達成感・成就感を味わわせる支援

○ 友達に読み聞かせる場の設定

全 体 会（2日目）

○ あいさつ

初等教育研究部委員長 相 部 保 美
学校長 高 橋 義 夫

◇ 主題発表

「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」

—子供主体の活動からみる教育課程の編成—

研究主任 重 松 宏 明

◇ 教科等発表

● 領域「人間」

「ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する『人間』学習」

「人間」部 植 松 伸 之

● 表 現 科

「豊かな感性と創造性の基礎を培う表現科学習」

表現科部 樺 島 穰

◇ 教科等発表

● 生活環境科

「身近な環境とのよりよい関係をつくる生活環境科学習」

生活環境科部 今 林 康 治

第2日目 午後の部
公開授業指導案

第1学年1組 表現科学習指導案

指導者 津 本 修 一

題 材 どうぶつのもりの一日

指 導 観

- 本学級の子供たちは、これまでに、経験したことや感じたことを簡単な言葉で表したり、童謡を歌ったりリズム楽器を演奏したりしてきている。また、自分や友達の顔を絵に描いたり、粘土で好きな動物をつくったりするなどの造形活動や、月見学芸会で、おたまじゃくしやかえるになりきって音楽に合わせて身体表現を工夫するなどの様々な表現活動を経験してきている。これらの活動を通して、子供たちは、表現活動そのものの楽しさや自分の思いを表現できた成就感、満足感を味わってきている。また、子どもたちは、入学以来、休み時間など飼育小屋の鶏を観察したり、うさぎに草をとって食べさせるなどの姿がみられ、動物に対する興味・関心は高いようである。
- 本題材は、自分のなりたい動物になりきり、情景音楽や挿入歌（教師自作）に合わせて、楽しく身体表現することをねらいとしている。具体的な活動内容としては、①なりたい動物のお面や衣装などをつくること、②好きな動物になりきって声や身体で表現すること、③情景音楽のリズムや旋律の特徴を感じ取って動きや踊りなどを工夫して表現すること、④友達のつくった衣装や身体表現をいっしょに楽しむことなどである。このことは、子供の感性を豊かに刺激し、働かせることができること、また、感じたり想像したりしたことを多様に表現することができるなど、子供が楽しく自己表現していく上で大きな価値があると考えられる。
- 本題材の指導にあたっては、感じる段階では、動物の森のお話や「どうぶつのもりの歌」に出会い、動物や森での動物の様子を思い思いに想像させたい。ここでは、動物の図鑑や写真、映像などの視聴覚的資料も活用しながら、その姿や動きなどの特徴に関心をもたせるようにする。表す段階Ⅰでは、選択した動物になりきるために、色画用紙、布、毛糸、カラーポリ袋などの造形材料を提供したり、必要な材料を収集させたりして、お面や衣装などの飾りをつくって表現させていく。表す段階Ⅱでは、動物の森の場やお話にそって提示される情景音楽や挿入歌（教師自作）に出会い、それぞれが選択した動物になりきって身体表現できるようにする。情景音楽については、ストーリーの情景を描写的、あるいは象徴的に構成し提示するようにする。味わう段階では、「動物の森の一日」というタイトルでつくってきた表現の発表会を行い、表現活動の達成感、成就感を味わわせるようにする。

目 標

- 動物の森のストーリーや場および情景音楽から感じ取ったことをもとに、動物になりきって楽しく表現することができる。

計 画（約6時間）

	感じる（1時間）	表すⅠ（2時間）	表すⅡ（2時間）	味わう（1時間）
活動と内容	1. 動物の森のお話や「どうぶつのもりの歌」に出会い、動物の様子を楽しく想像する。 ○ 「どうぶつのもりの歌」の歌唱 ○ 動物の様子を絵や言葉で表すこと	2. 選択した動物の飾りなどの造形物をつくって表現する。 ○ 選択した動物の形態などを調べること ○ 動物の衣装やお面などをつくること	3. 動物の森の情景音楽に合わせて楽しく動物になりきって表現する。（本時2/2） ○ 森の情景音楽の鑑賞と様子の想像 ○ 森の情景音楽に合わせた身体表現を工夫すること	4. 「動物の森の一日」と題して、発表会を行う。 ○ 動物の森のストーリーと情景音楽の総合的表現
手だて	○ 動物の森のストーリーと歌唱曲「どうぶつのもりの歌」の提示	○ 動物図鑑・写真などの提供 ○ 衣装づくり計画カードの提供 ○ 造形材料の提供と個人的な技能支援	○ 動物の森の場の設定 ○ 動物の森の情景音楽と作曲した挿入歌の場面に応じた提示	○ 発表会の場の設定 ○ グループ毎の相互鑑賞の促し ○ 感想カードの交流の促し

本時の目標

- 動物の森の情景音楽に合わせて動きを工夫し、動物の森の様子を体全体で楽しく表現することができる。

準備 「どうぶつのもりの歌」拡大歌詞、シンセサイザー、動物の森のイメージ画、動物の森の情景音楽のイメージカード、動物の森の場のセット

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時学習を想起し、本時のめあてを話し合う。 (1) 自分の選択した動物の衣装やお面を発表する。 ○ 動物の衣装をつくって表現したこと (2) 情景音楽を聴き、本時表現活動について話し合う。 ○ 情景音楽 A — D の鑑賞と情景を想像すること ・ 情景音楽 A — 朝の散歩の音楽 ・ 情景音楽 B — 動物のかくれんぼの音楽 ・ 情景音楽 C — 動物のおどりの音楽 ・ 情景音楽 D — 夜の眠りの音楽 ※ 情景音楽一つ一つについて、動物の森のお話などや音楽から感じたこと、想像したことを発表させる。 めあて どうぶつさんになって、どうぶつのもりのいちにちのようすをたのしくあらわそう。 2. 情景音楽を入れて森の動物たちの様子を身体表現する。 (1) 情景音楽 A — D に合わせて感じたことを自由に身体表現する。 ○ 情景音楽に応じた身体表現を工夫すること ・ 情景音楽 A — 朝の散歩の表現 ・ 情景音楽 B — 動物がかくれんぼをする様子 ・ 情景音楽 C — 動物がおどる様子 ・ 情景音楽 D — 動物が眠っていく様子	○ ぼくは、かめさんになって、こうらの衣装をつくったよ。 ○ 動物の森の音楽 A は、動物が楽しそうにあるいている感じがするね。 ○ 動物の森の音楽 D は、だんだんおそくなって、ねむってしまうような感じがするよ。 ○ 動物の森の音楽が入ると森の様子がよくわかるな。 ○ うさぎがぴよんぴよん楽しそうにはねて散歩する様子を表したいな。 ○ おさるさんが木のかげにかくれる様子をまねしてみたいな。 ○ A さんの森の音楽の踊りは、音楽に合わせて鳥が楽しく羽を動かしている感じがよくでていたね。 ○ こんどは、動物の森の一日の様子をつづけて表してみたいな。 ○ 動物の森の音楽が入ったので、動物の様子を楽しく表すことができて楽しかった。
(2) 情景音楽 A — D の表現の交流をする。 【場 の 構 成 図】 ○ 身体表現の発表と工夫点について話し合うこと ※ 情景音楽ごとに工夫した動きについて発表させ、友達の表現のよさに気づかせるとともに、自分の表現の参考にさせることによって、表現意欲を高める。 (3) 動物の森のお話の流れにそって、「どうぶつのもりの歌」を入れながら、情景音楽 A — D を通して表現する。 ○ 動物の森のお話の流れにそった総合的な表現 ※ 動物の森のお話のストーリーをナレーション役の子供に話らせながら、表現をつないでいくようにする。 3. 本時の表現活動について振り返り、本時のまとめをする。 ○ 本時表現活動の感想を発表すること	

第2学年1組 生活科学学習指導案

指導者 石 田 耕 一

単 元 あらつの町をたんけんしよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、未知のものに対する興味・関心が旺盛で、探検活動などを好む傾向がある。1年生の生活科においては学校探検や西公園探検などの探検活動を経験している。また、1年間の通学経験の中で、附属小学校から自分が利用する最寄りのバス停や駅までの範囲のもの・人・ことに目が向けられるようになってきた。しかし、様々な地域から通学する子供たちは、学校の周りの地域との触れ合いは少なく、地域とのかかわりで自分たちの生活をとらえることはできていない。
- 本単元は、荒津こだわり探検や「荒津こだわり館」づくりを通して、荒津の町における愛着の場づくりを行い、身近な地域へのかかわりを広げ深めていく導入単位として年間計画に位置づいている。具体的には、①荒津めぐりからの思いをもち、探検活動を繰り返し行うこと、②探検活動におけるものや人とのかかわりを「荒津こだわり館」に表現すること、③こだわりの場・人への親しみや気づきをふくらませながら、継続的なこだわりマップづくりを行うことを内容とする。これらのことは、身近な地域とのかかわりづくりの中で自分たちの生活を見直し、より充実した生活を送ろうとする態度を育てる上から価値がある。
- 本単元の指導にあたっては、探検活動におけるこだわりの場や人への愛着を深めていくことにより、身近な地域へのかかわりを始めていくことができるように次のような支援を行う。①荒津マップによる身近な地域の意識化や楽しく対象と触れ合うことのできる「荒津めぐり」の設定、及び荒津めぐりにおける子供の観点の明確化、②地域の人とのかかわりにおいて思いの実現をめざす探検活動の設定（例、ぼくらはちびっこ店員さん）、③お互いの表現活動のよさに気づき、さらなる探検活動への意欲を高める「荒津こだわり館」の製作及び表現活動の設定、④「荒津こだわりマップ」をさらにふくらませていく活動の促し。

目 標

1. 荒津めぐりにおける自分の思いをもとに、こだわりの場所への働きかけを繰り返し、その場所やそこにかかわる人への親しみを深めていくことができる。
2. 荒津こだわり探検における気づきを「ぼくらの荒津こだわり館」に表現することを通して、身近な地域とのかかわりづくりへの意欲をもつことができる。

計 画（約11時間）

段階	であう（4時間）	ふれあう（4時間）	ふかめる（3時間）
活動と内容	1. 荒津めぐりをする。 4 (1) 荒津めぐりの観点について話し合う。 ① ○ 荒津の町マップ*を通した「あらつの町」の把握 ○ 荒津の町への興味・関心、荒津めぐりへの意欲化 (2) 荒津めぐりをする。 ③ ○ 荒津めぐりの楽しさ、友達との協同活動 ○ 自分の思いの実現に向けての意欲	2. 荒津こだわり探検をする。 4 (1) 荒津めぐりでの思いや気づきにいて話し合う。 ① ○ 自分なりの問題発見とさらなる追究への意欲化 (2) 荒津こだわり探検をする。 ③ ○ こだわり探検を通した自分なりの思いの解決 ○ こだわりの場所やそこにかかわる人・ものへの親しみや気づきの深まり	3. 「ぼくらの荒津こだわり館」を開く。 3 (1) 荒津こだわり探検を表現し、「ぼくらの荒津こだわり館」を作る。 ② ○ こだわりの場への親しみや気づき (2) 「ぼくらの荒津こだわり館」を開く。 ① ○ 思いの解決における喜びや自信（本時3/3） ○ さらなる探検への意欲
支援	○ 荒津の町を意識させるマップ*の提示 ○ 子供たちの思いに沿った自由な探検活動の設定 ○ 荒津めぐりにおける地域の方への協力依頼 ○ 荒津めぐりにおける安全確保のサポート依頼	○ 子供のこだわりに応じた活動グループ*づくり ○ こだわりの場や人への協力依頼（こだわりの場でお店やさんになって追究する活動設定など） ○ 探検活動における安全確保	○ こだわりの場をマップ*や具体物や写真、VTRで再現する場の設定 ○ 子供たちがかわった地域の人との交流の場の設定 ○ 継続的な探検活動の保障と活動の促し

本時の目標

1. 「荒津こだわり館」開きを通して、こだわりの場や人とのかかわりを深めてきたことを 実感し、荒津の町への親しみをもつことができる。
2. 他のグループのこだわりのよさに気づき、新たな思いの実現への意欲をもつことができる。

準備 ぼくのわたしの荒津こだわり館、荒津こだわりマップ、こだわり探検カード、子供たちがかかわった地域の方への協力依頼

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確かめる。 (1) 前時までの学習を想起し、本時への思いを発表する。 ○ 活動の様子や思いの想起と本時目標の明確化 ・自分たちのこだわりの場所における気づき、問題解決の自信 ○ 本時学習への意欲や具体的な活動の見通し (2) 本時学習のめあてをつかむ。 めあて 「あらっこだわりかん」をひらいて、みんなにしょうかいしよう。	○ ぼくたちは、井手文具店のことを詳しく調べたよ。学校の売店のこともよく分かったよ。ぜひ、見に来てね。 ○ 他のグループは、どんなことを調べたのかな。楽しみだね。
2. 「荒津こだわり館」を開いて友達に紹介する。 ○ こだわりの場所や人とのかかわり、場や人への親しみや気づきの深まり ○ 他のグループのこだわりに対する興味・関心 ○ かかわりや気づきのよさの認め合い ○ かかわった地域の方々との交流 ※ 子供たちがかかわった地域の方への協力依頼 ※ 自分たちのこだわりの場所を紹介したり他のグループのこだわりのよさを感じ取ったりすることができるように、こだわりグループを紹介グループと探検グループに分け、こだわり館めぐりの活動を仕組む ○ 荒津の町に対する新たな発見や追究への意欲化 ※ こだわり館めぐりを終えたグループから、随時「こだわり探検カード」に気づきを表現させ、こだわりマップに掲示させていく。	(ぼくらの荒津こだわり館) 荒津こだわりマップの掲示 こ だ わ り の 場 こ ー ナ ー ○荒津やさしさコーナー 病院の先生、 地下鉄の駅員さん、 打動機園のお友達や先生 地域のお年寄りなど 人とのかかわりを紹介 ○建物調べ コーナー 屋根の色の違い などの紹介やク イズ ○おもしろ遊びコーナー 博多おはじきの製作や遊 びコーナー 「つづくりおもちゃコー ナー（オレンジ村さん）」 ○ちびっこ店員コーナー 自分の好きななってみた い店での弟子入り体験紹 介や実演 ・唐人町商店街や西公園 商店街など ○木や花の コーナー 町で見つけたい ろいろな花や木 の紹介クイズ 草花の飾り物 ○ 僕は、博多おは じきを作ったよ。 世界に一つしか ないおはじきだよ。 ○ みんなとても面白いことを調べていたね。すごいなあ。 ○ 荒津の町のことがいろいろ分かってきたよ。 ○ 商店街のおじさんから、よく調べたねってほめられたよ。 ○ 今度は（もっと）～を調べたいなあ。～に行ってみたいな。
3. 「ぼくらの荒津こだわり館」めぐりについて発表し話し合う。 ○ 荒津の町への親しみの深まり、自分の愛着の場の形成 ○ 他のグループの探検活動のよさへの気づき ○ これからの探検活動に対する意欲や具体的な思いをもつこと ※ 子供たちがかかわった地域の方との交流の場を設定する。 ○ 子供たちの活動への賞賛、未知なるものの紹介 ※ 荒津こだわり探検の楽しさや新たな気づきを認め価値づける。 ※ 次にしてみたい探検について発表させ、次時への意欲を高める。	

第3学年1組 「人間」学習指導案

サライ

サライ

指導者 中原 浩

題 材 301号復元 伊崎浜に浮かべよう (仲間 年間大主題「301の国づくり」の6月題材)

指 導 観

サライ

サライ

- 本学級の子供たちは、「ぼくらの301の国づくり」の活動を通して、自分が301の国(学級)をつくっていく大切な一人であり、また一人一人が学級の仲間であるという意識が芽生えてきている。また、今まで知らなかった友達と話したり誘い合って活動したりする姿も見られ、進んで楽しい学級を作っていこうとする意欲が育ちつつある。そこで、一人一人の思いや考えを生かしながら協同で行う創造的・製作的な活動に取り組み、友達とともに活動する楽しさを味わわせ、自己存在感や学級の凝集性を高めていきたい。
- 本題材は、年間大主題である「サライの国づくり」の6月題材であり『ものづくり』の活動にあたる。「サライの国」は3の1の子供たち41人がつくる共和国である。今までに「憲章づくり」、「各省づくり」、「テーマソングづくり」などの活動に取り組んできた。そしてこの『ものづくり』の活動は、友達とともに活動することの喜びを味わわせることをねらいとしている。具体的には、サライ号作りと進水式の活動を通して、①友達の思いや願いを感じ取る豊かな感性、②すばらしき「サライの国」に向かうための具体的な活動を考える創造力と判断力、③友達と交流、対話しながら協力して活動を推し進めることができる対人関係能力と実践力を培うことができる。
- 本題材の指導にあたっては、「サライ号」作りの活動に自主的、協同的に取り組みながら、その喜びを味わわせ学級の和を強めていきたい。そのために次のような支援を行う。①伊崎浜における漂着したサライ号の材料との出会い。②活動への期待を高め、夢を膨らませる復元図や航海図の提示。③日記や活動時における協同する姿や喜びの取り出しと賞賛。④協同で作り出す喜びを味わわせる時間や場と感動の共有を図る進水式の設定。

目 標

- 「サライ号」作りを通して、仲間と協力して作り上げる喜びと感動を味わい、友達とのつながりや学級のまとまりを強めることができる。

計 画 (約5時間)

階	感じる・考える (1時間)	行 う (3時間)	見つめる (1時間)
活 動 と 内 容	1. 伊崎浜で見つけた漂着物について話し合う。 ○ 活動への意欲の高揚 2. サライ号復元への計画を話し合う。 ○ 活動目標の明確化と計画の具体化 ぼくらの力でサライ号を復元して、伊崎の浜で進水式を行おう。	3. 協同でサライ号作りに取り組む。 (1) サライ号を作る。 ② 復元 (製作活動) ↓↑ 創造 (製作活動) ↓↑ 進水式計画 (話し合い活動) ○ 友達との協同活動の実践と自他のよさへの気づき ※ 制作活動は、朝の活動や昼休みなどの時間も使って行う。 (2) サライ号をプールに浮かべ、今後の計画を話し合う。 (本時)①	4. 伊崎浜で進水式を行う。 (1) 進水式を行う。 (2) サライ号作りを振り返り、今後のサライの国づくりについて考える。 ○ 有用感、充足感の感得 ○ 今後の活動への意欲の高揚
手 だ て	○ 伊崎浜における漂着物(サライ号の材料)の準備 ○ 復元図や航海図	○ 思いの具現化に向けた材料や用具の準備・援助 ○ 具体的実践活動の場と時間の設定 ○ 協同的活動の行為や思いの取り出しと賞賛	○ 活動時の感動やよさが見てとれる写真やビデオの提示 ○ 活動を広げる促しのノート

本時の目標

○ サライ号をプールに浮かべ、完成をみんなで喜び合う進水式の計画を立てることができる。

準 備 サライ号 進水式の計画案 活動の流れ図 水着 テレビ ビデオ(伊崎浜)

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子 供 の 思 考 の 流 れ
1. サライ号への思いと本時活動のめあてについて話し合う。 ○ できあがりつつあるサライ号への期待感の高まりと本時活動の見通しの把握 ※ 今までの活動を振り返る流れ図やペットボトルに詰めた自分の文をもとに思いを発表させる。 めあて サライ号をプールに浮かべて、伊崎浜での進水式をもっともりあげるアイデアを出し合おう。 2. サライ号を浮かべる試しの活動を行い、進水式の計画について話し合う。 (1) サライ号を協力してプールに浮かべる。 ○ 自分たちが作ってきたサライ号が浮かぶかどうかという不安と期待の高まり ※ 安全性に配慮して、教師は補助する。 ○ 感動をもとにした次の活動への実践意欲の高まり ※ 全員が乗って感動を共有し、さらに工夫することや進水式を成功させるための具体的計画へとつないでいく。 (2) 進水式をさらにもりあげる計画を話し合う。 ○ 計画の具体化、分担・協力をめざした話し合い活動 【予想される話し合いの話題例】 〔進水式のプログラムと分担について〕 ① はじめのことば……………イベント係 ② サライの国の歌……………歌声係 ③ 進水式……………みんなで ④ ちかいのことば……………みんなで ⑤ 先生のお話……………先生から ⑥ おわりのことば……………イベント係 ・ちかいの言葉は、どうするか、どんな言葉にするか？ 〔サライ号をさらにぼくたちの船にする工夫について〕 ・船の旗を作ったらいいのではないかな。 〔サライ号の航海や目的地について〕 ・船の目的地、航海先を決めよう。 ※ 進水式係からの提案は事前にプリントで配布し、自分の考えをまとめておく。試しの活動を通して思いをふくらませ、目的性、現実性の面から話し合わせていく。 3. 進水式までの取り組みや進水式への思いを発表する。 ○ 進水式への意欲の高揚と具体的準備への見通しの把握 ※ 伊崎浜の様子を紹介し、期待感を高める。	○ みんなで作ってきたこのサライ号が本当に浮かぶだろうか。どれくらいの人数が乗ることができるだろう。 ○ けっこう重くなったから、もしかしたらしずんでしまうかもしれないな。 ○ 絶対に浮かんでほしいな。そして、伊崎浜で進水式を行うんだ。 ○ やった。浮いたぞ。大成功だ。ぼくたちが作ってきたサライ号が浮かんでいる。 ○ みんなが協力して作ったから浮かぶことができたんだ。 ○ 完成した喜びがあふれる進水式、みんなの心が一つになる進水式にしよう。 ○ 誓いのことばは、一人一人がペットボトルに入れたらいいのではないかな。 ○ やっぱりみんなで言う言葉を考えたほうがいいよ。そしてそれをサライ憲章に加えたら、いいんじゃないかな。 ○ 伊崎浜の島を目的地にして航海したい。そして島を探検して、ぼくたちサライ共和国の基地にしたらおもしろそうだ。 【評価の観点】 ・活動に集中し、その活動から、見直したり話し合わなければならないことなどを明らかにすることができたか。 ・友達のよさに気づいたりみんなで行動することの楽しさを味わったりすることができたか。 ・進水式の期待が高まっているか。

第3学年2組 国語科学習指導案

指導者 末次幸一

単 元 虫の研究百科をつくろう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、特に小動物への興味が高く、常に新しい知識を求めようとしている。日常の読書生活においても、物語と共に科学的な読み物も好んで読んでいる。また、読みの学習では、事柄や場面の順序を考えたり人物の気持ちを想像しふき出しに表したりする活動を行ってきている。そこで、これらの実態をもとに、読書の範囲を広げたり、叙述に即して正確に読み取ったりしながら、個性的な自分の読みを創り出す活動を経験させたい。
- 本単元は、虫の研究百科をつくる活動目的をもち、教材文から他の昆虫記へと読みを広げながら、研究者の思いや考えを追求していくことをねらいとしている。具体的には、①虫の不思議を解き明かした研究を調べ再構成する活動目的をもつこと、②中心教材や他の昆虫記から必要なことばを取り出し自分の想像したことを付加すること、③自分の読み方を交流し、文脈のつながりを考えながらその読みを深め確かにするを内容としている。これは、子供たちが必要感をもって創造的に言語活動に取り組み、そのなかで個性的に理解する力を身につけ高めていく価値ある内容である。
- 本単元の指導にあたっては、子供たちが意欲的に読み広げ、必要なことばを取り出しながら、自分の読みを創り上げ表現していく学習を展開したい。そこで目的の設定段階では、虫の不思議クイズを行い、それを解き明かした研究と研究者の見方・考え方の素晴らしさに気づかせ、それを追求する活動目的を設定する。情報の収集段階では、ふき出しを導入し、中心教材「ありの行列」をもとに、叙述と文脈に即しながら、2つの実験をもとに観察・研究するウィルソンの思いと考えを想像する読み方ができるようにする。情報の整理段階では、第3学年の子供の実態に応じた昆虫記を選択できる場を設定し、自分の読み方・表し方を生かして研究百科をつくれるようにする。

目 標

1. 虫の研究百科をつくる活動目的をもって、「ありの行列」から他の昆虫記へと読みを広げ、虫を研究した人々の思いや考えを叙述と文脈に即して想像し、書きまとめることができる。
2. 相手の話を受けたり違いを考えたりしながら話し合い、読みを深め確かにすることができる。

計 画 (約14時間)

階	目的の設定(1時間)	情報の収集(6時間)	情報の整理(7時間)
活動と内容	1. 虫の不思議についてのクイズを出し合い、それを解き明かした研究について話し合う。 ○ 活動目的の把握(活動目的) 虫のふしぎの研究を読み深め、研究百科をつくろう。	2. 「ありの行列」から、ウィルソンの思いや考えを読み深める。 (1) 2つの実験をもとに観察・研究をするウィルソンの思いや考えを読み調べる。(時3/4) ④ ○ 叙述に即した読み ○ 説明された事柄の想像 (2) ウィルソンの研究について書きまとめ百科にする。 ② ○ 感想を付加した読みまとめ	3. 他の昆虫記から、研究者の思いや考えを読み深め、みんなで虫の研究百科をつくる。 (1) 自分が読み深めたい昆虫記を選び、読み深める。③ ○ 他の文献への読み広げ (2) 読み深めたことを絵図を加えながら工夫して書きまとめ研究百科をつくる。④ ○ 読み方のよさの交流
手だて	○ クイズによる、研究の価値への気づき ○ ありの行列の提示	○ ふき出しを活用した読み深め ○ 操作性のある読み取りノート ○ 文脈を意識した読みの交流	○ 昆虫記を選択することができる情報コーナーの設置 ○ 個に応じた支援

本時の目標

- 大きな石をおく実験とありの様子を叙述に即して読み取りながら、観察するウィルソンの思いを前後の段落とのつながりの中で想像し、ふき出しにまとめることができる。

準 備 学習の流れ図、操作性のある読み取りノート・ふき出し

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. はじめの観察でのウィルソンの思いを振り返り、大きな石をおいてさえぎる理由について予想し合う。 ○ 前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・ウィルソンのしたことに着目して思いを考える。 ・ありの行列ができる様子に着目して思いを考える。 めあて 大きな石をおいてありの様子をかんさつするウィルソンの思いを考えよう。	○ はじめのありの通った道すじ通りにありの行列ができるのはどうしてだろう。 観察しているウィルソンの思いをふき出しに書きまとめる。
2. 大きな石をおく実験でのウィルソンの思いを考える。 (1) ありの行列ができる様子を叙述に即して読み取りながら、ウィルソンの思いをふき出しに書きまとめる。 ○ 叙述に即して内容を正しく読み取ること ○ 説明されている事柄について豊かに想像すること ※ 時間を表すことばをもとに、ありの行列ができる過程をとらえさせ、ウィルソンの思いを考える箇所についての見通しをもたせる。 ※ 操作性のある読み取りノートを活用させる。 大きな石をおいて、～さえぎってみました。----- (すると) <u>みだれて、ちりちりに、</u>----- (ようやく) <u>一びき～道のつづきを</u>----- (そして) <u>さとうに～進んで</u>----- (そのうちに) <u>ほかのありたちも</u>-----→ (まただんだんに) <u>ありの行列ができて～</u>-----→ (帰るときも) <u>道すじはかわりません</u>-----→ (2) 自分の読み取り方と書きまとめたふき出しをもとに観察をするウィルソンの思いを話し合う。 ○ 相手の話の内容を受けながら話し合うこと ○ 叙述に即して、ふき出しの内容を検討すること ※ ふき出しに書きまとめたウィルソンの思いの違いに気づかせるとともに、道しるべになるものをつけたのではないかと考えたことへのつながりを考えさせる。	予想されるふき出し →○ 行列をさえぎったらありはどうするんだろう。行列はまたできるんだろうか。 →○ 思った通り、ありたちは困っているぞ。さあどうするんだろうか。新しく道すじをつくるのかな。 →○ おや、一びきだけは道のつづきを見つけたぞ。ほかのありたちはどうするのかな。 ○ ほかのありたちも同じ道すじをみつけたぞ。なぜだろう。 → 目が見えないのにどうやって見つけているんだろう。 →○ 目が見えないありにわかる目印みたいなものがあるのかな。ありがつけたのかな。 ○ 友達はどうなふき出しを書いているのかな。どんなことばから考えているのかな。 ○ いつ道しるべのことに気がついたんだろう。 ○ はじめの観察での思いとどんなつながりがあるのかな。 ○ 自分の気づかなかったふき出しを読み取りノートに書き加えよう。道しるべに気づいたふき出しを付け加えよう。
3. 5段落の考えにつながるように、ウィルソンのふき出しの見直しをする。 ○ 文脈（3～5段落）の中で、自分が読み取ったこと、想像したことを確かめ、付加修正すること ※ 友達のよい考えを取り入れることや、はじめの観察で読み取った思いと比べることを示唆する。	

第4学年1組 算数科学習指導案

指導者 小 森 晃

題 材 がい数で表そう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、単位より小さい端数を切り上げたり切り捨てたりして数を丸めて計器の目盛りを読む経験を十分にしている。また、数量を10～100～1000～にまとめる過程で、端数を必要に応じて「〇〇と少し」「大体〇〇ぐらい」と丸める経験もしている。本題材では、このような端数を丸める活動体験を生かして買い物、グラフづくり、量の測定などの場面に広げながら端数を処理する活動体験をいっそう豊かにしていきたい。
- 本題材は端数を処理する方法を工夫して数量の大きさを手際よく表現したり、計算の結果を見積る活動体験を豊かにして、概数による数処理のよさを味わうことをねらいとしている。具体的には次のような内容がある。①品物の値段や長さ、かさの端数を切り捨て、切り上げ、四捨五入する処理の方法をつくりだす。②大きな数量をグラフ用紙に収まるように端数を丸めてグラフに表す。③測定しにくい小さな値を丸めて計器の目盛りをよみ表現する。④端数を丸めて旅行の費用の和や差を見積る。このことで概数を生活に生かすよさを味わうことができる。
- 本題材の指導にあたっては、品物の金額について目的に応じた端数の処理の方法を探り、その方法を使って身近な福岡市の人口など大きな数量を丸めてグラフに表現する、身近な小さな数量を丸めて計器の目盛りをよんで測定する、旅行の運賃を丸めて和や差を見積り費用を計算するといった活動を十分に行えるようにしたい。そのために第1次では、品物の値段を比べたり買い物をするために素早く金額の端数を切り捨てたり、切り上げて調べる活動を行う。第2次では、重さやかさの端数を四捨五入して測定したり、グラフ化したりする活動、福岡市の人口などをグラフ用紙に入るように端数を丸めて表現する活動を行う。さらに第3次では旅行計画づくりでいろいろな行き先までの運賃を十万の位や百万の位などで丸めて和や差を見積り、費用を計算する活動を行う。

目 標

1. 端数を切り上げたり、切り捨てたり、四捨五入したりする処理の方法をつくったり、その方法を使う範囲を広げることができる。
2. 概数を使って数の大きさを手際よく表現したり、計算の結果を見積ることができる。
3. 概数による数処理を生活に生かすよさを味わうことができる。

計 画 (約8時間)

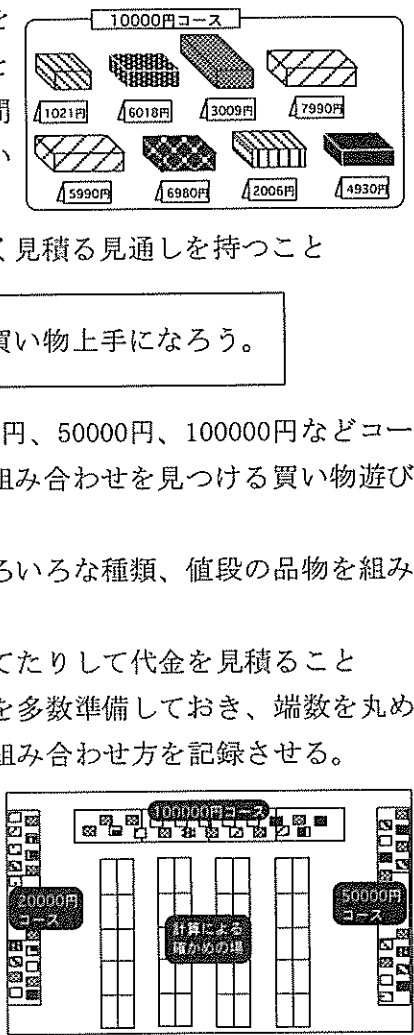
段階	第1次 数えて端数を処理する体験(2時間)	第2次 概数で測定や表現をする体験(4時間)	第3次 概数にして計算する体験(2時間)
活動と内容	1. 品物の金額を素早く数えて値段調べをする。 ① ○ 100000円までの数量の端数を切り捨てること 2. 予算にあった買い物遊びをする。 (本時)① ○ 100000円の端数を切り上げ、切り捨てること	3. 重さやかさの大きさを端数を丸めて測定する。 ② ○ 少ない量を四捨五入して目盛りをよむこと 4. 身近な数量の大きさを端数を丸めてグラフ化する。 ② ○ グラフの目盛りに満たない数量を数えて丸めること	5. 数量を丸めて概数にする方法を使って計算し、旅行の費用を計算する。 ○ 決められた金額の範囲で行ける場所を調べるために運賃の和や差を見積ること
手だて	○ 1～100000円までの値段を素早く比べる活動の設定 ○ 予算で買える品物を素早く選ぶ活動の設定	○ 小さな長さ、かさ、重さを測定して表す活動の設定 ○ 大きな数量をグラフ化する活動の設定	○ 鉄道やバス、飛行機の路線の地図を使って行き先を選んで旅費を計算する活動の設定

本時の目標

1. 品物の値段を素早く丸めながら購入計画を立てる買い物遊びを楽しく続けることができる。
2. 1～100000までの数を百の位や一万の位に目をつけて、切り上げたり切り捨てたりしながら予算に見合った買い物の計画を立てることができる。

準備 いろいろな金額の表示のついた品物の箱や模型、記録するノート

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 10000円以内で素早く品物を買う試しの活動を行い、切り捨てや切り上げで値段を丸める買い物遊びのめあてを話し合う。 (1) 品物の値段から何千円以下を切り捨てたり切り上げたりして丸めながら10000円で素早く買う試しの活動を行う。 ○ 既習の経験を生かした値段を素早く丸めるよさを味わうこと (2) 予算をオーバーしたり、時間が足りなくなったりしない買い物の仕方を話し合う。 ○ 端数を短い時間内で無駄なく見積る見通しを持つこと めあて 数のまるめ方を工夫して買い物上手になろう。 2. 素早く値段を丸めながら20000円、50000円、100000円などコースごとの予算内で買える品物の組み合わせを見つける買い物遊びをする。 (1) 予算のコースを決めて、いろいろな種類、値段の品物を組み合わせる買い物遊びをする。 ○ 端数を切り上げたり切り捨てたりして代金を見積ること ※ 予算のコースに応じて品物を多数準備しておき、端数を丸めながらできるだけたくさんの組み合わせ方を記録させる。 (例) 33000円→30000円 21000円→20000円 購入不可能→値段を見積る方法の見直し 「多めに見積ればいい。」 28000円→30000円 19500円→20000円…購入可能  (2) 選んだ品物の代金が予算を超えていないかを調べる。 ○ 計画が予算に応じているかどうかの確かめをすること ※ 選んだ品物の正確な値段を計算し、自己評価させながら、予算いっぱいの上質な買い物の仕方を話し合わせる。 (例) 50000円コース→48900円余り1100円 42000円余り8000円 3. 概算の仕方を発表し、本時学習をまとめる。 ○ 端数の大きさと全体の数量によって切り上げたり、切り捨てたりと数量を丸める方法を使い分けること	○ 急いで決めないと行けないから早く選ぼう。 ○ 一つ一つ計算していると時間がないから、昨日みたいに切り捨てて値段を見ていこう。 ○ 切り捨てると予算をオーバーしてしまうぞ。 ○ 切り捨てるだけだとオーバーするから値段を多めに見ることもいいんだ。 ○ 宝石のような高いものもあるよ。どのコースから買い物しよう。 ○ 値段をなるべく多めに見て考えていこう。 ○ 予算まででオーバーせずに買えたぞ。 ○ 何万円で計算すると予算が余ったな。 ○ おつりが少ない方が買い物上手だね。 ○ 2000円とか3000円ぐらいの値段を10000円にすると予算が余りすぎる。 ○ 少ない数は切り捨ててもいいけど数が大きくなると切り上げて丸めた方がいいね。 ○ 切り上げも切り捨ても同じ位でやらないと計算しにくくて駄目だね。

第4学年2組 生活環境科学習指導案

指導者 山下 浩 徳

単 元 生活の中の電気

指 導 観

- 本学級の子供たちは、日常生活の中で電池を使ったり電化製品を使ったりしてさまざまな電気の働きにかかわる事象を体験している。その中で「電池を使ってミニ四駆をもっと速く走らせられないか。」「蛍光灯から離れたスイッチを切るとどうして蛍光灯の明かりが消えるのか。」「家の電気はどこから送られてきているのか。」などの素朴な疑問をもっている。そこで、家庭における電気の働きや消費、家に送られる電気の仕組みなどを調べさせたりして、身近な生活を支える電気についての見方や考え方を深めさせたい。
- 本単元のねらいは、家庭の電気を私たちが光や熱、動力として積極的に利用している様子を調べ、電気の性質を理解するとともに電気の消費に目を向けてこれまでの生活を見直していくことができるようにすることである。具体的には、①電気が明かりや熱、動力として私たちの生活になくてはならないこと、②家庭生活の中でたくさんの電気を消費していること、③電気事業や電気の使用量の増大は私たちの生活と結びついていること、④節電や太陽電池の活用など自分の生活での電気の使い方を考えること、などの内容がある。これらの学習を通して、電気が私たちの生活を支えているという見方や節電や電気を有効に利用していこうとする態度を育てることができる。
- 本単元の指導にあたっては、家庭での電気の利用調べや体を使っての発電、電気施設の見学などの活動や体験を通して、生活の中の電気について考えさせたい。そのためにであう段階では、家庭で電気を使わない体験や発電をする体験などを行い、光や動力などとしての電気の働きを知るとともに、「家庭の電気がどこからくるのか。」などの調べたい問題をもつ。さがる段階では、家庭の電気使用量調べをしたり、九州エネルギー館に取材にいたりして、家庭での電気の働きや電気の消費の問題点について明らかにさせる。いかす段階では、家庭の中での節電や太陽電池の利用などを考えて、生活の中で電気をよりよく使っていくことができるようにしたい。

目 標

1. 自分の生活と関係付けながら、電気の働きについて調べることができる。
2. 節電をしたり電気を生活に役立てたりして、生活の中で電気をよりよく使う態度を育てる。

計 画 (約16時間)

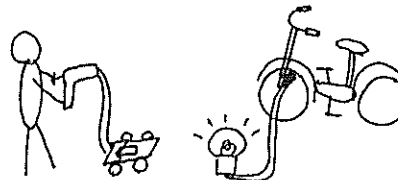
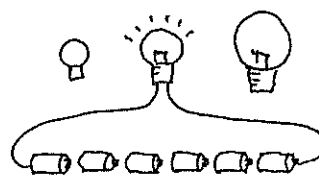
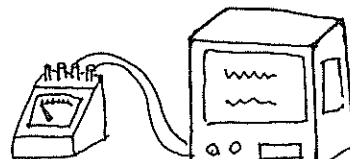
階	で あ う (3時間)	さ ぐ る (10時間)	い か す (3時間)
活動と内容	1. 身近な電気の使われ方を調べて追究課題を設定する (1) 家庭での電気の使われ方を調べる。 ② ○ 生活の中の電気の役割 (2) 電気についての追究課題をもつ。 (本時) ① ○ 家庭の電気利用や電気についての課題の把握	2. 追究課題について、電気の働きを詳しく調べる。 (1) 家庭での電気の消費について調べる。 ③ ○ 電気の使用と消費 (2) 電気が家庭に届くまでについて調べる。 ⑧ ○ 電気施設の見学 ○ 電気の生産と消費	3. 生活の中での電気のよりよい使い方を考える。 (1) 自分なりに電気のよりよい使い方を考える。 ① ○ 太陽電池利用や節電などの計画 (2) 考えたことを生活の中で確かめる。 ② ○ 電池利用や節電の実践
手だて	○ 電気を使わない体験や電気の力で動くものの調査 ○ 発電や電池を使う体験	○ 電力計や発電器、などの機器の準備 ○ 九州エネルギー館の見学	○ 太陽電池や太陽電池用のモーターなどの材料準備 ○ 実践活動の設定

本時の目標

- 電気の発電や乾電池使用の体験を行い、日常の家庭での電気の使用に目を向けて、電気の生産や家庭での電気の消費についての追求課題を持つことができる。

準備 乾電池、電流計、発電器、各種の電球、電気製品など

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○ 家庭で電気を使わない体験をして、電気の役割を調べたこと ・ 家庭生活をする上での電気の大切さについて。 ・ 光や熱、動力として電気を使っていること。 ○ 本時のめあての確認 ・ 自分で発電したり乾電池を用いたりして電気を使うこと。 めあて 自分で発電したり、かん電池を使ったりして、明かりをつけたりモーターを回したりしよう。 2. 発電器を回したり乾電池をつないだりして電気の働きを調べる。 (1) 発電器や乾電池で電気を起こして電気を使う。 <発電器を回して>  <乾電池をつないで>  ○ 発電によるエネルギーの生産と消費の体験 ○ 乾電池と家庭の交流電流が同じ働きを持つことの実感 ○ 発電や乾電池による電力（W）の大きさの体感 ※ 大小の手回し発電器や消費電力の違う電気器具を準備して、電気を使わせる。 (2) 電気を使って気づいたことを話し合う。 ○ 発電や乾電池の量を多くすれば電気の働きも大きくなること ○ 発電器や乾電池の電気でも、家庭の電気と同じ働きをするが、わずかな量の電気しか起こらないこと ※ 発電器や乾電池の電気と家庭の電気との関係を考えさせる。 3. 本時の学習についてまとめ、次時の活動について話し合う。 ○ 発電器を速く回したり乾電池を多くしたりすれば、電気の量が増えること ○ 次時の活動の見通しを持つこと ・ 自分のよく使う器具や家庭の電気の消費を調べること。 ・ 家庭の電気はどこでできているのか調べること。 ※ いくつかの電化製品の消費電力を電流計で調べ、自分の家庭での電気の使用量や電気の生産に目を向けさせる。 	○ 電気が使えないと、とても不便だ。電気の有難さがわかった。 ○ 明かりや冷蔵庫などいろんなところに電気を使っている。 ○ 発電したり乾電池を使ったりして、電気を使いたい。 ○ 速く回すとたくさん発電できるぞ。しかし1個の電球に明かりをつけるのも大変だ。 ○ 乾電池をいくつもつなぐと、電球にも明かりがついた。乾電池でも明かりがつくけど、数がたくさんいるな。 ○ 発電した量に比べて家庭ではもっとたくさんの電気を使っているのではないかな。 ○ テレビはたくさんの電気を使っている。 ○ こんなにたくさんの電気はどこでできているのか。 ○ 自分はどれくらい電気を使っているのか調べたい。

第5学年1組 国語科学習指導案

指導者 伊 藤 啓 二

単 元 物語の中の宇宙人を比べよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、本を読むことが好きで、図書館を利用し様々なジャンルの本を読んでいる。特に、物語文に対する興味は、低、中学年の時よりも増してきており、作品の選び方も似たような傾向の話を選んで読むようになってきている。また、作品の中の登場人物に共感的あるいは批判的に接しながら読む姿勢も見られる。そこで、5年生のこの時期に、子供が興味をもつショートストーリーの複数の作品を読み比べる学習を展開し、作品全体に流れる主題の相違点や似た作品の登場人物の描写の違いを比べることで、情報受信の方法を広げていきたい。
- 本単元は、2つの教材文から宇宙人に対する描写や作品に表れている主題の相違点を比べながら読み取り、短編小説のもつおもしろさにふれ、読書の範囲を広げていくことをねらいとしている。具体的には、①「おみやげ」「宇宙人の宿題」を読み、作品の主題や描写の相違点を比べること、②読みの視点（同一作家、他の作品に現れる宇宙人など）にしたがって、複数の作品を読み、情報を得ること、③読んで得た情報を元に、作品の楽しい読み方や同じ傾向の本を読めるコーナーの設置など、図書館情報の提供を行うことが内容である。
- 本単元の指導にあたっては、2つの教材文「おみやげ」「宇宙人の宿題」やその他の作品を読み比べることで登場人物の相違点、主題の共通性などを情報として受信できるようにしたい。そのためには、課題の把握段階で、2つの教材文を宇宙人の描写、人間へのメッセージなど自分なりの視点をもって比較し、もっと同一作家、同一ジャンルの作品を読みたいという目的意識を持たせる。情報の収集段階では、自分の課題に沿っていくつかの「ショートショート」作品を読み、交流しながら共通点や差違点を見つけ出す。そして、宇宙人についての物語の特徴や人間に対する作者の風刺などを情報収集させたい。情報の整理段階では、友達同士で自分の読んだ作品の面白さや楽しく読むための視点を紹介し合い、図書館案内などで伝えていきたい。

目 標

1. いくつかの物語を読み比べて、主題や描写の仕方について自分の考えを持つとともに、作品のおもしろさを味わうことができる。
2. 自分の興味や目的に応じた本を選び、読んで感じたことや考えたことを記録に整理し、情報を交換することができる。

計 画（約10時間）

階	課題の把握（4時間）	情報の収集（4時間）	情報の整理（2時間）
活 動 と 内 容	1. 2つの物語文を読み比べる。 (1) 宇宙人のイメージを出し合い、物語を読む視点を話し合う。① ○ 宇宙人が現れる作品への着目 (2) 2つの作品を比べながら読み共通点と差違点を話し合う。③ ○ 比較による読みの視点の把握	2. 2つの作品と他の作品を比べ、ユーモア作品の特徴や描写の相違点を話し合う。 (1) 同一作家の物語、宇宙人のでてくる物語を読み、課題に対する情報を探す。③ ○ 課題を解決する読みによる情報収集 (2) 作品と作者の意図を話し合う。① ○ 読者の立場に立った主題把握（本時）	3. 読み取ったことをもとに図書館に自分の読んだ本の紹介コーナーを作る。 ○ 紹介コーナー設置による読み取った情報の整理 ○ 課題追求による達成感や成就感の感受
手 だ て	○ 漫画などにでてくる宇宙人の提示と話し合い活動 ○ 2つの教材文の比較読み	○ 星新一作品集、小松左京作品集 ○ 作品の主題カード ○ 作品中の宇宙人の働きへの着目	○ 図書館のコーナーの活用 ○ 簡単な紹介文作成

本時の目標

- 2つの教材文を読み比べたときにもった課題（宇宙人の描写の仕方、人間へのメッセージ、文明社会への批判など）に自分の読んだ作品を照らして、SF作品のもつ価値や楽しさ、社会風刺のおもしろさなどを味わうことができる。

準備 2つの教材文に表れていた宇宙人像、子供の読んだ作品、情報収集ノート

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 2つの教材文を読んだときの比較の視点とその時にもった課題を出し合い、本時学習のめあてを話し合う。 (1) 「おみやげ」「宇宙人の宿題」に出てきた宇宙人の描写の違いを振り返る。 ○ 比較して読んだときの読み取りや比較の視点の想起 ※ 学習ノートや流れ図を活用して、本時の中心に焦点化できるように配慮する。 ・2つの作品の宇宙人は違うようで似ているようだった。 ・どちらも人間のことを悪く言っているようだ。 (2) 本時学習のめあてをつかむ。 ○ 作品と2つの教材との接点を探す見通しをもつこと	○ 「おみやげ」の宇宙人は人間のことを考えていて優しかった。 ○ 2つの教材文は人間のことにについてどちらもあまりいいことは書かれていないように感じた。 ○ この作者の作品に通じる面白さがありそうだな。
めあて 自分の読んだ作品と2つの物語を比べて、作品の面白さを話し合おう。	
2. 自分の読んだ作品と教材文の特徴を比べながら、作品のもつ面白さや価値を話し合う。 (1) 自分の読んだ本の中でてくる人間や宇宙人について紹介しながら、2つの作品との比較をする。 ○ 作品の中から自分のもった課題に対する情報の取り出し	○ ぼくは、星新一さんの他の作品を読んでみた。やっぱり宇宙人がでてきていた。 ○ ユーモアがあるけど、どこか皮肉っぽいところがある。
〈おみやげの中から〉 宇宙人・・・「文明をもたらそう」「住民が喜ぶだろう」 平和に暮らすための本、若返る薬など 人間・・・核実験で粉々にする。価値がわからない。	〈宇宙人の宿題の中から〉 宇宙人・・・「地球を滅ぼしてしまおうかと思っている。」 「君が大人になるまで待てみよう。」 人間・・・熱のせい、怖い夢と思っている。
〈自分の読んだ作品から〉 ・宇宙人の性格が優しいところが似ている。・宇宙人より人間の方が悪いと感じられるところが似ていると思う。	
(2) 作品に通じる宇宙人の働きや人間社会に対するメッセージなど自分の感じたこと、読み取ったことを話し合う。 ○ 登場人物（宇宙人）の描写的役割の把握、主題の把握 ・宇宙人は人間を助けようとしているのにそれに気づかない人間の愚かさを伝えている。 ・発展した文化が逆に自分たちを殺そうとしていることをこれらの作品で伝えたいようだ。	○ どの作品も宇宙人が悪者ではなく、人間のことを考えているようだ。 ○ この作品は、きっと人間のことにについて書いているのだろう。 ○ 友達の読んだ本もおもしろそうだったからぜひ読んでみよう。
※ 作風、結末の共通性なども感じ取らせていく。 3. 友達の選んだ本と紹介の話をもとに、自分がさらに読みたい本を決める。 ○ 友達の情報収集について興味を持つこと ※ どこに興味を持ったかを明確にさせる。	○ 自然破壊に対する風刺をしているところが似ているから読んでみたい。

第5学年2組 理科学習指導案

指導者 手 島 宏 樹

単 元 あらつ气象台で天気予報をしよう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、どこかへ出かけたり、遠足などの行事があるときなど天気を意識し、テレビによる天気予報をたよりに行動している。また、天気は、雨からくもり、晴れへと変化するという見方や考え方をしている。さらに「雲が多くなると雨が降る」「夕焼けの次の日は晴れる」「夜星空だったら晴れる」といった天気の見通しのもち方は知っているし、天気の変化は、雲や風、気温、湿度などに関係があると考えている子供が多い。しかし、実際に確かめたり、観測をもとに天気の変化を調べた経験のある子供は少ない。
- 本単元のねらいは、気温の変化、雲の動きや種類、風向きなどを実際に観測したり、ひまわりの画像、言い習わし等を活用しながら身近な地域の天気の変化を予想することができるようになることである。具体的には、①雲は西から東に動き、それにとまって天気も西から東へと変化することがわかること、②自分なりの天気の変化の観点にこだわり、そのこだわりをもとに天気の変化を調べ、予報すること、③気象現象の変化にこだわりながら情報を収集し、処理・考察していくことが主な内容である。この学習を通して、天気の変化を時間的変化や空間的広がりからとらえ、それを日常生活に生かしていこうとする態度を育てることができると考える。
- 本単元の指導にあたっては、天気の変化を自分なりの気象現象の観測を通してとらえ、自分の天気変化の観点に基づき天気の予想ができるようにしていきたい。そのために、「見出す」段階では、天気と生活との関わりなどから「自分で確かな天気の予想ができるようになりたい。」という思いのもと、福岡管区气象台を見学し、あらつ气象台を開設する。そして、1日の天気を観測し、天気の変化に関係のある現象を取り出し、自分のこだわりから観測する観点を決定する。「調べる」段階では、自分なりの観点で天気の変化を調べ、そこで得た情報をもとに天気の予報をする活動を継続的に行っていき、気象の変化についての傾向に気づかせていく。「生かす」段階では、自分なりの考えが確立した天気の予想の仕方と天気変化がよく伝わる表し方を考え、附属福岡小学校のみんなに天気予報として情報発信できるようにする。

目 標

1. 天気の変化に関する観測結果や二次情報などを、時間的・空間的に追究したり多面的な考察を加えたりして、根拠に基づく天気の予報をすることができる。
2. 自分なりの観点に基づく天気の予想を日常生活に生かすことができる。

計 画 (約9時間)

段階	見出す (4時間)	調べる (3時間)	生かす (2時間)
活動と内容	1. あらつ气象台を開設し自分の天気予報に必要な情報と活用の仕方を決める。 (1) 天気と生活との関わりを話し合い、气象台を見学し、あらつ气象台を開設する。③ (2) 1日の天気を観測し、天気予報に必要な自分の観点を取り出す。① ○ 天気予報に必要な観点の把握 ・風の向き ・雲の動きと種類や量など	2. 自分なりの観点であらつ气象台の天気の変化を観測し、天気予報を行う。 (1) 自分なりの観点で天気の変化を観測する(①+課外) (2) それぞれの観点での天気予報の仕方を紹介しあい、予報会議をする。 (本時+1) ② ○ 天気の予想に関する情報の収集、整理、判断 ・気温の変化 ・雲の動き ・雲の種類 ・ひまわりの映像など	3. 観測結果をもとにしたあらつ气象台の天気予報を行い、天気予報の仕方と情報を発信する。 (1) あらつ气象台からの天気予報をしていく方法を話し合う。 ① ○ 情報発信の仕方の話し合い ・情報発信パネルの設置など (2) あらつ气象台の天気予報を行い、附属小のみんなに情報発信する。 ①
手だて	○ 天気の変化と気温のグラフ ○ 福岡管区气象台の見学	○ 観測器具、観測ノート 継続した観測記録 ○ ひまわりの雲の動きの映像	○ あらつ气象台からの発信情報 ○ 情報発信パネル等の作成と設置

本時の目標

- 自分なりの観点をもとに収集した情報から天気を予想し、その根拠の交流を通して自分の考えを付加、修正、強化することができる。

準 備 観測ノート、継続観測記録、福岡市の拡大地図、

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 前時までの学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 (1) 前時までの学習内容を確認する。 ○ 雲の種類と量、雲の動き、風向や風力、気温や湿度の変化などを収集し、天気の変化を調べたこと (2) 本時学習のめあてを話し合う。 めあて _____ 自分なりの方法でこれからのあらかの天気を予報しよう。 2. 天気の予想をするために自分なりに情報を集め、これからのあらかの天気を予想し、その根拠を話し合う。 (1) 天気の予想をするために、自分なりに情報を集め、予想する。 ○ あらか気象台の気象情報の収集、整理、判断 ・福岡ドームの方から雲が動いてきている。 ・北から南へ弱い風が吹いている。 ・午前中の温度があまり上がっていない。 曇りのち雨 ※ 事前に観測させた今日の気象現象や情報をもとに予想させる。 (2) ミニ予報会議を行い、これからのあらか気象台の天気変化を判断した根拠を話し合う。 ○ ミニ会議における判断理由 ・西の空に雲がある。あの雲が近づくと必ず曇ってきた。 ・低い乱層雲の動きと風向きが同じだったから曇ってくる。 ・乱層雲が出ているときはいつも雨になっていた。 ・午前中の気温変化が少なく湿度が高いときは雨か曇りだ。 ・ひまわりの写真では、西にたくさんの雲がある。あの雲がだんだんと近づいてくるから曇ってくるはずだ。 ※ それぞれのグループであらかの天気のミニ会議を開かせる。 ※ 報告された気象現象を福岡市の拡大地図に表させる。 ○ これからのあらか気象台の予報会議 ・雲の種類から → あらか気象台の ← 気温の変化や湿度から ・雲の動きから → これからの天気 ← 言い習わしから ※ それぞれの観点から考えた理由をもとに総合的に判断させる。 3. それぞれの天気の予想のよさとよりよい方法について話し合う。 ○ 総合的判断による天気予報のよさへの気づき ・時間的・空間的広がりの方や考え方のよさ ・多様な情報収集の観点による天気予報のよさ ※ 取り入れたい観点をノートに書き込ませ、発表させる。	○ ぼくは、雲が西から東に動くことがわかり、当たるようになってきた。 ○ これからのあらかの天気変化を予報するのが楽しみだ。 ○ 観測結果とミニ会議結果の報告 ・西の雲は必ずこちらに進んでくる。だから曇ってくるはずだ。 ・ドームの上に乱層雲がある。乱層雲が出ると必ず雨が降り出した。 ・今日は温度差も小さく湿度が少し高い。こういう日は雨になることが多いようだ。 ・太陽に笠がかぶっている。もうすぐ雨になるはずだ。 ○ それぞれのグループの考えはわかるんだけど、やはり雲の動きから考えると曇りになるだろう。 ○ ひまわりの映像からあらかの雲の動きを想像できた。

第6学年2組 社会科学習指導案

指導者 猿 樂 隆 司

小 単 元 元寇と博多の禅僧

指 導 観

- 本学級の子供たちは、わが国の歴史を博多を中心とした外交史という視点でとらえてきている。また、歴史学習全体をとおして、外交史を中心にした博多の町物語でまとめ、地域に知らせたいという意欲を持っている。前小単元の鎌倉幕府と竹崎季長では、元寇における竹崎季長の行動を調べ、季長の行動の背景にある幕府の政治の仕組みをとらえてきている。そこで、博多の外交に関心をもっているこの時期に、元寇という厳しい状況下にもかかわらず元との交易を行っていた博多の町の禅僧を取り上げ、禅僧の交易に対する思いや願いとその役割について考えさせたい。
- 本小単元のねらいは、鎌倉時代に生きた博多の町の禅僧の行動を調べることで、禅僧が文化や政策の発展に果たした役割について共感的にとらえさせることである。具体的には次のような内容がある。①国家間では元と緊張状態にありながらも、元と交易を行う博多禅僧の文化交流への思いや願いを考える。②両国の禅僧による元との交易を許可した幕府やフビライの主な目的を、互いの国家の情勢把握の面から考える。③博多禅僧による交易の意味を文化・経済や外交政策の視点から考える。これらの内容を学習することによって、博多の町の変化の様子をとらえ、地域の歴史に対する愛情を育てることができる。
- 本小単元の指導にあたっては、鎌倉時代における博多の町物語づくりをとおして、元との文化交流に努めた博多の禅僧の役割を考えることができるようにしたい。そのために、みつめる段階では、元寇の際に博多の禅僧が元と交易を行っていた事実に出会わせる。そして、交易に対する思いや願いを探り、役割に対する解釈を町物語にまとめ、地域に広げるという活動目標を持たせたい。はたらきかける段階では、禅僧による元との交易の内容を調べ、交易の役割を文化・経済の面や外交政策の面から話し合わせたり、交易に対する北条時宗やフビライのねらいについて話し合わせたりして、外交をとおした元とわが国の関係をとらえさせたい。あらかず段階では、元とわが国の緊張状態における交易の意味を北条時宗や御家人、禅僧の立場から話し合わせ、その考えを町物語に表現させたい。

目 標

- 博多の禅僧を中心とした元との交易の様子を調べ、緊張状態に生きた人々の思いや願いを考えるとともに、博多の町の変化の様子をとらえることができる。

計 画 (約7時間)

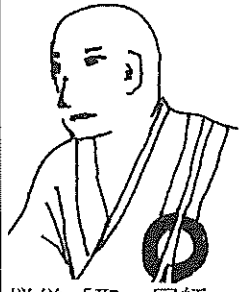
階	みつめる (2時間)	はたらきかける (3時間)	あらかず (2時間)
活動と内容	1. 元寇時の禅僧の交易から学習問題をつくる。② ○ 交易の役割を追究し考えを町物語に表す学習問題の把握 ○ 交易の役割に対する追究の対象や方法、観点の選択	2. 博多禅僧と元や日本の関係を調べる。(本時2/3) ③ ○ 元との交易内容の把握 ○ 交易内容の確認と交易の役割について文化や政治の面からの把握 ○ 交易に対する両国のとらえ方の把握	3. 鎌倉時代の博多の外交史を町物語に表す。② ○ 立場を明確にした元との交易のあり方の吟味 ○ 緊張状態における交易に対する価値付け ○ 町物語づくりの他者評価による学習の成就感の感受
手だて	○ 交易の事実を示す資料提示と時代状況の収集 ○ 学習計画立案の場	○ 学芸員への聞き取りの場 ○ 博多で発掘された元の銅銭や印鑑の模型の提示	○ 討論会の場の設定 ○ 学習内容を表現し、評価を受ける場の設定

本時の目標

- 緊張した状況下で元との交易を行う博多の禅僧の思いや願いを文化・経済の面や外交政策の面から考えることができる。

準備 博多で発掘された元の銅銭や印鑑の模型、青磁器、禅僧「聖一国師」の絵

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 元寇時における交易に対する禅僧の思いや願いを探る追究課題の明確化 —めあて— 博多の禅僧は、交易の際、どのような思いや願いをもっていたのか話し合おう。 ※ 埋蔵文化財センターの吉留さんより、博多で出土した元の銅銭や指輪を提示して頂き、めあての焦点化を図る。 2. 博多で出土した元の銅銭や印鑑、青磁器のそれぞれの意味や関係から禅僧の交易の役割について話し合う。 (1) 元の銅銭や印鑑、青磁器の意味について話し合う。 ○ 元の銅銭や印鑑、青磁器のそれぞれが生活とどのようなつながりがあるかを考えること (2) 元の銅銭と印鑑、青磁器の関係について話し合う。 ○ 博多で元との交易が行われていたことの実感的把握 (3) 元寇時での禅僧の交易の思いや願いについて話し合う。 ○ 文化・経済や政策の面からの禅僧の役割の把握	○ 当時、勉強したい人が禅宗のお坊さんとなり、博多から中国に渡っていったんだな。 ○ パスパ文字は元の文字だったのか。 ○ この時代は日本ではお金が使われていなかったのか。 ○ 指輪は印鑑の役目があったのか。 ○ 青磁器は物を入れる器としての役目があるな。 ○ 博多で元のお金を使って、取引が行われていたのか。 ○ 元では、商品の取引がお金だったので、禅僧はあこがれがあったのかな。
— 交流の具体的内容 — ＜文化・経済の面＞ 「文化を広めたい」 ↓ ・ 土木・建築・宗教への情熱 ↓ ・ 禅僧の使命 ○ 銅銭、陶磁器等の移入 ↓ ○ 博多から鎌倉、地方へ・国際都市への基礎 比較・検討  禅僧「聖一国師」 ＜政策の面＞ 「元の情勢を知らせたい」 ↓ ・ 中国への憧憬・幕府の依頼 ○ 防備体制強化 ・ 石築地の建設 ・ 鎮西探題や異国警備番役等の警備	○ 文化・経済、政策のどちらに大きな役割を果たしたのかな。 ○ 事実をもとに考えてみよう。
※ 考えの根拠となる事実は、交流途中に吉留さんに尋ねてよいことを知らせる。 3. 本時学習をまとめる。 (1) 吉留さんによる交流活動の評価を聞く。 ○ 役割の明確化と他者の評価による交流の満足感の感受 (2) 町物語に記載する内容について話し合う。 ○ 交易の役割についての考えを町物語に位置付けること	○ よし、吉留さんに確かめてみよう。 ○ 禅僧のおかげで博多の町は発展したのだ。 ○ 交易の役割について考えたことを町物語にまとめよう。

第1・2学年ふじ組 算数科学習指導案

指導者 西 原 敦 子

題 材 ぼくのおたしのおみせをつくろう（かずあわせ）

指 導 観

- 本学級の子供たちは、精神年齢2歳から4歳程度の1年生3名、2年生4名で構成されている。日常生活における数の意識では、列に並ぶ順番や給食の配膳のためにパンや食器の数に目を向けたリ、配ったりすることに関心をもつようになってきている。数の理解に関しては、物の集まりを数として意識し始めている子は「何個ある！」と自分から数えるものの、ある集合数と同等の数をつくったり、数対象を数詞・数字と結びつけてとらえたりするまでには至っていない。また、数対象を一つずつ指しながら数える子は、1対1対応による「同じ」を比べることはまだ十分ではないが、教師と一緒に10程度までの数唱をしたり、1対1対応をしたりしながら並べることはできる。
- 本題材のねらいは、1対1対応、数詞や数字との対応など具体物や半具体物、数図を用いながら数合わせができるようにすることである。つまり、お店に並べる品物を用意するために、提示された数を取り出し、1対1対応をしながら数えたり、それらを数図カードや品物におきかえ数合わせをしたりしながら、ものの集まりとしての数や数詞、数字などの理解を促すことである。このお店づくりの場で、数合わせの活動を繰り返し行なわせることは、数への興味を促し、日常生活の中のものの数や数詞の理解を広げ、実際に使うことができるようにする上で意義深い。
- 本題材の支援は、①子供たちの身近にある素材を取り上げ、数えた品物を並べることにより、お店が出来上がるように一人一人の活動の場を設定する。②実際に唐人町商店街に行き、いろいろなお店があることや品物が沢山並んでいる様子を見る（であう段階）→実態に合わせて提示された数と同じ数の品物を数えたり、品物を陳列するために箱詰め（数表箱）したり、絵カードを合わせたりする（かぞえる・あわせる段階）→それぞれがつくったお店でお店やさんごっこをして遊ぶ（まとめる段階）という一連の活動を設定する。③その過程で、一人一人の発達段階に応じた数の提示や支援を行なう。

目 標

1. 自分のお店をつかって、友達と一緒に楽しくお店やさんごっこをして遊ぶことができる。
2. 自分のお店をつくるために、1対1対応で絵カードと同じ数の品物を数えたり、合わせたりすることができる。

計 画（約5時間）

階	であう(1時間)	かぞえる・あわせる(3時間)	まとめる(1時間)
活動と内容	1. 商店街へ行き、沢山の品物を見る。 ○ 数えることへの目的意識	2. 自分のお店づくりをするために、繰り返し品物の数を数えたり合わせたりする。 (1) やおやさんをつくる。 (2) 果物やさんをつくる。 (3) おかしやさんをつくる。 (本時) ○ 1対1対応、まとめた数え方	3. 自分の好きなお店をつかって、お店やさんごっこをする。 ○ 数を合わせることの生活化
支援	○ 商店街見学の体験の場の設定	○ お店に見立てた活動の場の設定 ○ 小さい数、大きい数など個に応じた数の提示 ○ 半具体物（絵カード）の提示	○ やおや、果物やおかしの設定 ○ 買い物のやりとりの促し

本時の目標

- 提示された数と同じ数の品物を数表箱を使って数えたり、数と合わせながら陳列皿に並べたりすることができる。

Aグループ：提示された数(1～3)の絵カードを数表箱に合わせて1対1対応で数えたり、数えた分のくだものを陳列皿に並べたりすることができる。

Bグループ：提示された数(4、5)の絵カードを数表箱に合わせて数えたり、数えた分のくだものを陳列皿に並べたりすることができる。

Cグループ：提示された数(6、7)の絵カードを数表箱に合わせて数えたり、数えた分のくだものを陳列皿に並べたりすることができる。

準備 お店の場、半具体物の品物(くだもの)、数表箱、陳列皿、絵カード

学習指導の過程

活動と内容	個の活動を促す支援
1. 前時の活動を想起し、本時のめあてを知る。 めあて—— じぶんのおみせをつくろう！ ※ 教師と代表児のモデル演示を見取らせる。 ○ 活動の手順と方法の把握 2. お店づくりをする。 ※ 絵カードで提示した分の品物を取り出し、数表箱を使って数えたり、品物を入れた数表箱に絵カードをはって合わせたりさせる。 ○ 提示数に1対1対応すること ○ 数を正確に数えたり合わせたりすること Aグループ Bグループ Cグループ ・絵カードと同数の品物を数えながら取り出す。 ・取り出した品物を数えながら数表箱に入れる。 ・数表箱に入った品物に絵カードを合わせてはり、自分のお店に順番に陳列していく。 3. お店やさんごっこをして遊ぶ。 ※ 品物のやりとりをさせる。 ○ 品物を数えたり、合わせたりしてお店をつくったことへの達成感を味わうこと	1. 活動の目的意識を引き出す支援 ○ お店づくりの場の提示 ○ 教師と代表児によるモデル演示 2. 数を取り出し、数えたり、合わせたり、数にまとめたりする支援 ○ 個に応じた数えるための教具の提示 Aグループ：品物の絵が描かれた陳列皿 Bグループ：4から色分けした数表箱 Cグループ：6から色分けした数表箱 ○ 絵カードや数表箱で数合わせの活動を自己評価していくこと ・絵カードの上に半具体物を合わせて置きながら品物を取り出させる促し ・数表箱に品物を入れて、品物が余ったり足りなかったりしたことを自分で気づかせる言葉かけ ・数表箱に絵カードをはって、絵カードが余ったり、足りなかったりしたことを自分で気付かせる言葉かけ 3. 達成感・成就感を味わわせる支援 ○ お店に並べた品物の数への賞賛 ○ 「～を～個ください。」などの買い物のやりとりの仕方

第5・6学年梅組 体育科学習指導案

指導者 舩 元 俊 文

題 材 グランドホッケーゲーム

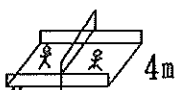
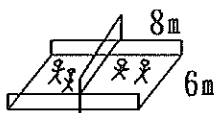
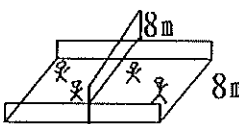
指 導 観

- 本学級の子供たちは精神年齢2歳から5歳程度の5年生男子2名・女子3名、6年生男子2名・女子1名の計8名で構成されている。子供たちはこれまでに、基本の運動の学習を通して器械・器具を使つての運動や、走・跳の運動、ボール操作の運動を経験してきている。ゲームについては、鬼遊びを通して1対1での勝ち負けや、追いかける役・逃げる役を決めての活動を経験し、勝敗についての意識が育ちつつある。ボール遊びに対しての興味・関心は高いが、小集団対小集団における勝ち負けのきまりを意識したり、道具を操作してボールを打ったりといった技能は不十分である。
- 本題材のねらいは、グランドホッケーゲームの簡単なきまりを守り、ラケットを使って多様な道具操作の動きを経験する中で友達とかかわりながら楽しくゲームをすることである。グランドホッケーゲームとは、ネットで半分に仕切られたコートの中で、ネットの下を通しながらボールをラケットで打ち合い得点を競いあうゲームである。具体的には、①ボールをラケットで打ち合いながら得点を競い合うこと、②攻守分離型のゲームにおいて同じチームの友達を意識してゲームをすること、③ラケットでボールを止める、打つなどの多様な道具操作の動きを繰り返すこと、などが学習内容である。以上のことで、ボールを使った遊びに対する興味・関心を高め、友達と楽しく運動できるような簡単なきまりの理解力、道具を使った多様なボール操作の技能を身につけることができる。このことは、子供たちの日常的な運動経験を広げることになり、生涯体育の基礎を培う上でも意義深い。
- 本題材の支援として次のような活動構成を行う。①ボールの動きを意識できるように、コートの両サイドにボールが出ないように壁を設置し、ボールをネットの下をくぐらせる場を設定し、攻防が続くようにすること、②攻・守を意識できるような攻守分離型のゲームを提示すること、③子供の意識が持続し、動きを広げることができるように順次場を広げること、④1時間ごとに広がるという変化した場に応じた動きが意識できるような個に応じた声かけ・動作援助・モデル演示を行うこと、である。

目 標

1. 同じチームの友達を意識して、勝ち負けのきまりを守りながら楽しくグランドホッケーゲームをすることができる。
2. ラケットを使って、止める・打つなどの多様なボール操作の動きをすることができる。

計 画 (約5時間)

段階	であう（1時間）	ひろげる（3時間）			いかず（1時間）		
活動と内容	1. ゲームに出会い、手順や方法を知る。 ○ ボールをラケットで打ったり止めたりすること ○ ゲームを攻守分離ですること	2. 楽しくグランドホッケーゲームをする。 (1) 1対1でゲームをする。 ○ ラケットの操作の動きの広がりときまりの意識 ① 			(2) 2対2でゲームをする。 ○ 変化した場に応じたラケット操作の動きの広がりときまりの意識 (本時) ① 	(3) 広いコートでゲームをする。 ○ 素早い動きのラケット操作ときまりの意識 ① 	3. ゲーム大会をする。 ○ 他の友達とゲームをすること ○ できるようになった動きを教えながらゲームをすること
	支援	○ ラケットの工夫 ○ 手順や方法、道具操作のモデル演示 ○ 基本の場の設定	○ 場が広がる。1対1・2対2などの変化した場や形態の設定 ○ サイトの壁、ネット、ラケットなどの道具や用具の準備 ○ 勝ち負けを意識できる得点板 ○ ボールの打ち方、止め方、相手を意識した打ち方、止め方、味方を意識したパスの仕方など、個に応じた声かけや動作援助、モデル演示			○ 他の学級の友達と一緒にゲームができる合同体育の時間の設定	

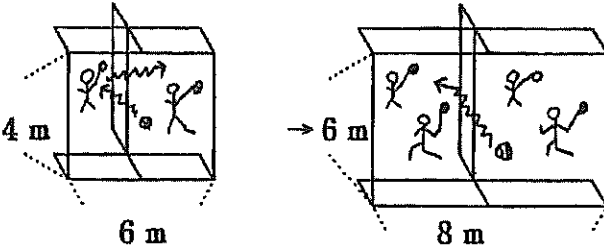
本時の目標（※Gはグループを表す。）

- 2対2の簡単なきまりを守って楽しくグランドホッケーをすることができる。

グループ	ラケットの操作の仕方	き ま り
A G	打ったり止めたりする。	友達の働きかけを受け入れきまりを意識する。
B G	相手のいない所をねらって打つ。	きまりを意識する。
C G	相手や味方を意識して打つ。	きまりを理解し、友達に働きかける。

準 備 ボール、ラケット、サイドの壁、ネット、得点板など

学習指導の過程

活 動 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援												
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時行ったゲームをする。 ○ 前時学習の想起 (2) 変化した場に出会い、本時学習のめあてについて話し合う。 — めあて — 2たい2でたのしくグランドホッケーをしよう。 ○ 2対2でゲームをすること 2. 変化した場で、2対2で楽しくグランドホッケーゲームをする。 (1) 2対2での動きを意識できるような試しのゲームをする。 ○ 変化に応じたラケット操作を知ること (2) 2対2でゲームをする。 ○ ラケット操作の動きを広げること <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 33%; text-align: center;">A G</td><td style="width: 33%; text-align: center;">B G</td><td style="width: 33%; text-align: center;">C G</td></tr><tr><td>・ボールを意識してラケットで止めること</td><td>・ボールの方に動いて止めること</td><td>・ボールを止めずに素早く打つこと</td></tr><tr><td>・方向を意識してラケットで打つこと</td><td>・相手を意識して打つこと</td><td>・相手のいない所にボールを移動して打つこと</td></tr><tr><td>・友達の働きかけからきまりを意識すること</td><td>・自分できまりを意識すること</td><td>・きまりを理解し友達に働きかけること</td></tr></table> 3. 本時学習のまとめをする。 ○ 得点板や対戦表で、グランドホッケーを振り返ること ・ゲームで楽しかったことを発表する。	A G	B G	C G	・ボールを意識してラケットで止めること	・ボールの方に動いて止めること	・ボールを止めずに素早く打つこと	・方向を意識してラケットで打つこと	・相手を意識して打つこと	・相手のいない所にボールを移動して打つこと	・友達の働きかけからきまりを意識すること	・自分できまりを意識すること	・きまりを理解し友達に働きかけること	1. グランドホッケーゲームの意欲を引き出す支援 ○ 前時が想起できる場の設定 ○ きまりや、ゲームのやり方が意識できるモデル演示 ○ 本時学習の場の設定  2. きまりの理解と友達とのかかわりを深める支援 ○ Aグループ ・役割を意識できるような声かけ ・ボールの打ち方、止め方の動作援助、モデル演示 ○ Bグループ ・相手のいないところをねらった打ち方の動作援助、モデル演示 ・ボールを自分の前で止めるような動きを意識できるようなモデル演示、声かけ ○ Cグループ ・味方を意識した道具操作を意識できるようなモデル演示、声かけ ・相手の動きを意識し素早く動いて止めることができるようなモデル演示、声かけ 3. 学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 発表の場の設定 ○ 得点板や対戦表の設定
A G	B G	C G											
・ボールを意識してラケットで止めること	・ボールの方に動いて止めること	・ボールを止めずに素早く打つこと											
・方向を意識してラケットで打つこと	・相手を意識して打つこと	・相手のいない所にボールを移動して打つこと											
・友達の働きかけからきまりを意識すること	・自分できまりを意識すること	・きまりを理解し友達に働きかけること											

— 学習指導協議会（2日目）メモ —

◇ パネルディスカッション

「21世紀の教科・領域への挑戦 ―新時代の授業を創る―」

パネラー

文部省初等中等教育局小学校課	教科調査官	嶋野道弘
福岡教育大学	教授	山下昭
福岡教育事務所	主任指導主事	谷友雄
春日市立春日野小学校	研究主任	高野誠一
附属福岡小学校	研究主任	重松宏明

コーディネーター

福岡教育大学	教授	寺尾愼一
--------	----	------

— ヌ 毛 —

研究紀要の部

生きる喜びを生み出す教育課程の創造
—子供主体の活動からみる教育課程の編成—

研究紀要目次

ページ

生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ～子供主体の活動からみる教育課程の編成～	-----	1 1 0
---	-------	-------

教頭	芋生修一
研究主任	重松宏明

豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう表現科学習	-----	1 2 4
------------------------------	-------	-------

表現科部	樺島 穰 津本修一
------	--------------

身近な環境とのよりよい関係をつくる生活環境科学習	-----	1 3 3
--------------------------	-------	-------

生活環境科部	芋生修一 今林康治
--------	--------------

ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する「人間」学習	-----	1 4 2
------------------------------	-------	-------

「人間」部	中原 浩 植松伸之
-------	--------------

個性的に理解し創造的に表現する子供を育てる国語科学習	-----	1 5 1
----------------------------	-------	-------

国語科部	伊藤啓二 吉田正樹
------	--------------

地域社会を創造していく社会科学習	-----	1 5 8
------------------	-------	-------

社会科部	後藤正弘
------	------

自ら数理を求め続ける子供を育てる算数科学習	-----	1 6 4
-----------------------	-------	-------

算数科部	重松宏明 加藤英也 小森 晃
------	----------------------

自然事象とのよりよい関係をつくり出す理科学習	-----	1 7 2
------------------------	-------	-------

理科部	山下浩徳
-----	------

対象への愛着を深める生活科学習	-----	1 7 8
-----------------	-------	-------

生活科部	藤木寿美枝 石田耕一
------	---------------

生涯音楽の基礎を培う音楽科学習	-----	1 8 5
	音楽科部 津本修一	
造形的な創造表現の喜びを味わう図画工作科学習	-----	1 9 1
	図画工作科部 樺島 穰	
自ら家庭生活を創造する家庭科学習	-----	1 9 7
	家庭科部 平山尚美	
自ら運動を創造していく体育科学習	-----	2 0 3
	体育科部 佐々木壮一朗 笠 宏照	
自立的な生活をめざして生活力を培う	-----	2 1 0
	障害児教育研究部 松本良一	
自分の生活を楽しんでいく生活単元学習	-----	2 1 3
～社会的体験を豊かにする活動を通して～		
	障害児教育研究部（生活単元） 松本良一	
言語活動の喜びを味わう国語科学習	-----	2 1 7
～ことばの楽しみを広げていく読み聞かせの活動を通して～		
	障害児教育研究部（国語科） 落合純哉	
みんなで表現する楽しさを味わう音楽科学習	-----	2 2 1
～表現を見合う・聴き合う活動を通して～		
	障害児教育研究部（音楽科） 西原敦子	
一人一人が運動のもつ楽しさにふれる体育科学習	-----	2 2 5
～運動対象へのかかわり方を広げるゲームづくりを通して～		
	障害児教育研究部（体育科） 舩元俊文	

研究主題

生きる喜びを生み出す教育課程の創造

－子供主体の活動からみる教育課程の編成－

重松 宏明 芋生 修一

1. 21世紀の社会と望まれる人間像

21世紀を目前に控えた今日、子供たちを取り巻く環境が急激に変化している。国際化、情報化、高齢化、環境問題など、対応を迫られるものが山積みされている。そこで、予想される未来世界において、豊かにたくましく生き抜く力をもった人間像を明らかにするために、「人間とは何か、いかにあるべきか」という人間存在の原理を、人間の生きる環境、働きかけの対象、生き方という面から次のように考えてみた。

- 人間は、自然と共に生きる存在である。
 - ・ 自然と共に生きるとは、自然の恵みを受け、自然と調和して生きることであり、また生命のつながりの中で生きるということである。
- 人間は、社会の中で生きる存在である。
 - ・ 社会の中で生きるとは、人とかかわって生きることであり、集団や社会の仕組みの中で協調し連帯して生きるということである。
- 人間は、価値を求めて生きる存在である。
 - ・ 価値を求めて生きるとは、理性と感性を高め、心の充足を求めて生きることであり、創造的に自己実現をはかりつつ生きるということである。

このような、人間存在の原理は、人間（子供）をとらえる視点であるとともに、教育の目標、内容や方法にもつながるものである。本校では、この人間存在の原理から、大切にしたい「生きる視点」を考え、この視点に対応させて、さらに『21世紀の社会で必要とされる人間像』を明らかにした。

大切にしたい「生きる」視点	21世紀の社会を豊かにたくましく生きる人間像
・ 自分自身の働きかけと自分の存在を大切に して生きる ・ 自分自身の価値観をもち、個性を発揮し ながら生きる ・ 新しい考えや文化を創造することに喜び や楽しさを感じながら生きる ・ 多様で多量な情報に対応し、活用しなが ら生きる ・ 心と知力と体力を調和的に発達させ、生 涯にわたって学習しながら生きる	・ 社会や自然に積極的に働きかけ、地球市 民として考え、行動できる人間 ・ 自分自身の価値観を確かにし、自分らし い生き方を創りだしていく人間 ・ 目標に向かって、自分の考えや働きかけ 方を、共に創造できる人間 ・ 情報を的確に処理、判断し、活用できる 人間 ・ 心身ともに健康で、生涯にわたって学び 続けていこうとする人間

2. 現行の教育課程を見直していく必要性

先に述べた人間像に迫ることを考えたとき、本校では、教育課程見直しの必要性を、(1) 現行教育課程実施上の問題点から、(2) 教育課程実施の新しい課題から、(3) 学校教育を取り巻く環境の変化から、という大きく3つの観点から整理した。

(1) 現行教育課程実施上の問題点から

○ 豊富な体験をもてる教育課程に

今の子供たちは、知識・技能の高まり、思考力の面での育ちは確かに素晴らしい。しかし、何かもの足らなさを感じるのである。それは、人間としての豊かさ、人間としてのやさしさ、人間としてのたのしみさにあるように思う。今の子供たちのものの見方・考え方、対処の仕方というのは、合理的、一般的、対処的すぎるように思うのである。これはまさに体験の不足、子供自身が環境にかかわっていく活動の不足からだ考える。子供たちは、土台がないままに覚えることや理解することばかりを行っている。だから時間がたてば忘れてしまい活用がきかないのである。また自分でかかわりをもっていないので、本物を知らない。本物を知らない人間は、本当かうそかを考えたり疑ったりする力がない。このことは、情報が多様化し、氾濫しているこの時代においてたいへん恐ろしいことである。マスコミの報道をまるのみし、一面的な見方・考え方をする人間を育ててしまうことにつながる。

体験を大切にしていくことは、今、教育の世界では大きく叫ばれており、取り組みも盛んに行われている。しかし、それは方法論的な取り上げ方であって、今の教育課程では限界があると考え。21世紀をたくましく生き抜く子供をめざして、教育内容を見直し、具体的な活動や体験の時間を保証できる教育課程が求められていると考える。

後述するが、本校では、子供が生きていくことに身近で、必要不可欠な具体的な活動や体験から教育内容を設定し教育課程を編成している。もっと子供が自分の活動を通して、自分の理屈、解釈でものごとを認識していく過程が大事にされた学習がなされなくてはならないのではないだろうか。

(2) 教育課程実施の新しい課題から

○ 生きる力をもった子供の育成をはかっていくために

第15期中教審報告案では、子供に「生きる力」と「ゆとり」をもたせることを強調している。いじめやそれに伴う不登校などの問題が深刻化してきている今日、今後求められる資質や能力は、変化の激しい社会、多様な価値観の存在する社会の中を生きる力と言及している。

今の子供たちには、子供自身が生きること喜びを覚えられような心のゆとりと人間関係をもたせることや、困難に対してもたくましく生きる意志と体力を育てることが必要であると考え。生きる力をもった子供は、社会の中で主体的に生きていける能力や態度、また自分の生き方につながる知識や価値観をもち、発揮できる力をもっている子供である。よって、これまでの学力のとらえ方を新たにしていかななくてはならないし、学力観が変われば、当然教育課程の見直しも行われなくてはならない。本校では、生きる力につながる子供たちの資質・能力を豊かな学力として分析・構造化している（p 113 参照）。

(3) 学校教育を取り巻く環境の変化から

学校を取り巻く環境も、大きく変わってきている。以下のような点で教育の在り方も見直していかななくてはならないと考える。

① 学校週5日制→指導時数の削減

完全学校週5日制に対応できるように、教育内容を厳選し、ゆとりのある教育を回復していく必要がある。

② 学校、家庭、社会の教育の役割と枠組みの変化→学校教育の立場と役割を明確にすること

家庭における教育力の減退、塾の加熱化や社会教育の拡大充実を考えたとき、学校教育の果たす役割については、再度見直していかなくてはならない。特に、子供と親とのだんらんの時間の減少や大手塾の私立中、高校入試にむけての徹底指導とその魅力には、小中の教師は、その現状を把握しておかなくてはならないと考える。その上で、学校、家庭、地域社会における教育の連携とバランスを今後考えていかなくてはならない。

③ 生涯学習体系への移行→知識を教えるのではなく、学習の仕方、学習する楽しさや喜びを感じさせ、獲得させること

「生きる力」をもった子供は、社会の中で主体的に生きていける能力や態度、また自分の生き方につながる知識や価値観をもち、発揮できる子供である。知識を知っているだけの子供ではなく、学習の仕方、学習する楽しさや喜びを知っている子供と言える。学習の喜び、自分の存在価値を自覚した子供は、自分が人生の主人公として積極的に社会や自然とかわり、楽しみながら生きていけると考える。

3. 本校がめざす子供像と主題の意味

私たちは、一人一人の子供が二度と帰らない子供時代を、豊かにたくましく、そして子供らしく生き、新時代の自分の人生を自分の手で切り拓いていける力を培ってほしいと願っている。

本校では「自立した子供」の育成を中核にすえて、めざす子供の姿を次のように考えている。

◎ 21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供

- ・ 社会や自然と調和し、心豊かな人間性をもった子供
- ・ 自分に自信をもち、自分を豊かに表現していく子供
- ・ 社会や自然に個性を発揮してかわり、新しい文化を創造する子供

上記のような子供の育成をめざし本校では、研究主題を「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」と設定し、教育課程の理論・実践研究を進めてきた。

主題の中の文言である「生きる」ということについては、自主的な活動と共同的な活動の中で、個性的かつ創造的な自己表現を行うことであるととらえている。

この個性的かつ創造的な自己表現のためには、五感を総合的に働かせた活動を行い、心に感じる体験、心に響く体験といった『心の体験』を豊かにすることが大切である。具体的には、対象に対して「感じる」「考える」「行う」という活動の繰り返しとして現れてくる。「感じる」「考える」「行う」活動を以下のようにとらえる。

☆感じる…社会や自然などの具体的対象に直接的に働きかけ、自分の五感を通して得た具体的な情報から対象を認識する活動

☆考える…対象とのかかわりによって得た情報を目的に向けて、あるいは問題解決に向けて、論理的に、一般的に、分析的に、効率的になど、教科・領域の特性にあった思考方法で加工、処理し、自分の新しい考えを創りだしていく活動

☆行う……自分の感じたり考えたりしたことをもとに、行為や言語、造形物、身体などを通して、自分なりに新しいものに創造、表現していく活動

この活動の過程で子供たちは、もの、人、ことを認知していくための「感覚」「思考」「行動」の要因を働かせて、社会事象、自然事象、文化遺産などにかかわり、個性的かつ創造的な自己表現をしながら、自分自身のかかわり方やかわっている対象の価値を自分の経験に取り入れていく。

また、生きるという営みは、自主的な活動、共同的な活動の中で行われる。つまり、子供が学ぶと

きは、対象と自分の関係の中で「自分が学ぶ（自主的）」と、対象と自分を含めた集団の関係の中で「みんなで学ぶ（共同的）」という2つの形態によって行われなくてはならない。

このような過程と形態のもとで生きる喜びの自覚がなされなくてはならない。

「生きる喜び」とは、「自分自身で活動して学ぶ楽しさ」「考えを創りだす楽しさ」「共同で学ぶ楽しさ」「自分自身の成長」の自覚である。

この生きる喜びは、子供がこれからの学習や生活に意欲的にかかわっていく原動力となり、自分の生き方にまで影響を及ぼすものとなると考えている。

4. 豊かな学力の構造

近年の科学や文化の進歩の状況から考えると、21世紀という時代は、これまでに経験したことのないスピードでの急激な変化と価値の多様化が予想されている。このような状況を考えると、21世紀を創る人間、21世紀を生きる人間には、そういった環境のもとに柔軟に対応できる資質・能力が求められる。それが「生きる力」と呼ばれるものの中身だと考える。

本校では、めざす人間像、子供像を明らかにしたとき、「学力観」についての見直しに迫られた。求める人間像が変われば、当然これまでの学力についても見直しが行われなくてはならない。本校では、新しく見直して創った学力を「豊かな学力」として次のように構造化した。

本校が考える豊かな学力の中核をなす内層には「豊かな心」があり、これは生きること、また生きる喜びを生み出すことのエネルギーとなっていく。次の中層には、物事を認知していくための「感じ方」「考え方」「行い方」があり、「環境とのかかわり方」として、環境に旺盛に働きかけていくことのできる力が位置づいてくる。つまり具体的な活動や体験をより意味のあるものにするための力である。さらに外層には、かかわる過程において得る知識・技能として「生きて働く知識・技能」が位置する。このような学力が、21世紀を豊かにたくましく生きるための「豊かな学力」と考える。

豊かな学力の中身は、次のようなものである。

A. 豊かな心

すべての活動の源泉となるものであり、学習をしている自分の存在や存在価値の自覚に支えられている。そして、自らの働きかけによって、さまざまな課題を見出したり、解決を工夫したり、解決したことをこれからの活動に生かしたりしていこうとする心の働きや高まろうとする意志・意欲である。

B. 環境とのかかわり方

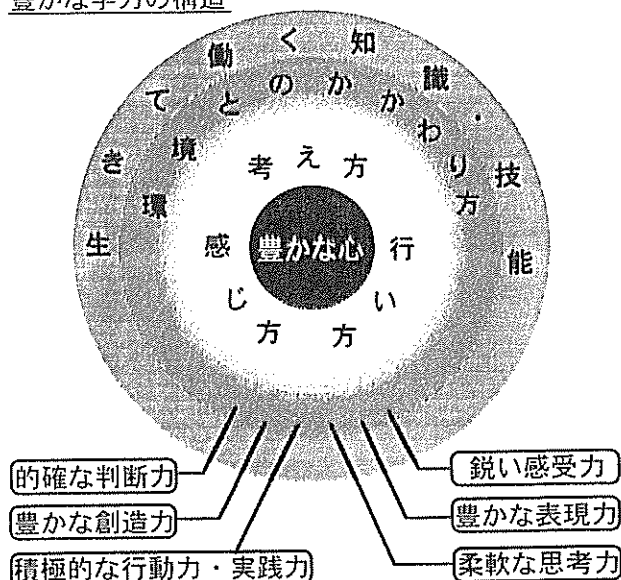
○「鋭い感受力」

自分の身の回りのさまざまな事象の中から、問題を見出したり、素直に感動したり価値を感じとったりする力である。

○「柔軟な思考力」

身の周りの様々な事象や直接的に働きかけて得た情報から、論理的に考えたり、直観を働かせたりして、事象のもつ価値や意味を見出していく力である。

豊かな学力の構造



○「的確な判断力」

情報の必要価値を見極めたり、かかわりの中で直面した事実や事象が、「真実であるか、誤りであるか」「善いことか、悪いことか」などをはっきり見極めることのできる力である。

○「豊かな表現力」

感じたこと、想像したこと、考えたこと、調べたこと、他の人に伝えたいことなどを、言語、絵図、数式、造形、音楽、身体などで表していく力である。

○「積極的な行動力・実践力」

目的を達成するために考えたこと、判断したことを意欲的に実際の行動として表していく力である。

C. 生きて働く知識・技能

自分の生活・生き方、在り方に活用でき、身の回りの様々な事象に働きかけていくことができるもとなる学習によって得た内容である。

5. 教科構成の立場

(1) 本校が考える教科・領域再編の考え方

教育課程の研究を行って、新しい教科を設定する場合には、その学校の教科構成の立場というものを明確にしておかなくてはならない。教科構成の立場を考えていく拠りどころに苦心しているとき、蜷谷米司氏の教科構成論に出会い、検討しながら本校の教科構成の立場を創り上げていった。(註1)

本校では、右図のように、子供がもの、人、ことを認知していくための、以下に示す3つの認識活動の基盤に対応させて教科を設定した。その3つの認識活動は、具体的感覚活動、抽象的思考活動、表現的行動活動である。子供たちは、それぞれの認識活動ならではのかかわりの対象に自ら働きかけ学習していく。この3つの活動と働きかけの対象で“科”として分類し教科を設定した。例えば算数科は、人間の抽象的思考活動を基盤に数、量、形、数量の関係といった対象に働きかけていく学習によってまとめ、教科として設定した。また自然事象や社会事象といった学習の対象については、現在の子供たちの発達や生活実態を考えると中学年までは一体的に取り扱う方が適切であるという判断から低学年は生活科、中学年は生活環境科として設定した。そして対象への認識をより深めるために、高学年では対象をせばめ、生活環境科を理科と社会科に分けて設定した。またこれらの教科全体を支え、総合的に人としての生き方、在り方を考える領域として「人間」を設定した。

本校では、このような考え方で、11の教科と1領域を小学校の6年間で行うこととした。ただし、これは、あくまでも基本的な考え方であって当然、教科間の関

図1 本校の考える教科・領域の枠組み

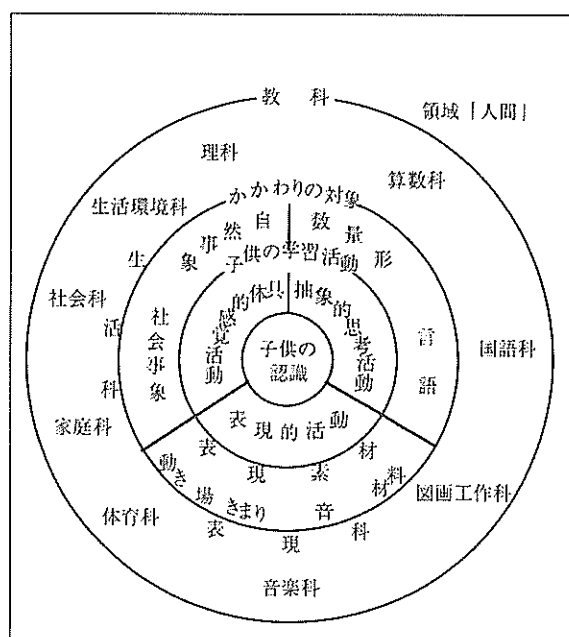
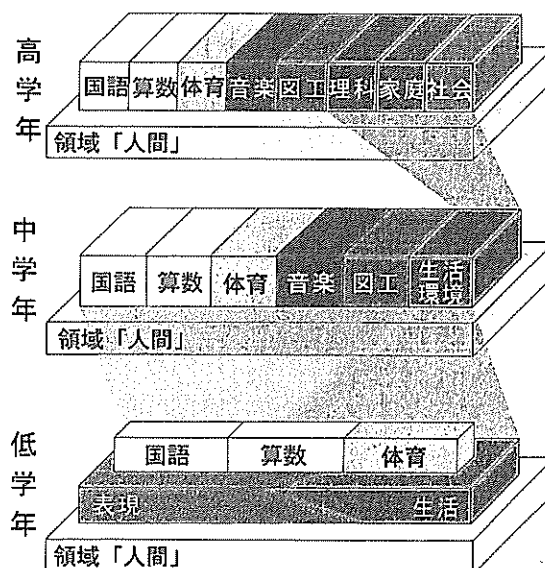


図2 本校が新しく仮説設定した教科・領域



連もあるし、明確に区分けしにくい部分もある。

図2は、本校での新しい教科を含めた教科・領域の枠組である。低学年に表現科、中学年に生活環境科、全学年に領域「人間」を新しく設定し、その他の教科も結果的には、これまでの教科と同じ教科名になっているが、どの教科も、本校なりの新たな教科目標と内容を設定している。

(註1) 蛭谷米司監修『新学力と学習』 三晃書房 平成7年

(2) 新設教科、新設領域の考え方

本校は、先に述べたような教科構成の考え方に基づいて、すべての教科目標を見直し、すべて新教科という考え方で教科・領域を設定している。さらに、現行の教育課程にはない教科・領域も新設教科・領域として設定している。ここで、新設教科・領域について、その設定の理由とねらうところを述べていきたい。

表現科

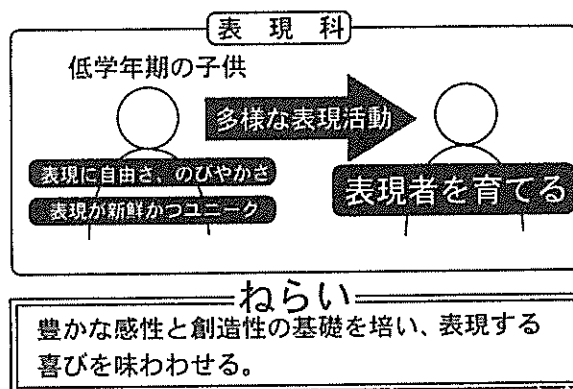
低学年では、表現科を新設している。

表現科は、生活科とともにすべての教科に生きて働く心と能力、態度の基礎になっていかななくてはならない教科であると位置づけている。つまり、すべての教科に発展していく多様な表現活動の経験を豊かにしながら、創造的に自己表現する喜びを味わわせていくことが小学校低学年に必要であると考えます。私たちは、子供の内にある思いや願い、考え、想像性を、その子供独自の個性として自由に、自分らしさを発揮しながら表していけるようにしていくこと、そして、そのことに喜びや楽しさを感じることが大切だと考える。

表現科は、表現の方法を教えることに重きをおくのではなく、「すばらしき表現者を育てていきたい」という私たちの願いのもとに新設した。

表現科設定の理由

- ◎すべての教科に発展していく表現意欲、表現力の基礎を培う教科の必要性
- ◎全感覚機能を総合的に育てる教科の必要性



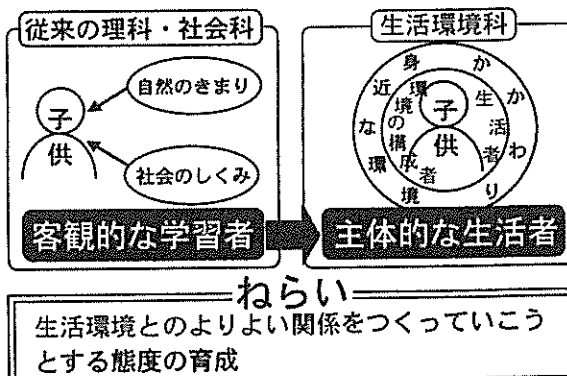
生活環境科

中学年には、生活環境科を新設している。生活科が新設され、子供の科学離れが進んでいると、低学年の理科復活論もある中、なぜ生活環境科を設定しているのか、生活環境科設定の理由を、ここでは2つの観点から説明する。

1つ目は、自分が生活している身近な環境の中での自分自身の生き方や在り方を考えさせ、自分が生活している環境へ主体的にかかわっていかうとする態度を育てていく教科をつくる必然性からである。つまり、生活環境科は、環境とのよりよいいかかわり方、よりよい生き方を求め、生活環境とのよりよい関係をつくっていかうとする態度を育てていくことをねらいとしている。環境の中で

生活環境科設定の理由

自分自身の環境でのあり方、生き方を考えさせ、環境への主体的な見方・考え方を育てる教科の必然性



のよりよい生き方を求める子供を育てるには、子供を社会の仕組みや自然のきまりを客観的にとらえていく学習者として見ていくのではなく、子供自身を環境の構成者であり、環境の中で生活する生活者であるといった立場で見ていくことが大切である。このことによって、自分自身が環境とのかかわりを深めたり、広げたり、考え直したりしようとする主体的な姿を生み出していくことができる。

生活環境科は、子供たちを、客観的な学習者ではなく主体的な生活者に育てるという点で従来の子供観を変えている。

2つ目は、もっと生活に密着した、子供が調べることに興味が喚起されるような、また、学習したことを生かしていけるような内容が求められているのではないかということである。私たちの身の回りの社会事象や自然事象には、社会問題になっていること、社会的関心を高めていること、生活の中によりよく活用できることがたくさんある。そういった内容を生活環境科に求めている。生活環境科は、生活科の内容選択の視点との関連も考えながら、A生命・B季節・自然、C健康・安全、D地域の歴史・文化、E社会的奉仕、F生産・消費の6つの内容選択の視点をもっている。

領域「人間」

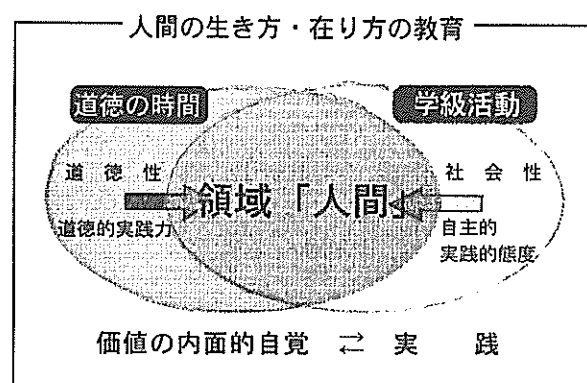
最近、いじめ問題や若者の自殺が社会的に大きな問題になっている。これらの問題は、人間相互の連帯感の稀薄化、他人の弱さや心の痛みを思いやることのない自己中心的な風潮とそれに流された誤った価値判断、意志決定の仕方等、子供の心があまりにも荒んでいるということが表面化した姿だと考える。こうした現状をうけて、学校教育の緊急課題として、「人間の生き方・在り方」という心の教育の中核を担う道徳の時間と特別活動（特に学級活動）との一体化を図った総合的な学習として、領域「人間」を設定している。ではなぜ一体化が必要なのだろうか。その理由を2点から説明する。

1つ目は、これまでの道徳の時間の学習は「自己の価値観の振り返り」に重点がおかれ、価値観の形成段階は個人の体験にゆだねられていた。しかし、前述したように、子供の豊かな道徳的体験が稀薄化している今日、価値形成の過程に具体的活動や道徳的实践を位置づけた総合的な学習が必要である。つまり道徳の学習で培った道徳的实践力を具体的な活動や道徳的实践として行い、それら具体的な活動から得た自分の体験をもとに内面を耕すといった実践と内面的資質の耕しとを統合させた教育が必要であると考ええる。

2つ目は、社会的・集团的体験の場を組織し、自分を取り巻く人間の生き方を見つめる活動や集団での実践活動を通して、感性や実践力、社会性や協調性を高めていく教育の必要性からである。

子供を取り巻く環境の変化で、とりわけ社会的連帯や協調性を養うことが困難な状態にある。社会的・集团的体験によって、人間としての自分の生き方、在り方を考えていく教育が必要なのではないだろうか。以上のような点をまとめ、①子供たちに自分の生き方・在り方にかかわる、心揺さぶられる事象と出会わせたい、②共に活動し、共に生きることの喜びを味わわせたい、③その活動と体験を通して豊かな自分づくりをはかってもらいたい。このような願いが総合的な学習の構想、領域「人間」を生み出した。

領域「人間」の考え方



1. 価値形成の過程に具体的活動や道徳的实践を位置づけた総合的な学習の必要性
2. 豊かな社会的・集团的体験を通して、人間としての自分の生き方・在り方を求める必要性

6. 子供主体の活動からみる教育課程の編成の考え方

(1) 教育課程のとらえ方

「教育課程」という言葉を調べると2つの定義がある。1つは「教育課程は、教育目的に即して教育の内容を構造化したものである」という立場である。「構造化された教育内容」という定義は、子供が何を学ぶか、という観点よりは、子供に何を教えるか、という観点からとらえられたものであり教育課程の言葉の定義は、このとらえ方が一般的だそうである。これに対して「教育課程は、教育目標を達成するために、学校において用いられる経験の総体である」という立場がある。(註2)

「経験の総体」とは、子供が何を身につけたかという子供の立場にたった定義である。本校は、教育課程を新しく創っていく立場で研究を行っている。近年大きく変わってきている子供の発達や生活実態を第一に考え、子供たちが、今何を身につけておかななくてはならないか、そして何を経験として身につけたかということを大切に教育課程を編成している。

(註2) 『総合教育技術 新教育基本用語』 小学館

(2) 子供の主体性を「環境への働きかけ」からみる

本校では、「一人一人の子供(自分)が環境に旺盛にかかわっているか」ということが、「子供主体の活動」を規定する大切な視点と考えている。

ここでいう環境とは、教科・領域でねらう教育的価値の存在する空間(もの、人、こと)であり、かかわりとは、子供たち自身による、その環境への働きかけである。子供たちは、自分の問題や課題解決のために、思いや願いをもって、この環境の中で自分が求める「もの、人、こと」に働きかけていく。環境

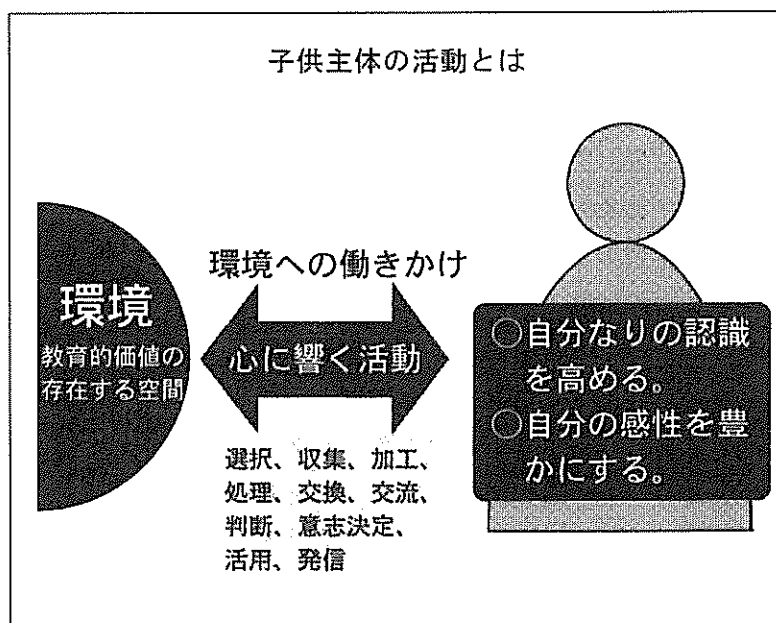
への働きかけの具体的な姿は右上の通りである。

このように、環境に働きかけることで、環境に対して何かを感じとる、環境とのかかわりに何かを感じとる、自分から発信する考えや行為に何かを感じとる、自分が環境に発信してみても何かを感じとる、といった、感じとりによって自分と環境との間を親しみのあるものにしていく。環境への働きかけを通して物事の原理、法則にも気づいていくことが大切なのである。

私たちは、子供主体の活動を「一人一人の子供が環境に働きかけること

によって、その環境やかかわっている自分に価値を見出したり、自分と環境とのかかわり方を広げたり高めたりしていこうとしている姿そのものである。」ととらえている。

働きかけの具体的な姿	
○	かかわっていくもの、人、ことの選択
○	もの、人、ことからの情報の収集・選択
○	もの、人、ことの操作
○	もの、人、ことから得た情報の加工・処理
○	もの、人、ことに対して感じ、想像し、考えたことの表現
○	もの、人、ことにかかわって得た考えや作品の交換・交流
○	もの、人、ことにかかわって得たものの活用
○	自分の考えやメッセージ、実践を、もの、人、ことへ発信



(3) 主体的な学びの姿

子供が主体的に学習している教室には、◇自主的活動の姿 ◇共同的活動の姿 ◇学習活動の価値を自覚している姿、この3つの姿が共存していなければならないと考える。

＜自主的活動の姿＞

- かかわっていくもの、人、ことを選択をしたり、そこから情報の収集・選択をしている。
- 学習を進めていくために必要なことを自分で考え、行動することができている。
- 情報処理の仕方や活動を工夫しながら、問題の解決に迫っている。
- 教材（学習活動や事象）に、子供自身が学ぶ価値を見出し、感じたことや考えたことの表現をしている。
- 自分の考えや活動を自己評価し、考えや活動の付加・修正や発展・継続を行っている。
- 学習したこと（内容）を、生活を楽しむことに生かしている。

＜共同的活動の姿＞

- コミュニケーションを自ら求め、働きかけを広げ深めている。
- 仲間とともに活動する楽しさ、高め合う楽しさを感じている。

＜学習活動の価値を自覚している姿＞

- 自分が活動したことの価値に気づいている。
- 学習したことを使うことに価値を見出している。
- 自分が高まったことがわかっている。

いずれにしても、学習者一人一人が目的をもち、学び、行動し、成果を確かめつつ進められなければならない。また自分のやっていることに自覚と価値の見出しがあることが大切なことである。

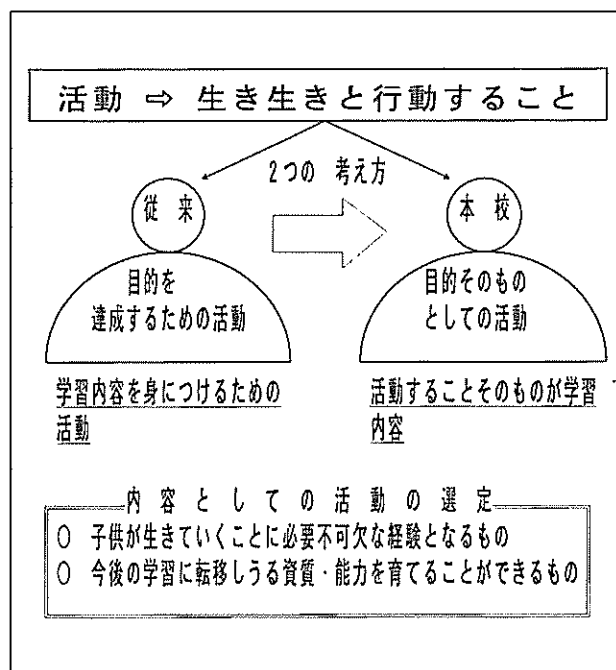
(4) 教育的価値ある活動から内容を考える

活動という言葉辞書を調べると「生き生きと行動すること」とある。この言葉から大きく2つの立場で活動をとらえることができる。

1つの立場は、目的を達成するための方法として活動があるとする立場である。それに対してもう1つの立場は、生き生きと活動することそのものに価値があるとする立場である。(註3)

生活科学習の中での活動はまさに後者にあたる。小学校教育では前者が主流であったと思われるが、本校では後者の考え方を大切にしている。

本校は「活動することによって学ぶ」ことを学習の基本とし「活動することが学習の内容である」ととらえている。この考え方によって体験の経験化を豊かにし、真の「生きる力」の育成をはかろうとしているのである。今求められている子供の学び方は、自分で活動し、自分の感じたことや考えたことを大切にしながら、働きかけた対象や自分の働きかけそのものに価値を見出し、学習の喜びと自分の成長を自覚していくといった姿だと考え



る。この姿が子供主体の活動であり、このような姿を求めて（子供主体の活動から）教育課程を編成していくことで、子供は学習の喜び、そして生きる喜びを味わうことができるのである。

教育課程の編成を行っていくために、活動の設定を次のような観点から考えていく。

- ① 対象の範囲の規定とかかわりからの活動の取りだし
 - ・教科・領域の考える教育的な価値が内在している環境とその中の「もの・人・こと」とのかかわりから
- ② 子供に求められている体験や知識・技能
 - ・子供が生きていく（生活していく）ことに身近で、必要不可欠な具体的な活動や体験、知識技能から
- ③ 子供に育成したい資質・能力
 - ・豊かな人間としての豊かな学力の育成から
 - 豊かな心 ●鋭い感受力 ●柔軟な思考力 ●的確な判断力 ●豊かな表現力
 - 積極的な行動力・実践力 ●生きて働く知識・技能

（註3） 大越和孝「効果的な活動の成立する授業」【教育研究8月号】1995 筑波大学附属小初等教育研究会

（5）本校が考える教科・領域と年間授業時数

新しい教科の枠組みと教科の内容を新しく設定し、年間授業時数を次の表のようにした。

〔新しく設定した本校の授業時数〕

区 分		第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
各教科の授業時数	国 語	238 (7)	245 (7)	210 (6)	210 (6)	175 (5)	175 (5)
	算 数	136 (4)	175 (5)	175 (5)	175 (5)	175 (5)	175 (5)
	生 活	102 (3)	105 (3)				
	生活環境			210 (6)	210 (6)		
	社 会					105 (3)	105 (3)
	理 科					105 (3)	105 (3)
	家 庭					70 (2)	70 (2)
	表 現	136 (4)	140 (4)				
	音 楽			70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
	図 工			70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
体 育	102 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	
領 域 「 人 間 」		68 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
ク ラ ブ					35 (1)	35 (1)	35 (1)
総 授 業 時 数		782(23)	840(24)	910(26)	945(27)	980(28)	980(28)
現行総時数との差		- 68	- 70	- 70	- 70	- 35	- 35

7. 各教科の重点

めざす子供像を、各教科・領域で、以下のように考え年間指導計画の作成を行っていった。

国語科	自分なりの必要感をもって行う言語活動を重視し、言語情報を収集・処理・活用して、創造的に自己表現する子供を育てる。
算数科	数学的な思考をともなった子供の自主的・能動的活動を重視し、数理そのもののものもつ価値や数学的な処理のよさを、自分自身の活動を通してつくり出していく子供を育てる。
生活科	継続的なかかわりや活動を重視し、身近な社会や自然に愛着を深めていく子供を育てる。
社会科	社会に生きる知恵や働きを探る活動を重視し、社会をよりよくしていこうと創造と実践を試みる子供を育てる。
理 科	自然事象と自分の生活に関係づけ調べる活動を重視し、自然事象とのよりよい関係をつくり出していく子供を育てる。
家庭科	自分と家族とのかかわりを深めていく活動を重視し、よりよい家庭生活を創造していく子供を育てる。
音楽科	子供自ら音楽とのかかわり合いを深める活動を重視し、生涯にわたる自己の音楽の楽しみ方を身につける子供を育てる。
体育科	運動へのかかわり方を追究、創造する活動を重視し、生涯にわたって自ら進んで運動に親しみ続けていこうとする子供を育てる。
図工科	材料をもとにした想像的な造形活動を重視し、主体的に創造する子供を育てる。
表現科	多様な表現活動を重視し、豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう子供を育てる。
生活環境科	生活づくりの活動を重視し、生活環境とのよりよい関係をつくり出す子供を育てる。
領域 「人間」	人にかかわる体験活動とその経験化をはかることを重視し、ともに生きることの喜びを味わい豊かにする子供を育てる。
特殊教育	子供自身が対象に働きかけ、満足感や充実感を味わう活動を重視し、自立的な生活を営む子供を育てる。

研究の評価とまとめ

1. 研究開発の内容について

(1) 編成した教育課程の特徴について

- ① 教科構成を子供（学習者）のもっている感覚、思考、行動に対応させて3つの教科群とそれをささえる領域にまとめ(P114 図18)、新教科、新設教科、新設領域を設定した(P114図28)。
- ② 低学年に表現科、中学年に生活環境科という新設教科を、また道徳と特別活動を統合して領域「人間」という新設領域を設定して実践研究を行うとともに年間指導計画を作成した。これら新設教科・領域は、どれも総合的学習の様相を強くもっており、頭だけでなく、心と体で学ぶ学習が多くなっている。
- ③ 子供の感覚、思考、行動を大切にすることは、子供主体の活動を重視することである。この考え方によって、学習の主体者である子供の心を具体的な活動によって十分耕し、対象にかかわってみて生じる主観的な見方も大切にしながら、認識を深めていく学習を志向することができた。これは、豊かな人間性を育む教育課程の編成へとつながった。
- ④ 内容設定の考え方を、子供主体の活動からみる教育課程の編成ということで、子供が生きていくことに必要な経験となったり、これからの学習に転移しうる資質や能力を育てる観点から活動の取り出しを行った。本校は、活動を内容と考えている。よって子供主体の活動は内容と方法を内包しており、真に生きて働く力の育成をめざしている。すべての教科の指導内容を新しく創ったという立場である。（ただし、価値ある内容（活動）の吟味にあたっては、各教科・領域とも現行の指導書を十分参考にしている。）

(2) 教育内容の構成・配列の有効性について

教育内容の構成を、本校では子供のかかわる環境（教育的価値の存在する空間、対象）と働きかけから規定している。例えば、領域「人間」では、「どのような人とどのように共生していくか」という視点から、子供たちが出会う大切な「人とのかかわり」を学習対象として「共生の仕方」を学習活動（内容）として「生命」「仲間」「福祉」「環境」「国際理解・協力」の5つの観点から設定している。

このように環境を各教科・領域から洗い出し、それを学習対象として活動を設定したことによって、次のような成果と課題が見られた。

① 児童の学びの姿から

- 「実際に～をしてわかったんだけど」「こんなふうになると～」など自分の働きかけを通し感じ、考え、認識している姿
- 自分自身の活動や働きかけの対象への価値を実感し、それを喜んだり、生活を楽しむことに生かそうとしている姿
- 楽しんでいる、困っている、夢中になっている、一緒に心配しているなど、学習時間における豊かな子供の表情
- 環境に自ら働きかけたり追究したりする姿やそれを保護・創造していこうとする姿

このような姿が、これまでの子供の反応や表情とは違った姿として、またこれまでも増して窺えるようになってきた。

② 基礎的・基本的事項の精選から

基礎・基本のとらえ方をどう考えるかによって、この項目についての述べ方が変わってくるであろう。知識・理解・技能の部分为基础と考えるのであれば、本校のカリキュラムは、基礎・基本についてのおさえはかなり不十分さを残すと考える。しかし、前述したように本校の考える学力観の立場に立てば、豊かな心、環境に旺盛に働きかけることのできる力、生活を豊かにすることのできる知識・技能が基礎・基本と考えている。つまり、子供たちが生きていく上で必要不可欠な経験となるものが基礎であり、子供たちが働きかける環境や対象に教育的価値を見出したり、味わったりすることのできる力が基本である。この基礎・基本に対する評価の難しさは残るが、これからの社会を生きる力は十分育てることができていると考える。

③ 学年の系統性から

本校では、子供の行う具体的な活動や体験の質や量、環境の広がりと言った観点から内容の系統づけ・配列を行っている。どの教科も、基本的には、かかわる環境（対象）やかかわり方、働きかけの質的・量的広がりや深まりを考慮している。

(3) 授業時間数について

まずこれまでの研究において、授業時間数に関する基本的な考え方を次のようにもっている。

現在指導内容の厳選ということがクローズアップされているが、現行の指導内容については、内容の軽重を考え、「これは削除していいのではないかと削減できるものではない。このことについては、本校と共同研究している福岡教育大学の教科教育を専門にしている大学の先生方からも同様の意見とご指導を頂いた。現在使われている「精選」や「厳選」という言葉は、今あるものからより価値高いものに絞り込むという意味をもった言葉である。本校では、精選や厳選という立場からではなく、まったく新しい立場から、教育内容を創るという立場で内容の設定と編成を行ってきた。

副主題からもわかるように、本校は子供主体の活動から教育内容を新しく作成している。子供が生きていくことに身近で、必要不可欠な具体的な活動や体験から内容の設定を行っている。

心（感じる）と頭（考える）、体（行う）全体で学ぶことが学習の基本であるので、教えられて事足りるもの（覚える学習）は、内容として考えないというのが、基本的な考え方である。逆に具体的な活動や体験を重視すると必要以上に時間がかかる。しかし、子供にとって必要不可欠な活動には時間にゆとりをもたせ、学習活動にもゆとりをもって取り組むというのが基本的な考え方である。

本校では、授業時数の削減ということを前提におきながら教育課程の編成を行っていないが、国語科の時間が第1～4学年まで週2時間、第5、6学年は、週1時間の削減を行っている。これは、国語科が、現行の「表現」「理解」の2領域を見直し、ことばと積極的にかかわり情報を操作する過程を重視した内容の再構成を行っており、重複する内容は統合し、内容を削減したからである。

算数、社会、理科、生活、音楽、図工、家庭、体育は、結果的に現行の週時間数と同じである。しかし、各教科の内容を見れば、例えば算数では、数学的な活動から内容を設定しているので、現行の指導書では第4学年の内容である大きな数（億や兆）を第3学年の万進法でかぞえる学習と統合し行うことが可能である。そのことによって時間数の削減が行われ、その学年の内容としての余裕がもてるようになってきている。このようなことを各教科において行うことは可能である。

新設教科・領域においては、生活環境科が週6時間あり、十分な具体的な活動や体験を行うことができるようになってきている。内容を考えたとき、週5時間へと減らすことも可能である。一方、領域「人間」においては、週2時間であり、活動内容から考えたとき、年間計画実施上やや無理がきており、もっと時間が必要という意見が出ている。

(4) 指導方法の変化や発展・特徴について

子供主体の活動から学習を考えるとすることは、子供の学びが変わるということである。よって当然教師の子供観や指導観は問い直され、指導方法も変わってきている。その概要は以下の通りである。

- ① 一人一人の活動を保証し、学習の価値をそれぞれの子供が自覚できる活動の構成を図るようになってきた。
- ② 個人では経験できない魅力ある社会的・集団的体験を豊かにする活動を、意識的に多く設定するようになった。そして、自分を取り巻く人間の生き方を見つめる活動や学級・学年での実践活動を通して、感性や実践力、社会性や協調性を培っていくことができた。
- ③ 学習の場が教室に限定されなくなってきた。開発研究の指定を受けてから、なおいっそう教室を飛び出した授業が多くなってきた。西公園、大濠公園、伊崎浜など、近くの自然や公共の場、歴史資料館や市の図書館、老人介護施設など、野外に学習対象や場を設定する機会が増えてきている。それとともに地域の中の人材活用の機会と場が多くなった。特に生活環境科、領域「人間」は、人材発掘なくしては学習が成立しない部分がある。また国語科、生活科、社会科などもこれまで以上に積極的に地域の人とかかわっていく学習の構成を行っている。
- ④ オープンエンドの学習が多くなってきて、学習で得たものを1つにまとめるという学習はほとんどなくなり、自分自身の感じ得たことを自分なりにまとめ表現させるという形が多くなってきた。
- ⑤ 子供の興味・関心や能力差に応じ、活動の選択ができるよう、準備や場の設定に時間がかかるようになってきた。
- ⑥ 子供の活動を重視したり、学習が総合化してくると、子供が自由に動きまわられるだけの広い空間が授業として必要になる。今回、研究開発に向けての研究授業は、体育館や多目的ホール、ワークスペースといった場所で行われることが多かった。国語科や算数科の学習においても教室のみで行われることは少なかった。これからの学校には、子供の旺盛な活動に応える広いスペースや空間をもった場、また資料や作品などを十分に保管、展示できる場が必要になってきている。

豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう表現科学習

表現科部 樺島 穰 津本 修一

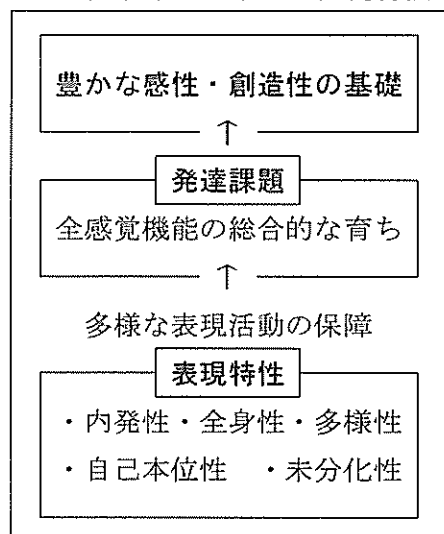
1. 表現科設定の理由

(1) 新時代に求められる人間を今こそ育てる

現代社会の急激な変化は、子供の育ちに様々な影響を与えている。従来、子供たちの遊びの中で育てられてきた自然的・社会的・文化的体験が失われつつある中で、感性の未熟さや生きる活力の乏しさが指摘されている。

激動するこれからの新時代を生き抜いていく子供たちは、これまでも増して心身ともに調和がとれ、主体的に考え、創造的に生きるための資質や能力を総合的に発揮していくことが求められている。そのためには、子供一人一人が他者と共感的に認め合いながら、自分自身のよさを実感し、自分の全てを発揮して自信をもって表現していくことができるような豊かな感性と創造性の基礎を身につけることが大切である。子供が創造的に表現する喜びを、今まで以上により一層味わうことができる教科設定の必要性がここにあると考える。

(2) 低学年児童本来の表現特性に応じ、発達課題を保障する



人間の感覚機能が急速に発達する時期は、幼児期から小学校低学年期であると言われている。低学年の子供たちにとって必要な発達課題は、全感覚機能を総合的に育てることにある。そのためには、言語、身体、音楽、造形などの多様な表現活動の経験を単独的、複合的、総合的に豊かにしていく必要があると考える。

また、低学年の子供たちの表現特性は、①本能的な表現欲求を有する内発性、②全感覚機能を働かせて表現する全身性、③生活表現と想像表現の未分化性、④自分本位の表現に浸り切る自己本位性、⑤様々な表現方法を複合的・総合的に取り入れる表現の多様性などがあげられる。この表現特性の中に、この後に育ちゆく豊かな感性と創造性の発達の芽を内包していると考えられる。

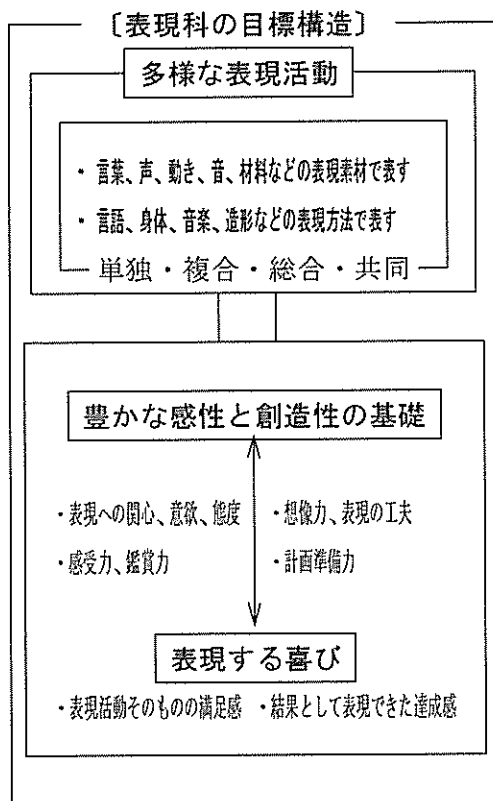
以上のように、これからの新時代に求められる人間像や低学年児童の表現特性に応じ、発達課題を保障する必要性から、表現枠に限界性のある従来の低学年音楽科、図画工作科などの表現領域を拡大、発展させ、新たに「表現科」を設定した。現行の音楽科、図画工作科は、これまでも音楽性や造形的な創造力などを育成し、多くの価値を担い成果も挙げてきた。しかし、専門的な教科枠や分化した表現技能にとらわれ、子供の表現欲求や表現内容、自由性のある表現方法の選択などの面で限界性があり、子供の多様な表現活動を十分に保障するまでには至らなかった現状がある。

表現科は、低学年の子供たちが価値ある表現対象や表現素材のよさや美しさを全感覚機能を総合的に働かせて感じ取り、言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法で多様に創造的に表現を工夫しながら、表現する喜びを味わうことのできる教科である。また、表現科は、低学年の子供たちに創造的に自分を表現していくことを保障するとともに、自己実現の喜びを味わわせることができる教科として価値があると考えられる。

さらに、表現科で育てられた旺盛な表現への関心・意欲・態度と表現する喜びの実感、全教育活動の“表し”の素地になると考える。

2. 本校の考える表現科の目標

多様な表現活動を通して、豊かな感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びを味わわせる



「多様な表現活動」とは、子供が言葉、声、動き、音、材料などの表現素材や、言語、身体、音楽、造形などの表現方法を単独的・複合的・総合的に取り入れて思いを表していく活動のことである。また、個人的な表現活動から共同的な表現活動へと発展していく場合もある。

「豊かな感性と創造性の基礎を培う」とは、子供が全感覚機能を働かせて刺激を受容する感覚や感情の育ちとともに、自分の価値判断で表現を工夫する過程と結果を積極的に見守ることである。

「表現する喜びを味わわせる」とは、自分の思いを表現していく過程そのものに浸り切る満足感や結果として表現できた達成感など生きる喜びにつながる快の感情を味わわせることである。表現科における学びの力を表現への関心・意欲・態度、想像力、計画準備力、表現の工夫、感受力・鑑賞力ととらえる。これらを総合的に働かせていくことによって豊かな感性・創造性の基礎の育ちとともに表現する喜びを味わわせることができると考える。

3. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「豊かに感じ取り」とは、子供が、過去の生活経験や身近な環境の中から、全感覚機能を総合的に働かせて表現対象のよさや美しさや楽しさなどを感受し、表現活動に向かうための想像性や表現されたものへの共感性を自ら発揮していくことである。

「創造的に表現していく」とは、子供が価値ある表現対象から全感覚機能を総合的に働かせて想像性を広げたり、深めたりしながら様々な表現素材や表現方法を工夫して表現する行為である。

「豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう」とは、価値ある表現対象から全感覚機能を総合的に働かせて、よさや美しさを感じ取り、様々な表現素材を生かして表現方法を取り入れ、表現活動そのものの楽しさに浸り切りながら自分の成長を自覚し、満足感や達成感を味わっていくことである。

(2) めざす子供の具体的な姿

- 表現対象から体全体を働かせて感じ取り、自分の思いをもとに表現活動そのものを楽しみ自分の成長を自覚している姿〔表現への関心・意欲・態度〕
- 多様な表現活動を通して、自分の思いを広げたり深めたりしながら、表現の工夫をしている姿〔想像力・表現の工夫〕
- 自分の思いをもって、表現のための計画や準備を進んで行う姿〔計画準備力〕
- 表現対象から美しさを感じ取り、表現活動のよさや楽しさを味わう姿〔感受力・鑑賞力〕

4. 表現科内容の考え方

全教育活動の“表し”の素地となる学びの力は、価値ある表現対象から感じ取った思いを様々な表現素材や表現方法で表していくという表現への関心・意欲・態度が中心となる。

そこで、多様な表現活動を表現方法の面から大別すると、中心となる表現素材や表現方法で表わされる場合と既習の表現経験を生かして様々な表現素材や表現方法を取り入れて表わされる場合に分けられる。内容構成は、この2つの表現方法により大きくA内容とB内容に分ける。

各内容における関連性や発展性に十分に考慮し、表現内容や表現方法の枠組みを柔軟に認めるようにする。

さらに、よさや楽しさを感じ取り味わう内容を単独では取り扱わないようにし、各内容の表現活動と関連した内容として一体的に取り扱う。

「A：中心となる表現素材や表現方法で表す」内容

- (1) 言葉、声、動き、音、材料などの中から、中心となる表現素材で楽しく表現遊びをする。
- (2) 言語、身体を取り入れながら、音楽、造形を中心とした表現方法で楽しく表現する。
- (3) よさや楽しさを感じ取り味わう。

「B：表現経験を生かして様々な表現方法で表す」内容

- (1) 言葉、声、動き、音、材料などの様々な表現素材を取り入れて楽しくなりきり表現をする
- (2) 言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法を取り入れて楽しく劇的に表現する。
- (3) よさや楽しさを感じ取り味わう。

A内容の(1)は、音素材としての声、手づくり楽器、打楽器などによる音集めや音づくりを楽しむ表現遊びや紙類、粘土、描画材などの材料をもとした表現遊びの内容である。

表現素材をもとに、感覚、感情、想像性などを育てることがねらいである。それぞれの表現素材が、単独的に取り入れられる場合もあれば、単独的から複合的に取り入れられて表現遊びが発展する場合も柔軟に認めるようにする。

A内容の(2)は、楽曲や題材などの音楽的表現、造形的表現を中心として、他の表現方法も主題をより豊かに表現していくために選択的に取り入れていくものである。音楽的、造形的な表現活動の内容設定は、相互の時間配分の均衡を考慮して行うようにする。

B内容の(1)は、自然物、動物、虫、乗り物などの美しさや楽しさを内包した価値ある表現対象に、言葉、声、動き、音、材料などの様々な表現素材を取り入れて楽しくなりきる表現活動の内容である。全身的な表現活動により表現対象と一体的になりきり、模倣的表現から想像表現へと発展させていくようにする。

B内容の(2)は、時間的流れや空間的な広がりをもつ創作的なお話や物語などを友達と共同してより劇的に表現することを中心とした内容である。なりきり表現と相互に関連し発展する場合も十分に考慮する。

各内容の(3)は、自分が表現対象や表現活動から感じ取ったり、友達が表現したもののよさや楽しさを味わったりする内容を、表現活動と一体的に設定する。

5. 年間指導計画作成の考え方

(1) 多様な表現活動の経験を豊かにする年間指導計画の作成

多様な表現活動の経験とは、言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法を単独的、複合的、総合的、共同的に取り入れながら、思いを表現していく活動を積み重ねていくことである。

多様な表現活動の経験を豊かにする年間指導計画の作成とは、低学年の2年間を通して、中心となる表現素材や表現方法で表すA内容から既習の表現経験を生かして様々な表現方法で表すB内容へと表現経験の深まりと広がりを考慮しながら意図的・計画的に内容配分、内容配列、題材開発、題材配列を行っていくことである。

(2) B内容の授業時数をA内容の授業時数以上とする内容配分

中心となる表現素材や表現方法で表すA内容の表現経験を生かして、様々な表現方法で表すB内容のなりきり表現や劇的表現がより豊かにできるように、全授業時数の内容配分をB内容の授業時数をA内容の授業時数以上とする。各題材授業時数は、A内容が1題材約2～4時間、B内容が1題材約6～10時間とし、弾力的に運用する。

〔第1学年、第2学年の全授業時数のA内容とB内容の配分〕

	A内容	B内容	年間授業時数
第1学年	64時間	72時間	136時間
第2学年	65時間	75時間	140時間

(3) 表現素材による表現遊び、表現対象からのなりきり表現や劇的表現の題材開発と題材配列

表現素材をもとに感覚、感情、想像性を主に育てるA内容(1)の表現遊びの題材開発や価値ある表現対象から想像性や共感性を主に育てるB内容(1)のなりきり表現、B内容(2)の劇的表現の題材開発を行う。

子供の表現特性や発達課題を考慮し、表現素材による表現遊びの題材を1学期に多く配列し、なりきり表現、劇的表現の題材を2学期以降に多く配列する。

〔第1学年 A内容表現遊びとB内容なりきり表現・劇的表現の題材数と時数配当の例〕

	A内容(1)表現遊びの題材数	A内容(2)音楽、造形を中心とした表現方法の題材数	B内容(1)なりきり表現(2)劇的表現の題材数
第1学期	5題材(20時間)	3題材(12時間)	2題材(12時間)
第2学期	3題材(10時間)	3題材(10時間)	5題材(40時間)
第3学期	0題材	2題材(12時間)	2題材(20時間)

(4) 自然や季節感、学校行事、他教科との関連を考慮した題材開発と題材配列

子供の表現対象に触れる感動体験や身近な生活実態に応じるように、自然や春、夏、秋、冬などの季節感、学校行事、生活科などの学習経験との関連や体験想起をもとにした題材開発と題材配列を行う。

〔第2学年 自然や季節感・生活科との関連や体験想起をもとにした表現科題材の例〕

季節	生活科単元	表現科題材
春	あらつちの春をたんけんしよう	→ 春の花たちのパーティー A(2)
夏	あらつちの夏とあそぼう	→ 雨つぶたちの大ぼうけん B(1)
秋	あらつちの秋を楽しもう	→ 秋をみんなであらわそう B(2)
冬	あらつちの冬をしらべよう	→ 雪さんとどうぶつたちがであったらB(2)

(5) 低学年の1年間、或いは2年間を通して、各A、B内容毎の連続・発展を考慮した題材配列
A内容の表現遊びや音楽、造形を中心とした表現方法による内容が、1学期から3学期へと連続・発展していくように題材配列を行う。

〔第1学年 A内容 音楽を中心とした内容の連続・発展を考慮した題材配列の例〕

音楽を中心とした題材	題材の主なねらい
リズムあそびはたのしい A(1)	鈴、カスタネットなどの打楽器に親しみ楽しくリズム打ちができる
がっきさんかよくね A(1)	ハモニカ、鍵盤ハモニカなどの旋律楽器に親しむことができる
みんなでのいがかう A(2)	楽しく簡単な合奏曲を合奏することができる

〔A内容 造形を中心とした内容の2年間の連続・発展を考慮した題材配列の例〕

第1学年題材	第2学年題材
なんでもペッタン A(1)	→ うつしてあそんでそれからそれから A(1)(2)
ならべてつんでどこまでも A(1)	→ ひらいてむすんでつないでみたら A(1)
なんでもねんどランド A(1)	→ みんなあつまれ！ねん土ゆうえんち A(2)

第1学年で経験した表現内容や表現方法が第2学年に発展していくように、多様な表現活動の経験を徐々に豊かにしていきながら、既習の表現経験を生かして様々な表現方法を取り入れて思いを総合的に表すことができるような題材配列を行う。

〔B内容 様々な表現方法で表す内容の2年間の連続・発展を考慮した題材配列の例〕

第1学年題材	第2学年題材
あきのむしさんになって B(1)	→ きれいなふくをもらった虫さんたちの人形げき B(2)
あきの木のみやはのお話 B(1)	→ 秋をみんなであらわそう B(2)
ミュージカル「ありとときりぎりす」 B(2)	→ ミュージカル「はだかの王さま」 B(2)

6. 学習指導上のポイント

(1) 子供が表現対象から感じ取った思いをもとに想像性を誘発できるお話を教師が提示すること
価値ある表現対象との体験想起から、創造性の核となる想像性を誘発させる必要がある。子供らしいファンタジーの内容と表現活動の方向性や空間性・時間性を含み込んだ教師自作のお話を子供に読み聞かせ、想像的な初めの思いを感じ取りノートに表現させる。

(2) 子供の多様な表現活動に応じるために、表現活動の特性別に場や時間を保障すること
言語、身体、音楽、造形などの多様な表現活動を個人的に或いは共同的にできるように、表現活動の特性に応じた材料や楽器などの物の準備や場所を確保する。また、表現活動の内容や段階に応じて弾力的に時間を配分するようにする。

(3) 子供の多様な表現活動をより活性化するために、表現活動別にT・Tを取り入れること
多様な表現活動を助言、補助する支援をはじめ、表現活動をより活性化させるために、教師の感性を生かしたT・Tを取り入れる。子供の多様な表現活動に積極的に刺激を与えるため、場面効果や場面転換を図る効果音を入れたり、劇的空間をつくりだす場や情景物の準備をしたり、新たな材料や道具の提供をしたりすることなどを表現活動別に行う。

(4) 子供同士の相互鑑賞などをもとに、自分の表現活動のよさに気づくことを促すこと
友達の表現活動のよさを見つける相互鑑賞などから、自分の表現のよさに気づくことができるようにする。また、自分の表現活動に対する満足感を味わいながら友達の表現のよさや工夫点を取り入れ、次なる表現活動へ生かしていくように促す。

7. 実 践

〔事例1〕第2学年 もしも空をとべたなら

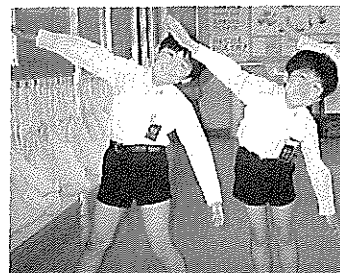
津本 修一

(1) 目 標

- ① 「空の旅」の表現活動に取り組み、なりきり表現の楽しさを味わう経験を豊かにすることができる。
- ② 想像した「空の旅」を様々な表現方法を取り入れながら楽しく表現することができる。

(2) 指導の実際 (8時間)

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 自分が表現したい「空の旅」の様子を想像し表現活動への意欲と見通しをもつ。(1)	1. 「もしも空をとべたなら」について話し合い、なりたいものや空の旅の様子を想像する。 (1) テーマについて話し合う。 ・もしも、空をとべたなら、遠くまで行ってみたい。 ・(動物図鑑を調べながら)空をとべる動物にはいろいろなものがあるね。 (2) 自分がなりたい空を飛ぶものを選択し、旅の様子を想像する。 ・わたしは、ちようちよになって虹のすべり台をすべってみたいです。 ・ぼくは、つばめになって空をすいすいとんでみたい。
2. 自分がなりたい空を飛ぶものになりきり、旅の様子を表現する。(6)	2. 空の旅の様子を様々な方法で表現する。 (1) なりたいものを様々な方法で表現する。 ・なりたいものの衣装/お面づくり ―― 蝶の触覚、鳥の翼、くちばしなど ・なりたいものの動きの工夫 ―― 翼のはばたき、舞い上がる様子など ・なりたいものの鳴き声、効果音など ―― 声や音楽素材を使った表現など (2) 空の旅のストーリーをつくって旅の様子を表現する。 ・4つの場面の旅のストーリーづくり(雲の上/嵐の場面/虹/太陽) ・わたしは、雲の上で「ふわふわダンス」をおどったよ。 ・ぼくは、虹をくぐってお日さまにあいさつをしたよ。
3. 「空の旅」の発表会を行い、表現活動の成就感・満足感を感得する。(1)	(3) 「空の旅」の発表会を行う。 ・いろいろな場面があっても楽しく旅ができました。 ・雲の上の音楽や嵐の音があったので旅の様子をほんとうの様に表すことができてうれしかったです。



〈空をすいすいとんでみたい〉



〈子供がつくったすずめの衣装〉



〈発表会の様子〉

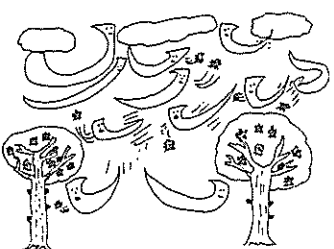
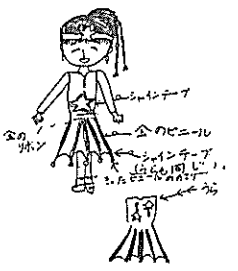
(3) 考 察

本題材の指導によって、子供一人一人の豊かな発想による空の旅を、なりたい動物の姿、ストーリー、動き、効果音などで多様に表現する姿がみられた。また、前年度に引き続き子供のこれまでの表現経験を生かしたB内容の題材の指導計画の仕組み方として、子供のイメージをふくらませる段階→子供一人一人が様々な表現素材や表現方法を用いて多様な表現活動を展開していく段階→表現の相互鑑賞による表現の楽しさ、よさを感じ得る段階で構成する基本的な活動構成が確立されてきた。さらに、子供の表現活動を促す支援としては、空間的な支援(活動別スペースの確保など)、時間的な支援(ストーリー作成やBGMの活用など)、物的支援(イメージを助ける視聴覚的資料の活用、表現素材の提供など)の有効性が明らかになってきた。

(1) 目 標

花と鳥と風と月の様子を豊かに想像し、自分の思いに応じて言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法を工夫し、友達と共同して創造的に表現していく喜びを味わうことができる。

(2) 指導の実際（8時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 生活経験をもとに感じ取った花鳥風月のよさや美しさを想起し、想像的な思いを絵や文で表現する (2)	1. 生活経験をもとに、花鳥風月から想像的な思いを絵や文で表す。    〈お月様の光の雫の様子〉 〈花鳥風月たちが会って行く様子〉 〈飾りづくりの計画準備カード〉
2. 花鳥風月の様子を言葉、材料、動き、歌などをもとにして友達と共同しながら多様な表現活動を楽しむ。 (5)	2. 自分が表現したい花鳥風月の様子を多様な表現方法で表す。 ・ 一人での動き、声に出す、飾りづくりなどの個人的表現 ↓ 〈個人的表現から共同的表現へ〉 ↓ ・ 共同的な動き、お話づくり、歌や踊りなどの共同的表現    〈桜の花びらの様子を表現する子供たち〉 〈楽しく生活する鳥の様子を表現する子供たち〉 〈風が吹き香る様子を表現する子供たち〉
3. 自分や友達が表現した花鳥風月の様子を振り返り、よさや美しさを感じ取り味わう。 (1)	3. 自分や友達が表現した花鳥風月の様子を振り返り、楽しく見たり、聴いたりする。    〈友達の表現のよさを感じ取る子供〉 〈光り輝く月の雫たちを表現する子供たち〉 〈友達との共同表現の振り返りカード〉

(3) 考 察

本題材において、子供たちは、花と鳥と風と月の様子の体験想起をもとに感じ取り、想像力を働かせてなりきって動いたり、出会いと別れのお話をつくったり、材料で飾りをつくったり、歌や踊りなども取り入れて楽しく表現していった。また、時間的な流れと空間的な広がりをもたせる場の設定や表現活動別のT・Tによる支援によって、子供たちは友達との共同的な劇的表現へと発展させていくことができた。これは、本題材を年間指導計画の中で、自然界のよさや美しさを表現対象とした既習題材の表現経験と関連させた総合的な題材として位置付けたことが効果的であったためと考える。

8. 研究のまとめ

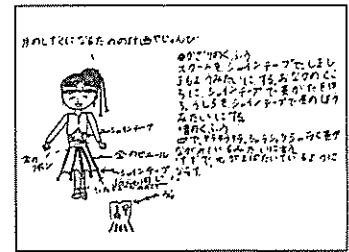
(1) 研究の成果

① 子供の姿容

表現科学習において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主的活動の姿

2年生題材「花と鳥と風と月の物語」では、自然の美しさや不思議さから感じ取った想像的な思いをもとに、自分になりたい飾りの材料の計画や音づくりのための楽器の準備を可能な限り自分で進んで行うようになったり、必要な材料がある場合は、教師に進んで要求するようになった。資料①は、子供が月の雫になりきるために、カラービニルなどの材料の計画やつくり方を考えた計画準備ノートである。



〈資料① 月の雫の飾りづくりの計画準備ノート〉

写真①は、月の雫と桜の花びらたちがなりきり表現を楽しみながら、想像的な思いをより豊かに表すために、友達と共同的に出会いや別れのお話を考え、歌や踊りで劇的表現をつくりあげている姿である。友達の表現のよさや工夫点に気づきながら共感的に見たり聴いたりして、さらに楽しく自分の表現に没入する姿が見られるようになった。



〈写真① 桜と月の雫が出会った共同的な劇的表現〉

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

2年生題材「秋をみんなで表そう」では、秋の虫たちの鳴き声を楽器でつくりながらお話もつくって動きで表し、最後は、「虫のこえ」という合奏へ発展させていった。写真②は、「きれいに鳴く虫さんたちがあつまって音楽会ができたのでとても楽しかった」と音づくりから合奏への高まりと多様な表現活動の楽しさを味わっている子供の姿である。



〈写真② 秋の虫たちの歌や合奏の音楽会〉

② 表現科における豊かな学力の育ち

表現科では、豊かに感じ取る心と創造的に表現する喜びを味わわせることを大切に考える。そこで、次のようなアンケートを行い、育ちを評価した。

ア. 評価の方法

〔質問1〕今までの表現科の学習で、とくに「きれいだな」「ふしぎだな」と感じた学習は何ですか？（複数回答）

〔質問2〕今までの表現科の学習で、自分で工夫して表そうと思ってきましたか？

イ. 評価結果

〔質問1の結果〕

表現対象からの感じ取りと表現する喜びについての回答が、「鳥や動物の形や動き」(86%)、「雲や雨(海)や雪」(73%)、「花や落ち葉の色や形」(60%)、「月や星の光」(49%)、「風」(41%)、「虫の形や動きや声」30(%)となっている。視覚的、聴覚的に感じ取れる表現対象を中心に、子供たちが感覚を働かせて感じ取ってきた結果であると言える。

〔質問2の結果〕

創造的な表現の工夫についての回答が、「いつも工夫して表してきた」(88%)、「ときどき工夫して表してきた」(12%)となっており、常に自分の思いに応じて自分なりの表現の工夫を試みてきており、創造的な表現の工夫をする行為、態度の育ちが表れてきていると言える。

③ 子供の意識の変容

表現科では、子供の多様な表現活動から学習内容を設定し、この多様な表現活動の経験を豊かにする視点から年間指導計画を作成し、指導実践を行ってきた。そこで、2年生の子供たちに対して、自分の思いを表していくための多様な表現活動についての意識調査を行った結果が次のようである。

〔調査1〕自分が「きれいだな」「ふしぎだな」「おもしろいな」などの感じたことを表すときどんなやり方で表そうと思いますか？

- 動き、言葉、音や声、材料などいろいろな表し方を組み合わせて表したい。（90％）
- 動き、言葉、音や声、材料などの表し方の中から一つだけ選んで表したい。（10％）

〔調査2〕表したいことを自分一人で表したり、友達と一緒に表したりすることについて、どう思いますか？

- 表したいことを友達と一緒に表したい。（95％）
- 表したいことを自分一人で表したい。（5％）

調査1より、全体の90％の子供たちは、多様な表現方法を学習の中で組み合わせて思いを表したいという意識をもっていることがわかる。これは、現行の図工科、音楽科などの教科枠では実現できない子供たちの表現に対する意識面の変容であると考ええる。

調査2より、全体の95％の子供たちは、「表したいことを友達と一緒に表したい」と、友達と共同的に表現活動をつくりあげていくことの喜びを実感している。

多様な表現活動をもとに、友達とも共感的に共同していくという“生きる力”につながる意識面の変容が、調査結果から明らかになった。これらの子供たちの意識面の変容からも、表現科を新教科として設定した意義があると考ええる。

(2) 全体考察

多様な表現活動の経験を豊かにする年間指導計画の作成と展開を通して、次のことが明らかになった。

① 豊かに感じ取り創造的に表現していく子供の姿について

感性と創造性は表裏一体であり、自然とかかわりながら想像的な思いを感じ取る体験や表現活動を通して、子供の成長発達における感覚、感情、想像力などの育ちが表れる。また、多様な表現活動は、子供たちにより一層表現する喜びを味わわせることができると考える。

② 内容設定について

多様な表現方法を活動であると同時に内容であるにとらえ、主に表現遊びや音楽、造形を中心としたA内容となりきり表現や劇的表現のB内容によって内容設定を図ってきた。特に、劇的表現のB内容の設定によって、表現活動が複合化、総合化、共同化され、多様な表現活動の経験を一つの題材を通して豊かにすることができたと考ええる。

各内容における学期間、学年間の発展性や、A内容とB内容の相互の関連性や発展性について、今後検討する必要がある。

③ 題材開発、題材配列について

表現遊びは、感覚、感情、想像力を育てることにつながり、有効な題材開発ができた。また、劇的表現の表現対象を自然や季節、生活科などと関連させて行ったことは、子供たちの自然に対するよさや美しさを感じ取らせるうえで有効に働いた。

今後、題材数をさらにまとめて、総合的な題材を増やしながら配列させていく必要がある。

身近な環境とのよりよい関係をつくる生活環境科学習

生活環境科 芋生 修一 今林 康治

1. 生活環境科設定の理由

生活環境科は、次のような理由から設定した。

1つ目は、身近な環境の変化に対応して自分の生き方を考えていく教科の必要性からである。

子供たちを取りまく環境が、国際化・情報化の進展、環境の悪化にともなって目まぐるしく変化をしている。このような環境の変化のなかで子供自身がどのように生きていくのか考え、行動していく力を培っていくことはこれまで以上に大切になってきている。しかし、対象とする環境が大きすぎるとは子供自身が考えていく切実感がともないにくい。そのために、環境に適応してすぐに行動できる範囲での学習において、子供たちが、それぞれ興味をもった対象について追究し、その結果を総合的に見て判断し、行動していくような主体的な活動の姿が求められている。このようなことから、子供の興味・関心を基本にし生活に根ざした身近な環境を対象としながら、共同で学び合う教科が必要となってきた。

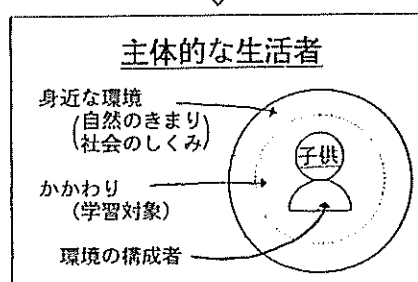
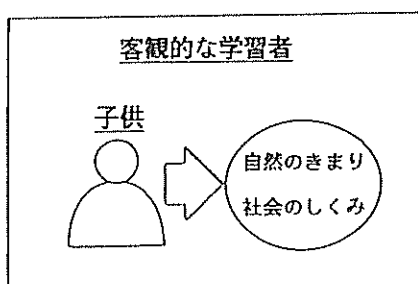
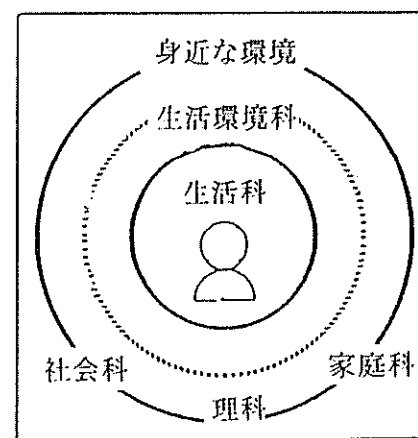
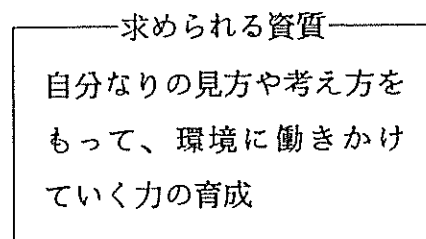
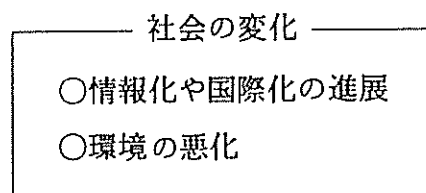
2つ目は、生活科で培ってきた資質・能力を中学年や高学年にまで伸ばしていくという点である。

これまで子供たちは、生活科の学習を通して、主体性や能動性を伸ばし、豊かな創造力を育みながら、自己の願いを達成してきている。また、体験を通して自己表現・自己実現していくことを学習の基盤としていた。生活環境科は生活科の同様に子供たちの体験や具体的な活動を核にし、その追究の過程において科学的な見方・考え方を養っていこうとするものである。そのような学習を通して子供たちは、少しずつ対象を客観的に見られるようになり、高学年では、自然と社会とをはっきりと区別して考えるようになる。

3つ目は、子供たちを客観的な学習者ではなく、環境の構成者であり主体的な生活者であるにとらえ直したことである。

子供たちは、自分の生活に密着した環境のなかで自分自身の在り方や生き方について考え、自分にとって環境のもつ意味や価値を見だし、環境のなかで生きている一員として自分ができることはないか、何をしなければならないかといった態度を育むことをめざしている（生活文化の創造者）。

これらのことから、生活を支えるその身近な環境とのかかわりをより調和的な関係へと高めたりつくりかえたりすることができると子供を育てていくことが大切になってくる。



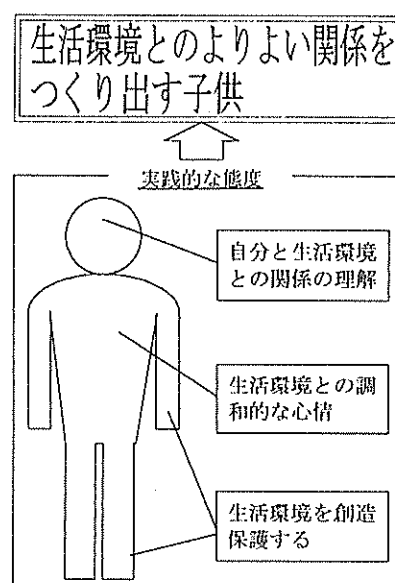
2. 本校の考える生活環境科の目標

自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、具体的な活動や体験を通して、環境構成者としての主体的な見方・考え方を養い、生活環境とのよりよい関係をつくっていかうとする実践的な態度を育てる。

3. 生活環境科の目標の考え方

自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつとは、子供自身が行動できる身近な環境（生活環境）に対する働きかけやその応答に関心をもつことである。すなわち、子供が生活環境での営みの中で体験したことから、もっと体験したい、確かめてみたいという思いや願いをもつことであると考えている。そのため、子供によっては、関心をもつ対象が社会事象とのかかわりであったり、自然事象とのかかわりであったりしていくことは、当然起こってくる。このような自分とのかかわりに関心をもつことを、学習の出発点として追究していく課題を設定するために、子供の主体的な活動が期待できる。

環境構成者としての主体的な見方・考え方を養うとは、自分の課題を追究していくために調査・取材・観察実験・栽培・飼育などの具体的な活動や体験を通して、生活環境のもつ自分にとっての価値や意味を考えていくことである。そのためには、かかわりに対する認識を深めていく必要があり、自分とのかかわりの中にも仕組みやきまりなどがあることを科学的にとらえていくことが大切である。そのことをもとに、友達とのかかわりにも目を向け、生活環境の中で生活している一人として総合的に整理して、かかわりに対して自分なりの判断をつくっていくことが主体的な見方考え方を養っていくことになる。



生活環境とのよりよい関係をつくっていかうとする実践的な態度とは、生活環境の中で生活している一人として判断したことをもとに、調和的な関係を求めていつでも行動化できる心の構えのことである。そのために、調和的な関係をつくることの価値を十分にとらえておくことが大切である。調和的な関係とは、自分と生活環境とがこれまで以上によりよく存在できる価値あるものにつくりあげたりするためのかかわり（生活環境の創造）や、今あるすばらしい関係を保ったり守ったりしていくためのかかわり（生活環境の維持・保護）のことである。

4. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

身近な環境とのよりよい関係をつくるとは、子供が働きかけることのできる環境に対して調和的な関係をつくっていくために、積極的に行動していくことである。自分自身が生活し行動している環境は、これまでに人々の営みや自然のしくみやきまりのなかで培われてきたものであることをとらえ、これから自分自身がどう行動していけばよいかを考え、行動していくことは、子供が自分の在り方、生き方を考えていく素地となっていくと考えている。また、生活環境科の目標は、よりよい関係をつくっていくことの価値を子供自身が体験していくことから育っていくと考える。

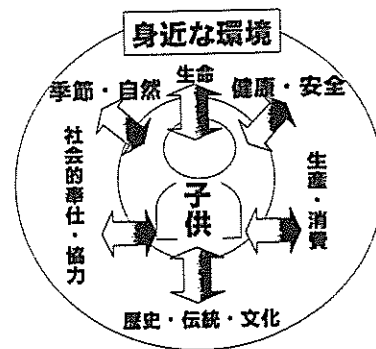
(2) めざす子供の具体的な姿

- 自分と生活環境とのかかわりを見直し、もっと体験したいこと、確かめてみたいことなどの思い願ひから、よりよい関係を求めて追究課題を設定することができる子供。
- よりよい関係を求めて設定された課題をもとに、自分と生活環境とのかかわりの中にある仕組みやきまりを科学的にとらえる子供。
- 友達と生活環境とのかかわりの中に、ある仕組みやきまりを総合的に考えながら、自分にとっての生活環境とのかかわりの意味を判断している子供。
- 自分なりに判断したことをもとに、自分が直接働きかけてできることから、積極的に行動に移している子供。
- 自分と生活環境とのかかわりを振り返り、その関係の深まりや自分の成長を感じている子供。

5. 生活環境科の内容の考え方

(1) 学習対象選定の視点

生活環境科の目標に迫るために、どんな事物・事象に出会わせるかが大切になってくる。そこで、子供たちの身近な環境とのかかわりから、ア 生命、イ 季節・自然、ウ 健康・安全、エ 歴史・伝統・文化、オ 社会的奉仕・協力、カ 生産・消費といった学習対象の視点を設定します。



(2) 学習内容を設定する観点

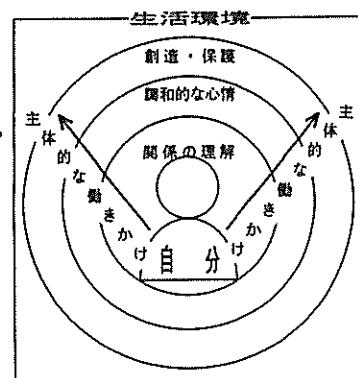
生活環境へのかかわり方の姿は、次の3つがあると考えている。

A 自分と生活環境との関係の理解

社会や自然の仕組みやきまりそのものの理解を目的とするのではなく、仕組みやきまりの理解とともに事象と自分とがどんな関係にあるのかを知ることを目的としている。具体的には、まず最初に体験や見学・調査などを行い、今の自分と生活環境とのかかわりをありのままにとらえ、解決すべき問題を明らかにすることである。すなわち、関係の理解は、「自分にとっての生活環境」を意識するため、自分も環境の構成者であるという自覚を促していくことになる。

B 生活環境との調和的な心情

生活環境の仕組みやきまりのすばらしさ、自分にとっての価値を感じ、自分も何か役にたちたいという思いや願いをもつことである。具体的には、解決のために積極的に生活環境に働きかけていくことで、認識が高まるとともに心情の高まりも現れてくるということである。このことで、認識と心情の高まりが思いや願いの高まりとなって現れ、実践する内容や方向性を決定していくことになる。



C 生活環境を保護・創造する態度

生活環境との関係をどのように高めていくか、その高めていく内容や方向性を明確にすることである。創造とは、自分にとっての社会や自然の仕組みやきまりをもっとよりよいものにするために生活の仕方を変えたり、変えるように社会に働きかけたりすることである。一方、保護とは今ある社会や自然の仕組みやよさを十分に感得・体得した上で、それらを受け継いで実践したり守っていったりすることである。すなわち、この創造や保護を行うことで自分と生活環境との相互的な関係や調和的な精神の大切さをより一層学んでいくことになる。

(3) 生活環境科の学習内容

関係の理解、調和的な心情、保護・創造する態度という3つの観点から学習対象を分析し、次のような学習内容の考え方をもとに具体的に設定する。

学習対象の視点	観 望 への かかわり方			学 習 内 容 の 考 え 方
ア：生命	関 係 の 理 解	調 和 的 な 心 情	保 護 ・ 創 造	身近な動植物や人の体のつくりをその活動や成長の様子からとらえ、その営みの神秘さを感じて人や動植物の生命を大切にすること。
イ：季節 自然				身近な自然を観察したり、行事に参加したりして、地域の環境と人や動植物との関係をとらえ、そのすばらしさを感じて環境を守ろうとすること。
ウ：健康 安全				地域の人々が健康で安全な生活を営むための仕組みやきまりを調べ、それらをうまく利用することを考えてよりよい生活を願うこと。
エ：歴史 伝統 文化				地域の歴史や伝統・文化的施設を調べ、人々の願いについて考えて自分も地域社会の一員として参加したり協力したりすること。
オ：奉仕 協力				地域での奉仕活動の様子を調べ、自分も役に立ちたいという思いをもって進んで参加したり協力したりして、よりよい環境づくりを行うこと。
カ：生産 消費	A	B	C	地域の環境を生かした生産活動の様子や自分たちの消費活動の様子を調べ、地域の人々や自分の生活が豊かになるように願って、それらを工夫すること。

6. 年間指導計画作成の考え方

(1) 単元設定の手続き

- ① 子供たちにかかわらせていきたい具体的な事物・事象の中には、生活環境科が設定している学習内容が複合的に存在していることから、その事物・事象の中から学習内容を取り出し、活動構成化して単元を設定する。

○ 3年生の例：「花いっぱい町」のなかに存在している学習対象の視点と学習内容

※ 主にアとオの視点から

学習対象の視点	ア：生命	オ：奉仕、協力
学習内容	- 花がよく育つ土の性質（水の保水性や粒の大きさ）を理解すること(A) - 花の生育条件（日光、水、肥料等）を理解すること(A) - 花が大きくなることへの喜びの感得(B) - 花の継続的栽培(C)	- 花いっぱい運動をしている人の仕事内容、運動内容を理解すること(A) - 花いっぱい運動の社会を作っていく仕組みや手続きを理解すること(A) - 花いっぱい運動をしている人々の願いや苦勞への共感(B) - 花いっぱい運動に参画できる内容を考え、運動に参加する(C)

- ② 生活環境へのかかわり方・接し方の活動が、環境を理解し適応することから、調和的な心情を高めて環境を創造し保護することへと向かうようにする。

例えば、大濠公園を調べた子供達が、学習の最後になってしおりを作って配ろうといったり野鳥にえさを与えてやりたいと言い出すことである。

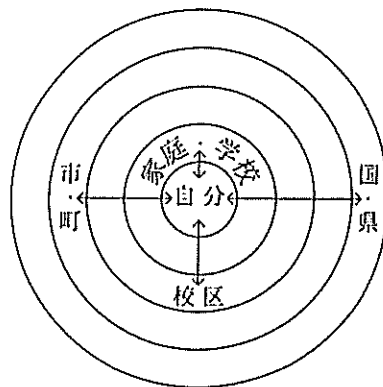
(2) 単元配列の考え方

- 季節・学校行事・地域行事等を考慮し、日常の生活との関連が図れるようにする。

例えば、春・夏・秋・冬などの季節の変化が見えるものとして3年生「学校周辺の自然観察」調査活動に適した時期として、夏の4年生「室見川」等、学校行事・地域行事と関連して3年生「学校や市のうつりかわり」「地域の祭」等を位置づける。

- 取り扱う身近な環境として、子供たちにとってすぐに操作でき
て関係がとらえやすい学校周辺を中心とした生活地域の環境から
出発し、自分との関係がとらえにくい環境へと深化発展していく
ようにする。

例えば、3年生の学習で学校周辺の様子を探索することから出発し、
4年生「福岡市の探検」の学習で福岡市にある施設や市の取り組み
を調べて適切に利用することへと発展していく。



- 身近な環境のなかでの自然に関する内容については、継続的な自然へのかかわりから自然の変
化に伴う人の生活の変化というように、自然と社会との結びつきや関係を発展的に取り上げる。

また、継続的なかかわり方が必要なものは順序性を考慮する。

例えば、3年生「花づくり・野菜づくり→花や野菜につく虫」、4年生「春夏秋冬といった自然と
生活の変化」である。特に、3年生単元では植物への継続的なかかわり方を必要とする。

(3) 単元配當時数

3年生では花や野菜、昆虫などのかかわりから継続的な観察を行っていくため、「季節」に多くの
時数を配当している。また、4年生では地域の生産活動や自分の消費活動の様子を調べていく中で、
現地での取材活動を多く取り入れていくため「生産、消費」に多くの時数を配当している。

7. 学習指導上のポイント

- (1) 自分と生活環境とのかかわりをつくる具体的な活動や体験を設定する。

具体的な活動や体験を行わせることで、生活環境の仕組みやきまりが自分にとってどのような意味
や価値があるのかを考えることができる。活動や体験が有効になるためには、今行っている活動や体
験が、後の活動や体験にどう役立っていくのか十分に吟味を行うことが必要である。

- (2) 地域社会でのよりよい人間関係を大切にする。

郊外での活動が多く、様々な人々とかかわりをもつことになるので、人と接するときの最低のル
ールは指導しておくことが必要である。また、人々と接することで、地域社会における新たな人間関
係が生まれてくる。

- (3) 表現の積み上げが見えるノートの工夫をする。

活動しながら考えたことや工夫したこと、体験しながら気付いたことや感じたことなどを書き残し
ていく。また、かかわった方へのお手紙を書くことも適宜行い、かかわりの継続や学習の価値を文章
として残していく。このことは、自分とかかわりを振り返ったり、別の事象にあてはめたりする
ときに子供自身の情報源になっていく。

8. 実践例

〔事例1〕 第4学年 わたしたちの大濠公園

今林 康治

(1) 目 標

- ① 大濠公園における人の活動に関心をもって自分が決めた対象に対して積極的に働きかけ、環境の保護を願って利用者への呼びかけを実行することができる。
- ② 大濠公園の魅力やよさを利用する人たちの取材や現地の観察を通して調べ、大濠公園の価値を自分なりに考えて表現し、調べたことと他の事象とを関係付けてとらえることができる。

(2) 指導の実際（20時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応								
1. 他の公園と比較して、施設・人・自然の違いから学習問題をつくる。 (4) 2. 野鳥や植物の観察 水の浄化・公園の清掃・公園の利用にかかわる人に取材したり、納得のいくまで対象にかかわって実験や取材を行ったりすることを通して、人と大濠公園との共存の関係をとりえて環境保護の価値を感じる。 (10) 3. 環境保護の観点を明らかにし、利用する人々に大濠公園のよさを伝える計画を立てて実行する。 (6)	1. 大濠公園と他の公園とを比べる活動を通して池の大きさや広さ、公園を利用する人の活動・動植物に気づいて問題を見出す。 ※大濠公園とのかかわりを見直す体験活動 ・なぜ、渡り鳥が来るのかたずねてみよう 2. 大濠公園のよさや相互関係をとりえる。 <2(1)野鳥の会の方と渡り鳥の観察をする子供> (1) 自分が決めた対象とかかわりながら、観察や施設の取材をする。 <table border="1"> <tr> <td>野鳥の会</td><td>植物友の会</td><td>公園事務所</td><td>公園利用者</td></tr> <tr> <td>・シベリアからの渡り鳥</td><td>・植物どうしの共生の関係</td><td>・池の水の浄化システム</td><td>・公園利用の目的と感じ方</td></tr> </table> (2) 水質の比較や訪れる方への取材など、観察や取材を広げる。 (3) 大濠公園の観察や取材で分かったことや考えたことをまとめ、発表会を通して「大濠公園を大切にする」という点でそれぞれの対象を関係付ける。 ※ 事象を総合的に関係付ける交流活動 3. 大濠公園の環境保護で自分にできることを考え、計画を立てて実行する。 (1) 大濠公園を再度観察し、施設や動植物のよさを知らせる計画を立てる。 (2) 公園を利用する人たちに対して、計画を実行する。	野鳥の会	植物友の会	公園事務所	公園利用者	・シベリアからの渡り鳥	・植物どうしの共生の関係	・池の水の浄化システム	・公園利用の目的と感じ方
野鳥の会	植物友の会	公園事務所	公園利用者						
・シベリアからの渡り鳥	・植物どうしの共生の関係	・池の水の浄化システム	・公園利用の目的と感じ方						

<2(1)野鳥の会の方と渡り鳥の観察をする子供>

(1) 自分が決めた対象とかかわりながら、観察や施設の取材をする。

野鳥の会	植物友の会	公園事務所	公園利用者
・シベリアからの渡り鳥	・植物どうしの共生の関係	・池の水の浄化システム	・公園利用の目的と感じ方

(2) 水質の比較や訪れる方への取材など、観察や取材を広げる。

(3) 大濠公園の観察や取材で分かったことや考えたことをまとめ、発表会を通して「大濠公園を大切にする」という点でそれぞれの対象を関係付ける。

<2(3)総合的に関係付けながら説明する子供>

3. 大濠公園の環境保護で自分にできることを考え、計画を立てて実行する。

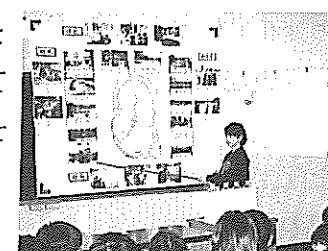
(1) 大濠公園を再度観察し、施設や動植物のよさを知らせる計画を立てる。

(2) 公園を利用する人たちに対して、計画を実行する。

<3(2)公園のよさを書いたしおりを渡す子供>



〈2(1)野鳥の会の方と渡り鳥の観察をする子供〉



〈2(3)総合的に関係付けながら説明する子供〉



〈3(2)公園のよさを書いたしおりを渡す子供〉

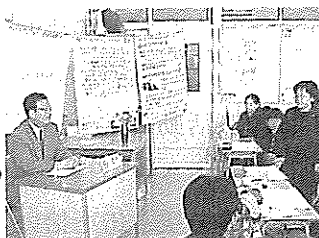
(3) 考 察

大濠公園を「大きい公園」とか「人がよく来る公園」と思っていた子供たちに、他の公園との比較調査活動を行わせたことで、その違いに気づいて自分の大濠公園に対する見方・考え方をありのままにとらえることができた（関係理解）。また、子供たちに大濠公園にかかわる人たちへの取材を行ったことで、大濠公園のばらしさと自分にとっての価値を見出し、自分も何か役に立ちたいという願いをもつようになった（調和的精神）。さらに、大濠公園のよさを伝えていく方法を計画させたことでパフレットやしおりをつくり、利用者に直接働きかけることができるようになった（環境の保護）。

(1) 目 標

- ① 福岡市が進めている国際交流としての町の変化や実際の交流の様子に関心をもち、自分たちにとっての国際交流の大切さや必要感をとらえることができる。
- ② 日韓交流を企画している在日韓国人の朴（パク）龍得さんの願いや福岡市の国際交流の意図に応えようと、自分たちにできる日韓交流を計画・実践することができる。

(2) 指導の実際（15時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 福岡市や友達が行っている国際交流を体験し、国際交流の楽しさを感じるとともに、国際交流に対する追究課題を設定する。 (4)	1. 福岡市の国際交流や太平洋子ども会議の様子について話し合う。 (1) 大韓民国総領事館を訪問し、領事館の仕事を調べるとともに、韓国の人々と交流する。 ・日本と韓国の友好のための仕事をしている。 ・日本と韓国は兄弟のように似ている。 (2) 福岡市の国際交流の様子について話し合う。 ・国際交流は楽しそうだ。自分も行ってみたい。＜領事館での交流＞ ・どうして多くの国と友好関係にあり、国際交流に力を入れているのかを調べて、自分たちにできる国際交流を行おう。 
2. 福岡市の国際交流の立場を追究するとともに、国際交流を進めている朴さんの思いや願いを探り、国際交流の価値を判断する。 (6)	2. 国際交流に力を入れる福岡市の立場や日韓交流を世話する朴さんの思いや願いを調べ、国際交流のよさを判断する。 (1) 姉妹都市との交流や国際交流都市をめざす意味について話し合う。 ・昔から外国と交流してきたんだ ・外国の人々と友達にためだ。 (2) 福岡市の国際交流の考えに基づき、日韓交流を世話している朴さんの願いや考え方について話し合う。 ・隣国同志が仲良く、協力して互いに発展 ・心と心の交流から色々な協力が生まれる ・自分たちも日韓交流をやってみよう。 
3. 朴さんの願いに応える交流計画を立て、国際交流の楽しさを味わい、計画的・継続的に交流する。 (5)	3. 朴さんの願いに応える日韓交流を実現させるため、韓国領事館の李領事と相談する。 (1) 日韓交流の可能性について話し合う。 ＜朴さんへの聞き取り＞ ・韓国の人々との交流の機会を与えて欲しい→韓国の先生と学習の機会 (2) 韓国の先生と学習した自分の国際交流についての感想を話し合う。 ・今度は自分たちが韓国に行って交流したい。 ・交流を続けたい。

(3) 考 察

子供たちは、福岡市の国際交流の意図を追究する活動や自分が国際交流を行った体験、韓国領事館での交流や李領事さんの話などを根拠に、福岡市や朴さんの日韓交流に対する考え・思いに共感していった。そのため、自分たちにできる国際交流を行っていきいたいといった姿に変容している。それは、国際交流の大切さを感じとり、国際交流都市『福岡』への理解と愛着の高まりでもある。そして、この福岡市への理解と愛着が、自分たちも福岡市や朴さんの願いに応えたいという実践的な態度へと高まっていった。それは、韓国領事館へ相談に行ったり、実際に韓国の先生たちと一緒に学習して交流したりして、自分たちの国際交流を積極的に実現していった姿からうかがえる。

9. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

ア. 自主的活動の姿 — 「花いっぱい町（3年）」 —

- ・自分がかかわっていく対象の選択や、対象から情報の収集・選択をしている。

学校の周りに設置してある花を調査し、自分たちの力で花いっぱい町にしようという目的意識をもって「町がきれいになっていいな」「花を育てるためには花がすきな土をつくらないといけないんだ」「日当たりのよい場所でないとかれてしまうだ」など、植物の育ちに必要な条件を調べたり、花いっぱい運動に携わっている方から教わったりする姿がみられた。

- ・情報処理の仕方や活動を工夫しながら、問題の解決に迫っている。

「来週は、黒門川通りに置いてみよう」など、設置場所をいろいろと変えることで選定に関する情報をさらに得たり、「いつも、どんな所に花を置いてるんですか」など、地域の方たちとコミュニケーションを図ったりしながら、選定の視点を明確にしていっていった。

イ. 共同的活動の姿 — 「わたしたちの大濠公園（4年）」 —

- ・仲間とともに活動したことや交流して高め合うことの価値を感じている。

お互いの事例を紹介しながら「そうやって水をきれいにしてるのか」「野鳥も喜んでるだろうな」など、大濠公園にある自然のすばらしさや施設仕組みなどを知って「こんなふうにして大濠公園はみんなから守られているんだ」と感心していた。

- ・コミュニケーションを自ら求め、働きかけを広げ深めている。

野鳥の会・植物友の会・公園事務所あるいは大濠公園に訪れている人たちと積極的にかかわり大濠公園にある自然のすばらしさを感じたり、施設の仕組みを調べたりする活動を行ったりして「いろんな鳥がいる」「こうやって水をきれいにするんだ」など、取材していった。そして、パンフレットなどを作って公園を利用している方たちに「こうやって水をきれいにしてるんです」など、人と自然との相互的な関係や環境保護を呼びかける姿がみられた。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿 — 「わたしたちの室見川（4年）」 —

- ・自分が活動したことの価値に気付いている。

「川を汚さない」「水を大切に使う」「もっと調べたい」などの思いをもとに、下流の取水場のところで空き缶を拾い、区役所にある機械のところを持って行って図書券をもらうシールに変えたり、水を大切に使うことを呼びかける看板をつくったりして、自分に価値を感じる活動を広げていた。

② 生活環境科における豊かな学力の育ち

生活環境科では、関係の理解・調和的な心情・保護・創造する態度を育てることを大切に考える。そこで、次のようなテストを行い、その資質・能力の育ちを評価した。

ア. 評価の方法

- a. 既習学習との類似事象で問題場面を提示したときの子供の反応
- b. 実証授業「わたしたちの大濠公園（4年）」における子供の反応

イ. 評価結果

- a. 質問：自分の地域でもっとこうしたらよいことは？（関係の理解）

結果を分類すると、ゴミ対策31、交通対策11、地域活動7、自然保護3であった。特に、地域活動は、学習での地域の人とのかかわりから、その価値を感じていると考えられる。

a. 質問：福岡城跡を紹介するためにあなたがすることは？（調和的な心情）

具体的に情報収集や活用の方法を挙げているのは、収集26、活用20であった。特に、収集では図書館、情報プラザ、現地取材などを挙げ、学び方が定着しつつあることがわかる。

b. 実証授業「わたしたちの大濠公園」における子供の姿

みんな「大濠公園を大切にしよう」と言っていました。植物のグループの人は、大濠公園の自然が見る人に見えるようにあてていると言っていました。野鳥のグループでは、じゃんかん水路で水をきれいにしていると言っていました。だから私はみんなの意見がつかえていると思います。

（調和的な心情）

私は大濠公園は「大濠公園」とか「くさくさん公園」と思っていました。でも今では冬には野鳥が来て、夏には自然がたくさんあるとてすきな公園だと思います。それに管理する所の方や野鳥の会の方、植物の会の方たちがいろいろと努力なさってすばらしい所になっているのだと思います。私はこれからこのすてきな大濠公園がいつまでもきれいであるようにがんばっていきたく思います。

（環境の保護）

これから私が大濠公園でやっていきたいことがあります。それはこの大濠公園を利用している人たちにも、公園のよさを知ってもらおうと、私は公園のいろいろな場所のことについてのしおりを作って、それさくはり、今までよりももっと大濠公園のことを知ってもらえたらいいと思います。

（環境の創造）

③ 子供の意識の変容

a. 初年度に生活環境科を設定するとき、その必然性を明らかにするために社会科や理科の学習を行った3年生、4年生へのアンケート結果と本年度との比較を行った。

・生活環境科の時間にこんなことをやりたいなと思って学習していますか。

初年度 ----- 思っている40% ときどき25% あまり20% 思わない15%

本年度 ----- 思っている40% ときどき50% あまり10% 思わない 0%

・自分の考えややり方で生活環境科の学習ができていますか。

初年度 ----- できてる42% ときどき23% あまり20% できてない15%

本年度 ----- できてる48% ときどき43% あまり10% できてない 0%

・生活環境科で学習したことを家で役立てていますか。

初年度 ----- している18% ときどき35% あまり30% していない17%

本年度 ----- している37% ときどき48% あまり13% していない 0%

b. 本年度、夏休みの自由研究テーマの傾向（学習したことの適用面から）

社会事象や自然事象をテーマにした子供の割合は、3年生28%、4年生49%、5年生68%と増えていた。その内、75%の子供が直接体験や取材を行い、自ら事象に働きかけている。

生活環境科についての学習の意識を調べ、初年度のアンケート結果と比較したとき、こんなことをやりたいなと思って学習したり、自分の考えで学習を進めていたりするなど、学習への主体性・能動性に伸びが見られた。さらに、学習したことを家で役立てていることから、学習が日常化していることが明らかになった。また、夏休みの自由研究においても、自主的に自分の課題に応じて、地域の自然を調べたり、施設に取材しにいく姿が多く見られるようになった。

（2）全体考察

- 子供の変容においては、かかわり・かかわり方を大切に、体験や具体的な活動を充分に行わせたことが有効であった。
- 豊かな学力の育ちにおいては、調和的な心情の育ちと環境保護・創造を育てることができた。
- 意識の変容においては、活動の目的や活動の転移など、子供たちの生活環境に対する興味・関心などの意識が高まっている。それは、生活環境科で共生・共存の視点から6つ学習対象と子供のかかわり方から内容を設定していったことによって、子供の主体的な活動や環境に対する総合的な見方・考え方を育てる上で有効であった。

ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する「人間」学習

「人間」部 中原 浩 植松 伸之

1. 領域「人間」設定の理由

いじめの問題に象徴されるように、今日ほど子供の豊かな心の回復が切望されている時代はない。

いじめの問題は、いじめられる子供の生命の救済が緊急の課題であるが、それだけでは根本的には解決しない。総じて加害者になる子供たちは「怒り・欲求不満・ストレス」等の心理的状态がともなっている。観衆・傍観者側に立つ子供も同じであろう。つまり、全ての層の子供が苦しみ、生きる喜びを見出せない状態にあるのである。いじめの克服は、いじめっ子、いじめられっ子双方の心をいやし、互いをいつくしむ生の喜びを回復することによって成り立つ。だからこそ、こんな子供を育てたい。

かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共によりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じる子供

「他者との調和的生き方を希求・思考・実践する子供を育てるべき」という論は、これまでも多く語られてきた。しかし、それが子供に内面化されず、生き方の指針となっていないために、いじめに象徴される心の荒廃が生じている。要は、一人ひとりの子供が生きることの喜びを感じるような経験をいかに積むかということである。

「ともに生きる喜びを実感できる」学習を、わたしたちは、次のように考える。

- ◎ 自分をとりまく「もの・人・こと」の生命を大切にし、思いやりをもってかかわろうとする共生の精神を発揮する学習
- ・「よりよい生き方」を思いや憧れの域から、はたらきかける実践の域まで高める学習
 - ・実践を振り返り、価値や意義を見出し内面的自覚を深める学習
 - ・その両者をくり返す「実践と価値の内面的自覚」の往復的な学習

従来の道徳の学習では、子供の価値観の形成が個人の体験に委ねられ、道徳の時間は、その価値観を振り返り内面的に自覚する時間として位置づいてきた。そのために、道徳の時間で育った心情をもとにして意図的な実践活動を設定することはその趣旨からはずれることになる。一方、学級活動は集団での自主的・自治的な問題解決や取り組みを実践化することを目的としてきた。したがって、実践過程での価値観の深化・統合はその特性から重視されてこなかった。

ところが、子供の側から見たとき、豊かな実践を行うことと、豊かな価値観や心情の形成が別々に生じることはない。豊かな価値観や心情によって豊かな実践が生まれ、豊かな実践によって豊かな価値観や心情が育っているはずである。その両者が深まったときに「共生の喜び」が実感される。

そして、それは、仲間とともに活動し、思考するなかでこそ、より深く味わえることができる。

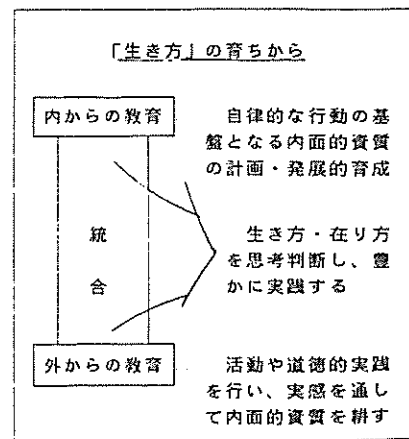
こうした考えをもとに、わたしたちは「人間の生き方・在り方」教育の中核を担う「道徳の時間」と「特別活動」特に「学級活動」を統合して、領域「人間」を仮説設定した。

「共生の精神の発揮」及び「実践と価値の内面的自覚の往復的な学び」を重視する理由を、私たちは大きく以下の3点から考える。

(1) 「生き方」の育ちの面から ―― 子供の心の内からの耕しと外からの耕しの統合の必要性

例えば、特別養護老人ホームを題材として学習するとする。必要なのは、自分の命をふりしぼりながら真摯に生きぬいている人に対して、「自分はどうかあるべきか」という自分の生き方の発見や実践である。そのような生き方の発見や実践を生み出す要件はなんだろうか。そのひとつは、お年寄りの生き方に接したときに、「何かをせずにはおれない」という思いを種として、何ができるかを判断し実践することである。この感受・判断・実践の過程で自分の心の豊かさが実感されるはずである。こ

れを外からの心の耕しと位置づける。これに対して内からの心の耕しが存在する。つまり、立ち止まって、自分の心を振り返り、その豊かな心をもとに、自分が大切にしたい心情や生き方を自分の実感をもとに意味づけし、つくり出すことである。この内からの教育と外からの教育が統合されることによって、子供の心に「お年寄りから学ぶ生き方」が確かに内面化されるはずである。この内からの教育と外からの教育という統合的学習を領域「人間」は担うのである。



(2) 子供を取り巻く環境の変化から —— 豊かな体験の必要性

子供を取り巻く環境の変化は著しい。遊びの中で、自然に触れ、自然や生命のすばらしさを体感したり、仲間や異年齢の中でルールや連帯感のよさを実感したりすることは、子供の発達課題である。しかし、そのような豊かな体験が希薄化している現実がある。このことは、前述した通り「心を振り返る時間」として位置づいてきた道徳学習の前提が揺らいできていることになる。したがって、学習の中で子供の豊かな体験を設定することが必要である。領域「人間」では、この豊かな体験を位置づけた総合的な学習をめざしている。

(3) 21世紀の社会に必要とされる資質・能力の面から —— かかわりを求められる環境

豊かな体験が希薄化している子供たちの現実とは裏腹に、子供たちが生きる21世紀の世界は、子供の人間性の豊かさがなければ解決できない問題が山積している。福祉、環境、国際理解・協力の問題がそれである。それらの問題は、私たちに、知識よりもむしろ「自分がどうかかわっていくか」という生き方を問うている。また、生き方の核には思いやりの心、生命への尊敬・畏敬の心が存在するという共通点がある。したがって、そのような問題に対応できる資質を育てる学習が必要である。そのためには、実際にそのような世界と子供がかかわりを持ち実践する学習として領域「人間」は重要性を持つ。

2. 領域「人間」の目標

人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通して、人間性豊かに生きる実践的な態度を育てる。

人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通ずとは、領域「人間」の学習方法を示す。「人間としてのよりよい生き方」を思いや憧れから実践に高めること、逆に、実践からその価値や意義を見出し思いを深めていく「実践と思いの往復」的な学び方を意味する。

人間性豊かに生きるとは、領域「人間」でねらう指導目標を示す。かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共にによりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じることに、その喜びを核として自らの生き方を主体的に切りひらいていくことを意味する。つまり、他者との共生の精神を自覚して調和的に生きる姿をめざしている。

3. 主題の意味と重要性

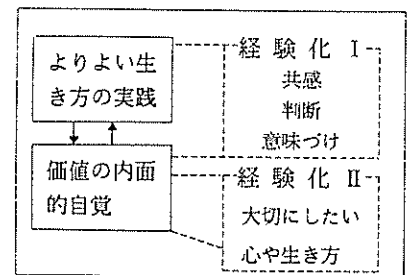
(1) 主題の意味

ともに生きる喜びを味わうとは、かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共にによりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じることを意味する。人は他者とのかかわりの中で、自分の力が発揮できた、自分の存在が認められた、自分が他者の役に立てたという感情を味わう。他者とのかかわりの中でそのような充実感・安定感・有用感を実感する

ことが「ともに生きる喜びを味わう」ことである。

豊かに実践するとは、「自他の思いや願いを感じ・推しはかり」「推しはかりを基によりよいはたらきかけを判断・実行し」「判断・実行をもとに自分にとって大切な生き方をつくりだす」ことを意味する。この活動によって生きる喜びを味わい、味わった喜びが次の活動の意欲の基盤になる。

人は、「人や自然とともによりよく生きたい」という思いや願いが喚起すると、他者・集団・社会と心を通い合わせ、かかわる活動を生み出す。それは、例えば授業の中で計画的に設定した共通の体験であっても、一人一人の子供は、その子なりの感じ方で「もの・人・こと」への共感を得たり深めたりする。また、その子なりの実感で、大切にしたい心や生き方を見出す。そのような体験からの学びが「経験化」である。つまり、「もの・人・ことにかかわる体験活動」の過程において生じる共感・判断・意味づけ（経験化Ⅰ）をもとにして、自分が大切にしたい心や生き方を自覚すること、自分なりの道徳的原則をつくりだし深めること（経験化Ⅱ）を意味する。こうした経験化を積み重ねることによって、感性は耕され、考え方・行い方も徐々に変容し、その子の道徳性と実践力の高まりがはかられていくと考える。



そこで、以上のような「実践と価値の内面的自覚の往復的な学び」を年間を通して継続することによって、「ともに生きる喜びを味わい豊かに実践する子供」を育てたいと考える。

(2) めざす子供の具体的な姿

- ① 自分の生き方がゆさぶられるもの・人・ことにであったときに、そのすばらしさを感じ取り、自分も共生の精神を実践しようという意欲を持つことができる。
- ② はたらきかけの活動を自他ともによりよく生きるという面から考え判断し、友や人との交流によって深めることができる。
- ③ 自分の「ともによりよく生きた喜び」を振り返り、これから大切にしたい心を見出し内面的に自覚し、自分なりの生き方をつくることができる。

こうした姿が、他者との共生の精神を自覚して調和的に生きる姿ととらえる。

4. 領域「人間」の内容の考え方

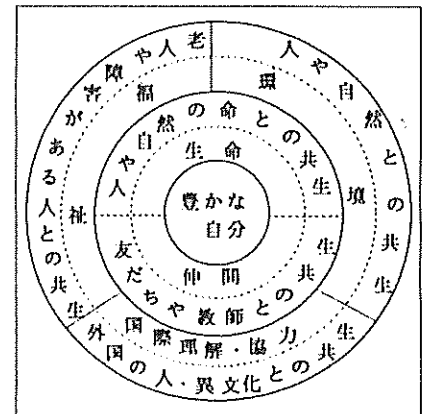
かけがえのない自分とかけがえのない他者を感じ、双方が共によりよく生きていくことを「共生」と考える。そして、領域「人間」の学習内容は、「どのようなもの・人・こととどのように共生していくか」という実践のあり方から規定する。

領域「人間」設定の理由で述べたように、21世紀に生きる子供たちが出会う社会は、自分がどのようにかかわって生きていくかということが問われる社会である。高齢化社会にともなう福祉の問題、国際化社会の到来にともなう国際理解・協力、生態系の破壊にともなう環境保全・創造、そして「いじめ」は、それぞれ個別の問題のようでありながら、その問題の根源は同じである。つまり、近代化の中で、生産性・効率性が過剰に優先されたことによって、人間が本来大切にしてきた「自然との調和」「人との協調性」「心の充足感に価値を置く生き方」が軽視されてきたことに起因するものである。豊かな福祉社会・国際化、環境保全、いじめの解消は「合理的・効率的」にできるものではない。一人一人の人の生き方が問われる問題なのである。その解決の基盤に位置づくものは、人と人、人と自然の共生の生き方をつくることではないだろうか。

そこで、領域「人間」では、子供たちが出会う大切な「かかわり」を学習対象として、それらの対象と共生の仕方を学習内容として次のように設定する。

学習の対象	学 習 の 内 容
豊かに生きる自分 (自分)	人や自然とふれあう喜びを感じ、共生の生き方を志向する豊かな自分に気づき、自信をもつ心の振り返り
学級や学校の友達 (仲間)	学級や学校の仲間との連帯感や学び合う喜びを実感し志向する対話、協働、協同製作などのふれあい
命を輝かせる人や自然 (生命)	生命の尊さを実感する動植物の育成、家族との対話、命を輝かせる人との対話などのふれあい
老人や障害がある人 (福祉)	老人や障害がある人に真心をもって接したり、相手の命を実感する対話、協同製作、表現（劇や歌の発表）、介護などのふれあい
異文化に生きる人 (国際理解・協力)	異文化圏の国の文化のすばらしさを実感し、自立を支援する異文化体験（遊び、料理、外国語による交信）、対話、支援活動などのふれあい
人の生き方を問う環境 (環境)	生命の共生、環境を保全しようとする人の願いを実感する、自然体験（生き物が共生する水田、川にひたる）、対話、協働などのふれあい

以上の対象や内容は、それぞれが独立しては存在しない。全ての対象へのはたらきかけやふれあいは、仲間づくりにつながり、対象の生命の実感につながる。さらに、全ての活動の中で最終的に培われるものは、共生の生き方に喜びを感じ、志向する「豊かな自分づくり」であるにとらえる。つまり、右図に示した通り、6つの内容は、仲間と生命の内容を経て豊かな自分づくりへとつながる構造をもっているのである。したがって、環境、福祉、国際理解・協力の内容であってもその中には仲間と生命に関する内容が含まれている。ただし、生命、仲間、自分の生き方そのものを学習対象とする場合は、他の内容と区別して設定する。



5. 年間指導計画作成の考え方

(1) 「共生」の精神が「思いやり」から「自他の生命の尊重」へ発展する配列

思いやりは、全ての活動を喚起し、発展させるエネルギーを生む。したがって、領域「人間」の学習活動は「思いやりの感受と発揮」を中核に据える。さらに、「思いやり」が深化していくと「自他の尊い生命」の感受と内面的自覚に発展する。そこで、高学年になるにしたがって、対象の生命を感じ、ふれあう活動を行うように内容の発達を考慮した配列を次のように行う。

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
仲間	学級の支持的風土	創造的学級組織・学級の連帯感	全校の支持的風土と連帯感
生命	身近な動植物への労り	生命を大切にする日常的な態度	生命の尊重の視点からの仲間、生命、福祉、環境、国際理解・協力への自分のかわりの自覚と活動
福祉	身近な人への感謝	真心を基盤とした地域福祉参加	
環境	身近な環境の美化	身近な地域美化を継続する態度	
国際	異文化との親しみ	真心を基盤とした国際協力	

(2) 「生命の感受」と「人との連帯感」を深める配列

① 学級づくりの適時に「仲間」の内容を設定する。

学期の始めと終わり、教育実習生とのふれあいの時期は、学級づくりの適時である。この時期に仲間の内容を多く配列する。また、実践にあたっては、学級の連帯感が深まる目的的な体験を設定する。

例えば、3年生では、「仲間」の内容を年間を通して次のように位置づけている。

1 学 期	2 学 期	3 学 期
ものづくり 仲間と活動する喜びを味わい 学級の凝集性を深めるふれあい 例：学級のシンボルづくり)	ことづくり 仲間意識を深め集団としての企画・運営力を高めるふれあい (例：教生先生とのふれあい)	思い出づくり 自分と学級の成長を確かめ・味わうふれあい (例：思い出文集づくり)

② 全ての学習で、中心内容である「生命」の感受と「仲間」意識の深まりを重視する。

例えば5年生では、「生命」「仲間」の内容以外の他の内容でも、「生命の感受」と「仲間意識」を深めるために次のように配列する。

期	1 学 期	2 学 期	3 学 期
題	バングラデシュ心を慰よう	田んぼの忘れ物	命を大切にする児童会をつくらう
内 容	国際理解・協力 バングラデシュの人の生き方のすばらしさを感じ友達に伝える。	環 境 田の中で生息する生き物の共生のすばらしさを味わう。	生 命 限りある命を必死に生きる方の命の尊さを感じ合う。
生命感受	相互扶助によってお互いの命を大切にするバングラデシュの人の生き方の感受	田の中に生きる人を含めた生き物同士の「生かし生かされる」命の感受	限りある命を生きる人の「今を生きる尊さ」「命のかけがえのなさ」の感受
仲間意識	仲間の意識化 「バングラデシュ支援キャンペーン」を通して仲間意識を感じる。	仲間の心へ共感 「農業生物の共生」への感動を共有し合う。	心の共感の深化 シンポジウムを通して感動を深め合う。
			総合 「命を大切にする児童会」をつくるためにはたらきかける。 学校のもの・人・ことの「命を自分たちが中心になって大切にしていこう」という意欲
			共感の発信 学級の学び（共感）を学校の仲間や日本（世界）へ広げる。

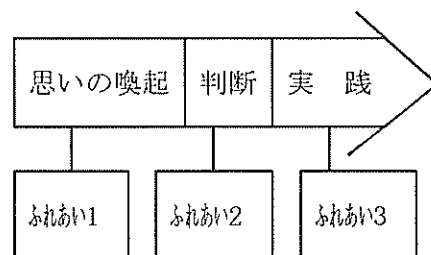
(3) 子供の発達段階を考慮した時数配列

- ① 福祉の内容は、他者に対する推しはかりの能力が発達し、障害がある人に対する偏見・先入観があまりつくられていない中学年に多く配当する。
- ② 高学年では、複数内容の複合化を通して豊かな自分を育てる機会が多く生じるので「総合」という時間を設定する。高学年では、福祉、環境の時数が中学年より減るが、内容が少なくなるわけではない。総合的に、福祉、国際理解・協力、環境の内容を学習することになる。

6. 学習指導上のポイント

子供たちは、生命の尊厳や思いやりのすばらしさを強く感じるもの・人・こととの出会いによって、「かかわりたい」という思いをもつ。その思いをもとに判断や実践活動が生まれる。その判断や実践活動は、もの・人・こととふれあっていくことによって質的に深化する。例えば、お年寄りとお会ったときに感じた「何かしてやりたい」という思いは、お年寄りとの「ふれあい」を継続するうちに「共に楽しむ喜び」や「お年寄りから学ぶ喜び」に変容していく。したがって、はたらきかける実践活動と「ふれあい活動」を連動していくことが大切である。

また、ふれあい体験は、共通の場で設定されたものであっても、個々の子供の心には異なるエピソードが残っているはずである。自分のエピソードをもとにしてもの・人・ことの心を推しはかる態度を育てたい。例えば「〇〇さんに手話で話したとき、通じたかどうかはわからなかったけど、にこっと笑ってくれたとき心が通じた感じた気がした」等の体験をもとにした子供の発言を大切にしたい。



7. 実践

【事例1】 第1学年 インターナショナルスクールの1年生と友だちになろう

中原 浩

(1) 目標

インターナショナルスクールの1年生と触れ合いながら、文化の違いを受け入れ、他者への共感的理解をもって活動を創り出していくことができる。

- ・ 外見や言葉の違いにかかわらず、ともに楽しく触れ合うための活動を考えることができる。
- ・ 触れ合いたい、仲良くしたいという思いを表情や身体などを使って伝え、ともに楽しむことができるとともに、かわりをもてる自分のよさに気づくことができる。

(2) 指導の実践（5時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1 福岡に住む異文化圏の同年齢の子供たちと楽しく交流しようとする意欲をもつ。 (1)	1. インターナショナルスクールの子供たちとの交流について話し合う (1) インターナショナルスクールの様子を写真やビデオで見る。 (2) 3組（帰国子女学級）の児童によるあいさつや自己紹介の様子を見て、知りたいことをインタビューする。  〇さん（帰国子女）が、遊んでいた言葉が分かるようになったと言っていた。わたしも一緒に遊びたい挨拶を練習しておきたい。 (帰国子女学級の子供の英語でのあいさつを見る)
2. 触れ合いたいという願いにもとづき、自分から活動する。 (課外)	2. 3組のお姉さんたちにあいさつや自己紹介の仕方などをならう。
3. 実際の交流によって、驚きや戸惑い、触れ合いの楽しさを実感する。 (1)	3. インターナショナルスクールを訪問し、交流を行う。 ※インターナショナルスクールでの交流は、インターナショナルスクール側が、本校での交流は本校が計画するように打ち合わせておく。
4. 交流体験のよさと課題をつかみ、喜んでもらえる招待の計画を立てる。 (1)	4. 学級に招待する計画について話し合う。 体で触れ合えるゲームができた。 よ 言ってることが通じた。 さ また来てねと言ってくれた。 生活の様子の違いが分かった。 招 英語であいさつしよう。 待 日本の遊びを紹介しよう 計 一緒に歌える歌をしよう 画 名刺をわたそう。
5. 触れ合い体験を実践し楽しさを感じ得する。 (1)	5. インターナショナルスクールの1年生を学級に招待して、楽しく交流する。
6. 訪問招待活動を振り返り、違いを受け入れ、真心をもって接することの大切さを自覚する。 (1)	6. 交流を通して見つけた自分や友達、そしてインターナショナルスクールの子供たちのよさについて話し合う。 はじめはドキドキしたけど、一生懸命、目を見て聞いたり手振りや声で伝えていると何となく言っていることが分かった。鬼ごっこが相手も喜んでくれた。思ったより通じるんだ。友達になれてうれしい。  (インターナショナルスクールのみなさん今日は)

(3) 考察

本題材は、異文化に触れ尊重する態度を育てるとともに、同じ「ヒト」として相手の心情を大切にしながらかわるという素地体験をもたせるものである。子供たちは、言葉や文化の違いを越えて、子供同士で自然に触れ合えるようになってきた。これは、本題材を進めるうえで、①本校の特色である帰国子女学級の子供たちへの情報収集、②相手の環境に入り込む訪問活動と招待活動の繰り返し、そして、③自分の姿や思いを見つめる場の設定、が有効であったと考える。

(1) 目 標

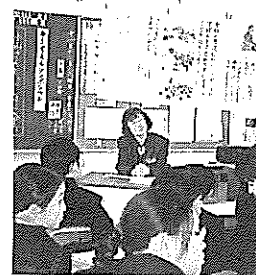
末期ガン患者の方と医師のひたむきな生き方を追究し、命の尊さを感じ、自他の命を大切にしていこうという態度を培う。

(2) 指導の実際（7時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 患者さんとの心のふれあいを大切にす る二ノ坂医師の生き 方のすばらしさを感じ、二ノ坂医師の医療活動に協力したい という意欲を持つ。 (3)	1. 地域医療の大切さを調べ、二ノ坂医師と話し合うことにより、二ノ坂医師の願いに応えようという課題を持つ。 * 二ノ坂医師がバングラデシュの医療から帰国後、なぜ地域医療を始めたのかを調べ、実際に二ノ坂先生に尋ねる場を設定する。 ・二ノ坂先生は、バングラデシュの人たちのように一人一人の患者さんを大切にする医療を行っている。二ノ坂先生のような医師になりたい。 ・二ノ坂先生の地域医療に協力する活動を行おう
2. 在宅ホスピスボランティアとして自分 たちができる活動を 話し合い、患者の願 いに立った活動を判 断する。 (2)	2. 在宅ホスピスボランティアとして末期ガン患者 〇さんの願いを大切にする医療の在り方について話し合う。 (1) 〇さんを支援するために自分ができることは 何かを話し合う。 ・〇さんの願いは命の大切さを感じ合うことだ。 (2) 1年間の学習で感じた命の大切さをまとめる。 ・有機米水田から感じた生き物の共生を伝えよう。 ・両親との対話から感じた、私が生まれてきたときの感動を伝えよう。 ・私たちのバングラデシュ支援や二ノ坂先生から学んだことを伝えよう。
3. 〇さんと話し合っ たことにより、命の 尊さを感じる。 (1)	3. 〇さんとのシンポジウムを行い、自分たちの生命観と、限りある命を力強く生きる〇さんの生き方のすばらしさを話し合う。 ・〇さんはすごい。〇さんは自分の運命に立ち向かっている。命はたった一つだ。くじけずに生きる心を大切にしたい。
4. 自立の意味を話し 合い、命の尊ぶ生き 方をつくる。 (1)	4. 〇さんが示した「自立」の意味を話し合う。 ・〇さんには及ばないけど、僕たちも自分の壁を乗り越える自立がある。 ・自分の壁を乗り越える生き方がしたい。



〈シンポジウムで有機米(赤米)を説明〉



〈子供の話に傾聴する〇さん〉

(3) 考 察

子供たちは日常生活の中で「命は限りあること」「自分の命は多くの人に生かされていること」を実感する体験がほとんどない。また、体験したとしても、じっくりと悲しんだり、悲しみを分かち合う経験が希薄化している。そこで、子供の生活の中で希薄化した「命を守ることの尊さ」「人と自然が共生することの尊さ」「限りある命を精一杯生きることの尊さ」を実感する経験を年間を通して断続的に構成した。そのことにより、子供たちは「私は、こういう体験のときにかげがえのない命を感じた」という具体的な体験をもとにした生命観を発言し交流できるようになったと考える。また、自分・友達・〇さんの発言への共感によって、人とともに生きる喜びを味わっている。

8. 研究のまとめ

(1) 研究のまとめ

① 子供の変容

ア. 自主的活動の姿

「耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう」では、耳が不自由な方の授産施設を訪問した子供たちが「手話で心を通い合わせたい」という授産施設の方の思いを感じ、思いに応えようという願いをもった。そして、手話会話の難しさを感じながらも、「手話を覚えることが私たちの努力と心を伝えることになる」という意欲をもち一月間の練習の後、授産施設で手話の会話と手話劇を試みた。A児は「手話は通じなかったけど心が通じた感じがした」と感想文に記している。



手話で会話を試みる子供

イ. 共同的活動の姿

4年生題材「スターシップ401号の航海」では、子供たちの1年間の生活を「航海」に例え、1学期に学級のシンボル作り（スターシップ号）、2学期は野外センターでのウォークラリー（スターシップの旅）、3学期は思い出ビデオづくり（1年間の私と401号のみんな）などの活動を行い学級の凝集性を高めてきた。



スターシップ号に乗って

スターシップ号を作ったあと、A児は次のような感想を書いている。

このスターシップができあがるにつれて、クラス全体がまとまっていく。完成はまだまだだけど、みんなの協力で早くすすむかもしれない。これからも協力し、なかよくできるクラス、太陽学級への道を力強く進んでいきたい。どんなアクシデントがあっても、お互いにみとめ合って進んでいきたい。

また、B児はビデオづくり終了後、次のように述べている。

私たちは今まで「スターシップ401号大航海」をやっていたからこそ、中休みや昼休みのフットベースのとき、むだなけんかをしなくなったり、学級会で自分と違う意見もみとめたりするようになった。「スターシップ401」はみんなの心を一つにまとめるかけ橋だ。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

実践を振り返り、自分の生き方をつくる姿が「価値を自覚する姿」である。「ぼくらにできるふれあい活動」では「小さな私でもお年寄りの方々の話し相手になれるし、よろこんでもらえる事がわかった。これからお年寄りにあったら・・・」「バングラデシュに心を届けよう」では「バングラデシュにはお互いの命を大切にする文化がある。ぼくも将来人の命を大切にする医師になりたい」というように、実感したことをもとに「こう生きたい」という生き方をつくっている姿がみられた。

② 領域「人間」における豊かな学力の育ち

領域「人間」では、「人の生き方の感受・ともによりよく生きたいという意欲」「心情の推しはかりをもとにした判断力」「生き方の内面的自覚」を育てることを大切にしている。それらの3つの資質は、個々独立しては存在しない。お互いに作用し、3つが重なったときはじめて「共生の力」となるととらえる。そこで、次のようなテストを行い、その資質・能力の育ちを評価した。

ア. 評価の方法

題材ごとに、「〇〇さんとの出会って心を動かされたことはあるか」「〇〇の活動をしたいか — 4段階尺度で」「なぜそういう活動を行いたいのか、自分の体験をもとに」「〇〇さんと出会い、活動を行う中で、こんな生き方をしたいと感じたことは何か」等の設問を設けたテストを実施した。

イ. 評価結果

○ 感受と実践意欲「ホスピスボランティアを行いたい、それはなぜか」

とても行いたい 15人	行いたい 22人	行いたくない 3人 (亡くなるのが辛い)
-------------	----------	----------------------

・Oさんの生き方を知ってホスピスの大切さを知った、自分たちも少しでも人の役に立ちたいから。

○ 人の心の推しはかりを大切にしたい判断力の伸長について (5年生 N=40人)

自分の体験をもとにして相手の心を推しはかり根拠にする	4月	2月	例：・Oさんが傷つく
①知識をもとにした理由が書ける	16→0		言葉は「患者さんあつかいされたとき」と言っていた。よく考えてみると「がんばって」という言葉はつらい言葉だ。
②自分の心情や相手の心の推しはかりを加えて理由が書ける	10→16		
③自分の体験をもとに相手の心情を推しはかって理由が書ける	9→18		
④自分の切実な体験(体験中の具体的なエピソード)をもとに相手の心情を推しはかって理由が書ける。	5→6	(靴は人)	

・おじいちゃんが入院していたとき、お母さんたちが自分がきつくても看病してあげていたから、私も相手のことを考えてお母さんのように接したいから。

○ 命の学習を行って大切にしたい生き方

・どんなに苦しいときにも明るく生きる。・たとえ病気になってもOさんのように希望をもって生きたい。いろいろな人を守りたい。・やさしい心で相手の気持ちを考えて生きたい。

③ 子供の意識の変容

○ 「人間の学習を行って変わった自分」を自由記述で

・道に生えている植物をあまり大切だと思わなかったが、小さな命でもそこにしかない大切な命だと感じるようになった。・人間の学習を行って「いつも笑顔で楽しく生きよう」と思うようになった。・前は遊ぶ友達が決まっていたけど、今はみんなと遊ぼうと思うようになった。

○ 「人間の学習を行って変わったこの学級」を自由記述で

・「やさしさ」「思いやり」「助け合い」の3つの心を知った。・クラスみんなが優しく接するようになった。・悪口が少なくなり明るくなった。・ハムスターやカナリヤを自分たちで学級に持ってきて大切に育てるようになった。・発表が苦手だった人が自信をもって発表するようになった。

(2) 全体考察

① 価値観の内面的自覚の面から

「どんなに苦しいときにも明るく生きる」「やさしい心で相手の気持ちを考えて生きたい」うがった見方をするならば、そういう心情が少なくとも同じような言葉を発することができる。それが本心から出ているか否かは、その子が「二ノ坂先生やOさんとのようにかかわったか」というかかわりの質の裏づけが必要である。子供たちの多くは、二ノ坂先生や小山さんの思いに応えたいという感受と意欲を持っている。さらに、その感受・意欲を実践に移すとき、「どんなことを一緒に話せばいいのか」「どんな思いで接すればよいか」と迷っている。その過程で「お母さんがおばあちゃんを看病したように」などの自分のエピソードをもとに切実な推しはかりを行っている。この感受・意欲・判断・生き方の自覚が一貫して積み上げられていることから、子供たちは実践をもとにして、温めたい生き方をつくりだしたと考える。

② 子供の連帯感・社会性の面から

「クラスみんなが優しくなった」「共感的な交流ができるようになった」ことが示すように、学級の連帯感が高まっている。それは、「仲間」の題材を通して連帯感そのものを高める取り組みを行ったことにもよるが、人にやさしく生きている人を追究したこと、判断・実行段階で友達との練り合いや協力を重視したことも作用している。それは、年間を通した積み上げの効果によると考える。

必要感をもって創造的な言語活動を行う国語科学習

国語科部 伊藤 啓二 吉田 正樹

1. 本校の考える国語科の目標

子供主体の言語活動を通して、個性的に理解し創造的に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び豊かな言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

2. 主題の意味と重要性

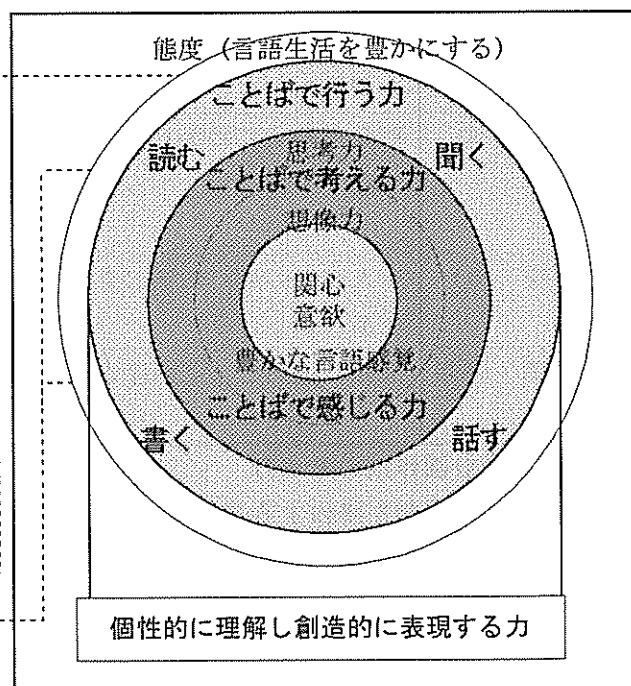
(1) 主題の意味

21世紀に求められる「生きる力」としての国語学力は、自分の意志と主体性を基盤とした「発信型」の能力である。ことばを媒介に情報を活用し、自ら言語生活をより豊かなものにしていく「発信型」の言語能力こそが今求められているのである。「創造的な言語活動」とは、子供たちが、ことばを通して、積極的にもの・こと・人に関わり、価値ある情報を追求していく言語活動である。つまり、情報を自分のものとして個性的に理解し、さらに自分の情報として再構成し創造的に表現していく言語活動である。研究主題「必要感をもって創造的な言語活動を行う国語科学習」とは、子供たちが何らかの目的や課題をもって創造的な言語活動を行うなかで、子供たち自らが、個性的に理解し創造的に表現する能力を身につけ、より高めていく国語科学習を構築し成立させていくことである。

「個性的に理解する」とは、子供たちが積極的にことばに関わり、他者の願いや論理を、自分の知識や体験と結びつけたり自分の必要感から選択・判断したりして、自分で納得のいくように理解することである。また「創造的に表現する」とは、個性的な理解のもとに、自分の感想や意見を付加し再構成した自分の情報を創り出すとともに、自分のことばと方法で表現し積極的に他と交流しながら深め豊かなものにしていくことである。

この「個性的な理解と創造的な表現の能力」の育成を国語科の基軸とするとともに、相補的な関係にある資質・能力と関心・意欲・態度の育成を目指す目標を設定している。

- ① 国語を尊重する態度
- ② 個性的に理解し創造的に表現する能力
 - ・ことばで行う力（言語活動力）-----
 - ・ことばで考える力（思考力・想像力）-----
- ③ 豊かな言語感覚 ・ことばで感じる力-----
- ④ 国語に対する関心



(2) 目指す子供の具体的な姿

- さまざまな文献や資料に働きかけ、自分に必要な情報を自分の読み方で理解するとともに、活用したり再構成したりする子供
- 自分の思いや考えを伝える目的をもって表現し、コミュニケーションを図りながら、より深く確かにしている子供
- ことばを通して、自分のものの見方・考え方を広げ深めている子供

3. 国語科の内容の考え方

個性的に理解し創造的に表現する能力を育てていくために、国語科では、情報を操作する過程を重視し、子供たちの言語生活と密接に結びついた内容の設定を考えている。本来子供たちの生活において行われる言語活動は、ことばと関わり何らかの情報を受信したり、あるいは自分の情報を創造し発信する情報操作の過程を通して展開している。その中で表現と理解の能力とは密接に関連し機能し合っているのである。そこで、情報を操作する過程（情報判断・情報検索・情報収集・情報選択・情報整理・情報処理・情報創造・情報伝達・情報保存）から、言語活動の様相を割り出し内容を設定した。そして次表のように「目的・課題を設定すること」を各学年に位置づけ、情報の受信→創造→発信と連続し、表現と理解の能力が相互に関連し機能するよう設定した。

情報を操作する過程から見た内容の概要

情報を操作する過程	内容（必要となる言語活動）		
	低学年	中学年	高学年
目的・課題設定 操作計画・企画	面白いこと・分からないことをみつける	知りたいこと・調べたいことを決める	学習や生活に役立つ情報を得る目的計画を立てる
受信	判断・検索	易しい読み物を楽しんで進んで読む	いろいろな本を探し読む（検索の範囲を広げる）
	収集	順序を考えながら情報の大体を聞き・読み取る	目的に応じて適切な文献・資料を探して読む
	選択・整理	必要な情報をみつけたり集めたりする	主題や要旨を考えながら情報を聞き・読み取る
創造	処理	自分の想像を付加する	自分の意見を付加する
	創造（再構成）	わかったこと経験したこと想像したことを表す	目的や自分の立場から情報を再構成して表す
発信	伝達	順序を考えてわかりやすく話す・書く	主張点と根拠が明確に表れる構成を考えて効果的に話す・書く
	（交信）	一人一人の違いに気づきながら話し合う	課題解決・創造生産の目的をもって話し合う
	蓄積・保存	情報の種類ごとに順序よくまとめ保存する	必要に応じて再活用できるよう工夫して保存する

4. 年間指導計画作成の考え方

(1) 価値ある情報を操作する過程が生み出されるように単元設定を行う。

子供の興味・関心に合わせて、次の5つの認識の対象をもとに単元を設定し、価値ある課題を追求し情報を操作する過程が子供の側から生み出されるようにする。

	言語	自然	社会	文化	人間
低	言語	身近な自然	身近な生活	くらしの文化	仲間（思いやり）
中	言語生活	自然環境	社会事象・問題	産業文化	人間観（人物像）
高	言語文化	環境問題	国際化社会	伝統文化	人間観（作者像）

また他教科との関連も考慮することで、単元数の焦点化と時間数の削減も図っている。

(2) 学年の言語能力の高まりを考慮して単元を構成する。

容易な操作から難易な操作へ、単純な操作から複雑な操作へとしだいに情報操作における言語活動の質が高まるように単元を構成し、次表のように学年の系統を考慮しながら位置づける。

学年	情報操作の型	情報の受信	情報の創造	情報の伝達
低	1 活動達成型の 単元構成	中心教材をもとに読みの基本的な能力を確かに身につけ、表現や読書に発展する単元	体験したことや想像したことを付加して表す単元	絵や動作を加えながら喜んで発信する単元
	2			
中	3 課題解決型の 単元構成	中心教材をもとに、それを補充したり発展する方向で情報を収集し整理していく単元	感じたことや考えたことを付加して表す単元	図や表を用いながらわかりやすく発信する単元
	4			
高	5 主題追求型の 単元構成	複数の教材を比べたり、必要な資料を自ら探したりして情報を収集・整理・処理していく単元	自分の立場から再構成し自分の意見を表す単元	多様なメディアを生かし効果的に発信する単元
	6			

(3) はじめは重点的に、しだいに総合的に情報の操作が子供の側で展開できるように配列する。

情報を操作する過程においては、子供たちがことばに積極的に関わり言語活動を営むことで自ら能力を身につけ高めていくことができると考えている。しかし、その全てを一単元で達成することはできない。そこで、下の例のように、1学期は、情報の受信を中心とした単元を位置づけ、2・3学期には、情報の創造・伝達を中心とした単元を配置し、重点的に指導を積み重ねながら、情報操作の過程をしだいに高めていくとともに、子供たちが自力で言語活動を展開できるように配列を工夫する。

(5年の例)		情報判断(検索)	情報収集	情報選択	情報整理	情報処理	情報創造	情報伝達
単元	情報操作過程							
見方を変えて考えよう			◎	→	◎	→	◎	→
宇宙人を読み比べよう		◎	→	◎	→	◎	→	◎
夏休み自由研究発表会					◎	→	◎	→
子供地球環境会議			○	→	○	→	◎	→
大切なものは何か		○	→	○	→	○	→	◎

(◎ 重点的指導によって言語活動を行う→○ 子供たちが自ら言語活動に取り組む)

5. 学習指導上のポイント

(1) 子供の活動欲求が高まる場としての単元設定

読む・書くの言語活動において、子供たちが意欲的に言語活動を行うような単元の導入と場の設定を工夫する。主として低学年は、「・・・をつくろう」「・・・で遊ぼう」といった活動そのものを楽しむような単元を設定し、高学年では、「・・・とは何か」「・・・について考えよう」といった価値ある課題追求を味わえるような単元を設定している。

(2) 情報を取り入れる場や資料の多様性

読む活動を主とした単元では、様々な本を準備して多読へ向かうようにしている。また、書く活動においては、実際に活動したり、広い範囲から情報を取り出せる資料・場の提供を行う。

伊藤 啓二

(2) 指導の実際 (7 時間)

— 154 —

(1) 目 標

必要な情報を中心教材「一秒が一年をこわす」や他の資料から収集・整理しながら地球環境問題について考え、主張点や根拠を明確にする構成を工夫して書きまとめ提案発表することができる。

(2) 指導の実際 (13 時間)

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 事例と結論の段落を関係づけながら要旨を読み取ったり、他の資料と比べたりしながら、自分に必要な情報を取り出し整理する。 (5) (情報の受信) 2. 収集した情報を再構成し、段落相互の関係に注意して筋の通った意見文を書きまとめる。 (4) (情報の創造) 3. 自分の提案の主張点と根拠を明らかにするとともに効果的な表現方法を工夫して発表する。 (4) (情報の発信)	1. 地球環境問題について考えるために必要な情報を、中心教材や関連する他の資料から収集・整理・処理する。 (1) 教材文や資料をもとに、自分たちの生活を振り返り、地球環境問題について話し合う。 ・今のままでは、地球環境は壊れてしまうぞ。 ・地球環境と自分にできることを考えたいな。 <資料から必要な情報を収集する子供たち> (2) 中心教材から地球環境問題を考える観点を読み取る。 ・筆者は原因・現象・対策の点から事例を取り上げて説明している。 ・事例をくわしく知り対策を考えるために他の資料を読んでみたいな。 (3) 自分が選んだ資料をもとに、必要な情報を収集し、自分の考えを付加して整理する。 ・観点ごとに区別してカードに書きまとめよう。 ・図表やグラフなども入れてカードを書こう。 2. 地球環境問題についての提案発表をまとめる。 (1) 集めた情報をもとに提案文を書きまとめる。 ・紙のリサイクルを主張したいけど、どんな事<集めた情報に自分の考えを付加したカード>例を取り上げたらいいかな。どんな順序で説明したらいいだろうか。 (2) 提案文を読み合い、グループとしての提案発表をまとめる。 ・みんなのよい点をうまく生かせるような提案発表にしていこう。 3. 子供地球環境会議を開く。 (1) 効果的な発表方法を工夫してグループで子供会議に向けての準備と練習をする。 ・内容の構成はいいかな。見せる資料の準備もした方がわかりやすいよ。 (2) 提案発表を行い、取り組みを決議する。 <表現方法を工夫し提案した子供の感想>

(3) 考 察

地球環境問題について考える課題意識をもった子供たちは、意欲的に情報受信から創造・発信を行う中で積極的にことばにかかわり言語活動に取り組んだ。単元を情報操作の過程として構成したことで、必要な情報を見つけるために読む、段落相互を関係づけ事例を通して要旨を読み取る、観点ごとに整理する、文章の構成を考えて書きまとめる、根拠を明らかにして説明するといった活動の必要が子供の側から生じ、主体的に言語活動を行うことができた。つまり、子供主体の言語活動を通して、子供たち自身が個性的に理解し創造的に表現する能力を身につけていったのである。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

4学年「わたしたちの体のひみつ」の学習において次のような子供の姿が見られるようになった。

私は目のことについて調べました。a 図書室におく本をつくることになって、他の人によく分かるように書こう。」と思って調べていきました。調べているとき、むずかしい言葉がいくつか出てきました。そういうところは、家の人に聞いたり、先生に聞いたりしました。その時、b むずかしいのは、簡単な言葉に直そうと思いました。そして、いよいよ書きはじめました。「ことがら」は、「なみだ」を中心に「水晶体」や「もうまく」「かくまく」に分けられました。でも順番を書くときに、涙のことはいっぱいあってはっきりしているけれど、他のことははっきりせず、バラバラになってしまいました。c 私は、「ことがらがはっきりしていないとよむ人が分からないな」と思って、一番はっきりしている涙のことにしぼればいいと、〇〇さんと△△さんに言われて涙のことにしぼりました。そして、d やっと書き終えて、自分でうまくできたと思いました。もっと間に挿し絵を入れとけばと思いました。

ア. 自主的活動の姿

aからは、子供が本を作るという目的を、自分たちで話し合って設定してきたことが分かる。子供の自主的な学習が展開されていると分析できる。また、a、bからは、人に読んでもらうという目的のためにはどんな工夫が必要か自分なりに考え、自分の情報の整理の仕方を見つめ直し、さらに価値ある情報へと変えようとする前向きな学習の姿が読み取れる。

イ. 共同的活動の姿

aからは、学習の目的を自分たちの活動の中から話し合いによって生み出していることが分かる。これは、共同的な活動としての学習が進んでいることが伺える。cからは、子供がお互いに書いたものを読み合い、よりよい文章にするために働きかけ合って深めていることが分かる。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

dには、子供が自分の学習に価値を感じていることが現れている。自分でも自分の表現の達成とそのよさを満足しており、活動が主体的に行われた結果の価値を自覚している姿と考えられる。

② 国語科における豊かな学力の育ちと子供意識の変容

国語科では、子供主体の言語活動を通して個性的に理解し創造的に表現する能力を育てることを大切に考える。そこで次のようなテストを行い、その資質・能力の育ちを評価した。

ア. 評価の方法

子供たちにとって初読の説明文と物語文を提示して、「どんな点におもしろさや価値を感じたか」「さらに調べたり表現したりしたいことはどんなことか」といった設問を設けたテストを行った。

イ. 評価結果

○ 情報を個性的に理解する能力の育ち（物語文を読んで子供たちが情報としてとらえた内容）

- ・描写や叙述の細部の面白さをとらえたもの（例 壁に書いてある言葉がおもしろい）・・・3人
- ・場面設定や内容構成の工夫をとらえたもの（例 料理店が逆転している仕組み）・・・5人
- ・作品としての主題を考えたもの（例 狼を楽しむことへの批判、人間風刺など）・・・8人
- ・自分の見方・考え方として一般化したもの（〇〇な見方や生き方が大切、自分と同じ）・・・24人

※ 文章の着眼点が多様であり、半数以上の子供が自分との関わりの中で、読み取ろうとしている。

○ とらえた情報をさらに追求し、自分の情報を創造していく能力の育ち

(説明文「森林のおくりもの」を読んで、さらに調べたり考えたりしたいこと)

- ・森林のおくりものについてさらに詳しく調べたい。 …… 6人
- ・木の他に鉄やプラスチック、石油などが使われてきているのはなぜか考えたい。 …… 2人
- ・森林破壊について調べたい。 …… 11人
- ・他(海や太陽)の「おくりもの」について調べたい。 …… 13人
- ・緑を大切に守っていくにはどうしたらいいか調べたい。 …… 8人

※ 85%の子供たちが自分の生活や問題意識と関係づけ、情報収集の目を広げようとしている。

○ 自分の情報を創造的に表現していく能力の育ち(複数回答可)

(文章を書きまとめる際の工夫点)

- ・よくわかるように詳しく書く(4人)
- ・内容の順序や構成を工夫して書く(18人)
- ・根拠を明らかにして書く(16人)
- ・要点や主張をはっきりと書く(9人)
- ・例を挙げながら自分の考えを書く(16人)

(みんなに発表する際の工夫点)

- ・見せる資料(図表・写真)を使う(36人)
- ・大きな声で間に気をつけて話す(13人)
- ・質問や呼びかけを入れて話す(9人)
- ・練習してみんなの方をみて話す(21人)
- ・OHPやビデオなどを活用する(8人)

※ 文字表現・音声表現のどちらにおいても、相手を意識し、効果的に表現する工夫を考えている。

② 子供の意識の変容

(一つの教材文での学習と、複数の教材や資料を扱う学習のどちらが好きか、それはなぜか。)

一つの教材文での学習(0人) 複数の教材・資料での学習(40人)

・ただ読むだけでなく自分がわからないことやもっと知りたいことを調べたり考えたりして、だんだんわかってくるのが楽しい。みんなと、話し合ったり、カードやレポートにまとめるのが面白い。・自分で資料を探したりとても大変だけど、他の学習や生活で役立つと思う。

(物語文「注文の多い料理店」を読んで、どんな学習をしてみたいか、どんな活動をしたいか)

- | | |
|-------------------|--|
| 読書に向かう活動
(32人) | <ul style="list-style-type: none"> ・宮沢賢治の他の作品を比べ読んでみたい。 …… 21人 ・宮沢賢治という人はどんな人か、伝記や作品を調べてみたい。 …… 4人 ・他の作者の類似した作品(狐や動物を題材にしたもの)を読む。 …… 7人 |
| 表現に向かう活動
(22人) | <ul style="list-style-type: none"> ・感想をまとめて読書会をする。 …… 8人 ・紙芝居劇をする …… 2人 ・シナリオを書いて劇を創る。 …… 7人 ・物語を創作する …… 5人 |

(2) 全体考察

情報を操作する過程を重視し内容設定を行ったことで、子供主体の言語活動を展開できた。子供たちが情報として取り出したり感じ取ったりしている面白さや価値は、事柄的・粗筋的なことよりも、むしろものの見方・考え方に迫るものが多くなってきている。特に多くの子供たちが、自分の体験や価値観と関係づけ「こうあるべきだ」「こんなことが大切だ」「こうしていきたい」といった解釈の仕方を自ら行うようになってきている点に、受け身的でなく能動的にことばとかかわり個性的に理解する能力の育ちを見取ることができる。さらに、子供たちは、叙述の細部に目を向けたり、筆者の呼びかけに答えようとしたり、自分の体験と比べたりしながら、さらに追求課題を設定し、情報操作に取り組むようになってきている。評価テストからも伺われるように、子供たちが表現の工夫として取り上げているのは、年間の単元の積み重ねの中で身につけてきている表現方法である。つまり子供たちは目的や課題をもち、自分の表現内容と方法を活用しながら創造的に表現しようとしているのである。以上のことから、情報を操作する過程を重視した単元を構成し、その配列を工夫し年間計画を作成し実践したことは、国語科における豊かな学力の育ちにおいて有効であったと考える。

地域社会を創造していく社会科学習

社会科部 後藤 正弘

1. 本校の考える社会科の目標

自分の地域と我が国の国土や歴史とのかかわりに関心をもたせ、社会に対する主体的な見方・考え方を養うとともに、国際社会に生きる民主的、平和的な社会の形成者としてよりよい社会をつくりだしていく実践的な態度や能力を育てる。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

生活環境科の発展、接続として社会科で取り上げる地域社会については、子供の愛着の場であり、社会生活に欠かせない生活地域を基盤にした上でかかわる事象によってその範囲を変えている。しかし、日本や世界全体とのかかわりから地域社会を多面的に見直し、地域社会をよりよくすることは子供の社会生活の向上につながり、子供の願いになっていく点では生活環境科と同じである。ただ、明らかに高まっていくものは、地域は他との関係で成り立っているという認識と郷土や日本を愛し育てるという市民（公民）意識への基盤である。つまり、地域を他との関係からみたり立場を変えてみたりしてとらえ、市民としてより質の高い現実的な地域社会の創造に向かう学習へと高めていくことであり、このような学習を自ら進めていく子供たちの姿を求めていることである。

地域社会を創造していくとは、子供が地域に住む人に学び、社会の充実や発展をめざして、そのよさを伸ばしたり、問題点を解決したり、よりよい方策を選択したりしながら、社会のあり方や社会生活の仕方を考えだすことである。このことは、21世紀に向かう子供たちがこれからの社会の形成者として必要な主体的な見方・考え方とよりよい社会をつくりだしていく実践的な態度を身につけていくことを意味している。具体的には、次のような力をつけていくことであると考えます。

- 問題探究力（目的⇒結果の予想⇒意味解釈）「この事実には、どんなよさや意味があるのか」
 - ・ 民主的、平和的な社会の実現に向かった時に生まれる問題をとらえ、予想した上で調べ、解決したことの意味を解釈すること。
- 社会実践力（問題・方法⇒選択）「～のためにどうしたらいいのか」
 - ・ 問題の解決から生まれた方法で実際にできるものを選んだり、問題や自分の行動そのものの判断を行ったりしていくこと。

以上のような力をつけていくためには、地域社会や生活を実際につくりだした地域の人の生き方を探っていく活動が大切だと考える。一つは、社会事象の中にある人の知恵や働きにふれ「人が何をするためにあるのか」「どんなよさがあるのか」などの問いの解決に向かう問題探究を行う活動である。もう一つは、社会事象への働きかけとして「～したい」「～しなければならない」という社会の創造にかかわる意志をもった実践的な活動である。

(2) めざす子供の具体的な姿

- 自分と社会とのかかわりを感じ取り、「働きかけたい」「やってみたい」と社会の問題に意欲的にかかわり、解決しながらよりよい社会のあり方を求めていく子供
- 社会事象の意味を人間の生き方からとらえ「ぼくたちが生活できるのは、こんな人の働きなんだ」「こんなふうの問題を解決したんだ」と社会の問題に取り組んだ人のよさをとらえ、感動や共感、批判をしていく子供
- 「こうすればもっとよくなるぞ」「こっちのほうがいいぞ」と地域社会とのかかわりの中で解決の方策をつくりだし、自分や社会のとるべき行為を判断したり実践したりする子供

3. 社会科の内容の考え方

本校社会科では、子供が積極的に地域にかかわり、よりよい地域社会をつくりだしていく実践的な態度を育てることをねらいとしている。そのために、①地域の人によりよい社会の実現に向かった時に生まれる問題をどのように解決したか探り、その働きを意味付けていく活動、②社会のあり方や自分の社会的行為そのものを追究していく活動を重視する。このような社会科の活動を重視すると、社会科の内容が次のような視点から設定されたと考える。

○ 地域の人物の問題解決の仕方を調べて理解する内容を設定する。

- ・ 取り上げる地域の特色がでており、そこで生きた人々が直面した社会事象（問題）にどう取り組み行動したのか調べて、人物の生き方の理解を他地域や全体の事象とかかわらせた内容。

○ 子供が社会とのかかわりについて考えることを内容として設定する。

- ・ 子供自身が人の生き方を中心に社会事象の特色を調べ、社会のあり方や自分を社会事象に置いたときの行為を選択するような考える内容。

この視点と、生活環境科の内容をつないで具体的な内容を次のように設定する。

生活環境科		内容の広がり		社会科	
地域の とらえ方	生活地域	⇒	・ 地域と日本や世界とのかかわりに広げる	⇒	単元地域（福岡、日本など）・・・生活地域を基盤に単元によって地域の範囲を変える。
内 容	生産と消費	⇒	・ 様々な生産に関する人の働きの意味	⇒	第1～3次産業と国土（例）福岡の漁業を盛んにする人々の行動の意味と開発計画の提案
	地域の歴史 ・ 文化	⇒	・ 先人たちの問題解決の努力とその意味	⇒	問題史的歴史（例）鎖国時の黒田藩の人々の行動の意味と鎖国に対する是非の判断
	社会的奉仕 ・ 協力	⇒	・ 願いを実現するための人の働きの意味	⇒	政治、国際関係（例）市の港湾開発計画を推進する人々の行動の意味と参画の仕方の判断

上記の内容を①空間的認識から歴史的認識へと発達する子供の認識形成過程と②地域の一員として自覚しはじめ、社会の形成者としての義務と権利を遂行しようとしていくまでの公民性の高まりの2点から、第5学年と第6学年に次のように設定する。

第5学年	第6学年
○ <u>日本の生産や国民生活と関連させて</u> ア 地域の産業の特色と働く人々の工夫 ・ 第1次～3次産業で働く人々 イ 国土を利用し環境を守る人々の工夫	○ <u>日本の歴史、政治の事象と関連させて</u> ア 地域の歴史上の人々の努力 イ 地域の政治にかかわる人々の努力 ウ 国際交流に努める地域の人々の努力

4. 年間指導計画の考え方

(1) 単元地域を重視した単元の設定

社会科の内容は、我が国の産業や歴史とつないだ地域の人々の努力や工夫であるが、人の働きの意味付けや社会的行為を追究する活動をまとまりにして次のように単元を設定する。

- ① 地域社会の産業や歴史の特色を取り出していくときの条件として、社会の変化を形成する情報化と国際化の視点から単元の内容の範囲を設定する。
 - 情報を創造し発信し、応答を受けるかかわり方が実際に地域活動の中で可能であること。
 - 国際化の視点から地域と他地域、地域と全体のかかわりが現実存在すること。
- ② かかわる地域の人と地域社会へのかかわり方から具体的な内容や活動像を設定する。
 - 生産性を高めたり、質の高い政治や文化づくりに努力、工夫してきた地域の人々の選定。
 - 地域の人への取材や模擬体験などの活動と目的が明確な提案や社会参加などの活動の選定。

③ 地域の人の働きを意味付け、社会的行為を追究する単元の基本的学習過程を設定する。

活動と内容	み つ め る	は たら き か ける	⇒	あ ら わ す
	1. 社会事象の中の人の生き方について問題をもつ。 ○ 原体験活動 ○ 取材調査活動	2. 地域の人の考え方や行動について背景とかかわらせて調べ、その意味について話し合う。 ○ 臨場的、模擬的体験活動 ○ 取材調査活動 ○ 交流活動		3. 地域の人の生き方から、社会のあり方や自分の行動について考え提案物などに表す。 ○ 提案と応答、評価
	地域の人の働きを意味付ける			社会的行為を追究する

(2) 地域の人とのかかわりを重視した内容の配列

第5学年の内容の配列は、空間的認識の発達から生活を支える衣食住を原点に、第1次～第3次産業にかかわる人から、それらと国土の環境や特色をつなぐ働きをする人へと広げていくことを基本とする。第1次～第3次産業単元内の配列は、地域の各産業にかかわる原体験の豊富さ（植物を育てるなど）や生産システムへの理解度（易から難へ）を考慮して、食料生産のあとに工業生産を位置付ける。そして、それらの産業を活発にしている人を中心に物流と情報産業を最後に配列し、産業間の関連や日本、世界的なネットワークにかかわる人の働きに広げていくようにする。

第6学年の歴史、政治、国際関係の内容配列は、地域の先人たちが社会生活をどうつくりあげてきたか調べ、とらえたことを生かして現実の政治や国際関係を考えていけるようにはじめに歴史内容を配列し、その後、政治や国際関係づくりに努力する人にかかわる内容を配列している。なお、歴史については問題史的に「その問題をどう解決したか」というように過去から現代に至る配列を基本としている。

配時は、両学年とも現行と同様105時間枠で次のように配列している。

		1 学期 3 6 時間	2 学期 4 5 時間	3 学期 2 4 時間
単 元 名 と 配 列	第 5 学 年	農水産業(25) ①食料生産に励む人々	工業(36) 運輸(9) 情報(11) ②自動車の生産に励む人々 ③豊かな環境づくりに努める人々 ④新しい運輸業に励む人々 ⑤情報産業に励む人々	国土、環境(24) ⑥国土利用にかかわる人々 ⑦森林を守り育てる人々
	第 6 学 年	歴史(77) ①福岡の歴史をつかった人々 ②大陸文化の伝来に励んだ人々 ③元寇にかかわった人々 ④自治都市をつかった博多の人々 ⑤筑国の中の博多の人々 ⑥明治の世の中をつかった人々 ⑦戦争と平和な世の中づくり		政治、国際関係(28) ⑧これからの社会づくり ・福岡市改善プラン・これからの国際関係

5. 学習指導上のポイント

(1) 地域社会にかかわる具体的な達成目標を設定すること

生活環境科によって育ってきている地域社会への愛着をもとに、地域社会への情報発信、提案や提供をかかわりの具体的な活動として達成目標化する。この場合、かかわる対象は、○提案する場合は内容にかかわる人や組織、○提供は地域一般（市民）の人々とする。

(2) 地域社会からの具体的な応答、評価機能を学習の中に生かすこと

子供の働きかけに対する地域からの応答、評価を学習の中に位置付けることで、達成感や効力感などかかわることへの喜びを味わわせるとともに、市民としての意識を実感できるようにする。

(3) 地域の人にかかわる活動を価値ある体験の中核とすること

実際に地域にでて体験してみる臨場的体験や自分の実践を市民に紹介するリサーチ活動、模擬的制作的活動など人の思いや考え方にふれていく活動を充実させていく。

6. 実践例

〔事例〕 第6学年 戦中、戦後を生きぬいた人々

後藤 正弘

(1) 目 標

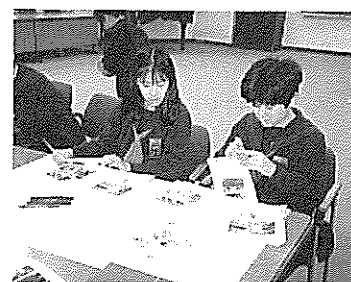
- ① 15年戦争や戦後を生きぬいた人々の行動や考え方を体験的に追究していくことで、当時の時代背景をとらえ、人々が生活や社会をつくりだしていく生き方について考えることができる。
- ② 戦後の世の中をつくっていった人々の努力をとらえるとともに、戦争のない平和な社会を築くための社会のあり方をつくりだすことができる。

(2) 指導の実例（11時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 身近な戦争体験者から戦争に関する情報を収集する活動をする。(3)	1. 戦争の悲惨さを感じ取り、地域の戦争体験者を通して学習問題をつくる (1) 15年戦争の様子やその経過と原因を映画や写真資料などで調べる。 ・当時の政治によって、国民は苦しい生活をさせられていたんだな。 (2) 身近な戦争体験者から戦争時の生活を聞き取り、疑問点や調べたいことについて話し合う。 ・こんな生活にきつと不満をもっていたはずだ、もっと調べたいな。
2. 戦争体験者の考え方や行動について取材と交流をする。(5) ・当時の生活を当たり前と思う生き方と政治的背景への気づき ・体験者への共感と平和な社会への必要感	2. 戦争体験者の井手さんの生き方を取材して、その意味を考え話し合う。 (1) 地域に生きる井手さんの行動やその考え方を取材して調べる。 ・どうして当時の生活に不満がないのだろう、何か理由があるはずだ。 (2) 井手さんの生き方の背景を政治や教育の様子を中心に文献資料等で調べる。 ・国民の意識を高める政策があったんだ。 ・教科書や軍事訓練など教育の影響があるぞ。 (3) 戦後の社会を体験者がどのように生きぬいたか直接取材や文献、映画等で調べる。 ・新しい社会づくりに向かって国民全員が努力していたんだな。 ・平和な社会づくりには政治の働きが大切だ。
3. 戦後の復興について調べこれからの社会について自分なりのプランを立てる(3)	3. 戦争のないこれからの社会のあり方について考え、表現物に表す。 (1) 民主的な社会を創造してきた人の資料を調べて、自分なりの社会のあり方を考える。 ・国民の声を十分に聞く政治が必要だ。 (2) プランを新聞やポスターに表現する。



〈井手さんと交流する〉



〈自分の考えを新聞に表す〉

(3) 考 察

本校社会科では、社会の創造に向けて地域の人々の生き方を探る活動を重視している。このことから本単元では、戦中、戦後を生きた戦争体験者（井手さん）に直接取材、交流するという活動と人物の働きや生き方に対する自分の考えを表現物に表す活動を行った。

この活動により人物の生き方を当時の政治や教育とつなげてとらえ、国民が平和に過ごす社会のあり方を判断していく実践的な態度が育ってきている。このことは、年間指導計画の中に、社会科で重視する上記の活動から設定した「人の生き方の意味追究から自己の社会的行為を選択していく内容」を学習してきた成果が示されていると考える。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

社会科学学習において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主的活動の姿

5年単元「新しい博多漁港と永村さん」で漁業従事者の永村さんの思いや工夫をとらえる学習において、進んで漁港に取材しに行き、働く人から直接必要な情報を収集する現地取材をするようになってきた。例えば、C児は、「今、イカ漁は漁場の問題などで困っているし、イカも少なくなってきた。永村さんはこの問題をどのように解決しているのだろう」と問題を持ち、永村さんに船の操舵室への入室を依頼して、レーダーやGPSなどの設備の工夫に気づいていった。このように地域の人々が直面した問題にどう取り組んでいるか問題探究していく姿が見られた。

イ. 共同的活動の姿

6年生単元「鎖国の中の博多の人々」で、鎖国の中で朝鮮通信使を黒田藩がどのように接待したらよかったのか提案し合う学習において、A児は、相島で接待することが一番よいという提案に反論し、立地条件と農民の負担から城内でもてなす方法を主張し根拠を吟味しあった。学習後A児は、「通信使は、城内でもてなした方がよいと考えていたけれど、それでは、幕府の監視が強くなるという考えを聞いて納得した。提案を幕府との関係から見直してみよう。」と提案をよりよいものにしていこうとした。このように、社会的行為の判断を集団で行い、よりよいしくみをつくりだしていくために提案し合う姿が見られた。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

6年生単元「戦中、戦後を生きぬいた人々」の単元の戦争体験者と交流して生き方を探る学習において、「当時の人をはじめはかわいそうとだけ思っていたけれど、今ではすごいと思うようになったし、平和な生活のために現在の政治がきちんと行われているかどうか考えるようになった」というように、歴史学習を生かして、今の社会のあり方を考えていこうとする姿が見られた。

② 社会科における豊かな学力の育ち

社会科では、社会事象やそこに生きる人の生き方に対して意味付けしていく問題探究力と社会のあり方や自分の社会的行為を判断していく社会実践力を育てることを大切に考える。そこで、次のようなテストを行い、その資質・能力の育ちを評価した。

ア. 評価の方法 (Aは問題探究力に関するもの Bは社会実践力に関するもの)

A : イギリスのチャーチルは、日本に原爆を落とすことは戦争を早く終わらせるために仕方がないことだといいましたが、あなたはこのチャーチルの考えについてどう思いますか。

評価基準 { 事実を多様に集め、民主的な視点から判断してチャーチルの言葉を評価していること }

B : 福岡市では、港湾の発展のために、和臼干潟など埋め立てたりアイランドシティを造成したりしています。しかし、自然が壊されるという理由から反対運動も起こっています。あなたが開発をすすめる立場だったらどのようにこの課題を解決しますか。

評価基準 { 自分のかかわり方を根拠立てて説明しており、社会のあり方を希求していること }

イ. 評価結果 (6年生 76名 %は複数回答での割合)

Aに対する反応	
1. 原爆を落とした結果を予想して批判すること「原爆を落とすことが長く人を苦しめるという予想をきちんと行うべき」	88%
2. 平和的に人権優先の考え方で批判すること「当時でも平和運動に努力した人がある。生きる権利をまず大切にすべき」	60%
3. 相互の立場を理解して原爆投下を批判すること「お互いの国が必要な資源を分け合って戦争の原因を取り除ける」	42%

Bに対する反応

1. 住民の納得のいく方法、協力してもらえ方法の考案「理め立ては働く場所や住居を提供する。協力を得る」	73%
2. 自然保護に優先権を与える政策の実施「社会だけでなく自然環境にも市の予算をつぎこむこと。自然があって社会がある」	57%
3. 自然と開発の両立をめざす政策の実施「人工的な自然環境をつくり、町にゆとりのある空間をつくる政策をする」	40%

○ テストによる評価結果は、Aについては、どの反応についても多様な視点でチャールの考え方を意味付けており、しかも、判断の根拠が明確で、事実に基づいていること(Aの1→88%など)から人物の生き方に対しての問題探究力が育っていることがわかる。Bでは、自然環境や住民の意志を尊重した上で協力や合意を得て両立をめざす実践的な判断をしており(Bの1→3)、民主的な立場を基盤によりよい社会のあり方を求めていく社会実践力がついてきていることがわかる。

③ 子供の意識の変容(意識の内容については、自由記述を簡潔にまとめたものを載せている)

設 問 内 容	社会事象を意味付ける	社会的行為を判断する	その他
1. 社会科の学習で楽しいと思う時はどんな時か	①人の行為の理由をつきとめた時 52% ②社会のことをみんなで考え合う時 35%	①人のためになるしくみをつくる 60% ②つくったものを考えてもらうこと 48%	本を読む 35% 見学に行く 30% 考えをまとめる 5%
2. 社会科の学習をして役に立ったと思うことはどんなことか	①世の中のしくみがわかること 35% ②本当の人の考えがわかること 20% ③社会と人とのつながり 15%	①つくったことに対して評価してもらうこと 40% ②社会のために何かしようと感じたこと 33% ③自分で行動しようと思ったこと 28%	
3. 社会の出来事で関心のあるものは何か	①民主主義をおびやかす事象 80% ②人の行為や考えの理由 55%	①人が何を選択したか 20%	どこに何があるか10%
4. これからしてみたい社会科の活動にどんなものがあるか	①人の行為を考え合う討論 60% ②人への取材と交流 38% ③社会の人と同じ行為 30%	①人のためにものやしくみをつくること 75% ②これからの社会を予想すること 23%	資料を採す 17% 見学 15%

(2) 全体考察

子供の変容ア～ウで述べてきたように、子供たちは、地域の人の生き方の意味を探り、自分自身の社会的行為を判断していくようになってきている。また、アンケートによる意識調査(全4項目)の結果にあるように、社会事象に対して意味付けたり、社会的行為を判断したりすることに社会科の楽しさを見い出すようになってきている。このような姿は、豊かな学力として社会科が大切にしている問題探究力と社会実践力が子供たちに培われてきていることを示している。このことから、社会事象を意味付けたり、社会的行為を判断する活動から内容を設定したことは、子供が地域に積極的に働きかけ、よりよい地域社会をつくりだしていく態度の育成につながっていったと考える。特に、内容の範囲として第5、6学年にも地域を重視し、年間を通して地域の人の生き方にかかわってきたことが効果的であったと考える。この意味で、社会科の年間指導計画上に子供の地域の人とのかかわりから生まれる社会認識や公民性の発達から内容を配列していくことが重要であるといえることができる。

以上のように、地域の人の働きを意味付け、自分の社会的行為を追究するという二つの活動から内容設定を図り、それらを認識と態度の関連によって配列した年間指導計画は、子供主体の活動を重視した社会科学習の基盤となると考える。

自ら数理を求め続ける子供を育てる算数科学習

算数科部 重松 宏明 加藤 英也
小森 晃

1. 本校の考える算数科の目標

数学的活動を通して、数、量、図形、数量の関係についての情報を数理的に処理するよさを感じ取りながら、問題を解決する能力や筋道を立てて考え表現する能力を育てるとともに、基礎的な知識や技能を身に付け、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「自ら数理を求め続ける」とは、子供が、自分の身の回りの対象にかかわる際に自分の思いや感じ方を基にした数学的思考を伴った自主的・能動的活動を行う中で、数理を生成し、そのものの持つ価値や処理の仕方のよさを感じとっていく体験を繰り返し行うことである。

これは、次の2つのことを大切にすることを意味している。

- 「～してみても分かったんだけど…」というように、実際に活動を行いながら数理の生成を図るとともに、活動の過程でしか感得できない実感などの感性面を大切にすること
- 対象や測定方法を選択して重さを測定する活動を繰り返すなどのように、対象へのかかわり方や情報の取り出し方を個性的かつ多様に持つことを大切にすること

このことによって、子供たちに次のような資質や能力を育てることができると考える。

- 情報活用力……自分に必要な情報を収集したり、その情報を処理したり活用したりする力
- 問題解決力……目的を達成するために、自分なりの活動の仕方と事象にかかわり解決する力
- 数学的表現力……問題をよりよく解決するために、自分の活動にあった様々な表現体系を駆使する力
- 数学的思考・判断力……筋道だてて思考を進め、活動を通して得た実感に基づき数理的処理のよさや生成した数理の価値を的確に判断できる力

このような資質・能力は、将来の情報化社会、価値観の多様な社会の中で、よりよく生きていくために必要な合理的な思考と事象を数学の視点からとらえる感覚を養い、社会の諸問題を数学的に解決するために、事象に対して自分自身が働きかけていく具体的方策と態度を身に付けるために必要であると考えられる。

そのために、これからの算数科の学習では、事象に対して数学的に意味のある活動を行いながら、どんな事象に対してどんな活動が使えるかということを自分なりに意味付けできることが必要である。そして、その過程において、数理を個性的に生成し表現していくことが、活動に子供の実感をともなわせることにつながる。活動に実感が伴ってようやく、以後の学習場面にその活動を転移させていくことができるようになると考える。

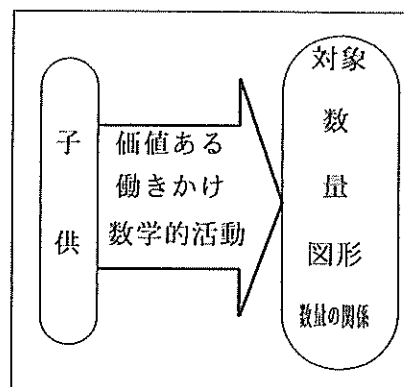
(2) 目指す子供の具体的な姿

- 問題解決に必要な情報は何かを考え、進んで情報を集めたり選択したり生かしたりできる子供
- 目的を持って粘り強く活動を繰り返して、問題を解決することに満足感、充実感を味わう子供
- 自分なりの表現を大切にして問題を筋道立てて解決したり、自分の考えを表現したりする子供
- 活動を通して生成した数理を進んで他の事象に当てはめながら、そのよさを実感している子供

3. 算数科の内容の考え方

算数科で学習の価値を見いだしていく対象には、『数』『量』『図形』『数量の関係』の4つがある。この4つの対象に働きかける、子供にとって必要で、価値ある活動を本校では『数学的活動』と呼び、これを算数科の内容と考える。

本校では、まず、4つの対象への働きかけ方を洗い出した。例えば『数』という対象に対しては、大きく「数を数える」「加減乗除の計算をする」「数の大小を比較する」「数の仕組みを構成する」「数を仲間分けする」「数の並び方の決まりを探す」「数の大きさをおよその数で見積もる」「演算の規則などの関係をつかむ」「数や演算に関する問題を作る」などの活動がある。このようにして、4つの対象への働きかけ方を取り出し、①子供が生きていくことに身近で、必要不可欠な数学的体験や具体的な活動、②これからの算数で、必要と思われる資質・能力を育てることができる活動という2つの視点から、右の表1に掲げているような11の数学的活動に類型化した。



(表1)

数	量	図形	数量の関係	数学的活動の類型
数をかぞえる				かぞえる
加減乗除	単位を換算する		文字式を計算する	計算する
数の大小比較	量の比較		比で比べる	比べる
	量の測定			測定する
数の仕組み	単位系の構成	図形の構成分解		構成・分解する
		図形の作図		作図する
数を類別する		図形の分類	起こり得る場合	分類する
並び方のきまり	内包量で表す		2量の関係	きまりを探す
概数で表す			表やグラフで表す	統計的に処理する
演算の規則		構成要素の関係	数の関係	関係をつかむ
数に関する問題	量に関する問題	図形の問題	関係を調べる問題	問題を作る

4. 年間指導計画作成の考え方

(1) 数学的活動の具体的内容の例

上で述べた11の数学的活動は、それぞれ、対象と組み合わせられて、活動の仕方が異なるものに細かく分析される。そして、対象の範囲の広がりや発展に伴って、数理の連続・発展が生じるように、系統化された具体的内容として設定される。例えば、『かさ』という量と『比べる』という数学的活動を組み合わせると『かさを比べる』という数学的活動になる。そしてそれは、『片方の容器の中の水を移し変えて比べる』直接比較の活動から『同じますに移して比べる』間接比較の活動へ、さらに『小さなますのいくつ分で比べる』任意単位による比較の活動へと系統付けられる。次の表2はこうした数学的活動の具体的内容の例である。

(表2)

数学的活動の類型	数学的活動の具体的内容の例
かぞえる	1対1対応付けて数える。2ずつ5ずつ数える。10といくつで数える。10ずつにまとめて数える。およそいくつで数える。単位を変えて数える。
計算する(加法の例)	具体物を使って計算する。位ごとに計算する。繰り上がりを使って計算する。筆算で計算する。
比べる(長さの例)	真っ直ぐなものを端をそろえて比べる。曲がった紐を真っ直ぐにして比べる。そろえられないものの長さを写しとって比べる。単位のいくつ分で比べる。
測定する(角度の例)	三角定規のかどのいくつ分で測定する。角の大きさの単位を作って測定する。分度器を使って測定する。平行線の性質を使って測定する。
構成分解する(図形の例)	ひごや粘土で構成する。色板で形を構成する。面で立体を構成する。シオボートで図形を構成する。対角線で多角形を分解する。
作図する	特定の長さの直線を引く。コンパスなどで円を描く。概形を作図する。角を作図する。展開図を作図する。平行線を作図する。垂線を作図する。図形を作図する。
分類する	弁別する。共通点や相違点を探す。仲間分けをする。
きまりを探す	関数の変化のきまりを探す。法則を探す。対応の規則を探す。並び方の決まりを探す。関数のグラフをかく。関数の関係を使って推測する。
統計的に処理する	目的に応じて情報を集める。集めた情報を観点に基づいて整理する。表やグラフに表す。表やグラフから読み取る。読み取ったことから判断する。
関係をつかむ	関係を絵図に表す。線分図やテープ図を使って、関係を取り出す。関係を式に表す。言葉で表す。
問題を作る	場面や式に合うお話を考える。原題の一部を変えて問題を作る。事象を変えて問題を作る。身の回りから学習したことを使って問題を作る。

(2) 対象（数、量、図形、数量の関係）の範囲

数学的活動の具体的な内容を子供の認識能力（空間認識や関係的見方、思考の抽象性など）の発達段階を考えて各学年に配列すると、その対象の範囲も、次の表3のように決まる。この表は、各学年の対象の範囲の広がりや発展を示したものであって、前学年までの範囲も含まれる。

年\対象	数	量	図形	数量の関係
1年	100程度の整数	長さ・広さ・かさ・時刻	身の回りの具体物	順序
2年	1万までの整数	長さ（cm, mm, m）かさ（l, ml, dl）	三角形、四角形、長方形、正方形、直角三角形 箱の形	大小
3年	兆の整数、真分数、小数第1位	長さ（km） 重さ（g, kg） 時間（秒）	円、球、正三角形、二等辺三角形	大小
4年	仮分数、小数第2、3位	面積（長方形、正方形） 角度（度）	平行四辺形、台形、ひし形、直方体、立方体	変化
5年	整数、小数、分数	体積（直方体、立方体） 面積（円、多角形）	正多角形、おうぎ形	対応、割合
6年	整数、小数、分数	体積（立体） 重さ（mg, t）	角柱、角錐、円柱、円錐	関数、分布

(3) 内容の配分

(表3)

数学的活動は、例えば「問題を作る」のように全学年を通して同等に重視されるもの、「きまりを導く」のように発達段階を考慮して2数量の関係的な見方ができるようになる4年生あたりから重視されるもの、逆に「数える」のように対象となる数の範囲が拡張されず、学年が進むに連れて軽減されるものがある。指

(4) 題材設定・配列の視点

- 活動に順序性のあるものは、その順に配列する。

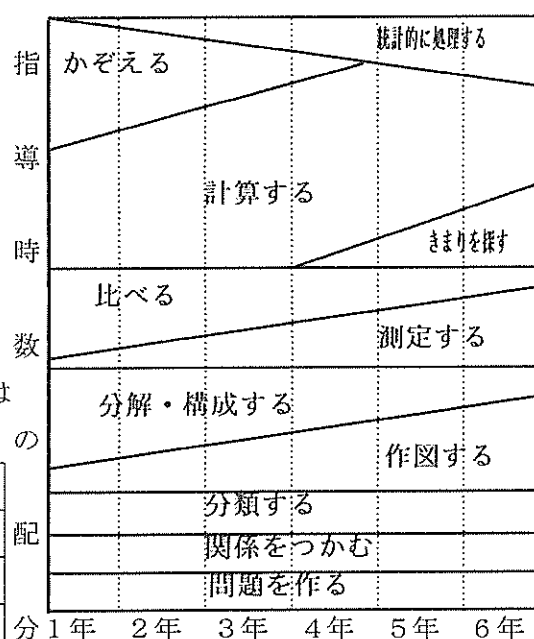
例 「かぞえる」→「計算する」

「比べる」→「測定する」

「構成・分解する」→「作図する」

- 同じ類型の数学的活動が1つの学年で複数ある時は子供の興味、習熟の視点から期間を空けて配列する。の

月	題材名	数学的活動
4月	「10までの数を数えよう」	1対1対応で数える
9月	「20までの数を数えよう」	10といくつで数える
1月	「大きい数を数えよう」	10ずつにまとめて数える



5. 学習指導上のポイント

- (1) 題材を通して、数学的な情報を子供たちが収集、選択できるような場を設定する。

子供たちが、自分の思いや感じ方に基づいて、自分が必要とする情報は、どんな情報で、どれくらいの量が必要かということ判断することを伴うような選択や収集が行えるように配慮する。例えば、第5学年の「速さ」の学習で、速さを比べるために、距離や時間を自分たちで設定しながら、データの収集ができるような場作りを行う。

- (2) 数学的活動が連続・発展し、生活に活用できるよさと実感が味わえるように事象を配列する。

例 第3学年「長いものさし作りをしよう」

1m物差しや紐で測定する。→紐に目盛りをつけて測定する。→巻き尺で測定する。

(運動場のトラック) (身の回りのいろいろなもの) (学校から駅までの道のり)

- (3) 数学的活動が子供の目的的活動になるように工夫する。

例 第4学年「立体迷路を作ろう」…面と面の垂直・平行を構成する数学的活動

6. 実 践

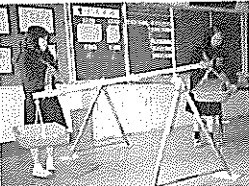
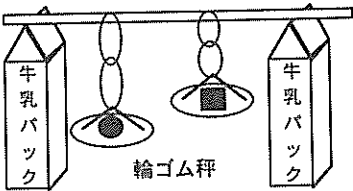
[事例1] 第3学年 重さくらべをしよう

小森 晃

(1) 目 標

身の回りのものの重さについて、手に持った量感をもとにそれぞれの重さに応じた天秤、ゴム、バネ秤、自動上皿秤など適切な計器を選択しながら測定したり、風袋と中身の重さを計算で測定したりする体験を豊かにすることができる。

(2) 指導の実際（7時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. ものの重さをゴムの伸びや天秤の傾きに置き換えて視覚化しながら比べるようになる。(2)	1. 身の回りのものの重さを手に持って比べたり、天秤やゴム、バネなどを使って比べる。 ※ 定規と消しゴム、種類の違う乾電池、ランドセルと習字道具など手に持っても分かりにくい重さを比較させる。 ・手に持っただけじゃ分かりにくいな。・天秤だとすぐにわかるよ。  <天秤で重さを比べる子供>
2. ゴムの伸び方に目盛りをつけたり、天秤の傾きから重さを単位のいくつ分で表したりしながら測定する。(2)	2. いろいろなものの重さについてゴム秤に目盛りをつけたり天秤を使って単位のいくつ分で重さを表して測定する。 ※ 多数のものの重さの順番を決めるために重さを数値化して表す工夫をさせる。  輪ゴム秤  <ゴム秤に目盛りをつける子供>
3. 測るものの重さに応じてそれぞれの測り方や計器を選択したり、単位を使い分けたりする。(2)	3. 自分たちが持ち寄ったものの重さに応じてゴム秤、天秤、バネ秤、自動上皿秤体重計などの計器を選択して重さを測定する。 ※ 計器は測定できる範囲（感量と秤量）があり、単位（gとkg）も重さに応じて使い分けさせる。  <計器を選んで測定する子供>
4. 風袋と中身の重さを計算して、重さから中身の品物を当てる。(1)	4. 容器に入った品物の全体の重さや風袋の重さを測定して中身の品物を当てたり、中身の個数を当てたりする「品物当てゲーム」を行い、重さの量感を生かす。 ・紙は軽そうだけど測ってみると意外と重いな。 ・手に持ってだいたいの重さが分かれば中のものも分かるぞ。  <手に持って中身を予想する子供>

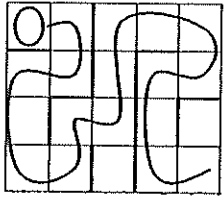
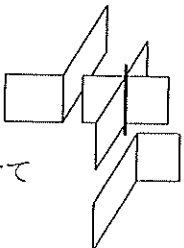
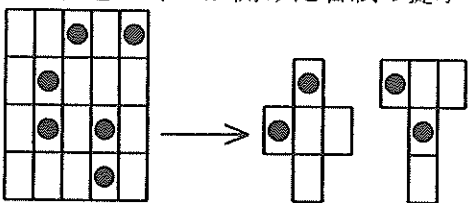
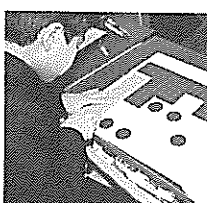
(3) 考 察

本題材では、身近なものの重さを比べる、重さを測定する、重さを利用して品物を当てるなど重さを実際に感じ取りながら調べる活動を十分に行うように題材を構成してきた。子供たちからは、どんなものにも重さがあることへの驚きを感じたり、それを測定することへの意欲を高めているつぶやきが聞かれた。実際の活動の過程ではものの形や大きさ、重さに応じて測り方や計器を選択する工夫はもちろんだが、計器に頼らずにできるだけ自分の手に持った感覚で重さを判断しようとする姿も数多く見られた。これは重さに対する感覚の大切さを感じ取り、感覚を高めようとしている姿である。

(1) 目 標

立体迷路を作るという目的に基づいて、辺や面の垂直・平行に着目して立方体や直方体を構成したり、面のつながりを意識して展開図を作図したりする活動体験を豊かにする。

(2) 指導の実際（14時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 立方体や直方体の面と面、面と辺の垂直と平行の関係をとらえる (4)	1. 蓋のない直方体に仕切りを作って立体迷路（1）を作る。 (1) ボールがスムーズに動くように仕切りを立てる。 ・仕切りの面と迷路の台紙の面が垂直になるように立てないと、ボールが動かなくなるんだなあ。 ・仕切りと仕切りも垂直・平行になるようにしないといけないんだ。  迷路（1）の平面図 (2) 仕切りの一部を取り外しボールの行き来が自由になる風車を作る。 ・風車の心棒を真っ直ぐ（垂直）に立てるには、心棒が台紙の面と2つの向きから垂直にしないといけないのか。 
2. 面と面の垂直・平行の位置関係に着目して立方体や蓋のない立方体の展開図を作図する (6)	2. 蓋のない立方体の2面に穴の開いた箱を組み合わせて立体迷路（2）を作る。 (1) 立方体を切り開いて展開し、立方体や蓋のない立方体＜風車の図＞の展開図を作図する。 ・展開図には、いろいろな種類があるんだなあ。 (2) 立体迷路（2）のボールの通り方の設計図をかいて穴の位置を考えて、蓋のない立方体の展開図を作図する。 ※ 穴をいくつか開けた台紙の提示  穴の位置が異なる展開図＜展開図をかく子供＞  立体迷路（2）
3. 平面や空間上の位置を数の組み合わせを使って表す。 (4)	3. 迷路（1）（2）の経路を数の組み合わせによって表し、位置を表すのに、数が用いられている例をさがす。 ・郵便番号やビルの部屋は、数をうまく使って表されているんだな

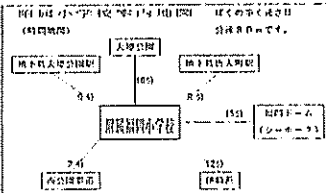
(3) 考 察

題材を通して、子供の活動意欲が連続する立体迷路作りという教材を用いて、直方体や立方体を面や辺の垂直・平行という視点から構成・分解したり、展開図を作図したりする数学的活動が連続するように仕組んだ。このことによって、子供たちは、迷路（1）作りの中でスムーズにボールが動くようにするために、面と面や面と辺の垂直・平行という概念を自ら作りだし、その概念を迷路（2）の中で生かしながら、蓋のない立方体の底面と側面の位置関係を考えて、展開図を作図することができた。また、迷路の経路を数の組み合わせを使って表すことで、生活の中で、座標の考えが用いられているものを取り出し、それらを正方形・長方形や直方体・立方体と関連付けてとらえることができた。このように数学的活動を豊かに持たせることによって、子供は自ら数理を獲得することができる。

(1) 目 標

異種の2つの量の割合としてとらえられる速さについて、その測定を行い、速さの表し方、比べ方、速さを使って時間や距離などといった他の量を求める活動体験を豊かにすることができる。

(2) 指導の実際 (8時間)

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. いろいろな速さ比べの活動を行い、速さに関心をもち速さを、時間と他の量との関係でとらえる。(2)	1. 簡単な速さ比べを行い、「速い」ということは何によって決まるのか、「速さ」とは何かについて話し合う。 ※ 積み木積み上げ競争(時間と積み上げた積み木の個数)、ジュース速飲み競争(時間と飲んだ量)、カード並べ競争(時間と並べたカードの枚数)など簡単な速さ比べを行い、速さについて話し合わせる。  <20個の積み木を速く積み上げる競争をする子供>
2. 速さを測定する体験、距離と時間に着目して、速さを絵図や線分図に表す体験を豊かにする(2)	2. おもちゃの速さや自分の歩く速さを、距離や時間の設定の仕方に工夫しながら測定する。 ※ おもちゃは一定の速さで動く電池のおもちゃ(ミニ四駆、プラレールなど)を使う。 ※ 時間や距離の設定は、各班自由に自己設定し、速さの測定の難しさや測定の仕方の工夫をまとめさせる。  <ミニ四駆の速さをグループで協力し測定する子供>
3. 自分の歩く速さを利用して、距離や時間を求める。(3)	3. 学校から目的地までの自分の歩く時間を実測し、その時間から距離の概測をし、附属小学校からの時間地図や距離地図を作る。  地下鉄大塚公園駅 80×9=720 大塚公園 80×10=800 地下鉄唐人町駅 80×8=640 福岡ドーム 80×15=1200 伊崎浜 80×12=960 西公園参道 80×2=160
4. 知っておけば、生活に役立つ速さについて考え、工夫して測定をする。(1)	4. 「生活に役立つ速さ調べ」ということで、本を読む速さや文字を書く速さなどを測定し、調べた速さを利用して、時間や読んだ本の量、書いた文字などを調べる。  <自分の歩く速さを調べている子供たち>

(3) 考 察

速さを測定する活動は、これまで算数科の学習ではあまり設定されることがなく、速さにおける3つの公式を知らせ、数字操作によって進められていく傾向があった。今日、何ごとにおいても速さを意識しながら生活が進んでいるなか、子供たちにとって、速さは単なる知識だけにとどまっている。本題材では、速さを比べる、速さを測定する、速さを活用してさらに距離や時間を調べるといった実測の活動を豊富に取り込み題材の構成を行った。時計をしっかりと握りしめ、動くものを食い入るように見詰め、測定に集中する子供の姿が見られた。また速さを正確に測るために距離や時間をいろいろ変えて工夫している姿も見られた。感想文を読むと、生活のなかの速さに興味をもち、速さを知って生活することの大切さや便利さを実感している子が多く、活動が子供の心に響いていることが伺える。

7. 研究のまとめ

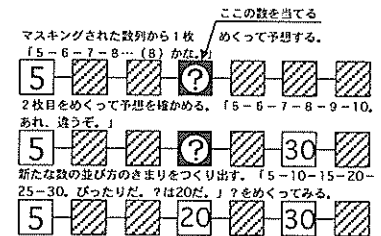
(1) 研究の成果

① 子供の変容

算数科学習の中において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主的活動の姿

1年生の大きな数の学習場面では次のような姿が見られた。この時間は2とび、5とび、10とびなど、数の並び方のきまりを取り出すことをねらっていた。子供たちはまず数列の中からカードを1枚めくり(右①)、その数をもとに数の並び方を考えて2枚目をめくっていった(右②)。2枚目が予想していた数と違うと、別の並び方のきまりを考えだしていった(右③)。この例は数値(備)を自分で取り出し、自己評価しながら考えの修正を行うといった算数の学習における自主的活動の一つの姿である。



イ. 共同的活動の姿

3年生の重さの学習では輪ゴムにものを下げる重さ比べを行った。ゴムが伸びすぎてものが下に落ちてしまい、重さ比べができないでいる友達の姿を見ていたある子供が、輪ゴムの秤そのものを高く持ち上げた。するとゴムが伸びて重さの違いがはっきりした。これを見た子供たちは秤を机の端に置いて輪ゴムが十分伸びる工夫を生み出していった。3年生の長さの学習では物差しで曲線が測れずに困っていた子供たちがお互いの工夫を出し合う中で紐で測定する考えを取り入れて測定していった。「僕たちは物差しをつなぎ合わせたみたいに紐をつないで長くして早く測れるようにしました。」といった工夫をしていた。これは友達とのコミュニケーションによって活動を高めている姿である。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

5年生の速さの学習では子供たちは自分の歩く速さを測定していった。そして学校の近くを歩いた時間と自分の速さから道のりを求めたりしていった。学習後には通学路などの道のりを求めて一番近い道を選んで通う姿がみられた。これは自分の歩く速さを距離の概測に利用している姿である。3年生の重さの学習で軽い紙でできた本やノートが思ったより重さがあることに気づいた子供たちは、その後、持ち物の重さに対する関心が高まり軽装を心がけはじめた。これは「紙皿とかノートがあんなに重いとは知りませんでした。持っていくものをもっと少なくしようと思います。」という子供の言葉からも分かるように、重さで学習したことを生活に生かしている姿である。

② 算数科における豊かな学力の育ち

算数科では「問題解決に必要な情報を収集し活用する情報活用力」「事象の数量や図形に着目しそれらに働きかける問題解決力」「式や図、表、グラフなどの表現を使いこなす数学的表現力」「筋立てて考え、正確に処理する数学的思考力・判断力」を育てることを大切に考える。そこで次のような調査を行って子供の資質・能力の育ちを評価した。

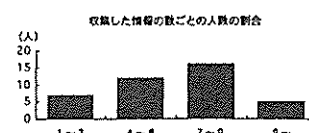
ア. 評価の方法

修学旅行を来年にひかえた5年生を対象に「長崎県まで旅行に行くためのプランを立てよう。」といった場面を設定し、そこで生じる問題を解決していく様子を観察した。そして「(ア)どんな情報をどのように集めればよいか」「(イ)最もよいと思う方法を説明しなさい」「(ウ)自分の考えのよさを友達に説明するためにどうするか」と設問し子供の考え方や具体的な働きかけ方を調査した。

イ. 評価結果

○ (ア)の質問から情報の収集・活用力を評価する。

- a 地図を見て駅やバス停から目的地までの道のりを調べる。
- b バスや汽車の時刻表で時間を調べる。c 交通機関の多さを調べる。
- d 今までに事故がないか安全性を調べる。e 運賃表で費用を調べる。
- f 人数と日数を調べて持ち物をできるだけ少なく（軽く）する。など



※ 7つ以上の観点から資料を収集した子供が50%以上に達している。特にa、b、eなど数学的处理可能な情報は全員が必要と考えており、数量に着目した情報収集や活用の姿が育っている。

○ (イ)の質問から数量や図形を使った論理的な思考力・情報処理力を評価する。

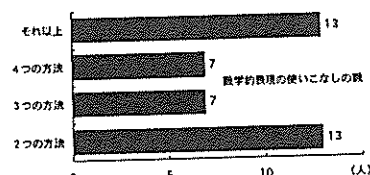
- ・ J Rは福岡から長崎まで153.2km（路線図を調べて）で2時間19分（時刻表を調べて）かかるから時速約66kmになる。
- ・ J Rは福岡から長崎まで4420円（運賃表を調べて）で153.2kmだから1000円で約35km行ける。

※ 収集した資料の距離と時間から速さを算出したり、単価あたりに進む距離などその子供なりの観点から資料に数学的な処理を施して活用していく姿が育ってきている。

○ (ウ)の質問から数学的表現力を評価する。

- ・ 言葉による説明 ・ 数量による説明 ・ 図による説明
- ・ 表による説明 ・ グラフによる説明など

※ それらをどれくらい自分の説明で取り入れたかを調べた結果が右のグラフである。全員が複数の表現手法を用いたが、特に3つ以上の表現が67.5%に達し数学的表現が豊かになっている。



③ 子供の意識の変容

○ 「算数の学習を通して変わってきたこと」では次のような伸びを自覚している姿が見られた。

(自主的な活動の面) ・前は先生や家の人に聞いていたけど、今は自分で考えたりいろいろな本で調べたりするようになった。 ・どんなふうによつていけば解決できるか見通しがすぐにつくようになってきた。 ・お買い物でお金を払うときに今度から自分で計算して出したいです。

(共同的な活動の面) ・自分の考えを友達に聞いてもらったり、友達の考えを言ってもらったりして算数はいろいろな解き方ができるのがおもしろいと思った。 ・自分が思いつかなかった友達の考えを聞くのが楽しみになった。

(自分の成長の自覚の面) ・自分の考えを図や式や表をたくさん使ってかけるようになった。 ・できない問題は途中であきらめていたけど、最後までやり抜けるようになってきた。

(2) 全体考察

子供主体の活動の展開を核とした年間計画を作成、実施してきた結果、子供たちは明らかにしたい事態に出会うと自分たちで必要な情報を集め、その説明では数量化したりグラフ化して分かりやすくする工夫ができてきた。例えば量の測定では測定する対象に応じて道具や方法をかえて、できるだけ正確に測定するような柔軟な見方が育ってきた。その他にもある数の計算ができるようになると自分でさらに大きな数をつくりだしてそれを処理していく態度が見られるようになった。これらは1つの対象に働きかけてつくり出した考えを他の対象に当てはめて、より一般性のある価値高い考えに高めようとする姿である。また、自分たちの求めている道具がないときは、自分たちでそれをつくり出そうといった創造的な姿も育ってきている。あるいは回りの友達に自分の考えを積極的に説明して評価を聞いたり、友達の考えのよさを自分の追究に取り入れて合理的に処理する姿が見られるようになってきている。子供たちは、その意識の変容からも分かるように、自分の情報の収集・活用力、問題解決力、論理的な思考力・判断力、数学的表現力に対して強い自信を持ってきている。

自然事象とのよりよい関係をつくり出す理科学習

理科部 山下 浩徳 安永 純二

1. 本校の考える理科の目標

自分と自然事象とのかかわりに関心を持ち、観察・実験などを通して問題解決を図るなかで科学的な見方や考え方を養うとともに、自然とのよりよい関係をつくっていかうとする実践的な態度を育てる。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「自然事象とのよりよい関係をつくり出す」とは、生活の中の多様な自然事象を自分なりに理解していく見方や考え方をつくり出し、これらの自然事象に共通にひそむきまりや仕組みの巧みさや神秘さを感じて、自然を大切にしたり自然のきまりを生活の中で生かそうとしたりすることである。

このことは、これまでのように学校の中の観察や実験だけで、自然事象の性質やきまりをとらえたと考えるのではなく、一人一人の子供が経験した生活事象と学校での観察や実験とが関係づけられたときに、自然事象の性質やきまりをとらえたと考える。このことが生活の中の多様な自然事象を理解していく見方や考え方を作り出すことになる。

また、これまで以上に主体的に自然に働きかける体験を大切にして、自然の中にひそむきまりや仕組みの巧みさや神秘さを実感していく。それは、自然のきまりや性質がわかることまでが目的ではなく、生活の中で身近な自然を大切にしたり自然のきまりを活用したりするような、自然とのよりよい関係を作り出す子供を育てることを大切にしているからである。

そのためには、子供に自然の性質やきまりを客観的にとらえさせていこうとする立場から、子供が主体的に生活の中の自然事象にかかわり自らの見方や考え方を構成していくという立場で学習内容を見直していく。そこでは、これまでの子供の生活経験から生まれた素朴な概念や理論を大切にするとともに、子供が自然に働きかけ活動していくことも大切な学習内容と考えていく。

このような子供たちに必要な資質や能力を次のように考えている。

- | | | |
|-----------------|-----------|-------------|
| ○ 自然事象に対する関心・意欲 | ○ 鋭い感受力 | ○ 科学的な思考力 |
| ○ 正確な観察・実験 | ○ 積極的な行動力 | ○ 科学的な知識・理解 |

しかし、これらの力は単独で存在するのではなく、総合的に働く力の構成要素として考えられる。

そこで、具体的な活動の中に現れる力としては次のように考えている。

- ① これまでの経験から身につけた、自然事象に対する自分なりの見方や考え方を明らかにし、あいまいさの残る点を、問題として設定する力
- ② 問題を解決するために、自分の考えのもととなる生活経験と関係付けながら観察・実験の方法を考える力
- ③ 考えた方法で実際に観察や実験を行い、結果からこれまでの自分の考えや生活経験を見直す力
- ④ 新たな見方や考え方を明らかにし、これからの自然事象とのかかわりを考える力

(2) めざす子供の具体的な姿

- ① 自分なりに自然事象を解釈する見方や考え方をもっていること。
- ② 自然事象のもつ神秘さや偉大さを感じ取れること。
- ③ 自然と共生・共存し、自然の保護を図ったり自然のきまりをうまく活用したりすること。

3. 理科の内容の考え方

自然事象とのよりよい関係をつくり出す子供を育てるためには、子供たちの身の回りにある植物や動物、空気や電気などの多様な自然の事物（もの）や現象（変化の様子）の中から、どんな事象の性質やきまりを取り出しどんな活動をすればよいかを明らかにする必要がある。

そこで次の観点から検討をした。

(1) 生活環境科をうけて発展した内容であること

本校では3、4年生に生活環境科を新設し、5年生から理科を設定している。

そこで、右の表のように5、6年生の理科では個別の事象の性質より、複数の事象をつなぐ共通のきまりを学習の対象として多く取り上げる。

これは生活環境科での自然の取り扱い方には、子供が1対1対応的に事象に働きかけて、その性質についての見方や考え方を培うことが多いという特徴があるからである。例えば、西公園の虫や室見川の生き物、

身近な花など特定の事象に対する見方・考え方を培い、それらに対する愛着を育てている。

理科ではこの上に立って、植物や動物など個々の事象の性質を学習対象とするより、植物や動物に共通に働く「誕生や成長」という事象のきまりを学習対象としてとりあげたいと考えている。

つまり、5年生からの理科においては個々の事象についての知識を増やすよりも、個々の事象をつなぐ共通のきまりをとりあげることにより、自然との関係を深めていくことをねらっている。

(2) 子供と自然事象とのかかわりを内容とすること

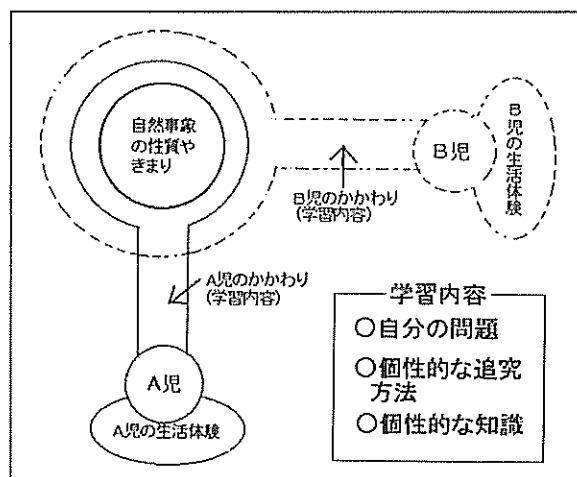
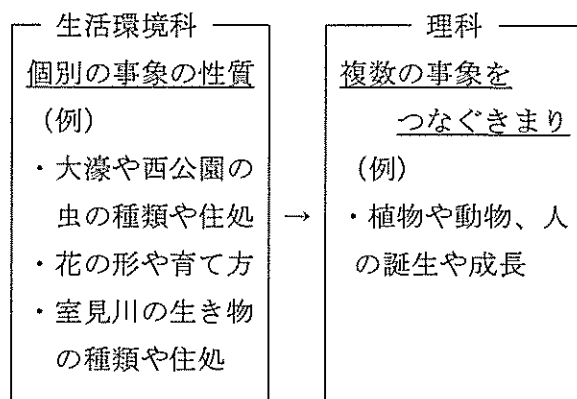
本校の理科では、子供は自ら自然事象に働きかける存在であるという立場を取っている。そこで、学習対象である自然事象のもつ性質やきまりそのものを内容とするのではなく、子供が事象に働きかけることを内容として考える。

つまり、自らの生活体験をもとに自分の問題を見い出すことや個性的な追究のし方、見い出した個性的な知識、すべてを学習内容と考える。

例えば、天気学習では、気象の変化の様子を知ることだけが内容ではなく、自分なりに天気を予想すること、また予想するためにいろいろな気象のデータを集めることも学習の内容となる。このような力こそ、生きて働く力になると考えている。

また、子供と自然事象とのかかわり方を考えたときに、次の理由から子供のかかわり方を3つに類型化している。

- ・ 生物は生命を持ち、それ自身が変化する原因を内在しており、時間とともに変化していく。そのため、誕生や成長といった生命の変化を観察したり、生物の育つ環境を整えて保護したりすることが子供の主なかかわり方となる。
- ・ 無生物の場合は外から変化を与えない限りそのままであり、子供が熱や力を加えることにより変化が生まれる。このような場合は条件を変えて実験したり、見い出したきまりを積極的に活用したりすることが子供の主なかかわり方となる。



- ・ 無生物の中でも月や星、大地の変化は、子供が直接変化を与えることができない。観察したりモデルを作ったりして自然のきまりの素晴らしさを楽しむことが子供の主なかかわり方となる。このような子供の自然事象に対するかかわりの姿から、下の表のように領域と内容を設定した。

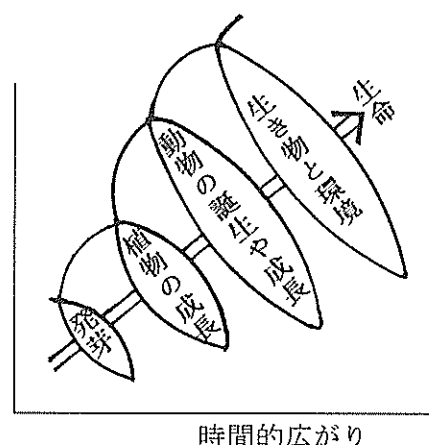
領 域	中 核 と す る 内 容
生物とその環境 へのかかわり	内容は生き物とのかかわりであり、自分自身の体の調子や様子の観察、動物や植物の飼育や栽培を通して、生命の尊重や生命の見方や考え方を育てる。
物質とエネルギー へのかかわり	内容は物のきまりや性質とのかかわりであり、生活の中で物を作ったり現象を調べたりして、物を利用することの利便性や物への見方や考え方を育てる。
地球と宇宙へ のかかわり	内容は地球を含む宇宙とのかかわりであり、天候や星座の観察を通して自然の神秘さや偉大さ、地球や宇宙への見方や考え方を育てる。

4. 年間指導計画作成の考え方

年間計画の作成にあたって次の3点から配列を行っている。

(1) 子供の活動の空間的・時間的広がりから

生物とのかかわりを例にとると、右の図のように生命の尊重や生命の見方や考え方を中核として、「植物の種の内部の観察」から「植物の育つ環境」へ、「生物どうしの関連」へと5、6年生を通して子供の活動が空間的・時間的に広がるように配列する。このように活動が空間的・時間的に広がるとともに、生命に対する見方が深まっていく。



(2) 子供の体験の豊かさや能力の発達に応じること

子供自ら自然事象をよりよく理解する見方や考え方を作り上げるときには、生活や学習で培った素朴な見方や考え方を、これまでの体験を生かしながらよりよい見方や考え方へ練り上げていく。そこで、子供にとって体験の豊富な事象から体験の少ない事象へと単元を配列していく。

また、子供が事象に働きかける能力の発達を考えて、まず直接具体的に自然に働きかけ、自然と応答しながら追究できる対象から、二次情報などを活用した間接的な体験を通して追究する対象へと配列していく。

(3) 自然事象の特性に配慮すること

自然事象にはその性質やきまりがもっとも特徴的に現れる時期がある。そこで人の誕生を含め、生物の誕生や成長は春から秋までに学習をするなどの配慮を行い、子供が観察や実験などの活動がしやすいように季節や時期にあわせて単元を配列していく。

5. 学習指導上のポイント

- (1) 子供の生活の中から学習内容の含まれる自然事象をとりあげて体験活動を行い、そこで起こる現象を説明するような場面を設定する。そして、自然事象に対する自分なりの素朴な見方や考え方では説明できない曖昧さを自覚し、自分の問題をつかむことができるようにする。
- (2) 自分の生活経験と結び付けて考えたその子なりの追究の方法を大切にして、学習を複線化したり指導計画を見直したりする。そして子供の主体的な追究ができるようにする。
- (3) 問題を追究して見い出した自然のきまりや追究の方法を生かして自由な追究活動をする時間を設定する。この中で新たな見方や考え方を生活の中に役立てたり学習の価値を実感したりする。

6. 実 践

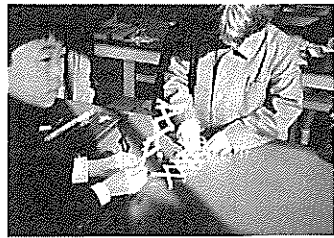
〔事例〕第5学年 生活の中でのこの働きを調べよう

山下 浩徳

(1) 目 標

- ① 身近なてこの仕組みや働きについて生活体験と結びながら調べ、見出し立てこのきまりや調べ方を日常生活に生かそうとする態度を身につけることができる。
- ② てこの働きやてこのつり合いの規則性についての見方や考え方を広げることができる。

(2) 指導の実際（7時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 小さい力を大きな力に変えるてこの働きを体感して、身近に見られるてこの仕組みや働きについての問題をもつ。 (2) 2. てこの仕組みや働きについて、てこの種類や力を測定する方法を工夫して个性的に調べ、支点～力点～作用点の距離とかかる力の大きさの関係をとらえる。 (3) 3. てこの学習で身につけたきまりや調べ方を生かして、自分の自由研究のテーマをきめて調べる。 (2)	1. 自由に動く棒で力くらべを行い、てこの働きや日常目にするてこの道具について調べたいことを話し合う。 (1) 鉄棒に棒を結び、力くらべをする。 ・ 子供が考えた力くらべの場合 第1種てこ（垂直に上げ・下げ） （水平に押し・引き） 第2、第3種てこ（上げ・下げ） <棒を使った力くらべ>  (2) てこの働きやてこの道具について調べたいことを話し合う。 ・ 棒の持つ位置を変えるとどのくらい力が変わるのか調べたい。 ・ ペンチはてこだろうか、他にもてこの道具があるだろうか。 2. いろんなてこ（第1～3種）を使ったり、ゴムやバネばかり、おもりなどで調べ方を工夫したりして、てこの働きやつりあいを調べる。 (1) 支点～力点の距離を変え、つり合う力の大きさの変化をバネばかりやおもりを使って測定する。 ・ どんなてこの場合でも、支点～力点の距離が長い方が力が少なくてよい。 (2) てこの両端におもりやバネばかりをつけて力がつり合う位置を探す。 ・ どんなてこでも「力×距離」が支点の左右で同じだとつりあう。 <第2種のてこ調べ>  3. てこのきまりを生かした道具作りや日常生活の中でのてこ探しなどの自由研究テーマを決めて、自分のテーマについて調べる。 ・ てこのきまりを生かしたマジックハンドや空き缶つぶしを作る。 ・ ピンセットやせんぬきがてこか調べる。<マジックハンド作り> 

(3) 考 察

本単元の学習を終えて、子供たちは身近な生活におけるよりよいてこの使い方を考えることができるようになった。例えば終末の自由研究で空き缶つぶしやマジックハンドなどを作ることができた。また子供のてこに対する概念が整理され、生活の中の物とてこのきまりをつなげて考えることができるようになり、ピンセットやせんぬきがてこか判断できた。このような姿がみられたのは、子供のもつててこに関する生活事象を想起させ、多様なてこを使って追究させたのがよかったと考える。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子どもの変容

理科学習において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア 自主的活動の姿

理科における自主的活動の姿とは、事象と出会い生活体験をもとに自らの問題をもつ姿や、個性的に問題を追究する姿、見い出したきまりや方法を新たな問題に生かしている姿である。

「生活の中の水溶液を調べよう」では、洗淨液を使って学校の汚れ落としをしたことから「洗淨液の種類によってどんな働きや液の成分があるのか調べたい」などの自分の問題を見いだした。また、この学習ではさびた釘や汚れた衣服など、それぞれの実体験から水溶液に溶かす物を持って来て、物の溶け方を調べていた。さらに、単元末の自由研究の時間では「食用酢でも物を溶かせるだろうか」「化粧水にも酸性やアルカリ性はあるのだろうか」など、自分でテーマを決めて学習できた。

イ 共同的活動の姿

理科における共同的活動の姿とは、みんなで個性的に追究して得た個々のデータや考えを出し合い共通性のある科学的なきまりを見いだす姿である。

「物の衝突」では、一人一人がいろいろな大きさの玉を使って衝突の働きを実験した。話し合いでは玉の速さと弾いた距離のグラフの傾きに着目し、みんなのデータを合わせて「衝突させる玉の大きさは違っても、当てる速さが速いほど弾く距離が長い」というきまりを見い出した。

ウ 学習活動の価値を自覚している姿

理科における学習活動の価値を自覚している姿は、学習して身につけた方法や知識を生活の中で生かした有用感を味わっている姿である。

5、6年生のキャンプの星の観測会で、5年生の「天秤座ってどこにあるの?」という問いに、6年生が「夏の星空を見上げよう」で使った星座盤を用いて「夏の大三角があそこだから、あの星の横にある小さな星よ」と得意げに指さして答えていた。

② 理科における豊かな学力の育ち

理科では、「生活体験をもとに問題をもつ、問題発見力」「これまでの経験から観察や実験の方法を考える、追究力」「自分なりに見方や考えを構造化する、見方や考え方を見直す力」などを育てることを大切に考える。そこで次のようなテストを行い、その資質や能力の育ちを評価した。

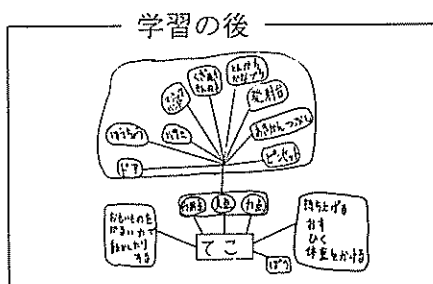
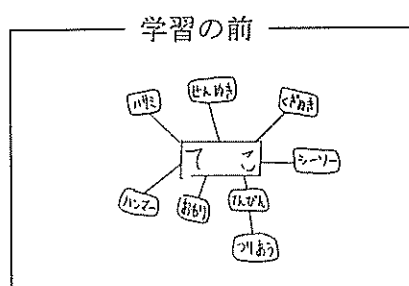
ア 評価の方法《対象5年生、80名》

- | | |
|---|---|
| a | いくつかの種類の磁石を与えて遊ばせる中で、そこからもつ問題やその問題に対する仮説を書かせる。見取るものは、 <ul style="list-style-type: none">・ 単なる疑問か、自らの生活と結び付けた問題か。（問題発見力）・ 自分の経験から生まれた仮説や追究方法であるか（追究力） |
| b | 「生活の中でのこ」の学習の前後の概念地図の比較を行う。見取るものは、 <ul style="list-style-type: none">・ 付加、修正、統合などの知識の構造化が行われているか（見方や考え方を見直す力）・ 知識の量の増加の程度や知識の正誤（結果としての知識理解の変容） |

イ 評価結果

- a 問題発見力については「磁石を近づけると本当にカードが狂うのか磁石の働きを調べたい」、「シートのような磁石もあるから磁石の種類を調べたい」、「磁石を使ってレースをするゲームを作りたい」など生活と結び付けた自分の問題を全員の子供がもてた。追究力については身近な磁石を集めてきたり磁石を使ったもの作りをしたりなど、これまでの経験を生かして子供だけで追究で

b 概念地図の比較



- ・新たに言葉を付加（付加）した人数 ——— 100%
- ・言葉を削除（修正）した人数 ——— 82%
- ・言葉をグループ化（統合）した人数 ——— 100%

③ 子供の意識の変容《対象5年生、80名》

ア 学習態度についての意識調査

○学習への主体性

平成6年度	53	40	7
	よくする	ときどき	しない

よくする ときどき しない

○学習への能動性

53	38	9
よくする	ときどき	しない

よくする ときどき しない

○学習内容の生活化

23	57	20
よくする	ときどき	しない

よくする ときどき しない

平成9年度	45	48	7
-------	----	----	---

75	18	2
----	----	---

43	39	17
----	----	----

平成9年度のグラフのように、子供たちは学習への主体性や能動性、学習内容の生活化の各点で自分自身の学習態度を高く評価している。その中でもとくに学習の能動性と学習内容の生活化の点は平成6年度と比べて、高い伸びを示している。

イ 学習内容についての意識調査

a 「印象に残った実験や観察（学習対象について）」自由記述で書かせた。

- ・ひよこやメダカを実際に誕生させて、赤ちゃんの学習をしたこと。
- ・自分が作った空き缶つぶしで本当に空き缶がつぶれるか試したこと。

b 「どんなとき楽しいと感じるか（学習活動について）」自由記述で書かせた。

- ・いろいろなやり方や答えがあって、自分の考えで実験や観察をするとき。
- ・自分の力や知識が利用できたとき。
- ・友達と協力してレポートをまとめるとき。

(2) 全体考察

成果としては、学習態度の意識調査にみられるように学習内容の生活化がはかられ、「メダカの学習を生かして家の熱帯魚の卵を育てたよ。」「ホウ酸の結晶のように身近にあるものでも結晶ができるかやってみた。」など、生活の中で実践する姿が見られたことである。この姿は、学習したことを生活場面にいかしている「自然とのよりよい関係を作り出す」姿であると考えている。

- 177 -

対象への愛着を深める生活科学学習

生活科部 藤木 寿美枝 石田 耕一

1. 本校の考える生活科の目標

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然に進んでかかわりながら、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

対象とは、子供の身の回りにある自然や社会であり、子供のまわりに存在するもの・人・ことでもある。子供がその思いや願いに基づいて対象に働きかけることにより、その結果が子供に受け止められ、新たな働きかけが生まれる。愛着とは、特定のもの・人・ことなどに対して形成される、愛情に基づく心理的なきずなであり、そのものや人にふれたり、ことに接したりすることによって安心感をもてるような結びつきをいう。

対象への愛着を深めるというのは、自分の身近な社会や自然の対象にふれあい関係しあうことによってその対象へ好感をもち、愛情を感じるようになることである。この過程では、子供は対象への関心・思考・気づきを高めることにより、自分自身にとってもつ意味に気づき、身の回りのものを見直すことができる。

対象への愛着を深めるためには、一度でなく、繰り返し対象への働きかけが行われなくてはならない。このため、活動が連続発展するように対象に対してかかわろうとするような活動が必要であり、このような活動を継続的に働きかける活動とよぶ。

対象への愛着を深めるために、継続的に働きかける活動を重視するのは、生活科で行う活動がひとつひとつ独立した活動ではなく、活動のそれぞれが他の活動と関連をもち、一つの活動を行うことによって次の活動が予想され、活動への意欲がもてるような活動で構成するためである。このような活動によって構成された生活科の活動は、子供にとって興味深い活動であり、自分から進んで動きたくなくなるような主体的な活動を生み出すものと思われる。

＜継続的に働きかける活動とそれによって得られる能力・態度＞

- ・見続ける活動 — 観察力、問題発見力
- ・調べ続ける活動 — 問題解決的能力、情報の収集処理能力
- ・育て続ける活動 — 自他の生命を大切にする態度、環境への関心
- ・表し続ける活動 — 表現能力・表現を楽しむ態度
- ・遊び続ける活動 — 社会的ルールの取得

(2) めざす子供の具体的な姿

対象への愛着を深める子供の姿を次のように考える。

- 身近な社会や自然に関心をもち、これと積極的にかかわり続けようとする子供。
- 工夫しながら多様にかかわることを通して、多面的に対象を知ろうとする子供。
- 好ましい環境とのかかわりを実践できる子供。
- 自分が回りの人から見守られていることに感謝し、意欲的に活動を広げていくことのできる子供。

3. 生活科の内容の考え方

子供たちに自立への基礎を養うためには、子供にとって必要でありながら不足している価値ある活動や子供自らが進んで対象への働きかけを繰り返し、対象への愛着を深めていく活動が重要である。

(1) 子供たちにとって価値ある活動

子供たちにとって価値ある活動とは、子供たちの成長にとっての必要な活動を取り出し、内容の重点化を図った活動である。

右表は、本校保護者に子供にさせたい体験のアンケートを取った結果である。この結果からは、第一に自然とふれあう体験、第二に体を使って仕事をする勤労体験、以下友達や異年齢・地域の人などとふれあう体験などが求められている。これは、本校が都市部に位置し、自然とのふれあいが極めて少ないことや兄弟の数が少なく、地域とのかかわりも薄いという実態から生じていると思われる。そこで本校ではこれらの実態から、特に「自然と深くかかわる活動」と「人と深くかかわる活動」を価値ある活動として、重点的な内容として設定する。

<子供にさせたい体験>

(保護者アンケートより)

1. 自然とふれあう体験
2. 勤労体験
3. 友達や異年齢の人とふれあう体験
4. 地域活動に参加する体験
5. ボランティア体験

↓ ←子供の実態

<価値ある活動>

- 自然と深くかかわる活動
- 人と深くかかわる活動

(2) 対象への愛着の深まる活動

対象への愛着を深める活動とは、子供たちは繰り返し対象にかかわることによってそのものが好きになり、対象に対して心地よさや安定感を感じる活動のことである。この活動を行うことにより、子供たちは、自然に対する親しみや人から見守られているという思いをもち、それを基盤にして意欲的に活動を行い、自立への基礎を養うことができる。

これまでの生活科でも、活動を内容と考えていたが、ややもすると単に楽しいだけの活動で終わりがちであった。これは、活動がその場限りで終わり、その活動を基にして気づきが広まったり、思いが深まったり、ふるまい方が変わったりすることが少なかったためである。このため、活動が子供に根付いたり、学習が生活化したりすることができにくかった。そこで、学習したことが子供の生活に生かされるような活動が必要となる。

愛着が深まる対象の条件としては、第一に子供の身近にあり、何度も働きかけることのできるもの。第二に働きかけるたびに新しい発見があるもの。第三に子供に多様な発見を促すものなどが考えられる。そして、このような対象と活動を内容として設定する。

4. 年間指導計画作成の考え方

年間指導計画の作成にあたっては、子供たちが価値ある体験を継続的に行いながら対象への愛着を深めることにより、自立への基礎を養うことをめざしている。このために具体的には、次のような点を留意している。

(1) 愛着の深まる段階をふまえた単元の構成にする

愛着の深まる段階を次のように考え、愛着が単元や年間を通して深まるように計画する。

<愛着の深まる段階>

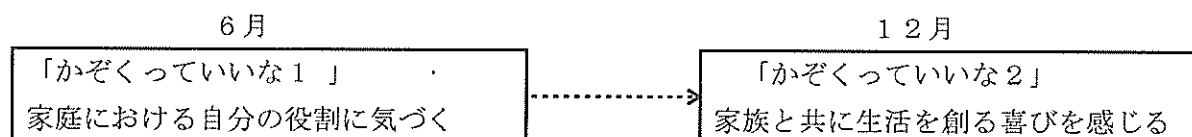
①関心をもつ段階	対象に対して近づき、自分の感覚でそのものとふれあおうとする段階。
②好意をもつ段階	対象の傾向やよさに気づき、対象に好意をもつ段階。
③安定感をもつ段階	対象とのかかわりを深めたいと思い、そこに対して心地よさや安定感を感じ、そこを基に他に対しても働きかけようとする段階。

(2) 子供が継続的に対象に働きかけるような単元の配列を行う

子供にとっての活動は単発で終わることなく、自分が学習したことが次の学習へも連続発展するような活動が望ましい。そのために、次の3点からの継続を大切にして単元を配列していく。

① 思いの継続

思いの継続とは、自分が関心をもった対象に対して愛情を抱いたり、新しい問題をもったりしながら対象とかかわり続け、自分の思いを日常の学校生活や家庭生活に生かしていくことである。そのために、同じ対象を学習対象とする単元を年に数回位置付ける。例えば第1学年の家族単元を従来なら12月に1回配置していたものを6月と12月というように数回配置した。そのことにより、下図のように家族に対する愛着の深まりを生むことができると考えた。このように配置することによって、子供は自分の育ちを学習に持ち込むことができ、育ちそのものへの振り返りも容易になる。



② 時間的継続

対象の時間的な経過による変化が感じられるよう、春・夏・秋・冬と季節を経るごとに対象にかかわっていきける単元を配列する。

③ 空間的継続

一つの間を基点に、さらに場やそれにかかわるもの・人・ことなどを広げていきけるよう、単元を配列する。例えば、下図のように、西公園という場において、春には西公園の探検を行い、草花や虫などに関心を持ち、夏には、野鳥の会の人との出会いを通して小鳥に目を向けてく活動である。さらに秋には公園内の秋を地域の人たちとともに見つけて西公園の楽しみ方を広げ、冬には公園の遊びマップを作ったり地域の人と協力して巣箱をかけたりして西公園への思いを深めていく活動である。

＜継続的に対象に働きかける単元の例＞

単元	あらつ の 春	⇒	あらつのおかの小鳥	⇒	あらつ の 秋を楽しもう	⇒	わたしたちのたから西公園
思いの継続	もつと～した いな		こんなこともある んだ		いろいろな楽しみが あるな		大好きだよ西公園 大切にしたいな
時間的継続	春	→	夏	→	秋	→	冬
空間的継続	草花・虫	→	草花・虫 小鳥・地域の人	→	動植物・地形 地域の人	→	動植物・地形・施設 地域の人・下級生

5. 学習指導上のポイント

継続的に働きかける活動となるよう次のような点を学習指導上のポイントとして考える。

- 学習対象の対して、多様な方法で多方面から活動できるようにすること。
- 子供の興味・関心・必要感に根ざした学習対象に対し、子供が目的的に、あるいは、連続的・発展的に追求活動を行うことが可能であること。
- 子供の実生活に根ざした活動であり、子供が自ら振り返りを行える活動にすること。
- 子供の諸感覚を通した直接体験が多く含まれていること。
- 子供の意識の流れに応じて学習展開が柔軟に展開できること。

6. 実 践

〔事例1〕 第1学年 ようちえんさんとなかよしⅡ

石田 耕一

(1) 目 標

- ① 園児が冬の遊びを楽しんだり上手にできるようになったりした喜びを自分のものとして感じ取ることができる。
- ② これまでの園児とのかかわりを「なかよし絵本」に生き生きと表現し、園児とのかかわりにおける心地よさや自己の高まりを感じ取ることができる。

(2) 指導の実際（9時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 冬休みにした冬の遊びを仲良しペアの友達と楽しく行う。 (2)	1. 汀幼稚園を訪問し、仲良しペアのお友達と冬の遊びをする。  <お手玉をして遊ぶ> <すごろくをして遊ぶ> <あやとりをして遊ぶ> ※ 園児に喜んでもらえたかという視点からの振り返り活動を行わせる。
2. 遊び道具の作り変えや試しの遊びを繰り返す中で、冬の遊びが上達したり、冬の遊びの工夫にきづく。 (2) 仲良しペアのお友達に喜んでもらおうという思いをもって冬の遊びを楽しむ。 (2)	2. 冬の遊びをさらに楽しいものにし、園児と触れ合う。 (1) 園児に喜んでもらうために、冬の遊びを工夫する。 ○ 仲良しペアのお友達に喜んでもらおうという思い ○ 仲良しペアのお友達の側に立った思考 ○ 楽しんでもらうための工夫や努力（遊びの変更や遊び道具の改良）  <分かりやすいに絵のカルタを作る> <竹馬の練習をする> <数え歌を練習する>
3. 仲良しペアのお友達への思いや気づきを「なかよし絵本」に生き生きと表現する。 (3)	3. 仲良しペアのお友達と一緒に「なかよし絵本」を作る。 ○ これまでの園児との触れ合いの様子 ○ 仲良しペアのお友達との協同活動 ○ 仲良しペアのお友達への愛着の深まり ※ マジックショー見学を学習のまとめとする。 <楽しく話しながら表現する> 

(3) 考 察

本單元においては、單元「ようちえんさんとなかよしⅠ」で培ってきた汀幼稚園児への好意をもとに、他者志向的共感に基づいたふるまい（活動2）や仲良しペアのお友達とのかかわりにおける心地よさをもつと同時に自己の高まりを感じ取る姿（活動3）が見られた。

このことは、園児に喜んでもらえたかという視点からの振り返り活動や園児と一緒に「なかよし絵本」を作る協同活動を設定したことによるものと考えられる。

(1) 目 標

- ① 身近にある秋の自然に関心をもち、小道づくりを通して秋の西公園への愛着を深めることができる。
- ② 自分なりの秋の西公園の楽しみ方を地図やポイントカードに表現することができる。

(2) 指導の実際 (10時間)

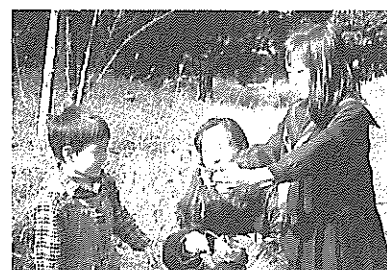
ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 自分たちの知らない西公園の魅力を発見する。 (3) ・ 季節ごとに変化する西公園の楽しみ方を発見する。 ・ 秋の小道の楽しみ方を体験する。	1. いつも西公園を歩いておられる田村さんに、ご自分の西公園の散策の小道を教えてもらい、その小道をみんなで歩いてみる。 (1) 田村さんに定期的に歩かれている西公園の魅力を尋ねる。 ・ ドングリって場所によって大きさが違うんだね。 ・ 水引草って珍しいね。同じ茎なのに表と裏では色が違うんだよ。 (2) 田村さんの小道を回りながら、各ポイントで示された活動を試す。 ・ 落ち葉で友達の顔をつくろう。 ・ ネコジャラシで手品をしよう。
2. 自分なりの秋の楽しみ方を見つける。 (5) ・ 西公園のどこにどんな秋があるかに気づく。 ・ 友達の秋を体験する。	2. 自分の公園の秋の小道を作る。 (1) 自分で西公園の秋を見つけ地図に描く。 ・ 秋のふわふわススキ村へ行こう。 ・ 秋のじゅうたんは気持ちいいよ。 (2) みんなで見つけた秋を話し合い、クラスの地図に表していく。
3. 家族や友達と小道を回り、自分の秋を共に味わう。 (2)	3. 友達やうちの人と一緒に自分の秋の小道を回ってみる。 ・ お母さん、ここが秋のシンボルを集めた場所よ。 ・ またみんなでこれるといいな。 ・ 今度は違う季節の西公園を見せたいな。



<田村さんと小道を巡る>



<秋のふわふわススキ村>



<お母さん弟と一緒に>

(3) 考 察

これまで子供たちは、1年生のときから西公園と親しみ、自分なりの楽しみ方で遊んできた。しかし、広い西公園には子供たちの知らない楽しみ方がまだ多くある。そこで、西公園をよく散策される方の小道をヒントにすることにより、これまでと違った西公園の魅力を自分なりに探索することができた。この活動の最中、子供たちから、「西公園っていろんな遊びができるから大好き」の声が聞かれます。西公園への愛着が深まっている様子がみられた。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

生活科学習において次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主・自立的活動の姿

本校生活科では、自主的・自立的活動の姿を対象に出会って思いをもち、自分なりのやり方を考えて進んで活動を行おうとすることであると考えている。第2学年単元「小鳥となかよくなろう」の単元において、S児は自分の身の回りに小鳥が数多くいることを知り、小鳥が喜ぶものを作りたいという思いを抱いた。そこでどんなものを作れば小鳥が喜ぶかの情報を収集に、油山にバードウォッチングへ行き、そこにある「自然観察センター」でバードテーブルやモデルの小鳥に興味をもった。そして、その作り方をセンターの所員の方に尋ね、意欲的に製作に取り組むことができた。

イ. 共同的活動の姿

共同的活動の姿を友達と活動の楽しさを共有する姿であると考えている。第1学年単元「じゃんぼすべりだいであそぼう」では、斜面や傾斜を利用した遊びで、互いに声を掛け合いながら楽しく活動する姿がみられるようになった。また、場の変化に応じた活動を考える中で、子供たちは自ら遊びのきまりを作りだしたり役割分担を決めたりして、遊びの楽しさを共有し合う姿を見ることができた。



<なかよく遊ぶ姿>

ウ. 学習の価値を自覚している姿

学習の価値を自覚している子供の姿を、学習したことに対して満足感を感じている姿であると考えている。第2学年単元「大好きなおじいさんおばあさんにプレゼントをしよう」では、これまで自分たちのことをかわいがってくれたおじいさんやおばあさんに自分があげたいプレゼントを製作し贈る活動を行った。右の作文は、プレゼントを使ってもらって喜んでいる子供の作文である。

おじいさんおばあさんの
うちに行くとわたしはあげた
折り紙入れにいつもはがきやお手紙を
たくさん入れてあるのでわたしはとて
うれいすおじいちゃんたちがよろ
こんでくれるプレゼントができてよかった

<子供の作文>

この作文から、プレゼントをしてよかったという満足感を抱いている子供の姿を見ることができる。

② 生活科における豊かな学力の育ち

生活科では、「自分の思いを抱く力」「継続的に働きかける力」「相手の気持ちを推し量る力」が大切であると考えている。そこで、次のようなテストを行い、その資質や能力の育ちを評価した。

ア. 評価方法

子供たちをこれまで行ったことのない西公園の場所に連れていき、そこでどんな遊びをするかを観察した。そこで、次の3点を観点に評価した。

1 「自分がしたいことがはっきりしているか」(自分の思いを抱く力)

①自分で自分の思いがつくれる。 ②友達と共に思いをつくりだす。 ③思いを抱けない。

2 「これまでの遊びの経験を生かして遊びを工夫しているか」(継続的に働きかける力)

①これまでの経験をもとに新しい遊びを創り出している。 ②これまでの経験をもとに遊びを工夫している。 ③遊びに工夫が見られない。

3 「友達と仲良く遊べているか」(相手の気持ちを推し量る力)

①友達と仲良く遊んでいる。 ②友達と一緒に遊んでいる。 ③一人で遊んでいる。

イ. 評価結果

- 1 (自分の思いを抱く力) どんな遊びをしたいかが決まらない子供はなく、自分がやりたいことを自発的に決められていた。
- 2 (継続的に働きかける力) 他の場所で行った木のほこらを基地にした遊びをもとにして、基地を結んだ「まよいの大迷路」という遊びを考案して遊ぶ姿が見られた。
- 3 (相手の気持ちを押し量る力) 共同して友達との遊びを工夫する子供が大半で、一人遊びをする子供は2人であった。

③ 子供の意識の変容

<活動への興味・関心>

○今までの生活科で楽しかったことは何ですか。(子供向け)

- ・ 名人先生と棒投げをしたり、野鳥の会の先生と鳥を探しに行ったりしたことがおもしろかったです。今度の生活も楽しくしたいと思います。楽しかったことをふやしたいと思います。

○家庭で生活科のどんなことが話題になりますか。(保護者向け)

- ・ 西公園の自然の中で楽しく遊んだこと、大きな木の音や香りのいい木の話、カツオナが大きくなっているか毎日見に行ったことなどをうれしそうに話してくれました。(保護者)

西公園や他の所の探検、遊び、バードウォッチングとそれに付随する活動、製作活動などが多く、活動名をあげる子供がほとんどであった。家庭では、その日の活動の様子を詳しく家人に報告している子供が多かった。

<活動の継続性>

○家で続けていることはどんなことですか。(子供・保護者向け)

- ・ お風呂洗いや食器並べを1年生のときからしています。(子供)
- ・ 学校で野菜をたくさん育てたので、家でもねぎや花を植えてみました。(子供)

○進んで家族や友達・地域の人にかかわる姿はみられますか。(保護者向け)

- ・ 名人先生と接して以来、デパートなどでお年寄りを見かけると、進んでドアを開けているのを見てうれしくなりました。(保護者)

食器並べや兄弟の世話などの家庭での仕事や草花の栽培を続けている子供が多い。また、地域の中では、気軽に年寄りに声をかけるなど学習したことが生活化されている様子がみえる。

(2) 全体考察

子供たちの日常の活動の様子やアンケートから、子供たちは自分から進んで活動を楽しみ、そこを生活のなかでも生かしていることが分かる。これは、活動内容が子供の実態に適合しており、子供たちに活発な活動を促しているためであると思われる。また年間指導計画の面から見ると、本校の計画が学校での学習のなかで生活に生かせるような体験を年間計画に繰り返し位置付けているためであると思われる。この繰り返し活動を位置付けることによって、効果的な面が2点みられた。一つは、活動に質的な深まりが見られることである。例えば、実践事例2にみられるように西公園での活動をみると、1年生からの西公園での遊びの経験をもとにして、次には場所の特性を使った遊びを考案していった。二つめは、学習の継続化や生活化という点での有効性である。学習が一時期で終わらず数回にわたって行われるので、初回に学習したことの成果が次の学習に生かされることが可能である。この間、学習は子供の意識に残っており、再学習した折りに学習の成果が新しい学習に付加できると共に、学習したことの強化が可能になる。また、家庭生活や地域においても学習したことの成果が継続していることが認められた。

「生涯音楽の基礎」を培う音楽科学習

音楽科部 津本 修一

1. 本校の考える音楽科の目標

創造的な音楽活動を通して、音楽に対する豊かな感性と音楽性の基礎を培うとともに、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「生涯音楽の基礎」とは、小学校段階において身につけさせたい「日常生活に生きてはたらく音楽的諸能力や態度」を意味するものである。近年にみるマス・メディアの発達および音響器機や音楽ソフトの普及、様々な音楽教室の門戸の広がりなどにより、子供たちを取り巻く音楽的環境の変化および多様性には目を見張るものがある。このような多種多様な音楽的環境にある子供たちにとって、生涯にわたって音楽を愛好し、自ら音楽とかかわりながら日常生活を潤いあるものにしていくことができる力がこれから必要になってくると思われる。このような力を育成すべく本校の音楽科では、低学年表現科での表現活動の経験を生かしつつ、子供一人一人に「生涯音楽の基礎」を培うことを基本的な理念として学習指導を展開していきたいと考える。そこで、これからの音楽科では、子供の「創造的な音楽活動」を重視していくようにする。「創造的な音楽活動」とは、子供一人一人が自分なりの音楽の楽しみ方を身につけようとする態度を生み出す子供と音楽とのかかわり合いである。「創造的な」というのは、単に曲想表現の工夫や音楽をつくって表現するということのみを指すのではない。子供たちが、様々な音楽活動を通して「自己の音楽の楽しみ方をつくりだしていくこと」を意味しているのである。具体的には、音楽を聴いたり、歌唱曲を歌ったり、器楽曲を演奏したり、音楽をつくって表現したりといった様々な音楽に対する積極的なかかわりのなかで、子供一人一人が自分なりの聴く楽しさ、歌う楽しさ、楽器を演奏する楽しさ、音楽をつくる楽しさを味わい、その楽しみ方を探りながら身につけていくことである。

このような子供たちに身につくであろう力を次のように考えている。

- ① 音楽をすすんで聴いたり表現したりすることができる力 【音楽に対する関心・意欲・態度】
- ② 音楽のよさ・美しさを感じ取り、感動を味わうことができる力 【音楽的感覚／感受力】
- ③ 楽曲の曲想表現を工夫したり、音楽をつくって表現する力 【音楽的思考力／判断力／解釈力】
- ④ 表現上の必要に応じて、歌唱法や楽器の奏法を身につけることができる力 【音楽的技能】
- ⑤ 自分からすすんで日常生活のなかで音楽を楽しむことができる力 【音楽の実践力】

(2) めざす子供の具体的な姿

本校の音楽科では、次のような子供像をめざしている。

- ① 音楽を聴いたり、歌を歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりすることが好きで、意欲的に活動する子供
- ② 音楽を聴いて、そのもち味を味わい、身体や言葉などで素直に表現できる子供
- ③ 自分の思いをもとに、楽曲の演奏を工夫したり、音楽をつくったり、音楽で自己を表現する喜びを味わえる子供
- ④ 日常生活で、音楽ソフトや楽譜・資料などを収集したり利用したりして音楽を楽しめる子供

3. 音楽科の内容の考え方

本校の音楽科では、子供が生涯にわたって音楽を愛好し、自分なりに音楽を生活のなかに生かしていくことができるような能力や態度を育てていくうえで、必要であると考えられる様々な音楽活動を「創造的な音楽活動」と総称し、音楽科の内容として設定することにした。

- 内容の区分としては、子供の活動の様相ごとに聴く活動、歌う活動、楽器を弾く活動、音楽をつくる活動の4つに整理し、それぞれに下位項目を設定するようにした。
- 発音や発声法、楽器の基本的な奏法については、特に項目を設定せず、音楽活動のなかで必要に応じて指導を行っていくようにする。
- 音符・休符・記号の理解および表現に関する内容は、上記4つの活動のなかで適時指導を行っていくようにする。

【音楽科の内容】

(1) 聴く活動

- ア. 音楽のよさを全体的に味わって聴く。
- イ. 音楽を特徴づけている構成要素のよさを感じ取って聴く。
- ウ. 楽器の音色や人の声のよさを感じ取って聴く。
- エ. 自分の好きな音楽ソフトを収集して聴く。

(2) 歌う活動

- ア. 自分の好きな音楽ソフトを聴いて歌う。
- イ. 歌詞の情景や楽曲を特徴づけている音楽的要素を生かして、工夫して歌う。
- ウ. 音の重なりや和声の響きのよさを感じ取って合唱をする。
- エ. 自分の愛唱歌のレパートリーをつくったり、歌ったりする。

(3) 楽器を演奏する活動

- ア. 自分の好きな音楽ソフトを聴いて演奏する。
- イ. 楽曲を特徴づけている音楽的要素を生かして、工夫して演奏する。
- ウ. 音の重なりや和声の響きのよさを感じ取って合奏をする。
- エ. 自分の演奏曲のレパートリーをつくったり、好きな楽器で演奏したりする。

(4) 音楽をつくる活動

- ア. 楽曲の特徴を感じ取って、リズム伴奏をつくる。
- イ. 言葉のリズムやアクセントを生かしたり、自分のイメージをもとに旋律をつくる。
- ウ. 音の重なりや構成を工夫する。
- エ. 表したい情景や心情をもとに自由な発想で即興的に表現する。

4. 年間指導計画作成の考え方

本校の音楽科では、子供主体の活動に主眼をおき、「生涯音楽」といった将来を見すえた音楽科教育という立場に立ち、次のような視点に立って年間指導計画作成にあたるようにした。

- 各学年の創造的音楽活動のおおよその割合を、学年の発達段階を考慮して次のように設定する。
 - ※ 聴く活動は、全学年を通して鑑賞だけでなく、歌う活動や楽器を演奏する活動と関連させながら取り扱い、全体の4分の1程度と充実させる。
 - ※ 学年の発達特性を考慮し、歌う活動の割合については下学年の方を多く、楽器を演奏する活動や音楽をつくる活動の割合については上学年の方を多くするようにする。

【各学年の基本的な創造的音楽活動の内容の割合】

創造的音楽活動の内容	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
(1) 聴く活動	25%	25%	25%	25%
(2) 歌う活動	40%	35%	30%	25%
(3) 楽器を演奏する活動	20%	25%	25%	30%
(4) 音楽をつくる活動	15%	15%	20%	20%

- 各内容の学年の目標に照らし合わせ、2学年ごとに音楽の楽しみ方や表現や鑑賞の能力に系統性をもたせた内容を設定する。

【内容の学年系統例】

	第3・4学年	第5・6学年
(1) ア	音楽のよさを感じ取って楽しく聴く。	→ 音楽のよさを味わいながらすすんで聴く。
(2) ア	教材曲などの音楽ソフトを参考にして演奏する。	→ 自分の好きな音楽ソフトを選択・収集し、聴きながら楽しく歌う。
(3) ア	教材曲などの音楽ソフトを参考にして演奏する。	→ 自分の好きな楽曲の音楽ソフトを選択・収集し、参考にして演奏する。
(4) ア	楽曲の特徴を感じ取って、簡単なリズム伴奏をつくる。	→ 楽曲の特徴を感じ取って、リズムの組み合わせを工夫してリズム伴奏をつくる。

- 子供の自主運営による音楽発表会を目的とした題材の開発を行い、年間計画に位置づける。

※ 歌う活動を中心とした題材例

- ・音楽会「日本のメロデーシリーズ」をひらこう(第4学年) ・世界の民謡と民族音楽の音楽祭をひらこう(第6学年)

※ 音楽をつくる活動を中心とした題材例

- ・「海のファンタジー」をつくらう(第5学年) ・「宇宙のファンタジー」をつくらう(第6学年)

- 一学期をひとつの大きな学習サイクルとして年間計画を組織し、次のような題材構成の重点事項をもとに題材構成・配列を行い、年間を通した内容のバランスを図るようにする。

※ 聴く活動を中心とした題材構成 → 歌う活動・楽器を演奏する活動を中心とした題材構成

→ つくる活動や音楽発表会を目的とした題材構成というように各学期の題材を構成、配列する。

【第4学年 第2学期 題材配列事例】

題材構成の重点事項	第4学年 第2学期 題材例 [指導時数]	題材の内容
聴く活動に重点をおき、他の活動と関連を図った題材構成	(9月指導題材) ふしのとくちょうを感じ取って [約6時間]	(1)ア、イ、ウ、エ(2)ア、イ(3)ア、イ
歌う、楽器を演奏する活動に重点をおいた題材構成	(10月指導題材) たのしく合奏をしよう [約4時間]	(1)ア、(3)ア、イ、ウ、
つくる活動や音楽発表会を目的とした総合的な題材構成	(12月指導題材) オリジナル音楽会をしよう [約8時間]	(1)ア、イ、エ、(2)イ、エ、(3)イ、ウ

- 季節・学校行事など学校生活や他教科の内容と関連を図った題材構成および配列を行う。

(題材例) ・季節との関連例 — 第4学年2月題材 ミュージックシアター「雪んこのたび」

・学校行事との関連例 — 各学年共通題材 月見／藤見学芸会をしよう

・国語科との関連例 — 第3学年題材 ミュージックシアター「3年とうげ」

5. 学習指導上のポイント

- (1) 子供の音楽的プロフィールを十分に把握し、その実態に応じた指導を工夫する。

・音楽活動への興味、関心、志向性 ・音楽的技能の実態 ・家庭での音楽経験の実態 など

- (2) 子供が音楽の楽しみ方を身につけていくための手だてや支援を工夫する。

・鑑賞教材に関する音楽ソフト／資料の充実 ・子供の実態に応じた楽曲の選定／編曲

- (3) 子供が自分の音楽的成長を実感できるような、自己および相互評価活動を継続的に行う。

・音楽ノート ・計画／感想カード ・リコーダーステップカード ・表現交流カード など

6. 実践例

〔事例〕 第5学年 手づくり音楽会をしよう

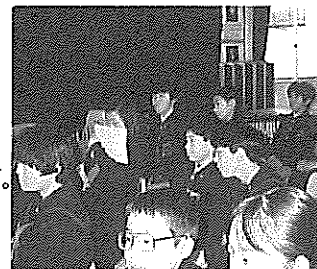
津本 修一

(1) 目 標

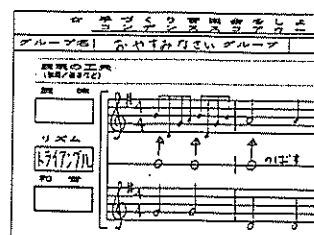
グループで演奏する楽曲を選択し、楽器編成や簡単なアレンジを行いながらアンサンブルを行い、楽曲の持ち味や特徴を生かして表現する楽しさを味わうことができる。

(2) 指導の実際（8時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 「世界の子守歌」を鑑賞し、「手づくり音楽会」づくりへの意欲と見通しをもつ。(2)	1. 教材曲「世界の子守歌」を鑑賞し、「手づくり音楽会」の計画をたてる。 (1) 「世界の子守歌」を鑑賞する。 ・ 子守歌にもいろいろあるんだね。ぼくは、シューベルトの曲が気に入ったよ。 ・ あっ。この曲知っている。自分でも歌ったり、リコーダーでふいてみたいです。 (2) 「手づくり音楽会」の計画を立てる。 ・ 好きな曲を選んで、同じ曲の人でグループを組んで、演奏したいです。 ・ 歌だけでなく、楽器なども入れて合奏してみたらおもしろいと思います。
2. グループごとに簡単なリズム伴奏や副旋律づくりをして、アンサンブルをする。(5)	2. グループごとにアンサンブルをする。 (1) アンサンブルのためのアレンジをする。 ・ ぼくは、鍵盤ハーモニカが得意だからメロディーをやりたいな。 ・ 子守歌のやさしい感じができるように、トライアングルを入れたいと思います。 ・ グループ別コンテンススコアカードの活用 ・ 楽器編成例：ウッドブロック、すず、タンバリン、トライアングル、歌は全員で。〈グループ別コンテンススコアカード〉 (2) アンサンブルのためしの活動をする。 ・ ハーモニーのパートは、自分でもっと伴奏のかたちを工夫してみよう。 ・ メロディーのパートとリズムのパートのバランスを考える必要があるな。 (3) アンサンブルの表現を練り上げる。 ・ ①課題の設定→②部分/パート練習→③アンサンブル練習→④表現の検討
3. 「手づくり音楽会」の発表会を行い、グループアンサンブル活動の成就感・満足感を感じ得する。(1)	3. 「手づくり音楽会」の発表会を行う。 ・ 発表会で、うまくみんなと合わせることができたのでよかった。 ・ 自分たちでアレンジしたアンサンブルが完成できてうれしい。 ・ たくさんのお客さんが集まってわたしたちの演奏を聴いてくれたので、とてもうれしかったです。



〈世界の子守歌の鑑賞の様子〉



〈グループアンサンブルの活動の様子〉

(3) 考 察

本題材の指導によって、「子供自ら音楽の楽しみ方を探る活動」が活性化され、子供主体の創造的な音楽活動がみられるようになったことが大きな成果であった。また、子供一人一人のこれまでの音楽的経験をもとにした選曲、楽器編成、簡単なアレンジ、発表会の企画・運営といった活動を組み入れた題材構成の仕方が明らかになってきた。これからの音楽科の学習では、子供たちの音楽的プロフィールを十分に把握すること、また、子供一人一人がそれぞれがそのもち味を生かすことができるような音楽活動が展開されるように指導を工夫することがとりわけ重視されてくると考える。今後は、グループの中での個の生かし方、子供の個人的な音楽的プロフィールの把握の方法、アレンジにおける効果的な支援のあり方についてさらに究明していきたい。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

音楽科学習の中において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主的活動の姿

子供が主体となって音楽発表会を企画・運営するという題材「手づくりの音楽会をしよう」では、子供たちが鑑賞曲で聴いてきた「世界の子守歌」のなかから演奏してみたい楽曲を選択し、自分たちで楽器編成や簡単なアレンジを行い、音楽会のプログラムや係を決めて、音楽会をつくっていこうとする姿を生み出すことができた。特に、子供たち一人一人のこれまでの音楽経験や楽器の演奏技能を生かして自分で演奏楽器を決めたことによりこれまでにない旺盛な活動意欲がみられた。

イ. 共同的活動の姿

中学年の学習に物語や国語科教材と関連をはかりながら、グループで音づくり活動を行うという題材設定したので（例－ミュージックシアター「3年とうげ」をつくろう）、お互いに音を聴き合いながらよりいい音をつくろうとする姿がみられるようになった。また、高学年の学習にグループで自分たちの楽器編成に合う簡単なアレンジをしてアンサンブルをするという活動を取り入れたので、楽譜通りの演奏をこなすのではなく、グループの個性を生かした表現がより可能になり、自分たちでいろいろ話し合って音楽表現をつくっていくという姿がみられるようになってきた。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

題材のまとめとしての発表会の感想や自己評価カードなどの子供の記述のなかに、「自分たちだけで音楽会を開くことができたので、とてもうれしい。」「グループでのアンサンブルがだんだん合ってきて音楽の時間が楽しくなった。」「また、他の曲で音楽会をしてみたい。」というような声が多く聞かれるようになってきた。これは、子供主体の活動を多く取り入れた題材構成による授業のなかで子供たちが音楽活動の楽しさや成就感、満足感を味わっている姿であるといえる。

② 音楽科における豊かな学力の育ち

音楽科では、子供の「創造的な音楽活動」を生みだす力を育てることを大切に考える。そこで、次のような調査を行い、その資質・能力の育ちとして、①楽器選択、②簡単なアレンジ、③曲想表現についての活動意欲と音楽的能力を評価した。

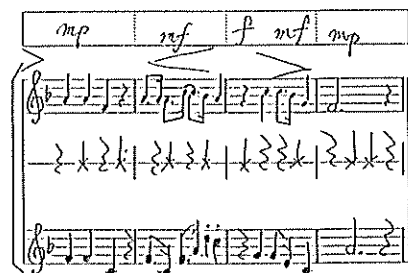
【資料】子供が書いたスコアカード

ア. 評価の方法

評価の方法については、楽曲「空をみあげて」をグループでアンサンブル活動をさせ、その楽器選択、アレンジ、曲想表現について、その様子や右資料のようなグループのスコアカードをもとに評価するという調査を行った。

イ. 評価結果

楽器の選択については、どの子も意欲的に取り組み、自分の好みや楽曲の表現に相応しい音色をもった楽器を選択していた。また、アレンジおよび曲想表現の工夫では、主旋律の表現では、強弱だけの工夫だけでなく楽曲の表情についての記述も加わり、リズム伴奏や副旋律および簡単な和音伴奏づけまでしようとする子供が増え、楽曲への子供の関わり方が積極的になり、音楽を自分で楽しむ意識が高まってきた。



③子供の意識の変容

子供の意識の変容については、次のような意識調査アンケートを行い、その変容をみていった。

(本校5年生 80名を対象として調査)

Q1. これまでの学習で1番楽しかった学習は何ですか。

手づくり音楽会 ————— 62.5% 「大黄河」の合奏 ——— 15.0%
「カルメン」の鑑賞 ——— 12.5% 「白い雲」の合唱 ——— 7.5%
その他 ————— 2.5%

Q2. そのわけは何ですか。(上位4位)

- ①自分たちだけで音楽をつくっていくことが楽しかった。 ②グループでの活動が楽しかった。
③いろいろな曲と出会えてよかった。 ④音楽に対する自信がついてきたから。

※「手づくり音楽会」などの自主運営による音楽活動の楽しさを味わわせることが、子供の音楽に対する意識を高揚させることにつながった。

※音楽に対する子供の積極的なかわりが音楽の楽しみを味わわせることに大きく関与している。

Q3. 音楽科の学習のなかで好きな活動は、何ですか。(前学年) 本学年

- 歌うこと — (67.5%) 77.5%, ○楽器を弾くこと — (75.0%) 85.0%
○合唱すること — (72.5%) 80.0%, ○合奏すること — (72.5%) 85.0%
○音づくりをすること — (30.0%) 47.5%, ○曲づくりをすること — (37.5%) 50.0%
○音楽を聴くこと — (67.5%) 80.0%, ○自分たちで音楽会をすること — (45.0%) 80.0%
○音楽に合わせて身体を動かすこと — (35.0%) 32.5%

※身体表現を除いたすべての音楽活動に対する意識の高まりがみられるようになった。

Q4. あなたが、これから音楽科の学習で、やってみたいことを書いてください。(上位5位)

- ①グループでの活動をもっとやりたい。 ②ほかの曲でまた音楽会をやりたい。
③もっとたくさんの曲をLDなどでできたい。 ④曲をつくってグループで発表したい。
⑤音楽の時間をもっとふやしてほしい。

※グループでの音楽活動への意識の高まりがうかがえる。

(2) 全体考察

以上の子供の実態や意識の変化のデータから、「生涯音楽」をめざした音楽科の方向性のあり方として、子供主体の活動を重視した音楽科年間計画の有効性が明らかにされてきた。

○音楽をすすんで聴いたり表現しようとする子供の主体的な音楽活動が活発になってきた。

このことは、子供が音楽に対する積極的なかわりをねらった目的的な音楽活動を仕組んだ題材を開発、年間計画に位置づけたことが有効にはたらいたと考える。

○演奏楽器の選択、曲想表現の工夫、リズム伴奏や和音伴奏づくりといった音楽における自己表現能力が向上してきた。

このことから、音楽をつくって表現する活動を中心とした題材構成の有効性がうかがえる。このような自己表現にかかわる諸能力は、「自分なりの音楽の楽しみ方」を豊かにするうえで重視されるべき能力であるにとらえる。

○自分たちの音楽活動の充実感や成長を実感し、喜べるようになってきた。

このことから、グループアンサンブルなどの子供の自主的な音楽活動の重視、子供一人一人の音楽的プロフィールを大切にしたい題材構成と年間の配列が、子供が自分自身の音楽的成長の実感につながり、音楽活動へより一層の興味・関心をもたせるうえで有効であったと推察できる。

造形的な創造表現の喜びを味わう図画工作科学習

図画工作科部 樺島 穂

1. 本校の考える図画工作科の目標

多様な造形活動を通して、造形的な感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びを味わわせ、豊かな情操を養う。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

低学年表現科の中で育成された表現への関心・意欲・態度や感性、創造性の基礎をさらに中、高学年の図画工作科では、造形的な感性と創造性の面から子供の成長を促していく必要がある。造形的な創造表現の喜びを味わうとは、子供が材料と積極的にのかかわりながら多様な造形活動を通して、想像的な思いを広げたり深めたりしながら、自分のよさを生かして造形活動を工夫し、夢や憧れを造形的に実現していく表現過程そのものの楽しさや、結果として表現できた達成感、成就感であるとする。

多様な造形活動とは、総合的な感覚や能力をより一層育てるため、材料をもとにした想像活動を中心に、子供の思いに応じて、絵や立体、つくるなどの表現内容や表現方法を単独的、複合的、総合的に関連を図りながら柔軟に造形活動の過程を認めていくことである。

造形的な創造表現の喜びを味わうための基礎となる学びの力を、①造形への関心・意欲・態度、②発想や構想の能力、③創造的な技能、④感受・鑑賞力としてとらえる。

生活再現的な表現や固定化した造形活動から十分に発展させることができていない現状から、材料とのかかわりをより一層重視したり、想像活動の経験を豊かにしながら多様性を認めていくことにより造形的な感性と創造性の基礎が培われていくと考える。

これからの図画工作科は、全学年にわたって主体的に自立した造形態度を育成し、造形的な感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びをより一層味わわせることが大切であるとする。このことは、子供たちにとって生きる喜びにつながると考える。

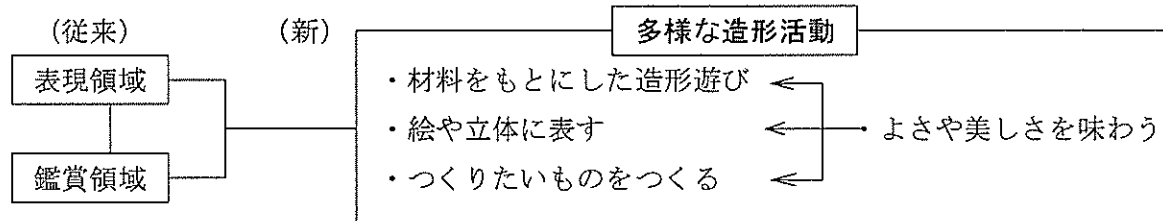
(2) めざす子供の具体的な姿

造形的な創造表現の喜びを味わう子供の姿を次のように考える。

- 自分の思いをもって進んで造形活動を楽しみ、自分の成長を自覚している姿
〔造形への関心・意欲・態度〕
- 多様な造形活動を通して、想像力を働かせて自分らしい発想や豊かな表現の構想をしている姿〔発想や構想の能力〕
- 表現の意図に応じて、手をはじめ全感覚を働かせ自分らしい技能を発揮している姿
〔創造的な技能〕
- 美的直感力を働かせて造形対象のよさや美しさを感じ取るとともに、自分や友達の造形活動のよさや楽しさを味わう姿〔感受・鑑賞力〕

3. 図画工作科の内容の考え方

(1) 表現・鑑賞領域を多様な造形活動として一体化した内容設定



従来の図画工作科の表現領域と鑑賞領域の活動を多様な造形活動として大きく「材料をもとにした造形遊び」、「絵や立体に表す」、「つくりたいものをつくる」の3内容に設定し、「よさや美しさを味わう」活動をそれぞれの多様な造形活動に含み込み、一体的に取り扱う。

また、多様な造形活動の相互の関連や発展を子供の思いに応じて柔軟に認めていくように配慮する。

(2) 内容構成と内容配分

〔中学年〕		〔高学年〕	
(1) 材料をもとにした造形遊び(約25%)	→	(1) 材料をもとにした造形遊び (約25%)	
↓ ↑		↓ ↑	
(2) 表したいことを絵や立体に表す(約50%)	→	(2) 表したいことを絵や立体に表す(約50%)	
↓ ↑		↓ ↑	
(3) つくりたいものをつくる(約25%)	→	(3) つくりたいものをつくる (約25%)	

発想の柔軟性が影を潜める高学年の造形活動により一層の勢いを与え、子供の主体的な造形態度や想像力を育て、創造表現の喜びをより一層味わわせるために、従来の中学年の内容構成を基盤に高学年の絵と立体の内容を関連統合し、新しく材料をもとにした造形遊びの内容を設定する。高学年の材料をもとにした造形遊びの内容は、中学年の内容である①材料や場所からの共同発想による造形遊びの内容と②材料の分解・再構成から創造的な形づくりを行う造形遊びの内容を相互に関連、発展させ、創造的な空間構成の内容も含み込むものとする。

高学年の絵と立体の内容においては、材料からの発想も十分に考慮し、思いの広がりに応じて想像活動がより発展していくことができるように、絵や立体の固定化した枠組みに限らず、相互に関連し合った多様な造形活動への広がりを柔軟に認めていくようにする。

各内容の全授業時数の配分は、「材料をもとにした造形遊び」の内容を約25%、「絵や立体に表す」内容を約50%、さらに手の巧緻性を高めるために「つくりたいものをつくる」の内容を約25%以上とすることを基本に、内容相互の関連や総合化することも考慮する。

4. 年間指導計画の考え方

(1) 材料とかかわりながら想像活動の経験を豊かにする年間指導計画の作成

表現と鑑賞の活動を一体的に取り扱うとともに、材料からの想像的な発想をもとに、子供の思いに応じて、絵、立体、つくるなどの関連を図る造形活動を柔軟に認めていく。

つまり、再生的表現よりも創造性の核となる想像活動の経験を中、高学年にわたって豊かにし、材料をもとにした造形遊びの特性を図画工作科の全ての学習に生かす方向で、内容設定、内容配分、題材配列を行う。

(2) 造形活動の全内容を各学期毎に経験できる内容配列と時間配分

子供たちの想像活動の経験を豊かにしていきながら創造表現の喜びを味わわせるためには、各内容を一時期に集中させずに、片寄りなく各学期に配列する。

〔第3学年 各学期毎の内容配分と時間数の例〕

	1 学期	2 学期	3 学期	合 計
材料をもとにした造形遊び	4 時間	8 時間	4 時間	1 6 時間
表したいことを絵や立体に表す	1 4 時間	1 6 時間	6 時間	3 6 時間
つくりたいものをつくる	6 時間	6 時間	6 時間	1 8 時間

(3) 材料体験と想像活動の連続・発展を図る中、高学年の造形遊びの題材開発と題材配列

中学年造形遊びでは、木材、枝木などの自然材と発泡スチロールや透明容器などの人工材の体験のおよその均等化を図りながら材料の分解、再構成を中心に行う。高学年造形遊びでは、異質の材料の組み合わせや布材や柔軟金属材などによる創造的な空間構成の内容も加味しながら題材開発と題材配列を行う。造形遊びの題材数と時間数は、中学年が4題材で、1題材につき約4時間～約5時間程度、高学年が2題材で1題材につき約8時間程度とする。

〔造形遊びの材料体験の連続・発展を図る題材開発と題材配列〕

	1 学期	2 学期	3 学期
第3学年	紙パックから生まれるふしぎな形	はっぱうすスチロールを切ったりつないでりべッボトルのなかまたち	木切れを重ねてつみ上げながら
第4学年	ダンボールをつなぐ形から	材料を遊具にみんなでつけてみると 銀色のアルミたちから生まれる世界	色糸と小枝たちのおしゃべりタイム
第5学年	布と針金で生み出されるもの	金あみとホースを手がけることから	
第6学年	スチレンボードとリングのタイアップ	やわらかい金属にいぶきを与えて	

(4) 心象的な思いを多様な造形活動で表現できる絵や立体の総合化を図る題材開発と題材配列

子供の心象的な思いをより広げていくため、絵や立体に表す内容を絵や立体の単独的な題材開発と絵や立体の総合的な題材開発を行い、各学年各学期毎に1題材ずつ均等に題材配列を行う。

〔多様な造形活動で表現できる絵や立体の総合化を図る題材開発と題材配列〕

	1 学期	2 学期	3 学期
第3学年	自分の花にお話しながら	海の中に行きたいな	おしろに雪がふってきた
第4学年	インパチェンスの花物語	雲を見て感じたことを表そう	冬の木々と光と風たちに出会って
第5学年	春を体で感じて見たら	心にひびく白い世界	想像の世界に翼を広げて
第6学年	花と自分の心に広がる世界	心に浮かんだ白い風景	未来の自分へのメッセージ

5. 学習指導上のポイント

(1) 材料とかかわりながら想像活動を豊かにする活動提案を行うこと

子供の造形活動の大きな方向性を示したり、材料へのかかわり方や想像性を促すヒント演示、ヒント提示などの活動提案を、一斉、グループ、個に応じて行うようにする。

(2) 想像活動を誘発できる材料を開発し、子供の思いや意図に応じて材料の提供を行うこと

子供の手の巧緻性の発達や全感覚機能の総合的な育ちを意図する材料を開発し、活動前や活動途中に提供し、子供の意図や思いに応じて選択活用ができるようにする。

(3) 想像活動をより活性化し、感受力を育てる相互交流の時期と方法を適宜検討すること

自分や友達が表現したもののよさや楽しさを相互に感じ取らせ、次への想像活動をより活性化するための相互交流を活動途中や活動後などに行うようにする。

6. 実 践

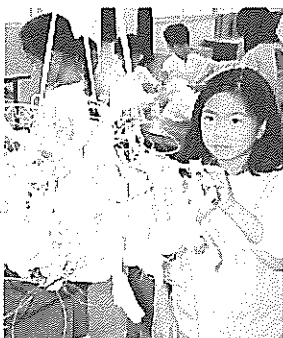
〔事例〕 第5学年 布と針金で生み出されるもの

樺島 穰

(1) 目 標

布と針金の材料操作から創造的な形をつくりだすとともに、友達と共同的に再発想しながら教室の空間を造形的にまとめ、表現する喜びを味わうことができる。

(2) 指導の実際（8時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 布と針金の材料操作をもとに発想を広げ、新しい形をつくりだす楽しさを味わう。 (2)	1. 布と針金の材料操作を通して、新しい形をつくりだす。 (1) 布と針金を切ったり、変形させたりする。 ・ 広さや長さなどを考えて布と針金を切る。 ・ 布の膨らみから見立て、意味付けをする。 (2) 変形させた布と針金を結合、再構成する。 ・ 針金に布を巻き付けて止める。 ・ 布に針金を差し込んで止める。 ・ 布と針金の形から生命感を感じ取る。  〈布と針金を積極的に操作する子供〉
2. 布と針金による新しい形の生かし方を考えて表現を深め、創造的な楽しい形をつくりだす楽しさを味わう。 (3)	2. 布と針金による新しい形の生かし方を考えて、創造的な楽しい形をつくりだす。 (1) 新しい形の視点を変更し、題名を考える。 ・ 正面から見ると不思議な植物みたい。 ・ 下から見上げると想像の鳥のようだ。 (2) 空間への生かし方を試しながら楽しい形をつくりだす。 ・ 空中へ吊ると浮かんでいる感じになる。 ・ 窓辺に掛けると布が光って美しい。  〈空中に吊るして楽しい形にする子供〉
3. 布と針金による楽しい形をもとに、友達と共同的に発想し空間を造形的にまとめる楽しさを味わう (3)	3. 布と針金による楽しい形をもとに、友達と共同的に発想しながら教室の空間を造形的にまとめる。 (1) 形と形の相互の関係から再発想をする。 ・ 机上の形から空中に浮上した形たち ・ 空中で形と形が合体した別の形 ・ ふわふわひらひらの想像物体の出現 (2) 教室の空間を造形的にまとめ物語化する。 ・ 布世界から飛び出した鳥たちの旅 ・ 空中を浮かんで流れる布の川  (3) 形と空間の美しさや楽しさを味わう。 〈教室の空間に造形的にまとめられた形たち〉

(3) 考 察

本題材では、布と針金という異質の特性の材料を積極的に変形、結合しながら再構成を行う中で、見立て、意味付けなどの想像性を多様に発揮していった。また、友達との共同的な空間構成を促す活動提案により、布と針金の形と形の浮遊感覚を生かして、教室の空間を造形的にまとめることへと発展させることができた。子供の姿を通して、高学年における造形遊びの内容設定と材料と豊かにかかわる活動を重視した年間計画上の配列が効果的であったことが明らかになった。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の姿容

図画工作科学習において、次のような子供の姿が見られるようになった。

ア. 自主的活動の姿

高学年造形遊びでは、教師による活動提案と主材料の提供をもとに、子供が、自分の思いに応じて材料収集や材料計画を進んで行う姿が継続的に見られるようになってきた。写真①は、子供が家庭などから想像性を誘発できる人工材料の収集を積極的に行ってきた姿である。

また、自分の表現製作の方法で、自信をもって思いを表していく造形活動を楽しむ姿も見られるようになってきた。



〈写真①〉 積極的な材料収集をした高学年の子供

イ. 共同的活動の姿

異質の材料である「金あみとホース」を分解・再構成しながら創造的な形をつくりだした子供たちは、さらに自分と友達の間で形と形を空間的に組み合わせ、共同的に発想をしていくことができた。写真②は、教室の空間を友達と共同発想しながらまとめていっている姿である友達との共同的に想像性を豊かにしていく姿が見られるようになった。



〈写真②〉 形を共同的に空間構成する

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

材料と豊かにかかわりながら想像活動の楽しさを味わった子供たちは造形活動の過程と結果によって生まれた想像世界を絵に表していった。写真③は、子供が、材料たちが宇宙に夢の旅行してきた様子を絵に表しながら「材料の色や形から思いついたことを最後に絵や文で表してとても楽しかった」と造形活動の深まりに気づいている姿である。



〈写真③〉 自分だけの想像世界の深まりを絵に表す

② 図画工作科における豊かな学力の育ち

図画工作科では、造形的な感性と想像活動を豊かにし、表現する喜びを味わわせることを大切に考えている。そこで、次のようなアンケートを高学年の子供に行い、その育ちを評価した。

ア. 評価の方法

〔質問 1〕 今までの図画工作科の学習の中で、どんなことを表すことが楽しかったですか？

(複数回答)

〔質問 2〕 図画工作科の学習で、つくりたいものや表したいものを始めにできた形から変えていたり、最後まで考え続けたりしますか？

イ. 評価結果

質問 1 の結果として、造形対象からの意欲的に感じ取り、楽しく表現できた内容は、「想像の世界」(82%)、「自然などの美しさ」(60%)、「生活の中の心に残ったこと」(22%)となっている。子供の造形対象としての内容の関心が想像的な内容が 80%以上と多いのは、材料とかかわりながら想像活動を豊かにしてきている結果であると考えられる。

質問 2 の結果として、想像的に思いを連続、発展させる姿についての回答が、「表したいものをできた形から考え続ける」(77%)、「表したいものを始めにだけ考える」(22%)となっており、造形活動を通して、常に発想をしながら想像活動を豊かにしている姿が多くなっていることを示していると考えられる。

③ 子供の意識の変容

図画工作科では、子供の多様な造形活動から学習内容を設定し、材料とかかわりながら想像活動の経験を豊かにする視点から年間指導計画を作成し、指導実践を行ってきた。そこで、高学年の子供たちに対して、自分の思いを表していくための多様な造形活動についての意識調査をおこなった結果が次のようである。

〔調査１〕自分がつくりたいものや表したいものを表すとき、どんな表現方法で表そうと思いますか？

- 様々な材料を自由に使って、いろいろな表し方で工夫して表したい。（７７％）
- 一つの材料を中心に一つの表し方で工夫して表したい。（２３％）

〔調査２〕自分が表したものをさらに友達を表したものと組み合わせてまた新しいものを表すことについて、どう思いますか？

- 自分が表したものをさらに友達と組み合わせてまた新しいものを表したい。（７５％）
- 始めから最後まで友達と一緒に表したい。（２０％）
- 始めから最後まで自分だけで表したい。（５％）

調査１より、全体の７７％の子供たちは、多様な造形活動を学習の中で組み合わせて思いを表したいという意識をもっていることがわかる。これは、再現的表現活動よりも材料活用自由性や多様性を保障した想像的な表現活動の経験を豊かにしてきた結果であると考ええる。

調査２より、全体の９５％の子供たちは、友達との共同表現を望んでいると言える。さらに、その中でも、「自分が表したものをさらに友達と組み合わせてまた新しいものを表したい」子供が、７５％であり、個別発想・個別表現から友達との共同発想から共同表現へと想像活動の質を高めていく表現態度の変容が表れている。自主的表現活動をもとに、友達ともお互いに刺激を与えあって共同していくことへの意識面の変容が明らかになった。これらの子供の意識面の変容からも、材料とかかわりながら想像活動を豊かにしていく年間計画の価値があると考ええる。

(2) 全体考察

材料とかかわりながら想像活動の経験を豊かにする年間指導計画の作成と展開を通して、次のことが明らかになった。

① 造形的な創造表現の喜びを味わう子供の姿について

材料をもとにした造形遊びを中心に、材料とかかわる活動から多様な造形活動を柔軟に認め、想像性を自由に広げていくことによって、子供に表現の喜びをより一層味わわせること味わわせることができたと考ええる。

② 内容設定について

材料とかかわりながらより想像活動が誘発できるように、高学年にも造形遊びを新内容として発展させていった。創造的な形づくりから友達との共同発想により空間構成まで想像活動の楽しさを味わうことができたと考ええる。また、絵や立体の関連を重視することによって総合的な造形活動も展開することができた。今後、さらに各内容相互の関連性をより明らかにしながら選択的、総合的に多様な造形活動が柔軟に行えるように検討する必要がある。

③ 題材開発、題材配列について

高学年造形遊びは、主体性、材料感覚、想像力を総合的に育てることにつながり、有効な題材開発ができた。また、創造的な空間構成への内容も取り入れたことにより、子供達の全身的な空間感覚を養ううえで有効に働いた。今後、総合的な題材を増やしながら配列する必要がある。

自ら家庭生活を創造する家庭科学習

家庭科部 平山 尚美

1. 本校の考える家庭科の目標

家庭生活に関する実践的な活動を通して、日常生活に必要な情報を生かすとともに自分の生活に対する見方・考え方を養い、家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「自ら家庭生活を創造する」ということは、子供が家族の一員として主体的により豊かな家庭生活を築きたいという自分の願いに向かって、働きかけ家庭生活への新たな見方・考え方・かかわりを創り出していることである。

このことは、自らを家庭生活に対する受動的な立場の一員としてではなく、家族を構成している一人の実践者として、その役割を担う能動的な立場にいることを自覚し、家庭生活を創っていく主体者としての生き方を求めていくことである。

そのためには、子供自身が家庭生活に働きかけることを通して家庭生活の意味を認識し、働きかけることの喜びを感じていくことが大切である。家庭生活の価値を感じ、家庭生活に働きかけていく価値を見いだしたときに、家庭生活を自ら創り出そうとする行動・実践が生まれてくると考える。これらのことから家庭科では、家族にかかわるという視点から家族関係を中核として位置づけていく。家族にかかわる意味や自分の立場や役割を考えさせていくために、家族との関係から衣生活や食生活、住生活の内容を取り出して家族や家庭生活を総合的に関連し合ったものとして内容を構成していくようにする。

このような子供たちに身につくであろう力を次のように考えている。

- 家庭生活への関心・意欲・態度～家庭生活のよさを認識し、自分が願う家庭生活への実現に向けて働きかけようとする力（課題把握力）
- 家庭生活を創意工夫する力～課題を解決し、よりよい家庭生活を築いていくためにはどんな情報を収集し選択していけばいいか、その解決の方法を探り考えていく力（情報収集力・課題解決力）
- 家庭生活を創り出す知識・技能～家族や家庭生活へのおもい・願いを具体的な場において表していく知識・技能（家庭生活を実現していく知識・技能）
- 家庭生活への実践力～家族関係や家庭生活をよりよくしていくことに喜びを感じたり、自己の高まりを自覚して更に実践していこうとする力（家庭生活に役立つ態度）

(2) 目指す子供の具体的な姿

目指す子供の姿としては、家族とのかかわりや家庭生活に対する見方・考え方・かかわり方の広がりや深まりを意識し、自分が家庭生活を創っていく主体者として家庭生活に働きかけ、役立つ存在であることを自覚していくことが大切である。そこで具体的には次のように考える。

- ① 家族のために自分が願う家庭生活を実現するために必要な知識・技能を自ら情報収集し、試し工夫して身に付けている姿
- ② 家庭生活に自ら働きかけることによって、家族への理解を深めている姿
- ③ 自分が身につけた知識・技能を生かして、家族のために家庭生活に進んでかかわり、働きかけようとしている姿
- ④ 家族のために家庭生活に働きかけることにより家族に役立つ有用感を味わい深めている姿

3. 家庭科の内容の考え方

家庭科では、子供が家庭生活の変化に主体的に対応して、自らの願う豊かな家庭生活を創り出していく力を育てることを大切としている。そのためには、子供自らが家族の一員として家庭生活に働きかけていくことが大切となる。そこで本校家庭科では、子供たちが学習の価値を見出し、働きかけていく対象を「家族の生活と被服」、「家族の生活と食物」、「家族の生活と住居」と設定する。従来の内容でも住居領域においては、家族の生活と関連させながら住居の内容を取り扱っているが、新内容では、家族とのかかわりから衣生活や食生活、住生活の内容を取り出し、家族と家庭生活を総合的に関連し合ったものとして捉えていくという考えに立っている。

そこで家族とのかかわりをより明確にするために、子供たちがかかわっていく対象を下記のようにして、領域として設定する。次に、家庭生活に働きかけていく活動や家族とのかかわりを豊かにしていく活動を重視した内容とする。つまり、子供自らが家庭生活をよりよくしていきたいという願いのもとに、家庭生活を見つめながら課題を見つけ、その課題解決のために情報を収集する。

そして、課題解決に向けて家庭実践を行い、自分の家庭生活への働きかけを有用感として味わっていく。この家庭生活への働きかけの全ての学習過程を内容と考えていく。

《家族とのかかわりから見た家庭科の内容の概要》

働きかけの対象	家 族 と の か か わ り 活 動
家族の生活と被服	○ 家族の生活を豊かにするための布を用いた身の回りの簡単な物を製作する活動 ○ 家族が気持ちのよい健康的な衣生活をおくることができるために被服を工夫して整える活動
家族の生活と食物	○ 家族の健康を考えた簡単な調理を工夫する活動 ○ 家族との心のふれあいを深める食事を工夫して整える活動や会食の活動
家族の生活と住居	○ 家族が快適に気持ち良く住むための身の回りの整理・整とんや清掃の仕方を工夫する活動 ○ 家族の一員として家庭生活に協力して計画的に生活する活動

4. 年間指導計画作成の考え方

(1) 家族とのかかわりを重視した題材構成

題材構成にあたっては、衣生活・食生活・住生活のあり方を家族とのかかわりから見直し、家族の一員として子供がどう働きかけていくかという視点で行っていく。

《家族とのかかわりを重視した題材構成の例》

(※=は家族とのかかわりに関する視点)

題材名・学年	ね ら い
家庭生活を楽しくする小物を作ろう (5年)	○ <u>わが家において、生活に役立つ小物</u> を作るための情報を収集し、小物を作ることができる。
私のじまんの野菜料理を作ろう (5年)	○ 食生活に不足しがちな野菜を使ったおかず作りをして、 <u>家庭での食生活にかかわりをもつ</u> ことができる。
気持ちのよい住まい方を考えよう (6年)	○ <u>自分や家族が快適に</u> 気持ちよく住むことができるように、住まい方を工夫することができる。

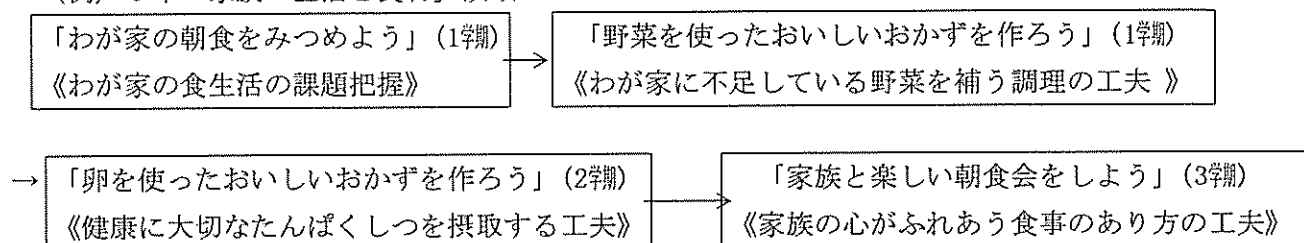
(2) 家族との関わりが深まっていく題材配列

① 家族への見方・考え方・かかわりが深まっていくために各領域で2年間を貫く視点の設定

題材の配列においては、家族の中の一員として、自分はどのように生活しているか家庭生活全般をとらえるために、3領域を関連した題材から視点を作る。そして家族に対しての具体的なかかわりを追求し、最後に各領域で学んだことを生かして総合的に学習していく題材となるように配列する。また、各領域全体を貫くような視点を自分の家庭を見つめさせるの中から生み出させ、各題材で深めていけるようにする。自分の家族とのかかわりを明確に意識した課題をもって2年間を通して家族とのかかわりを深めていくように題材を配列する。

領 域	2 年 間 を 貫 く 視 点
「家庭生活と被服」	「衣生活における私の役目」「家庭生活に役立つものを作ろう」
「家庭生活と食物」	「家族の健康を考えた食事を作ろう」
「家庭生活と住居」	「家族とのふれあいを深めよう」「家族との住まい方を工夫しよう」

(例) 5年「家族の生活と食物」領域



② 基礎的な知識・技能が2年間を通して身につく家庭生活への実践的な態度が深まる題材の配列

2年間を見通して家庭生活を向上させようとする実践的な働きかけが深まっていくように、知識・技能の易しいものから高度なものになるように題材を配列する。

(例) 「家族の生活と被服」領域

「家庭生活を楽しくする小物を作ろう」(5年・1学期) → 「家庭生活に役立つ袋を作ろう」(5年・2学期) → 「家庭生活に役立つ物を製作しよう」(6年・2学期)

③ 季節や行事との関連を図り、家庭生活へのかかわりが深まる題材の配列

家庭科の学習では習得した知識・技能が日常の家庭生活の中で応用・発展し家庭生活をよりよくしていくために活用されることが大切である。したがって、子供の身近な生活と関連させた内容を取り上げて家庭生活に生かせるようにする。

(例) 「おやつとだんらんーお月見会をしよう」(5年生)～月見学会との関連

「家族と楽しい会食をしよう」(6年生)～卒業との関連

5. 学習指導上のポイント

- (1) 子供が、家族への自分の願いを実現させていくことができる知識・技能を身につけ定着させていくために、実際に試し工夫していく実践的・体験的な活動の場を設定する。また、家庭生活に働きかけていくために必要な基礎的な知識・技能が身につけやすいように2年間の題材の配列を工夫する。
- (2) 子供が家族への理解を深めていくことができるように家族とのかかわりに視点をおいた学習活動を工夫する。
- (3) 子供が自らの課題を解決していくことができるために、情報収集の仕方を工夫させる。
- (4) 子供が進んで家庭実践をする態度を育てるために、自分の家族へのかかわりのよさをふりかえり味わうことのできる自己評価の場を設定する。

6. 実 践

[事例] 第5学年 おやつとだんらん—家族でお月見会をしよう—

平山 尚美

(1) 目 標

家族でお月見会をするための簡単なおやつを整えたり、心のふれあうだんらんのあり方を考えたりして、家族でだんらんすることの楽しさを味わうことができる。

(2) 指導の実際（8時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応						
1. 家族とのふれあいを深める自分の家族とのだんらんの様子を見つめ、学習の課題を持つ。 (1)	1. わが家を思いうかべながらだんらんとは何か、だんらんのあり方について話し合う。 ・ 家族との心のふれあいを持つことは、お互いの気持ちや家族の考え方がわかり家族として生活していくためにはとても大切だ。						
2. 心のふれあう楽しいだんらん（お月見会）をもつ学習計画を立てる。 (1)	2. 心のふれあう楽しいだんらんを持つ方法について情報収集し学習計画を立てる。 工夫すればいろいろな方法で心のふれあいが持てるのだな。 ——めあて—— おやつを作って家族とのふれあいを深めるお月見会をしよう						
3. 家族と楽しいお月見会をするための情報を収集して試しの活動をする。 (5)	3. 家族との心のふれあう楽しいお月見会にするために家族や資料等から情報収集し、試しの実習をして課題追求をする。 ・ 秋の食材を生かして家族の好みにあったおやつを工夫しよう。						
・ お月見会にふさわしいおやつ作りの試しの実習 ・ お月見会にふさわしい場作りの試しの実習	<table><tr><th>＜子供が家族から収集してきたおやつ＞</th><th>＜子供が実際に試して作ったおやつ＞</th><th>＜試し活動と見直したこと＞</th></tr><tr><td>お父さん 「くずきり」 弟 「白玉だんご」 お母さん 「いきなりだんご」</td><td>いきなりだんご (選んだ理由) 秋らしいので家族の大好きなさつま芋を使っただんごを作ってあげたいと思ったから。</td><td>(試すこと) ・いもをやわらかくして、いもの形をくずさないようにする。 (ためし方) ・蒸す時間の長さを変える。 (見直したこと) ・いもがまだ固かったので蒸す時間をふやす。</td></tr></table>	＜子供が家族から収集してきたおやつ＞	＜子供が実際に試して作ったおやつ＞	＜試し活動と見直したこと＞	お父さん 「くずきり」 弟 「白玉だんご」 お母さん 「いきなりだんご」	いきなりだんご (選んだ理由) 秋らしいので家族の大好きなさつま芋を使っただんごを作ってあげたいと思ったから。	(試すこと) ・いもをやわらかくして、いもの形をくずさないようにする。 (ためし方) ・蒸す時間の長さを変える。 (見直したこと) ・いもがまだ固かったので蒸す時間をふやす。
＜子供が家族から収集してきたおやつ＞	＜子供が実際に試して作ったおやつ＞	＜試し活動と見直したこと＞					
お父さん 「くずきり」 弟 「白玉だんご」 お母さん 「いきなりだんご」	いきなりだんご (選んだ理由) 秋らしいので家族の大好きなさつま芋を使っただんごを作ってあげたいと思ったから。	(試すこと) ・いもをやわらかくして、いもの形をくずさないようにする。 (ためし方) ・蒸す時間の長さを変える。 (見直したこと) ・いもがまだ固かったので蒸す時間をふやす。					
4. 家庭実践をする。(謝)	4. 家庭でお月見会をして家族とのふれあいを深める実践をする。						
5. 家庭で実践したお月見会の感想を交流し、だんらんについての考え方を深めると共に、家庭生活に働きかけるよさを味わう。 (1)	5. それぞれの家庭での実践を交流する。 ・ お月見会をして今まで知らなかった家族のことがわかったよ。 ・ ぼくの作ったおやつで家族が楽しい時間が持ててよかったな。 《家族からの感想》・年々季節の行事に対する取り組みが減ってきているのは大変残念ではありますが、子供が喜んで取り組む行事は大切にしていきたいと思っています。今回の月見会は、本人、妹、母親とだんご作りから飾り付けまでがんばりました。子供の一生懸命さをみていると大変うれしく思いました。父親はただ食べるだけでしたが、これからは毎年月見会を続けていきたいと思っています。						

(3) 考 察

本題材は、月見学芸会という本校の学校行事と関連させて取り組んだものである。お月見会という場を設定したことは、月見にふさわしい秋の食材を生かして家族の好みを考えて味・色・形などの点から工夫することができた。また、この学習をして子供たちは、だんらんについての考えを深めることができ、家庭生活に働きかけることの喜びを感じることができた。これは、月見会という場を具体的に設定したことで子供たちの取り組みが明確になり家庭からの情報収集などの観点がはっきりして家族とのかかわりの活動が深まったからと言える。

7. 研究のまとめ

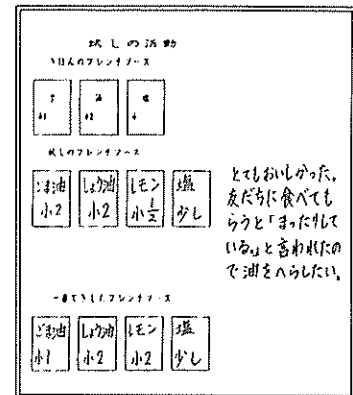
(1) 研究の成果

① 子どもの変容

家庭科学習の中において、次のような子どもの姿が見られるようになった。【ドレッシング作りのノート】

ア. 自主的活動の姿

「私のじまんの野菜料理を作ろう」の学習では、Y児は「お父さんお母さん2人ともいそがしいしお父さんは疲れ気味だから元気がついて見た目が美しいサラダを作ってあげたい」とめあてを持っていた。そして家族の好みを考えて中華風のドレッシングを作ってあげたいと、自分の願う家族の味にするために油を減らしたりレモンの皮を加えたりして試しの活動を行い追求していった。そして家庭で実際に作って食べてもらい「とてもおいしい」と誉められ野菜が少ない日などに自分から進んで野菜サラダ作りを行うようになっていった。



イ. 共同的活動の姿

6年生「衣服の手入れをしよう」では落ちにくい汚れを工夫して落とす学習を行なった。B児は最初はせっけんをつけつまみ洗いをしていたが、友達が歯ブラシを使って汚れを落としているのを見て、自分もブラシを使って洗い、汚れの落ち方を比べるというように友達の良さを取り入れていた。

6年生「家族と楽しい会食をしよう」では、卒業の際家族への感謝の気持ちをこめた会食を開く学習をした。実際に家族を家庭科の学習に招待して会食の時の話題のすすめ方や接待の仕方を試してみた。Aグループでは、小学校での思い出などを話題として語り合っていた。参加していた家族から「フルーツサンドイッチは初めて食べてとてもおいしかったし、みんなの話が聞けてとても楽しかった」とほめられグループで協力して計画し実践できた喜びを味わっていた。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

5年生「おやつとだんらんーお月見会をしようー」では、家庭からお月見会にふさわしいおやつの情報収集を行った。その感想の中に「このお月見会をして本当に良かったです。家族で話をする時間やいっしょにいる時間が多くなったからです。これからもおやつを作ったりしてだんらんをしようと思います。」とあった。このように実際に家庭でお月見会を実践した子供たちは、だんらんの大切さを実感した感想がほとんどで、これからはしてみたいとか、家族と一緒に過ごすことが増えたなどの変化があった。また自分が家庭に働きかけたことで家族が喜び家庭が変わるということを感じ取っていた。

② 家庭科における豊かな学力の育ち

ア. 評価の方法

家庭科では、家族の一員として家庭生活に自ら働きかけていく力・自分の願う家庭生活に近づくために情報収集をし課題解決する力、自分が家庭生活に働きかけたことで家庭生活が変わっていくという喜びを感じる力を育てることを大切としている。そこで家族との関わり意識の変化と実際の姿の変容を捉えるため「家族の一員としての役割を考えてどんなことをするようになったか」「自分の願う家庭生活に近づくためにどんな工夫をしたか」「家族の一員として役立てたときどんな気持ちになったか」「家庭科の学習をして家族への見方やかかわり方が変わりましたか。」などの設問をして評価を行なった。

イ. 評価結果

設問1・家庭の学習をして家庭で家族の一員として自分の役割を考えてどんなことを行動したり実践するようになりましたか。(6年生)

(衣)・5年生の時はあまりしなかったけど6年生になって良く小物を作ってプレゼントをするようになった。

(住)・部屋の環境をよくしたりそうじが得意になった。

(食)・5年生の時は朝ごはんは作れなかったけど6年生になって自分で栄養のことを考えて作れるようになった。

設問2・自分の願う家庭生活に近づくためにどんなことを工夫したり、努力できましたか。(5年生)

(食)・卵を使った料理では家族の好みを考えて甘さを工夫したり中に入れる物を工夫した。

(衣)・袋作りでは、使いやすくするために形を工夫したり縫い方を丈夫にした。

設問3・家族の一員として家族や家庭生活に役立てたときどういう気持ちになりましたか。またそのときどんなことを考えたり思ったりしましたか。(6年生)

(衣)・自分の作ったものを家族が喜んでくれたのでとてもうれしかった。・もっと家族の喜ぶものを作ってあげようと思った。・良くがんばったなあ満足した気持ちになった。

(食)・家族が喜んでくれたので家族の一員として役だってうれしい気持ちになった。

③ 子供の意識の変容

設問1・家族や家庭生活のことを考えて作るのはどんなことが楽しいですか。(5年生)

(食)・家族の好みなどを考えていろいろ自分で工夫して作って、それが家族に喜ばれたりするから

(衣)・今まで家族がどんなものをほしいとか、好きな色など知らなかったのに分かったりするから。

設問2・家庭科の学習を自分の生活でも生かしていますか。(6年生)

(食)・母が疲れているときや困っているときなどに作ってあげたりできて、母も喜んでくれるから

(衣)・縫い方とか知って自分1人でいろいろなことができるようになったから。

設問3・家庭科の学習をして家族への見方や考え方が変わりましたか。どんなことが変わりましたか。

【家族への見方の主なもの】(6年生の例)

・家庭の仕事って大変なんだということが家庭科の学習をしてだんだん分かってきた。

・いざ自分でやると大変なので今までぼくたちのためにしてもらっていたことがありがたい。

【家族への関わり方の主なもの】(6年生の例)

・5年生の頃よりも自分のことは自分で責任を持ってやるようになったし、自分も家族の1人だから家族のために役立ちたいと思うようになった。・家族のためにもっといろんなことをしてあげたいなあと思うようになって、前よりももっと家族に協力するようになった。

(2) 全体考察

家庭科では、家族へのかかわりの活動を位置づけることによって自ら家庭生活を創造しようとする子供を育てるための年間計画を実践してきた。その結果上記のように家族の一員としての自分の役割を感じて行動しようという意識、また家庭科の学習を家庭生活に生かしたという思い、実生活での生かし方、家族への見方・かかわり方の変化が表れてきている。また家族へかかわっていくことを喜びとして感じてきていることも分かる。これらのことから、家族とのかかわりの活動を位置付けた年間計画が効果的であったと考える。さらに、子供たちが家族の一員としての自覚を深め家庭での実践を高めていくためには、季節や行事等とのつながりを考えた各領域の関連を生かしたより工夫された題材の開発をしていくとよいと考える。

自ら運動を創造していく体育科学習

体育科部 佐々木 壮一朗 笠 宏 照

1. 本校の考える体育科の目標

運動の経験や心身についての理解を通して、運動する喜びを味わわせるとともに、健康の増進と体力の向上を図り、生涯において運動を志向し、健康で明るい生活を営む態度を育てる。

2. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「自ら運動を創造していく」とは、様々な運動の経験をするなかで、楽しさや技能・技術、社会的態度など、その運動がもっている特性に触れながら、自分なりの発想で運動の特性を見直したりつくり出したりすることである。このことは、21世紀を豊かに生きる子供たちが、生涯において運動を実践していく生涯体育・スポーツを推進するための基礎となるものである。すなわち、生涯体育・スポーツの一時期である小学校段階においては、子供の興味・関心、能力にあった運動の楽しさを十分に享受することが大切であり、自ら運動の楽しさを追究することによって、子供たちは様々な課題を見出したり、解決を工夫したりしながら運動する喜びを味わうものである。

このような考えにたって、本校の体育科では、子供たちに次のような力を付けたいと考える。

- 運動が持つ魅力や価値をとらえ、積極的に運動にはたらきかける力
- 自らの運動の実態をとらえ、運動能力を高めていこうとする力
- 体や健康を自分で維持・管理する力
- 日常的に運動とかかわり、運動生活を深め、発展させる力

以上のような力をつけるためには、子供が旺盛な活動を展開することができる運動環境を設定する必要がある。ここで大切にしたい運動環境とは、場や人である。このことは、運動の楽しさや技能・技術、社会的態度などの運動の特性から運動環境をとらえるとき、子供が課題を解決するために、コートやスペース、ルールなどの場をつくりかえたり、共に運動する友達や自分の役割を意識しながら協力し合ったりして活動することである。子供が運動の楽しさをとらえるために興味・関心を重視したルールや器具・用具などを活用できるようにすること、技術・技能を高めるために器具・用具などを効果的に使った練習をしたり、活動構成を工夫したりすることができるようにすること、などの学習環境を設定しながら、子供の旺盛な活動を引き出すことが大切である。

(2) めざす子供の具体的な姿

- 自分の運動課題をもち、その克服・達成に向けて、運動の取り組み方を考え、工夫しながら運動を楽しんでいる子供
- 運動の特性に触れ、新しい動きを発見したり、つくり出したりすることに楽しさや喜びを感じている子供
- 自分にとっての運動の価値や必要性を認識しながら運動を行っていく子供

3. 体育科の内容の考え方

子供が自ら運動を創造しながら、運動する楽しさや喜びを味わうことができるようにするために、体育科では、次のような基本的な視点に立ち、「学習内容」としての運動をとらえ直すことにした。

- 小学校期の子供の興味・関心、能力などに合った運動に含まれる楽しさを味わう活動を取りあげる。
- 運動への主体的な態度を養っていくための活動、運動の基本的な学び方を重視する。

体育科が他教科に比べて特徴的であるのは、学習活動の中心が運動の実践を通して展開されるという点である。しかも、運動は、技術構造の特性を有しているので、各運動の特性に基づいた活動を展開することが必要である。そこで、身体の上での操作と運動を行う環境から技術構造をとらえ、次のような運動内容を設定した。

走る・跳ぶ・投げる・泳ぐの運動、ボールやなわなどを操作する用具（手具）を使った運動、
ジャングルジムや雲梯などの固定施設を使った運動、
跳び箱や平均台などの器械・器具を使った運動、心に感じたことを身体により表現する運動

これらは、技術の違いに応じて、学習過程は異なってくるし、子供の発達段階や技能の程度によって運動の場や人とのかかわりを適合させることを考えなければならない。

運動の場や人にかかわるためには、子供が各運動に含まれる特性（運動対象）を味わうだけでなく子供自らが運動を創造していくための「克服型」・「達成型」・「競争型」・「表現型」の4つの活動が必要になってくる。この活動の内容は資料1のとおりである。

これらの活動により、子供は自ら場にはたらきかけ、コートを作りかえたり、人にはたらきかけ、グループで競争するルールをつくったりなどして運動を行い、その楽しさを味わうことになる。

【資料1 4つの活動類型と内容】

活動類型	活 動 の 内 容
克服型	自分の努力や工夫によってできるようになった喜びを味わうことができる活動
達成型	めあてとする高さや記録などに挑戦し、それを達成できた喜びを味わうことができる活動
競争型	個人対個人、集団対集団で競い合う喜びを味わうことができる活動
表現型	感じたことを体の動きで表現したり、特定の踊り方で踊ることで喜びを味わうことができる活動

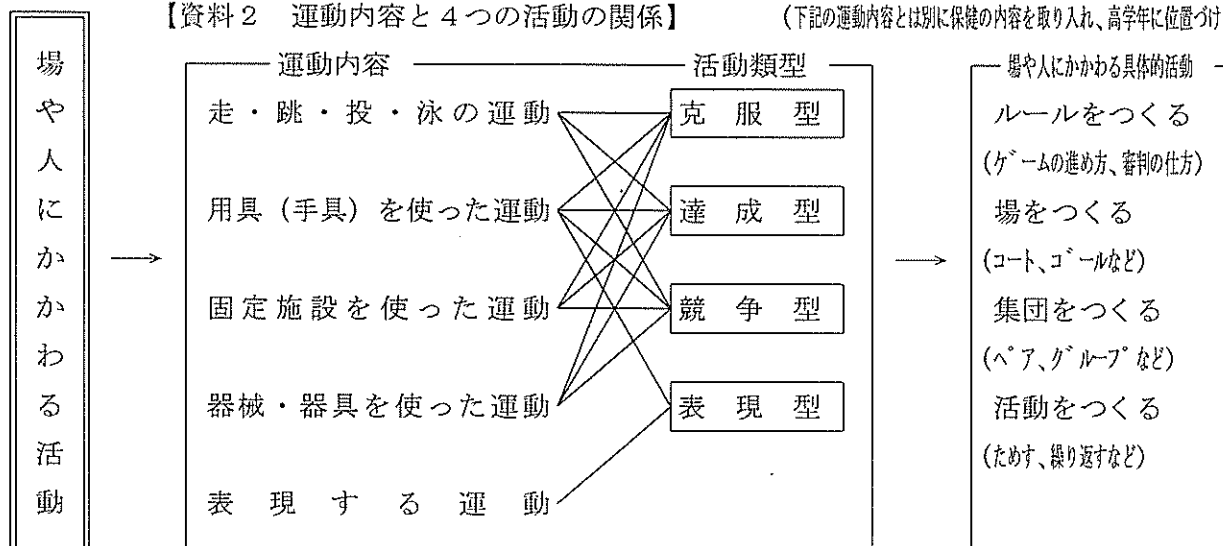
4. 年間指導計画の考え方

体育の内容は、運動にかかわる4つの活動との関連づけ方によって決まってくる。

年間指導計画の作成にあたっては、まず運動内容と上記の4つの活動、そして、それにかかわる具体的活動を関連づけて運動教材を取りあげる。また、これらの活動は子供の運動に対する意欲や、学

【資料2 運動内容と4つの活動の関係】

（下記の運動内容とは別に保健の内容を取り入れ、高学年に位置づける）



習指導の効率を高めることにつながるが、運動内容と4つの活動を関連づけると資料2のようになる。運動が必ずしも特定の活動とだけ関連するわけではない。

たとえば、障害物を越えて走る運動教材で、ハードルにひっかからないようになる（克服）だけでなく、自分の目標タイムを達成する（達成）、速さを友達と競う（競争）など、それぞれの学習場面に応じた活動の構成を考えることが場や人にかかわる具体的な活動を取り入れることになる。

これらを関連づけて、学習内容を設定するとともに、年間指導計画上のなかに位置づけることにする。

○ 運動の内容的視点から

4つの活動を組み合わせた内容を設定する。これは上記で述べたように、単独で扱うものもあるが子供の興味・関心や旺盛な活動の持続などの面から考えて、資料3の矢印にあるようにいくつかの活動を広げ、関連づけて内容を設定した。このなかで、子供は、運動をつくったり、選択したりするなどの場や人にかかわる具体的な活動を行うようになる。

【資料3 運動教材の選定例】

活動類型\ 運動内容	走・跳・投・泳	用具（手具）	固定施設	器械・器具	表 現
克服型活動	走・跳・投の3種の運動	力だめしの運動	鉄棒・雲梯などの運動	マット・跳び箱などの運動	
達成型活動	↓	↓	↓	↓	
競争型活動	↓	↓			
表現型活動		新体操遊び			OOを表現する運動

○ 運動の構成的視点から

場や人にかかわる活動は、低・中・高の発達段階（運動実態等）をふまえ、資料4にあるような活動をそれぞれの学年に配列する。たとえば、中学年においては、「高さに挑戦する活動」、「友達と競争する活動」を重視した単元を配列する。

【資料4 発達段階における場や人にかかわる活動】

その際、各学期にまたがって単元を位置づけ次第にそのための場を子供が自らつくり、協力して運動することができるような内容系列をふまえる。資料5は、年間を通じて（第4学年）競争型活動（ゲームづくり）を取り入れ、子供が自ら場や人にかかわることができるように、積み上げを考え配列した運動教材である。

	場・ルールなど（場）	集団（人）	活動形態
低学年	場・ルールに親しむ	仲よく遊ぶ	→多様に遊ぶ活動
中学年	場・ルールをつくる	協力して運動する	→挑戦的・競争的活動
高学年	場・ルールをいかす	役割を決めて運動する	→運動文化の習得的活動

【資料5 第4学年 配列例】

競争的活動（用具を使った運動）
「ハンド・ベースボール」→「フットボール、ポートボール」→「スリーゴールサッカー」

5. 学習指導上のポイント

- (1) どの子供もその教材における動きができることをめざし、教材の価値に触れる過程を設定して追究できるようにする。
- (2) 子供が自ら運動や場にはたらきかけて、自分の運動実態を高められる環境づくりができる活動を設定する。
- (3) 友達同士、ともに学び合い、高め合っていくような学習の集団を組織していく。
- (4) 子供が運動とかかわる中で、「なぜ」、「どうすれば」など問いや探究をしていくような主体的な体験活動を設定する。

6. 実 践

〔事例1〕第1学年 もみじだにでおにあそびをしよう（競争型）

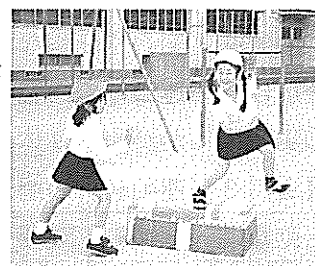
笠 宏 照

(1) 目 標

- ① 場の広さや特徴をとらえ、前後左右の方向に素早く逃げたり、追いかけてたりして、力いっぱい走り回りながら体全体を使って楽しく遊ぶことができる。
- ② 友達と一緒に遊び場にあるものや身近な道具を利用して場をつくり、逃げ方やつかまえ方を工夫して、グループで楽しく競争しながら遊ぶことができる。

(2) 指導の実際（7時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 運動場の広さをとらえ、遊具や道具をつかった場で鬼遊びをする。 (4) ・動く範囲を決め、身近な道具で場をつくり、ルールを工夫して遊ぶ。 ・競争を意識しながら、グループで動きを考えて楽しく遊ぶ。	1. 運動場に慣れながら鬼遊びをする。 (1) 固定施設や用具を使って場や遊び方を工夫していろいろな一人鬼をする。 ・とびばこやタイヤをつかって、たかおにをするよ。 ・たかいところには10かぞえるまでいることができるようにしよう。 (2) グループで競争しながら助け鬼をする。 ・ぼうやわをつかってきゅうけいしょをつくらう。そこにいと、つかまらないよ。 ・まもる人とつかまえる人にわかれるぞ。つかまえるときは、はさみうちにするよ。
2. もみじ谷の地形や広さをとらえ、自然物や運動場での遊び方を生かして鬼遊びをする。 (2) ・もみじ谷にある自然を生かしながら場やルールを工夫して遊ぶ。 ・学習した場づくりを生かして遊ぶ。	2. もみじ谷の坂や植物などをつかって場やルールを工夫して、楽しく集団の鬼遊びをする。 <1-2 はさみうちにつかまえる> (1) もみじ谷の坂や植物などをつかって場を工夫し、競争を楽しみながら助け鬼をする。 ・もみじだにをいっぱいつかってあそぼう。 ・木につかまったらきゅうけいにするよ。 ・さかをすばやくのぼればつかまらないぞ。
3. 動きや場を生かし鬼遊び大会をする。 (1)	(2) 道具を用いて休憩所などの場をつくりながら、遊び方を工夫して助け鬼をする。 ・カラーコーンでさかのとちゅうにきゅうけいしょをつくらう。にげるときはくんだりさかをつかってにげよう。 3. もみじ谷に遊び場をつくり工夫した動きを使って鬼遊び大会をする。 ・木のかげにかくれながら、つかまえにいくぞ。 ・さかのとちゅうをきゅうにまがって、おにからにげるぞ。



<1-1 とびばこを使った高鬼遊び>



<1-2 はさみうちにつかまえる>



<2-2 坂を下ってにげよう>

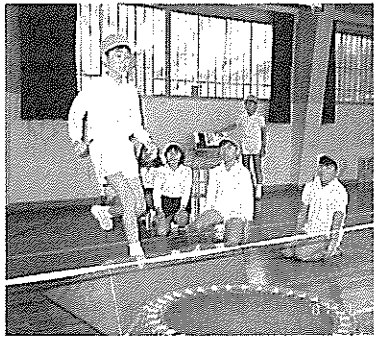
(3) 考 察

本単元を通して、子供たちは自分たちで場やルールを工夫し、全身を使って走り回ったり、動きを考えたりするなど、競争しながら鬼遊びの楽しさを味わうことができた。また、学校外の遊び場であるもみじ谷において、自然物を利用したり、学習した遊び方や用具を使ったりしてのびのびと活動することができた。このことは、逃げる友達をつかまえるという達成型活動からグループ対抗による競争型活動へと内容を設定したこと、もみじ谷の特徴である木などの自然物へと結び付く用具を用いて運動を構成したことが有効に働き、本単元の年間指導計画における価値を見いだすことができた。

（1）目 標

- ① 跳躍の姿勢・方向・リズムなどに変化を加えて跳んだり、高さを変えて跳んだりしてゴム高跳びを楽しくすることができる。
- ② 子供自らが、記録に挑戦したり競争したりする場をつくり、友達と協力してゴム高跳びを行い、運動による達成感・成就感を味わうことができる。

（2）指導の実際（6時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. ゴム高跳びの運動に出会い、自己の運動実態を調べる。(2) 2. 用具や場を工夫して、仲良くゴム高跳びに挑戦する。(2) — 達成型 — 達成欲求による課題の把握 ・姿勢、方向、リズムなどの達成欲求による課題を把握する。 — 競争型 — 競争欲求による課題の把握 ・グループや個人間で競争をする。 3. 競争の形態や場を構成してゲームをつくる。(2)	1. いろいろな形態の場や跳び方での跳の運動を行う。 ゴムを三角形に張った場、三角パッドと組み合わせた場、2つの助走コースの場など ・三角パッドを使ったら、跳ぶ角度がわかった。 ・ゴムを三角形に張った場では、跳ぶリズムが大切。 ・カーブのある助走コースで、少し斜めから跳ぶよ。 2. 用具や場の工夫をして、ゴム高跳びに挑戦する。 (1) いろいろな高さ・形態・ゴムの張りや幅などの条件を工夫した場で跳の運動をする。 ・助走の歩数を考えて跳ぶよ。そのために輪を並べるよ。 ・向きを変えて跳んでみたいな。 ・高さを変えて挑戦する。 ・支柱の印の黄色のところまで跳べたよ。今度は、ゴムをずらして赤色のところまで挑戦するよ。 ・三角パッドの位置をずらすと、跳びやすくなったし、記録も伸びたよ。  ＜ゴムを三角形に張った場＞ ＜体をひねって跳んでみる＞ (2) 高跳びの仕方や競争の仕方を工夫して跳ぶ。 ・○チームと連続跳びの競争をしよう。 ・△チームの跳んだ点数はどれくらいかな。 3. ゲーム化して、遊びをつくる。 ・○チームとタイム競争をしたい。 ・△チームと連続跳びのゲームをしたい。＜連続跳びの回数に挑戦＞ 

（3）考 察

子供は、単元を通してゴム高跳びの活動に熱中し、その特性を十分に味わうことができた。特に、姿勢・方向・リズムなどを変えていろいろな高さに挑戦する達成型から、高さや方向を選んで高跳びの競争をする競争型の活動を取り入れたことで、子供の動きに変容が見られた。これは、従来の達成型だけの学習に比べ、子供が活動欲求を満たすことができたからである。この競争で、子供たちは目的を明確にもち、旺盛に活動できた。また、場や友達とのかかわりを深めることができ、年間指導計画作成上、必要教材としての価値を見い出すことができた。

7. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 子供の変容

ア. 自主的活動の姿

子供が自分の運動の能力をとらえ、それに適した課題を持ち、自ら達成・解決しながら楽しんで学習に取り組む。

4年生の力だめしアスレチックにちょう戦しようでは、自分たちで練習の場や動きを工夫した。タイヤとびでは、身近なものを使った練習を考えた。「タイヤにふれずに跳び越す」という「ちびっこコース」の練習として中庭のとび石を使う方法、「タイヤに足をかけて跳ぶ」という「チャレンジコース」の練習としてイスにかた足をのせて使うという方法をそれぞれ考え出した。これは、学習を進めるために必要な活動を自ら創造し、活動している姿である。

イ. 共同的活動の姿

他者や運動とのかかわり合いの中で、運動の価値や意味をとらえ、コミュニケーションを図りながら運動を楽しむ。

4年生の新体操遊びでは、ペアになった子供たち同士がなわを使った自分たちの動きについてアドバイスをうけるようになった。B児は、「タンブリンのリズムに合わせてなわでとびたいな」と、自分で認識した動きの見直しのポイントを見てもらった。それを受けてC児は、B児のポイントをとらえ、なわを使った動きを見た後に「とぶ高さを変えると、タンブリンのリズムの変化に合うと思うよ」という具体的なアドバイスをを行った。これは、お互いの動きを高め合うためにコミュニケーションによる見直しの活動によって動きの練り上げを行っていったものである。

ウ. 学習活動の価値を自覚している姿

自分にとっての運動の意味を体力や動きの面からとらえて運動を楽しむとともに、運動の特性に触れながら、生活へも広げていく。

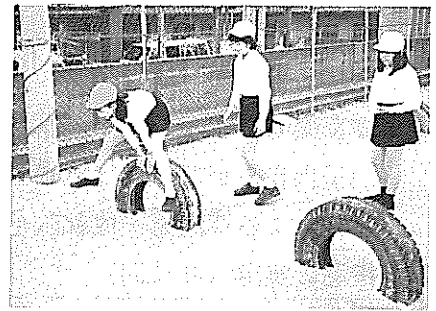
5年生のパンパンネットボールで学習したことを、休み時間に活用しながら運動場で遊んだ。「鉄棒をネットの変わりにしよう」「体育館と同じ大きさのコートにしよう」などの意見を出し、足でラインを引いて、自分たちでコートをつくり、楽しくゲームをすることができた。これは、子供たちがパンパンネットボールを学習したことを、生活における遊びの場面にも広げていった姿である。

② 体育科における豊かな学力の育ち

体育科では、子供一人一人が、自分の運動課題の克服・達成に向けて、取り組み方や動きを工夫・創造することや運動・スポーツの学習を、生活場面や遊びにまで広げる力を育てることを大切に考える。そこで以下のような方法で、その資質・能力の育ちを評価した。

ア. 評価の方法

評価は、4年生では「ゴム高跳びに挑戦しよう」、5年生では「パンパンネットボール」のそれぞれの学習終了後に、「それぞれの学習において自分のめあてを達成するために、どのような活動をしましたか」、「体育で学習したことが、学校や家庭での遊びにつながりましたか」の質問を行った。また、それぞれの学習における動きについては、観察やVTRからの分析を中心に行った。



〈タイヤコーナーで動きを考える子供たち〉

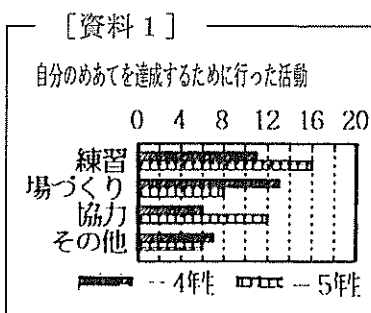


〈鉄棒を使った場で、パンパンネットボールで遊ぶ〉

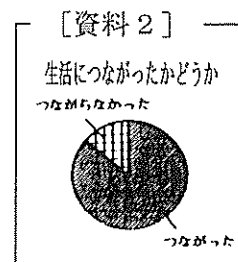
イ. 評価結果

【対象：本校4年生37人，5年生38人】

子供たちが「ゴム高跳び」や「パンパンネットボール」の学習において、それぞれ自分のめあてを達成するために行った活動は、[資料1]の通りであった。具体的には、練習では「高く跳べるようにスピードをつけて助走し、力いっぱい踏み切ることを注意した」（4年生）場づくりでは「跳び箱やトランポリン、ロイター板を置いて踏み切る時のジャンプが高くなるようにした」（4年生），協力では「ボールをつないで攻撃するために、みんなでポジションを決めトスを□君へまわすようにした」（5年生）などであった。



体育で学習したことが生活につながったかどうかについては、[資料2]のように、多くの子供たちが「つながった」と答えた。その内容は「休み時間にゴムを使ってゴム跳びをした」、「家庭で、お姉さんとビーチボールを使ってバレーボールをして遊んだ」など学習内容を遊びに活用することであった。



学習において高まった動きの姿は、[資料3]の通りである。ここでは子供たちがそれぞれの運動において、器械・器具・用具を使って場をつくりながら連続する動き（ア：きかいあそびをしよう）速さをとらえた動き（イ：新体操あそびをしよう）高さやリズムを意識した動き（ウ：ゴム高跳びにチャレンジしよう）などをつくりだしていることがわかる。

〔資料3〕

各学習における運動技能の例

ア. 高さの違うとび箱を並べて連続で支持膝び跳しをした（2年生：きかいあそびをしよう）

イ. なわやボールなどを自分の考えで素早くまわしたり、高く投げ上げたりなど工夫した操作をしながら、動きをつくり出した（3年生：新体操あそびをしよう）

ウ. 高さや回数、リズムを課題にしながら、記録に挑戦したり、チーム同士で競争したりしてゴム跳びを楽しんだ。（4年生：ゴム高跳びにチャレンジしよう）

以上の活動は、子供たちが自分たちでそれぞれの運動においてその取り組み方・動きを工夫・創造している姿や運動・スポーツの学習を、生活場面や遊びにまで広げている姿であると考えることができる。

③ 子供意識の変容

〔資料4〕 体育の学習が終わった感想を自由記述で

・ロイター板を使ったので、8cmも高く跳べるようになってうれしかった。・3人でポジションを決めてパスをしたのでボールをコントロールできるようになってよかった。・自分たちでネットの高さを変えたり、コートを決めたりしてゲームをつくっていくことが楽しかった。・友達と一緒に跳ぶ中で、高く跳ぶとび方やタイミングよく跳ぶとび方を考えることができた。

(2) 全体考察

子供たちはそれぞれの学習の中で、運動の場をつくったり操作したりする活動を通して、場とのかかわりや運動を通した友達同士の人とのかかわりを深めることができたものと考ええる。さらに、その活動によって、子供たちは自分なりの動きをつくりだしたり、また、チームで協力して作戦行動をとったりすることができるようになってきた。この動きをつくり出すということは、生活における運動遊びとの関連や未経験の運動を教材化し内容として規定した結果、体育の学習を日常の運動場面に広げ、場の工夫や動きを創造するという姿に結び付いた。ここに生活まで運動場面を広げることや生活から運動内容を取り出すことの必要性をとらえることができる。

以上のことから、子供たちが場や人とのかかわりをとらえ、運動を創造するということを重視して作成した年間指導計画は、有効であったと考える。

自立的な生活をめざして生活力を培う

障害児教育研究部

落合 純哉

松本 良一

西原 敦子

舩元 俊文

1. 自立的な生活をめざして

発達に遅れのある子供たちの教育のねらいは、子供たちが自立的な生活を営むことができるようにすることである。

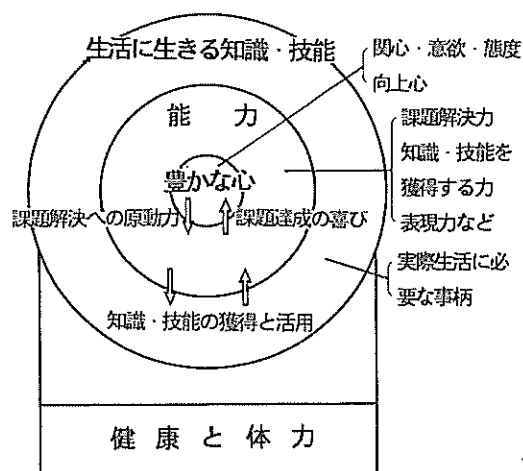
ここでいう自立的な生活とは、「自分のもっている力を最大限に発揮しながら身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかける中で、自分の活動への満足感や充実感を味わうこと」であるとする。この自立的な生活を可能にするには、次の2つのことが大切である。①基本的な生活習慣を確立することや、自分の生活上の課題を身の回りのもの・ひと・ことへ働きかけて解決することなど、自分のことが自分でできるようになること、②自分の身の回りのもの・ひと・ことへ興味・関心や意欲をもち、何かしらの期待感をもって働きかけようとすることや、その働きかけの結果を、「やった、できた」という達成感・成就感や「自分でできたんだ、みんなで一緒にやれたんだ」という効力感・有用感として味わうこと、の2つである。①の「自分でできる」とは、自分一人の力でできるということだけを意味するのではない。分からないことがあれば人に尋ねたり、できないことがあれば助けを求めたりするなど、他者への援助を求めてできるということも含んでいる。また、②の達成感・成就感、効力感・有用感を味わうことは、「自分はこんなことができるんだ、自分にもできるんだ」という自分への自信を育て、それが、自立的な生活を支える「自分から」という生活への積極性を生み出すことにつながっていくと考える。

子供たちが日々の学習や生活の中で達成感・成就感や効力感・有用感を味わいながら、できることが増えていくとき、そこには生活力が培われていると考える。自立的な生活をめざしていく上で、生活力を培っていくことが最も大切なことであるとする。

【生活力の構造】

2. 生活力とめざす子供の姿

生活力とは、健康や体力を基盤とした、豊かな心と課題解決力・表現力などの能力、生活に生きる知識・技能の3つの総体であるとする。ここでいう豊かな心とは、「おもしろそうだな」という身の回りのもの・ひと・ことへの興味・関心や「やってみたいな」という活動への意欲、「できるようになりたいな」という向上心など、学習の原動力となるものである。また課題解決力・表現力などの能力とは、「～をするために～をやろう」という学習課題を意識したり課題解決の見通しをもったりする力、「～がわからないから～さんに



きこう」という知識・技能を獲得する力、「こんなことができるようになった」と行動で表現する力など、学習を進めていく中で生活に生きる知識・技能の獲得と活用を促すものである。さらに、生活に生きる知識・技能とは、実際生活に必要なコミュニケーション・身辺自立・移動・作業・集団参加などにかかわる事柄である。

以上のような生活力が培われ、自立的な生活を営む子供の姿を次のように考える。

め ざ す 子 供 の 姿

- 「おもしろそうだな、できるようになりたいな」と学習課題へ興味・関心をもつ姿
- 「～したら～できたぞ」と見通しをもつ姿
- 「これが分からないから、～さんに聞こう」「～を練習しよう」と繰り返し課題に取り組む姿
- 「今度は～をやろう」「～くんと一緒に遊ぼう」と自分で活動や対象を選択しながら課題に取り組む姿
- 「できた、やれた」という学習への達成感・成就感や「自分でできた、～が喜んでくれた」という効力感・有用感を味わう姿

このような姿を具体化するためには、子供自身が「できた、やれた」と思える学習を積み重ねていくが必要になると考える。

3. 自立的な生活をめざして生活力を培う学習指導

子供たちの自立的な生活をめざすためには、具体的に日々の学習の中で「何を」「どう伸ばすのか」ということを考えて指導することが大切である。そのためには、教科別の指導や領域、領域・教科を合わせた指導の中のそれぞれで培われる生活力を明らかにして指導を行う必要がある。これが、「何を」である。さらに、その力を培うためにはどんな内容の活動をさせればいいのか、どのように活動させればいいのかを考えて指導を行う必要がある。これが、「どう伸ばすか」である。

「何を」「どう伸ばすか」ということについて、具体的に次のように考える。

	「何を」→「どう伸ばすか」
国 語	生活に必要なことばを理解し表現する力 → 聞く・話す・読む・書く内容を、生活目的を達成する言語活動を通して
算 数	数量や図形の初歩的なことを理解し生活に活かす力 → 生活に身近な数量・図形の内容を、具体的な操作活動を通して
音 楽	生活の中で音楽を楽しむ力 → 身体・器楽・歌唱表現の内容を、子供に身近な音楽の鑑賞及び表現の活動を通して
図画工作	造形表現の喜びを味わう力 → 造形品を鑑賞したり表現したりする内容を、初歩的な造形活動を通して
体 育	生活の中で運動を楽しむ力 → 基本の運動やゲームの内容を、運動実態に応じた適切な運動経験を通して
生活単元	生活上の課題を解決する力 → 生活に必要な事柄を、生活上の課題を解決する目的活動を通して

以上のことを大切に考えながら、日々の学習の中で子供たちが自分のもっている力を十分に発揮できるような、「子供たちが、できる」状況を次のような観点からつくることが生活力を培う学習指導で大切であると考ええる。

4. 「子供たちが、できる」状況づくり

(1) 子供たち一人一人が学習すべき内容を明らかにする。

子供たち一人一人の学習内容を明らかにする上で、まず児童の実態を把握する必要がある。具体的には、①これまでの学習経験とその学習で身につけたものが何であることを明らかにする、②具体的な単元・題材の内容にてらして「今、何ができるのか」、そして「何ができそうか」ということを明らかにする、という観点から把握する。以上のような観点から把握した児童の実態と①生活に生きる知識・技能の習得、②生活上の課題解決の仕方の習得、③対象に能動的に働きかけようとする関心、意欲、態度の伸長、などを考え、具体的な子供たち一人一人の学習内容を設定する。

(2) 子供が意欲的に学習に取り組めるような教材をつくる。

次のような観点から、教材の素材となるものを子供たちの生活の中から見つけ出し教材化する。

- 学習内容を内包して子供の興味・関心に応じるもの
- 子供たちの実態に応じることができると多様な活動が内包されているもの
- 子供に課題解決の必要感を喚起するもの
- 子供に活動への目的意識を喚起するもの

(3) 子供の意識や学習したことが生活に生きるように連続・発展する活動を構成する。

① 学習対象への動機づけの段階（動機）

子供たちが解決すべき課題を意識したり、課題解決の見通しをもったりすることをねらう。

② 課題に熱中して取り組む段階（熱中）

子供たちが熱中して繰り返し課題に取り組む中で、課題を解決したり、課題解決の過程や結果で生活に生きる知識・技能を身につけることをねらう。

③ 活動の結果を振り返る段階（発展）

子供たちが自分が学習してきた成果を実感し、達成感・成就感や効力感・有用感を味わったり学習したことを生活に生かすことをねらう。

【基本的な指導のしくみ】

	重 力 機	素 材 中	発 展
活 動 と 内 容	1. 学習対象にであい、 学習への意欲をもつ。 ○ 学習課題の把握 ○ 課題解決への見通しをもつこと	2. 課題に熱中して繰り返し取り組む 中で、課題を解決する。 —— 具体的な活動例 —— 模擬体験の活動、表現活動、操作 活動、構成活動、ゲームの活動 ○ 課題解決の仕方 ○ 生活に生きる知識・技能	3. 活動の結果を振り返 ったり、学習して身に つけたことを生活に生 かしたりする。 ○ 達成感・成就感や 効力感・有用感 ○ 学習の生活化
支 援	○ 直接体験の場の設定 ○ 教材とのであいの工夫	○ 変化と繰り返しの活動の設定 ・場の変化 ・学習内容の変化 ○ 教師の個に応じた働きかけ	○ 学習の成果の発表の 場の設定 ○ 家庭との連携による 学習の生活化の促し

5. 指導の実際（次ページ参照）

- 言語活動の喜びを味わう国語科学習
- 自分の生活を楽しくしていく生活単元学習
- みんなで表現する楽しさを味わう音楽科学習
- 一人一人が運動のもつ楽しさにふれる体育科学習

自分の生活を楽しんでいく生活単元学習

～社会的体験を豊かにする活動を通して～

障害児教育研究部（生活単元）

松本 良一

1. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

自分の生活を楽しんでいくとは、自分のもっている力を最大限に発揮しながら身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかける中で、自分の活動への満足感や充実感を味わうと同時に、次の活動への期待感をもつことである。つまり、子供たちが日々の生活の中で「今日の生活に満足し、明日の生活を楽しみにする」ことである。

そのためには、単に自分のことが自分でできるようになるだけでなく、「やったー」「できた」という達成感・成就感や、「自分でできたんだ」「みんなで一緒にやれたんだ」という効力感・有用感をともなった活動を数多く積み重ねていくことが大切である。なぜなら、この達成感・成就感や効力感・有用感を味わうことが「自分はこんなことができるぞ」「自分にもできるんだ」という自分への自信を培うことにつながり、その自分への自信が「自分で」「自分から」という、身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかけようとする、生活への積極性を生み出すからである。

(2) めざす子供の具体的な姿

学習場面での「自分の生活を楽しむ子供の姿」を、①身の回りのもの・ひと・ことへの積極的な働きかけの姿（興味・関心、見通し、積極性）と②活動への満足感・充実感を味わう姿や期待感をもつ姿、という2つの観点から、具体的に次のように考える。

① 身の回りのもの・ひと・ことへの積極的な働きかけ

- ア. 「おもしろそうだな、やってみたいな」と学習課題へ興味・関心をもつ姿（興味・関心）
- イ. 「～したら～できるぞ」と見通しをもつ姿（見通し）
- ウ. 「ぼくは、これをやろう」と自分から課題に取り組む姿（積極性）
- エ. 「～を練習しよう」「～さんと一緒にやろう」と繰り返し課題に取り組む姿（積極性）

② 活動への満足感・充実感や期待感

- ア. 「できた、やれた」「自分でできた」と学習への達成感・成就感、効力感・有用感を味わう姿（満足感・充実感）
- イ. 「次は、あれをやろう」と、次の活動への期待感をもつ姿（期待感）

(3) 生活単元学習で培う生活力

上述しためざす子供の姿を具体化することで、自分の生活を楽しむことを可能にする生活上の課題を解決する力が培われると考える。この生活上の課題を解決する力とは具体的に、①生活上の課題への興味・関心や生活上の課題を意識する力、②課題解決に必要なことを意識し見通しをもつ力、③繰り返し課題に取り組む力、④課題解決のためにノートを見たり人に聞いたりする力、⑤自分の課題解決の成果を振り返る力、⑥課題解決の過程や結果で身につく実際生活に生きる知識・技能、などである。

以上のことは、子供たちの身の回りのもの・ひと・ことへの働きかけを今まで以上に積極的にするとともに、子供たちの生活がよりよくなることにつながり、子供たちの生活力を培うことや現在及び将来の自立的な生活を考える上で意義深い。

2. 副主題の意味について

「社会的体験を豊かにする」とは、現在及び将来の社会生活を送る上で必要と考えられる社会の仕組みを利用する範囲をひろげたり、利用の仕方を高めたりすることである。

ここでいう社会生活を送る上で必要と考えられる社会の仕組みとは、自分の生活が楽しくなるような何らかの生活目的を達成するために、目的もしくは手段として利用する通信・購買・移動・余暇利用・飲食・情報収集などにかかわるものである。その利用の範囲をひろげるとは、社会の仕組みの利用を多様に数多く行うことであり、利用の仕方を高めるとは、自分の必要感や期待感に支えられて、できるだけ自分の力で利用を行えるようになることである。

3. 社会的体験を豊かにする活動づくりの具体的な方途

(1) 学習対象としての社会的体験の取り出し

子供たちが自分の生活を楽しくしていくための社会的体験を、自分の生活を楽しむために目的として利用するものと手段として利用するものから、具体的に次のように考える。

必要性	社会的体験	具 体 的 な 内 容	身につく知識・技能
目的として	購買にかかわるものの利用	自動販売機、コンビニエンスストア、スーパーマーケットなどを利用すること	手続き、人とのかかわり方 金銭の使い方など
	余暇利用にかかわるものの利用	図書館、博物館、美術館、遊戯施設などを利用すること	手続き、人とのかかわり方 金銭の使い方、マナーなど
	飲食にかかわるものの利用	食堂、レストランなどを利用すること	手続き、人とのかかわり方 金銭の使い方、マナーなど
手段として	通信・運輸にかかわるものの利用	電話、郵便、宅配便、インターネットなどを利用すること	手続き、人とのかかわり方 金銭の使い方など
	移動にかかわるものの利用	バス、電車、地下鉄、などを利用すること	手続き、人とのかかわり方 金銭の使い方、マナーなど
	情報収集にかかわるものの利用	地図、案内板、交番などを利用すること	人とのかかわり方、情報収集の仕方など

以上のような社会的体験を、次のような手続きで取り上げ単元の設定を行う。

	社会的体験を取り上げる手続き	具体例（単元「総合図書館に行こう」の例）
1	子供が目的意識や課題意識をもてるような生活上の課題を設定し、学習対象としての社会的体験を明らかにする。	課題「総合図書館に行ってビデオを見たり、本を借りたりしよう」から、福岡市総合図書館の利用という社会的体験を設定する。
2	課題解決のために必要な社会的体験を明らかにして、具体的な学習内容として設定する。	総合図書館に行って楽しむために必要なビデオライブラリーの利用、本の閲覧の仕方、バスの利用の仕方などを学習内容として設定する。
3	社会的体験をする過程や結果で身につく実際生活に必要な知識・技能を明らかにする。	図書館の施設利用の手続き、図書館の人のかかわり方、運賃の払い方、公共の場での過ごし方、など

(2) 社会的体験を豊かにする活動づくり

社会的体験を豊かにする活動づくりを行うためには、子供たちが日常生活において発揮する能動性に着目しながら、子供たちの「～できるようになりたい」という達成動機を引き出す学習を行う必要

がある。さらに、学校外で行う直接体験の活動と学校の中で行う模擬体験の活動（模擬の場での活動）や代理体験（写真やビデオの視聴など）の活動を関連させた活動構成を行い、学校内で学んだことが学校外で生きるようにする必要がある。このことで、子供たちの社会的体験が豊かになり、生活上の課題を解決する力が培われると同時に、自分の生活を楽しんでいくことが可能になると考える。

具体的には、社会的体験を豊かにする活動づくりを、①児童の実態の把握、②個の学習内容の設定、③活動構成、という手順で行う。

① 児童の実態の把握

子供の社会的体験に対する実態を次のような観点から把握する。

- 子供が日常生活で獲得している社会の仕組みに対する働きかけ方
- 社会の仕組みに対する興味・関心
- これまでに社会の仕組みを利用した経験の度合い

② 個の学習内容の設定

課題解決に必要な社会的体験（申込の手続きや金銭の使用など社会の仕組みを利用するために必要な事柄）と上述した子供の実態から、次のような点に留意して学習内容の設定を行う。

- できるだけ自分の力で課題解決を行うことができるようにする。
- 社会生活を送る上で大切な人とかかわる内容を重視する。
- 社会の仕組みを利用するための知識・技能だけでなく、課題解決の仕方についても個の学習内容として設定する。

③ 活動構成

学校外で行う直接体験の活動と学校内で行う模擬体験の活動や代理体験の活動で構成し、学習過程の「であう」「しらべる・おこなう」「いかす」3段階に位置づける。

ア. であう段階

社会の仕組みを利用する直接体験の活動を行うことにより、活動への目的意識をもったり生活上の課題を意識したりすることをねらう段階

イ. しらべる・おこなう段階

直接体験の活動と模擬体験や代理体験の活動を交互に行うことにより、社会の仕組みの利用の仕方を身につけることをねらう段階

ウ. まとめる段階

表現物をつくる活動を行うことにより、直接体験や模擬体験・代理体験の活動を通して自分が行ったことやできるようになったことを振り返り、活動への達成感・成就感を味わう段階

	であう	しらべる・おこなう	いかす
活動と内容	1. 社会の仕組みを利用する直接体験をする。 ○ 活動の目的意識 ○ 課題の意識化	2. 模擬体験と直接体験を繰り返し行う。 <u>しらべる（模擬体験・代理体験）</u> ↑ ↓ ※ 繰り返し <u>おこなう（直接体験）</u> ○ 社会の仕組みの利用の仕方	3. 活動を振り返り、表現物にまとめる。 ○ 自分の活動への達成感・成就感
支援	・直接体験の場の設定（子供が目的意識を持ちやすい社会の仕組みの設定）	・社会の仕組みの利用に必要なことを繰り返し体験できる模擬の場 ・社会の仕組みの利用の仕方をまとめた個に応じたノート	・視聴覚機器による活動の振り返り ・地図やパンフレットなどの表現物

4. 実 践

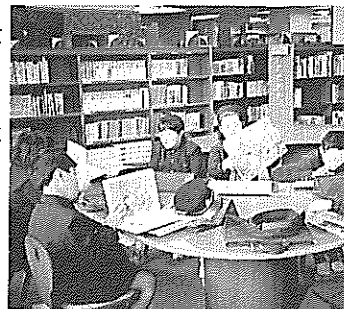
〔事例〕 第3・4学年さくら組 そうごうとしょかんに いこう

(1) 目 標

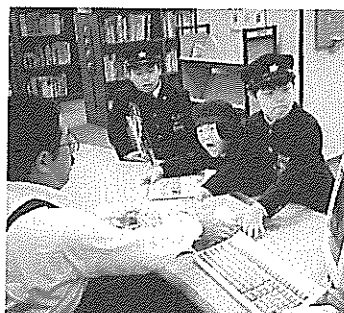
みんなで福岡市総合図書館に行こうという目的意識をもってバスの乗り方や図書館の施設の利用の仕方などの課題を解決し、実際に福岡市総合図書館に行ってみることが出来る。

(2) 指導の実際（12時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 自分たちが利用できる総合図書館の施設について知り、学習への目的意識をもったり課題を意識したりする。 (3) 2. 図書の閲覧の仕方や貸出の仕方、ビデオライブラリーの利用の仕方について模擬体験で練習して、実際に総合図書館に行き施設を利用する。 (8) 3. 自分の活動への達成感・成就感を味わう。 (1)	1. 総合図書館に見学に行き、図書の閲覧やビデオライブラリーでのビデオの視聴を体験する。 ○ たくさんの本に驚き、自分の好きな本を選んで読む。 ○ 自分の好きな本を教師の貸出カードを使って借りる。 ○ ビデオブースでビデオを楽しく見る。 2. 図書館の施設の利用の仕方を練習する活動と実際に総合図書館に行き施設を利用する活動を繰り返す。 (1) 図書の閲覧の仕方や貸出の仕方について練習し、実際に総合図書館に行き自分の貸出カードを作って本を借りる。 ○ 自分の貸出カードが欲しいと言い、申込書に名前と住所を書く練習をする。 ○ 実際に総合図書館で申込書を作り、本を借りて喜ぶ。 (2) ビデオライブラリーの利用の仕方について練習し、実際に総合図書館に行きビデオブースの申込をしてビデオを見る。 ○ ビデオライブラリー利用申込書に自分の登録番号を書き、好きなビデオを選んでビデオの番号を入力する練習をする。 ○ 実際に総合図書館に行き、ビデオブースの申込を自分でしてビデオを見て楽しむ。(模擬の場で正しく申込書を書いて喜ぶ姿) 3. 総合図書館での学習を写真やビデオで振り返り、自分の活動をパンフレットに絵や文でまとめる。



(総合図書館での本の閲覧を体験する姿)



(貸出カードを使い嬉しそうに本を借りる姿)



(模擬の場で正しく申込書を書いて喜ぶ姿)

(3) 考 察

目的意識をもって、貸出カードの作り方やビデオライブラリーの申込の仕方などの図書館利用の手続きを練習して課題を解決し、総合図書館に行き楽しむ姿や、学習後に家族と総合図書館を利用して楽しむ姿など、自分の生活を楽しくしていく中で生活力の育ちを見ることができた。このことは、①総合図書館の教材化、②直接体験による学習対象の価値の意識化→模擬体験と直接体験の繰り返しによる自分の活動の意味の実感という一連の活動構成が有効であったと考える。

言語活動の喜びを味わう国語科学習

～ことばの楽しみを広げていく読み聞かせの活動を通して～

障害児教育研究部（国語科）

落合 純哉

1. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

発達に遅れのある子どもたちへの国語科学習指導では、ことばの基礎力をしっかりと身につけさせ、理解力や表現力を育てていくとともに、ことばを使っていくことの楽しさを十分に味わわせていくことが必要であると考えます。これは、ことばを生活の中で豊かに使っていき、という必要不可欠な生活力を培っていくためには、様々なことばの使い方を経験するとともに、身につけた理解力や表現力の価値を繰り返し実感することが大切であると考えますからである。

これまでの指導では、ことばの基礎力、理解力や表現力を育てる指導が重点的に行われてきており、子供たちは、ことばの基礎力がある程度身につけるとともに、表現力にも育ちがみられた。しかし、身につけたことばの基礎力、表現力を生かしてことばの楽しさを十分に味わい、生活に積極的に生かしていこうとする態度を育てるまでには至っていない。

こうした姿から、ことばの楽しみという視点を取り入れることによる指導内容の見直しや、様々なことばの使い方の経験をもとに、身につけた理解力や表現力の価値を繰り返し実感させる指導のあり方について究明したいと考えた。

言語活動の喜びを味わうとは、子供たちが、話しことばや書きことばを使って、多様なコミュニケーションの場や表現物とのかかわりを広げていくことを通して、身につけた表現力を生活に生かしていくことのよさを繰り返し実感することである。

多様なコミュニケーションの場や表現物とのかかわりを広げるとは、楽しい体験を素材に、相手と楽しくやりとりをしたり、図書館で自分の好きな絵本を選んで読んだりする等、ことばを使う経験を多様に積み重ねていくことである。また、身につけた表現力を生活に生かすことのよさを繰り返し実感するとは、表現の対象や表現する相手を広げていきながら、「おもしろかったことを友達に話したら、喜んでくれた。」等、様々な人とのやりとりを通して快の感情を味わうことである。

国語科学習指導における具体的な言語活動としては、次のようなものがあげられる。

中心となる言語活動	活 動 内 容
聞くこと 話すこと	友達に遊び方を教えたり、遊ぶためにお互いにことばでやりとりをしたりしながら、休み時間などに遊べるような、ことば遊び（かるた、あてっこあそび等）のコーナーを作る。 [題材「あてっこあそびでわいわいあそぼう」]
読むこと	教材文をもとに絵本づくりを通して内容を読みとり、それをもとに友達に読み聞かせていく活動を継続的に行う。絵本の場面をただ理解するだけではなく、絵本の能動的な楽しみ方をさせ、読むことの楽しさを広げていく。 [題材「ともだちによんであげよう」－そらいろのたね－]
書くこと	伝えたいことを家族や友達に知らせるために、お知らせノートや、パンフレットに書き、相手とのやりとりを継続的にしていく中で書くことの喜びを味わう。パンフレットは、生活単元学習等の中で実際に相手に活用してもらう。 [題材「たなばたかいのおしらせパンフレットをつくろう」]

(2) めざす子供の具体的な姿

- ① 感動的な体験に出会ったり、教師の読み聞かせを楽しく聞いたりし、表現をすることへの関心・意欲をもったり、いくつかの場面の中から、好きな場面を選び出したりしている姿
- ② 状況を理解しながら相手とやりとりをしたり、好きな場面のイメージをふくらませながら個々の楽しみ方に応じた表現をしたりしている姿
- ③ 「自分が書いたことについて、お母さんに返事をもらったぞ。」「自分の読み聞かせを、友達が楽しそうに聞いてくれたぞ。」等、ことばの楽しさを味わったり、表現力を生活に生かすことのよさを実感したりしている姿

(3) 国語科で培う生活力

言語活動の喜びを味わっていくために、国語科において培う力を次のように考える。

- ① ことばを生活場面の中で使っていこうとすることへの関心・意欲・態度
- ② 文字力・語彙力・文法力など、ことばの基礎力
- ③ 好きな絵本や場面を選ぶ、場面をとらえて表現につなぐ、人とのかかわる力、状況を認知する力、といった理解力、表現力

2. 副主題の意味について

ことばの楽しみを広げる読み聞かせの活動とは、様々なことばの楽しさを感じたり、楽しみ方を経験したりしながら、個々のことばの楽しみ方に応じて表現することを繰り返し、実際の生活に自分の表現力を生かしていこうとするものである。

ここでいう、ことばの楽しみとは、具体的には次のようなものがあげられる。

- ① ことばを使うことへの興味や関心、自信
 - ・楽しかったことをお母さんに伝えたいな、絵本を読んでみたいな
- ② 様々なことばの楽しみ方を経験すること
 - ・ことばあそび、行事のパンフレットづくり、絵本の読み聞かせ等
- ③ 表現したいものを選び、自分なりに表現すること
 - ・印象的な場面を選択して、感情を込めながら話す等

これらを積み重ねながら、表現力を高め、達成感・成就感、有用感を繰り返し味わっていくことが、ことばの楽しみを広げることである。

また、読み聞かせの活動とは、教師の語りかけや読み聞かせをもとに、体験したことや読んだ場面のイメージをふくらませながら、とらえたことを自分なりに表現することを繰り返していく活動である。体験したことや読んだ場面のイメージをふくらませるとは、教師の体験したことについての語りかけや絵本の読み聞かせをもとに、印象的な体験や場面を選択し、場面の状況に即して動作化や音声化をすることである。自分なりに表現するとは、話す相手への意識を広げたり、場面に応じた発声・動作の仕方を考えたりすることである。

3. 活動づくりの具体的な方途

(1) 児童の実態のとらえ方

- ① 言語活動への興味・関心：これまでの生活経験からくる、表現しようとするものについての傾向、また、音声言語、文字言語、いずれかによる表現の傾向。
- ② ことばの基礎力：語彙力・文法力・文字力等、言語活動の上で基礎となる力の発達の程度。
- ③ ことばの使い方：絵本や場面の選択力、場面をとらえて表現につなぐ力、人とのかかわる力に応じた理解力、表現力の程度。

(2) 学習内容の設定

- ① 個々の発達段階（障害の程度、感覚・認知、言語・数量、性格・行動、社会性など）から目標を達成するための、内容選択・系統的位置付けをする。
- ② 個々の子供の興味・関心、課題解決の仕方、表現の仕方をもとに、子供のよりよい生活を考え、ことばの楽しみという視点で選定する。

ことばの楽しみの段階を次のように考えた。

	読みの楽しみをみつける	読みの楽しみを深める	読みの楽しみを広げる
体験や場面を選択すること	○印象深い体験や場면을直観的に選ぶ。	○表現のおもしろさを感じとり、好きな場面を選ぶ。	○友達に聞いてもらいたいという思いから好きな場面を選ぶ。
場面をとらえて表現につなぐこと	○場面の大体のイメージをつかむ。	○場面のイメージと、発声の仕方や、動作を結び付ける。	○場面に応じて、声の大きさを意識したり、身振りをつけたりして話す。
人とかわるること	○ひとりで表現することを楽しむ。	○教師や学級の友達に聞いてもらおうとする。	○他学級の友達にも聞いてもらい、友達の話を聞こうとする。

(3) 読み聞かせの活動構成

読み聞かせの活動を「みつける」「ふかめる」「ひろげる」の3段階で構成する。具体的には、次の通りである。

	みつける	ふかめる	ひろげる
活動と内容	1. 教師の読み聞かせを聞き、好きな場面を選んで読む。 ○ 読み聞かせの楽しさの感受 ○ 内容についての大体の理解	2. 読み聞かせを聞き、読みを深めるとともに、楽しみ方に応じた表現をする。 (1) 好きな場面について読み深め、楽しみ方に応じて表現する。 ○ 様々な場面の内容の理解 (2) 好きな場面を選び、楽しみ方に応じて表現をする。 ○ 楽しみ方に応じた表現	3. 他の学級の友達と読み聞かせをし合う。 ○ 人とのかわりの実感 ○ 読み聞かせの楽しさの実感
支援	・ 内容にふさわしい調子での読み聞かせ ・ 場面ごとに分かれた絵本の提示	・ 内容にふさわしい調子での読み聞かせ ・ 場面の状況に即した体験の場 ・ 個々の楽しみ方に応じた絵本 ・ 読み聞かせをする場	・ 個々の楽しみ方に応じた絵本 ・ 他学級の友達への読み聞かせの場

(4) 教材化にあたって

教材化にあたっては、次の点に留意する。

- ① 教材文となる絵本として、個のことばの基礎力等に応じた内容をもっている、興味・関心にそったものである、3～5程度の場面で構成されている、等の条件をもつものであること。
- ② 読み聞かせの楽しさを感じるとともに、好きな絵本や場면을自己選択することのできる場が設定されていること。
- ③ 個々の内容理解に応じながら場面の状況に即した模擬体験をすることを通して、イメージをふくらませることができるような場が設定されていること。

4. 実 践

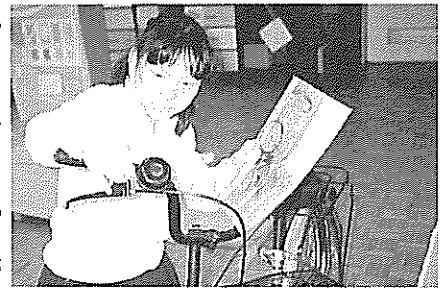
[事例] 第5学年梅組 ともだちに よんであげよう ―「はじめてのおつかい」―

(1) 目 標

- ① 好きな場面を選んで内容を読み取り、自分なりに表現する楽しさを味わうことができる。
- ② 物語のあらすじや場面の状況をとらえ、表現の仕方を工夫しながら相手に読み聞かせをすることができる。

(2) 指導の実際（6時間）

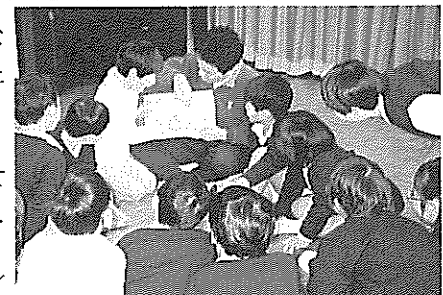
ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. 読み聞かせの楽しさを味わう。 (2) 2. 動作化や音声化をしながら内容を読み取るとともに、表現の仕方を工夫しながら教師や友達への読み聞かせをする。 (2) 3. 自分の表現の仕方を工夫しながら教師や友達への読み聞かせを行い、読み聞かせの楽しさを実感する。 (2)	1. 教師の読み聞かせを聞き、自分の好きな場面を選んで読む。 ○ 教師の範読を聞いてうれしそうに「おもしろかった!」と言う。 ○ 範読の後、絵本の印象的な場面を選び、大きな声で読み始める。 ○ 読み聞かせの場で、教師の援助を受けながら文をたどって読む。 2. 教師の範読をもとに、場面ごとの読み深めと表現を繰り返す。 (1) 好きな場面を読み、模擬体験の場で動作化や音声化をする。 ○ 教師の範読に合わせて動作をしたり、大きな声で話したりする。 ○ 好きな場面に即した模擬体験の場に行き、主人公になりきって発語をしたり、動作をしたりする。 (2) 教師の範読を聞き、動作化、音声化や、読み聞かせを繰り返す。 ○ 教師の範読を聞きながら、主人公がおどろいた様子を表して話す。 ○ 模擬体験の場にある登場人物の絵に繰り返し呼び掛ける。 ○ 登場人物になりきったり、場面の様子に即して動作化したりしながら友達に読み聞かせをする。 3. 自分の表現の仕方、他の学級の友達に読み聞かせる。 ○ 絵本のペープサートを操作しながら、教師と一緒に大きな声で好きな場面を読む。 ○ 絵本を大きく広げて友達に見せながら、登場人物になって抑揚をつけたり、擬態語を強調したりしながら文を読む。



＜好きな場面を読み、体験の場で動作化をするU児＞



＜体験の場で動作化・音声化を繰り返すF児＞



＜他の学級の友達に読み聞かせをするT児＞

(3) 考 察

表現のおもしろさを味わわせながら場面の内容をとらえさせるとともに、範読をもとに登場人物に同化させて話させることを繰り返していく活動の設定が、ことばの楽しさを味わいながら、自分の表現をふくらませていく上で有効に働くものと考えられる。また、模擬体験の場の条件として、絵本のさし絵との視覚的な結びつきがあること、登場人物に同化できる体感的な場であること等があげられる。

みんなで表現する楽しさを味わう音楽科学習

～表現を見合う・聴き合う活動を通して～

障害児教育研究部（音楽科）

西原 敦子

1. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「みんなで表現する楽しさを味わう」とは、楽曲が流れる中で音をよく聴きながら一緒に表現することを快の状況として楽しむことである。発達に遅れのある子供たちは、歌を歌ったり、楽器を鳴らしたりすることに楽しく取り組むが、その表現は音や楽曲をよく聴くこともなくどんな曲でも大声で歌ったり、拍やリズムなどの意識を持たずに楽器を鳴らしているといったものが多い。それは、自分の表現への意識に加えて、友達（相手）の表現への意識も薄いからだと考える。そこで、音楽的表現力は弱いものの音楽に対する感受性や表現への意欲などは比較的豊かな子供たちに一緒に身体表現をしたり、歌ったり、楽器を使って音を合わせたりするなど身体表現、歌唱表現、器楽表現を創造していく中で、音楽的表現力を身につけていく充足感や友達と一緒に表現することから生まれる安定感をもたせていく。

子供たちの自立的な生活をめざす上で、音楽科学習の中で大切に考えることは、子供たちが日常生活の中で音楽の楽しみ方を身につけることである。そのために、子供たちに音楽を楽しむ心情や自分から働きかける力、音楽的表現力を育てる必要がある。

音楽科学習の内容には、表現（身体・歌唱・器楽）と鑑賞の2領域があるが、発達に遅れのある子供たちの音楽科学習では、系統的な内容で学習を行なうのは困難である。そこで、子供たちが楽しんで学習するために、子供たちの発達段階や障害の程度を考え、身体表現、歌唱表現、器楽表現、鑑賞の活動を各題材の中に総合的に取り入れた音楽的活動を行なうことが必要である。

この音楽的活動の中に、一人一人の表現をそれぞれの音楽の楽しみ方として持たせることが大切である。そして、一人一人の表現をみんなと合わせる時、音楽的要素をより意識しながら表現する楽しさを感じることができる。また、そのような音楽の楽しみを知ることは、毎日の生活を明るく楽しいものにすることができると思う。

(2) めざす子供の具体的な姿

みんなで表現する楽しさを味わう子供を次のように考える。

- ① 音楽の楽しみ方や表現を知る姿
- ② 表現方法や表現対象を選ぶ姿
- ③ 表現を合わせる姿

ここでいう音楽の楽しみ、表現を合わせることを次のように考える。

- 歌詞から表現を生み出す ○ 楽曲のリズム、拍、速度などに合わせて表現を生み出す、
○ 楽曲の雰囲気を感じ取って表現を生み出す、○ みんなの動きに合わせて表現を生み出す

(3) 音楽科で培う生活力

- ◎ 音楽的表現への興味・関心、意欲、表現することへの自信（情意）
- ◎ 自分の好きな表現方法や楽曲を選ぶ力や自ら表現しようと働きかける力（能力）
- ◎ 楽曲の拍やリズム、強弱など音楽的要素をとらえた表現力（技能）

2. 副主題の意味について

子供たちが音や音楽との出会いをもつということは、彼らが意識を傾けてそれを聴く時に生ずることである。単に音のある空間にいるというだけでは、子供と音楽との関係は生まれない。時に反射的なレベルでの反応行動は見られても、音の存在に気づいていない子供も存在する。目は見えていても物をみていない、耳は聞こえていても音を聴いていない、音や物の存在にすら気づいていないという状態が観察される中で、指導の最も大切な出発点は「音に気づく」子供にするためのかわりであると考え。

「音を聴く」とは、子供たちが意識を傾けて、音や楽曲を聴くことである。意識する中には、部分的でも聴きとめる段階、集中して聴く段階、楽曲の音楽的要素を聴き取る段階がある。

「表現を見合う・聴き合う活動」とは、①拍やリズムなど音楽的要素を強調した楽曲のテープを聴くこと、②リズム譜を見ながらテープを聴くこと、③自分や友達の表現をVTRで見ながら聴くこと、である。この表現を見る・聴く活動を繰り返すことにより、自分の表現を音楽的な表現にしていくことができる。また、お互いの表現を見合う、聴き合うことで友達の姿から音楽的要素を聴きとり、表現を合わせる楽しさを味わっていくことができると考える。そのためには、楽曲の選定や楽曲の雰囲気を表す場の設定などの表現のさせ方についても表現を見合う・聴き合う活動を支える重要な手立てとなる。

取り扱う楽曲については、子供たちの耳を傾け、関心が高く、心をひきつける楽曲はどのようなものを検討する。身近な生き物、乗り物、食べ物、季節感があるもの、子供の生活に関係するもの（友達、遊びなど）、繰り返しのフレーズがあるものなどから選択する。また、構成する際には、本題材で身に付けさせたい音楽的要素をどの楽曲も含んでいることと、音楽的要素をとらえた表現に高まりが見えるような楽曲の配列にすることを留意する。

3. 活動づくりの具体的な方途

(1) 児童の実態のとらえ方

精神発達に軽・中度の遅れのある子供たちの音楽科学習指導では、一人一人の実態を学習の取り組みの様子、音楽的表現力（音楽的要素をとらえた身体表現、歌唱表現、器楽表現）などを視点にとらえている。子供たちの表現は、身体表現を中心にしながらも、動きから反応する子供、歌詞（言葉）から反応する子供など様々である。そのような子供たちに音楽的表現力を身につけさせていくために次のような観点から実態をとらえる。

- ① 音楽的表現力の実態
- ② 表現に対する興味・関心→どの表現（身体・歌唱・器楽）が好き（得意）か。
- ③ 表現への働きかけ方→音楽的要素（拍、速度、強弱など）をとらえた身体表現や器楽表現がどの程度できるか。
- ④ 音を聴く段階

(2) 指導内容の設定

精神発達に軽・中度の遅れのある子供たちにとって、身体表現は中心とする内容であるが、子供たちの表現の実態や身に付けさせたい音楽的要素を考慮して内容を設定する。これは、楽曲を選定する際も大切な条件となる。

音楽的要素としては、拍、リズム、速度、強弱の4つを中心に考える。

◇音楽的要素をとらえた表現

	身体表現	器楽表現	歌唱表現
拍	・一定のリズムを感じながら身体を左右に振るなどの動きをする。	・提示された拍子に合わせて楽器を鳴らす。	・提示された拍子に合わせて歌う。
リズム	・特徴的なリズムをとらえて動いたり、動きを変化させる。	・提示されたリズムを楽器で鳴らす。	・歌が旋律（音程は含まない）に合っている。
速 度	・楽曲の速度に合った動きをする。	・楽曲の速度に合った楽器の鳴らし方をする。	・楽曲の速度に合わせて歌う。
強 弱	・強弱などの音の変化を動きで表す。	・強弱などの音の変化を楽器で鳴らす。	・大きな声、小さな声など変化をつけて歌う。

◇表現を見合う・聴き合う

1. 友達の表現を見たり、聴いたりしながら、楽曲に合わせて身体を左右に揺らす。
2. 友達の表現を見たり、聴いたりしながら、楽曲に合わせて拍打ちをする。
3. 友達の表現を見たり、聴いたりしながら、楽曲に合わせて部分的に友達と同じ表現をする。
4. 友達の表現を見たり、聴いたりしながら、楽曲の音楽的要素をとらえて表現をする。

(3) 活動構成

「であう」、「あらわす」、「まとめる」の3段階で構成する。

- ① であう段階 みんなで歌を歌ったり、楽器を鳴らしたり、身体表現をしたりするなど表現の見通しをつかむ活動
- ② あらわす段階 音楽的要素をとらえた表現を繰り返しながら、音楽的表現を身につけていく活動
- ③ まとめる段階 身に付けた音楽的表現をお互いに発表しあう活動。他クラスの友達や先生に伝える活動

	で あ う	あ ら わ す	ま と め る
活動の内容	1. 表現活動に対する動機を高める。 （表現に出会う） ○ 楽曲や場に出会う ○ 表現の仕方を知る	2. 自分の好きな表現をみつけて、繰り返し表現する。 （表現を知る → 表現を選ぶ） ○ 音楽的要素をとらえた表現を身につけること	3. 自分の好きな表現を発表する。 （表現を味わう） ○ 満足感、充足感、楽しさを感じる
支援	・楽曲の提示 ・表現のモデル演示 ・教具（楽器）の提示 ・場の構成	・音楽的要素を強調した楽曲のテープ ・表現のモデル演示 ・子供の実態に応じた教具（楽器）の提示 ・場の構成	・賞賛や励まし（音楽的表現を価値づけるような声かけを行う）

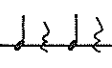
4. 実 践

[事例] 第1・2学年ふじ組 がっきとあそぼう

(1) 目 標

楽曲のリズムをとらえて身体表現をしたり、楽器を鳴らしたりして楽曲に親しむことができる。

(2) 指導の実際（6時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. いろいろな楽器の名前や音色を知る。(1) 2. 楽曲「みんなでね」、「楽しいおどり」を歌ったりリズム打ちをしたりする。(4) 3. 他クラスの友達に自分たちの表現を発表する。(1)	1. 楽曲の範唱や教師のモデル演示を聴いたり、楽器あてクイズをしたりなど楽器を鳴らして楽しく遊ぶという楽曲と楽器に出会う。 ○ 歌のモデル演示に合わせて、自分なりに覚えた歌詞を大きな声で歌っている。 ○ いろいろな楽器、楽器音の提示を楽しそうに見たり、鳴らし方のモデル演示を見て「たんたん」と言いながら模倣したりする。 ○ 「太鼓したい!」とうれしそうに言う。 〈タンブリンの音をあてて喜びを表す子供〉 2. 楽曲に合わせて、身体表現を工夫しながら踊ったり、パート別に手拍子や楽器を鳴らしたりする。 (1) 楽曲の拍やリズムに合わせて一人ずつ楽器を鳴らしたり、身体表現をしたりする。 ○ 拡大リズム譜を見ながら  のリズムをたたく。 ○ 楽器を鳴らしている友達の表現を見ながら歌詞に合わせた動きをつくっている。 (2) 楽曲の拍やリズムに合わせて3人ずつの合奏をしたり、身体表現をしたりする。 ○ 友達の表現(VTR)に合わせて表現する。 〈友達の表現VTRを視聴しながら表現する子供〉 3. 自分で楽器や演奏するパートを選び、みんなで合奏することにより、音を合わせることを楽しむ。 ○ 他クラスの友達の応援に少し照れながらもはりきって楽器を鳴らしている。 ○ 全員合奏では、うれしそうな表情で、歌ったり、リズム打ちをしたりする。 〈楽器を鳴らすことを喜ぶ子供たち〉

(3) 考 察

本題材を通して、次のような子供の姿がみられた。楽器や楽器音に興味を持ち、意欲的に表現する姿、楽曲を聴きながら、楽曲の拍やいろいろなリズムをとらえて、楽器を鳴らしたり、歌詞にあわせて身体表現を創り出す姿、お互いの音（表現）を喜んで聴き合う姿、自分の好きな（得意な）楽曲を選び、自信をもって皆の前で発表したり、合奏することを楽しむ姿などである。今後は、みんなで楽しく表現する中で音楽的要素をどのようにとらえさせていくかを明らかにすることが課題である。

一人一人が運動のもつ楽しさにふれる体育科学習

～運動対象へのかかわり方を広げるゲームづくりを通して～

障害児教育研究部(体育科)

舩元 俊文

1. 主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

発達に遅れのある子供たちは、障害の特性、成育歴、生活経験の違いから運動量や運動経験が不足しがちである。そのため生活経験の中で調整力を中心とした体力が十分に発達しておらず、運動の楽しさを十分味わえないでいる。そこで、体育科では、子供の興味・関心や、技能など実態に応じた適切な運動を通して、各種の運動の基礎を培い、運動にかかわっていかうとする態度や運動することの楽しさを十分に味わわせていくことが必要である。

「一人一人が運動のもつ楽しさにふれる」とは、子供たちが、発達段階や障害の程度に応じた適切な運動に出会い、運動のもつ特性にふれながら繰り返し活動する中で、達成感や成就感を味わうことである。

「運動のもつ特性にふれる」とは、子供たちが本来もっている運動欲求を喚起させるような運動にであり、子供たちが活動する中で、運動対象とかかわり、その対象とのかかわりを広げることである。具体的には、「こんな動きができるようになった」という道具操作や動きなどの技術的な広がりや味わったり、「こんな場で遊んで楽しかった」という場とのかかわりから動きを広げ達成感や成就感を味わったり、「友達と一緒に遊んで楽しかった」など人とかかわり方を広げ、達成感や成就感を味わったり、「今日は勝って楽しかった」などの勝ち負けのきまりからかかわり方を広げ、達成感や成就感を味わったりすることである。

(2) めざす子供の具体的な姿

具体的に運動のもつ楽しさにふれる子供の姿をつぎのように考える。

- ① 道具とのかかわりを広げている姿。
- ② 場とのかかわりから、道具操作の動きを広げたり、人とかかわりを広げたりしている姿。
- ③ 人とかかわりから、道具操作の動きを広げたり、場を意識し、動きを広げたりしている姿。
- ④ きまりとのかかわりから、道具操作の動きを広げたり、人とかかわりを広げたり、場を意識し、動きを広げたりしている姿。

このように、運動対象とかかわり、動きを広げながら、繰り返し活動する姿である。

(3) 体育科で培う生活力

以上のような姿を具体化することで、①調整力を中心とした体力②運動に必要な身体操作に関する技能③運動への知識やきまりの理解力④集団の中で友達と協力しながら運動する態度を身につけることができる。そうすることで、これから先の生活の中に運動を取り入れ、運動にかかわるときの基本的な姿勢につながり、運動を通して友達とかかわりを広めたり、深めたりすることができる。このことは子供たちが自分を主張したり、相手との関係を考えるなどの社会性を身につけるなど、実際の生活に生きて働く力を培っていくうえで意義深いと考える。

体育科では、めざす子供の姿を具体化する中で、各種の運動の基礎を培い、運動にかかわっていかうとする態度や、運動することの楽しさを十分に味わわせたいと考える。具体的には、運動への興味・関心・意欲・態度、日常生活を支える基本的な動き、運動を楽しむための技能、運動を行う上での手順や方法、きまりの理解、などである。これらの力が培われることで、生活する上で必要なたくましい体力や、生涯を通じて運動にかかわる力を育てることができると思う。

2. 副主題の意味について

「運動対象」とは子供たちが運動するときにかかわる道具であり活動する場や人でありきまりである。「運動対象へのかかわり方」とは、道具を操作し動きに生かそうとすることであり、活動する場や人に働きかけて動きを広げたり高めたりすることであり、きまりを意識しながら活動することである。「運動対象へのかかわり方を広げる」とは、運動対象への働きかけ方を知り動きを広げたり高めたりしてきている子供たちに、運動対象としての道具・場・人・きまりを変化させることで、その変化に応じた動きを身につけ、さらに動きを高めたり広げたりすることである。「運動対象へのかかわり方を広げるゲームづくりを通して」とは、このような運動対象へのかかわり方が広げることができ、子供たちの運動欲求に応じることのできるゲームを子供の実態に応じて作り出していくことである。

【運動対象に対する働きかけ方の高まりの姿】

運動対象	働きかけ方の高まり		具体化できる子供の姿
道具	道具の操作技術の向上	→	運動を楽しむことができる。 → 繰り返し運動にかかわることができる。
場	場に応じた動きの広がりや高まり		
人	相手に応じた動きの広がりや高まり		
きまり	きまりの変化に応じた意識の向上		

具体的には、子供たちの実態や発達段階に応じたゲームにであい、興味・関心をもち、子供たちが、手順や方法を知り、繰り返し活動することである。その中で、道具を操作しながら場に応じた動きをすることであり、友達を誘ったりして働きかけることであり、役割分担や勝ち負けなどのきまりを意識することである。そして、身につけた動きを運動対象の変化に伴い、さらにその変化に応じた動きを身につけ動きを広げたり高めたりしていくことである。

このような運動対象へ働きかける力を身につけることでさらに、休み時間における遊び、家に帰ってからの遊び、地域におけるレクリエーションにいかすことができ、スポーツを通して社会参加の可能性を拡大していくことができ、生涯にわたって運動に親しむ態度を身につけることができると考える。

3. 活動作りの具体的な方途

(1) 児童の実態の把握

子供のゲームとのかかわり方の実態を次のような視点からとらえる。

- ア. どんな運動を経験しているのか、どのような運動に興味をもっているのか。
- イ. どのくらい道具を操作できるのか。（なげる、ける、とる、うつ）
- ウ. どのような場で、運動してきているのか。
- エ. 勝ち負けをどのくらい意識できるのか、きまりをどのくらい意識できるのか。
- オ. 友達と協力して活動したことがあるのか、何人ぐらいた活動することができるのか。

(2) 学習内容の設定

以上のような児童の実態から具体的な学習内容を設定する。

- ア. 自分ができそうな動きを意識し、友達とかかわりながら活動すること。
- イ. 運動対象に繰り返しかわり、勝ち負けを意識しながら活動すること。
- ウ. 運動対象の変化に応じた多様な動きをしながら活動すること。

具体的には、次の通りである。

	道具	場	人	きまり
1	一つの動きをする	攻守分離して1対1でする	一人で遊ぶ	きまりを聞く
2	相手を意識して操作する	変化した場で攻守分離してする	友達の誘いを受入れて遊ぶ	きまりを促されて意識する
3	味方を意識して操作する。	攻守交替でする	友達を誘って遊ぶ	きまりを意識する
4	相手や味方を意識して操作する。	一部攻守混合でする	誘いを受けて小集団で遊ぶ	きまりを理解する。
5	相手や味方、場を意識して操作する。	攻守混合でする	誘って小集団で遊ぶ	きまりを工夫する

以上のようなことから題材を設定し、簡単な動きやきまりから複雑なものへと年間を通して配列する。

(3) 活動構成について

「であう」「ひろげる」「いかす」の3段階で構成する。具体的には次の通りである。

ア. であう段階

運動対象にであい、体験を通して課題を意識させたり、学習への目的意識をもたせたりして学習への意欲を引き出す。

イ. ひろげる段階

易しいことから難しいことへと条件を変化させていく活動を設定していくなかで、子供たちの意識を持続させながら、繰り返しかかわり、動きを広げていく。

ウ. いかす段階

条件を変化させて、身につけた運動対象への働きかけ方を生かすことで、達成感・成就感を味わう。

	であう段階	ひろげる段階	いかす段階
活動と内容	1. 新しい運動を体験する。 ○ 新しい運動への興味・関心 ・意欲をもつ ○ 新しいゲームの体験 ・手順や方法を知る	2. 運動対象における自分の役割を意識して繰り返し運動をする。 ○ 運動対象へのはたらきかけ方を広げる。 ○ 運動対象の変化に応じた運動対象へのはたらきかけ方をすることでさらに動きをひろげたり高めたりする。	3. 学習してきたことを生かして、楽しくゲームをする。 ○ 学習の場で生かす。 ○ 休み時間など生活の場で生かす。
支援	・多様な道具操作の体験 ・運動対象へのはたらきかけ方の体験	・簡単なかかわり方から、より動きがあり、かかわりを意識できる内容の設定 ・個に応じた支援	・合同体育の場の設定 ・休み時間などにゲームができるような場の設定

(4) 教材化にあたって

教材化にあたっては、次のことに留意する。

- ① 子供の興味・関心に応じた運動を選定すること。
- ② 子供がきまりを理解しやすいように、攻守分離・攻守交替・攻守混合と段階をおった形態での運動を選定すること。
- ③ 多様な動きを経験できるように繰り返しかわられるような内容を選定すること。
- ④ 運動文化財につながるような運動を素材として選定すること。

4. 実 践

[事例] 第3・4学年さくら組 グランドホッケーゲームをしよう

(1) 目 標

簡単なきまりを守って楽しくグランドホッケーゲームをする中で、ボールを止める、打つなどの多様なボールや用具操作の動きをすることができる。

(2) 指導の実際（5時間）

ね ら い	学 習 活 動 と 子 供 の 反 応
1. ゲームの手順や方法 簡単なきまりを知り、 試しのゲームをする。 (1) ・ 1対1でラケットで ボールを打ちあって 遊ぶ。 2. 変化した場や形態で ゲームをする。 (3) ・ 広がった場で1対1 でゲームをする。 ・ 2対2でゲームをす る。 3. 合同体育の時間に他 の学級の友達と一緒に ゲームをする。 (1)	1. モデル演示からゲームの手順や方法、役割分担や勝ち負けの決まりを知り、遊ぶ。 (1) 1対1でラケットでボールを打ちあって遊ぶ。 ○ ラケットでボールを止めたよ。 ○ ラケットでボールを打ったよ。 (2) 基本となる場でゲームをして遊ぶ。 ○ 1対1でゲームをしたよ。 ○ 相手のいないところに打って点を取ったよ。 2. 変化した場や形態で、その変化に応じた動きをしながらゲームをして遊ぶ。 (1) 広がった場で、1対1でゲームをして遊ぶ。 ○ コートが広くなったぞ。 ○ ボールが止めにくいなあ。 (2) 2対2という変化した形態でゲームをして遊ぶ。 ○ 2対2でゲームをした。 ・ 2人で守る場所を変えてゲームをした。 3. 合同体育の時間に、他の学級の友達と一緒にゲームをする。 ○ 他の学級の友達にボールの打ち方や止め方を教えたよ。 ○ みんなでゲームをして楽しかった。



〈1対1でボールを打ちあって遊ぶ姿〉



〈2対2でボールを打ちあって遊ぶ姿〉



〈打ち方を教えている姿〉

(3) 考 察

ゲームにおいて両サイドを壁で仕切ったり、コートの中にネットを張りその下をボールがとおるようにしたりして打ち合いが続くようにしたり、ラケットでボールを打つことで技術の差が余りでないようにするなど子供の運動実態に応じたゲームに出会わせ、場を広げたり1対1から2対2するようように運動対象を変化させ、その変化に応じた動きを身につけることができるように動きを取り出して意識させたり、モデル演示により動きを意識させたりしたことは、運動対象への働きかけ方を広げ、運動のもつ楽しさを味わっている姿に結びつくものであると考える。

— ヌ 𐄌 —

— ヌ 毛 —

お わ り に

本校は平成6年度から8年度までの3カ年間、文部省の研究開発学校の指定を受け、21世紀の時代を担う子供たちにとっての必要な学力のしくみとその培い方を究明してきました。そして、このささやかな研究の成果を、平成9年3月、「21世紀の教科・領域への挑戦－新時代の授業を創る」と題した著書を発刊し、皆様のご批正をいただいているところです。

さて、第15期中央教育審議会の答申では、これからの学校は、子供たちに「生きる力」を身に付けることの必要性を強調しています。「生きる力」とは、これからの社会の如何なる変化に直面しても自分の頭で考え、自分で問題を発見し、試行錯誤を繰り返しながら課題解決へ立ち向かう強い意志と能力を持つことが大切であり、それは体験によって学ぶものであるとしています。

私たちが求める子供像は、「21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供」にあります。具体的には、自分に自信を持ち、豊かに自己表現できる子供であり、心豊かな人間性をもった子供であり、個性豊かに文化を創造する子供であります。私たちは、開発研究の視点として、豊かな人間としてのあるべき学力を割り出し、生きる喜びを生み出す子供の育成という観点から、教科・領域の枠組みを行い、授業時数を設定して教育課程を編成し、実践を試みてきました。また、帰国子女教育においては、在外体験で身に付けたよさを生かしながら国際理解教育の推進に資する学習内容を検討し、実践してきました。さらに、障害児教育においては、発達の種類や障害の度合いの異なる子供たちの生活力の構造を明らかにし、これからの社会に自立的な生活をめざすための資質や能力の育成に努めてきました。

そして、実践の結果、私たちの求める子供像は、中央教育審議会の答申にいう「生きる力」を持った子供像と軌を同じくするものであると確信しているところです。

今回の研究発表会に当たっては、特に次の二つの点に留意してきました。

一つには、3カ年の開発研究で試案として作成したカリキュラム、とくに「表現科」「生活環境科」「人間」等の新設教科・領域については、研究開発学校だからできるという内容のみではなく、総合的学習としての視点から学習内容の検討を行えば、公立の学校においても無理なく学習指導に生かされるよう指導のねらいや教材の配列等に工夫をしてきました。

二つには、開発したカリキュラムの妥当性を、子供の姿で評価できるよう授業づくりに努めてきました。つまり、学習活動に、自主性・意欲性・目的性があるか、創意・工夫、個性が見とれるか、価値ある内容を含んでいるか、新たな活動へと発展するものであるか、等の授業づくりの具体的視点を厳しく吟味してきました。

子供主体の活動から教育課程を編成・実施するという願いを込めて実践に精進してはきましたものの、研究の道なお遠し、の感を免れないのも事実です。

今後とも皆様方の厳しいご指導をお願いします。

平成9年6月

副校長 倉 吉 志米男

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校研究同人（平成8年度）

	〈大学教官〉		〈附小教官〉	
全 体	山下 昭 堺 正之	中村重太	高橋義夫（校長） 楠田和三（副校長） 安永純二（教頭） 重松宏明（研究主任）	
国 語 科	前田真証 中谷雅彦	山元悦子	伊藤啓二 仁田野三重子	吉田正樹
社 会 科	中野和光		芋生修一（教務主任） 後藤正弘	
算 数 科	山下 昭 山口武志	飯田慎司 清水紀宏	重松宏明 小森 晃	加藤英也 本田 透
理 科	中村重太	宮脇亮介	安永純二 今林康治	山下浩徳
生 活 科	寺尾慎一		藤木寿美枝	石田耕一
生活環境科	中村重太		芋生修一	今林康治
音 楽 科	平井健二 木村次宏	岩崎洋一	津本修一	
図画工作科	吉井 宏		樺島 穰	郡司掛信也
表 現 科	吉井 宏		樺島 穰	津本修一
家 庭 科	甲斐純子		平山尚美	
体 育 科	相部保美		佐々木壮一朗 稲津一徳	笠 宏照
人 間	高田 清	堺 正之	中原 浩 石硯昭雄	植松伸之
保 健	照屋博行		今村由香	
障害児教育部	石井武士 海塚敏郎 藤金倫徳	山下 勲 木舩憲幸	落合純哉 西原敦子 石橋康秀	松本良一 舩元俊文

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校教官（平成9年度）

（職名）	（担任）	（専攻）	（氏名）	（出身都市）
校長		生物学	高橋義夫	大学
副校長		社会	倉吉志米男	太宰府市
教頭	専科	社会(生活職)	芋生修一	大野城市
研究主任	専科	算数	重松宏明	糟屋郡
教務主任	専科	人間	中原浩	三井郡
教諭	1の1	音楽(表)	津本修一	福岡市
教諭	1の2	体育	稲津一徳	糟屋郡
教諭	2の1	生活	石田耕一	糟屋郡
教諭	2の2	国語	伊藤啓二	春日市
教諭	3の1	理科(生活職)	今林康治	福岡市
教諭	3の2	社会	猿樂隆司	宗像市
教諭	4の1	算数	小森晃	筑紫郡
教諭	4の2	理科(生活職)	山下浩徳	甘木市
教諭	4の3	国語	末次幸一	柳川市
教諭	5の1	図画工作(表)	樺島穰	福岡市
教諭	5の2	理科	手島宏樹	筑紫野市
教諭	5の3	生活	藤木寿美枝	大川市
教諭	6の1	国語	吉田正樹	福岡市
教諭	6の2	人間	植松伸之	糸島郡
教諭	6の3	体育	笠宏照	福岡市
教諭	専科	算数	加藤英也	八女市
教諭	専科	家庭	平山尚美	福岡市
教諭	ふじ	障害児教育音楽	西原敦子	福岡市
教諭	さくら	障害児教育生単	松本良一	久留米市
教諭	うめ	障害児教育体育	舩元俊文	糟屋郡
教諭	専科	障害児教育国語	落合純哉	大野城市
養護教諭	養護		今村由香	糟屋郡
研修	専科	障害児教育生単	田脇浩則	春日市
研修	専科	社会	宮崎隆行	大川市
研修	専科	体育	岩城一磨	小郡市
研修	専科	国語	石井陽子	宗像市
研修	専科	図画工作	山本博敏	福岡市

◎平成8年度転出教官

楠田和三（春日市）
後藤正弘（宗像郡）
石硯昭雄（糸島郡）

安永純二（大野城市）
石橋康秀（久留米市）
郡司掛信也（福岡市）

佐々木壮一朗（糟屋郡）
本田透（柳川市）
仁田野三重子（福岡市）

タイトル・メッセージⅢ

新時代の美光が地上へ降りるこの時

巡りゆく大地に生命を育み

限らない天空に夢を描く

人としてともに考え行い抜く

創造主体者たちの輝ける瞳こそ

新時代を創り 新時代を担う

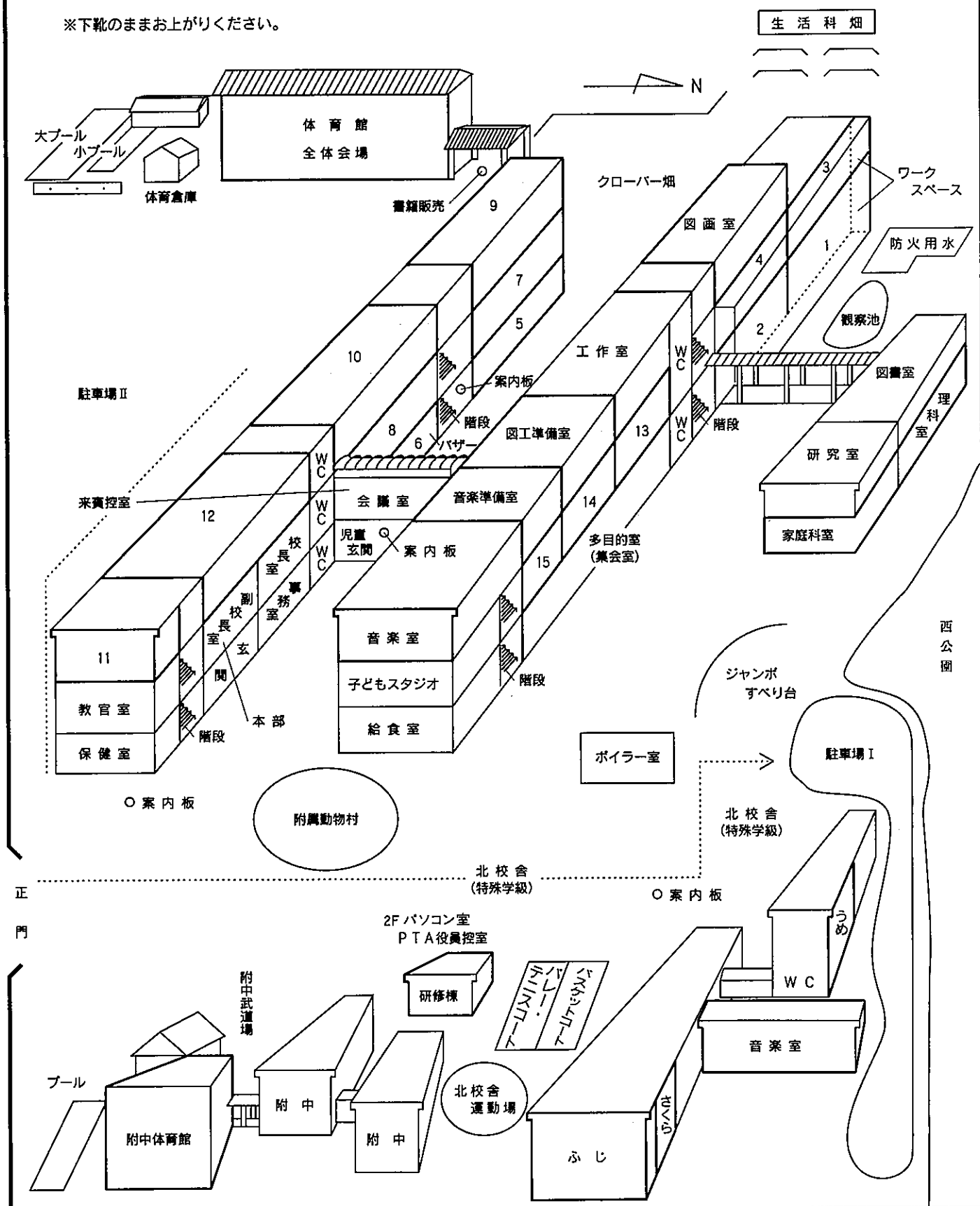
(Y・Kabashima)

平成9年6月 印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No.28

発行者 福岡教育大学教育学部
附属福岡小学校
〒810 福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092 (741) 4731(代)

印刷所 (株)ネオ・プリンティング
TEL 092 (511) 8941(代)

※下靴のままお上がりください。



Fuzoku
Fakeoka

